

【完結】 向カイ風ニモ負ケズ

柴猫侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▼滝隠れの里にて生まれた朴訥な少年、たきの シライト。▼危ない目に遭いたくはないものの、忍の一族、血継限界、手配書に載る極悪人？等々……行く先で待ち構えている様々な出来事の果てに、彼を待つものは一体なんなのか。▼「……因みに忍は目指してません」

目次

第一章 滝と風

- 一. 契約はしっかりと確認を | 1
- 二. 行きはよいよい帰りは怖い | 14
- 三. 敬称をつけた上での固有名詞 | 22
- 四. 仙人だって酒は飲む | 34
- 五. ナチユラル窃盗 | 46
- 六. 一先ず暫定ニート | 56

滝隠れ秘伝 | 新しい風 | 69

第二章 糸と綱

- 七. 口寄せのじゅちゅ! | 78
- 八. 適齢期は思っているよりも早いもの | 92
- 九. 弟子と言うよりは小間使い | 102
- 十. 賭けるのは | 114
- 十一. 新しい扉が開かれるのはふとした時 | 126
- 十二. 繋がりの糸 | 138

滝隠れ秘伝 | 遊戯編 | 148

第三章 波と雪

- 十三. 性欲と医者スイッチの因果関係 | 159
- 十四. だって卵好きなんだもん | 172
- 十五. ついつい買っちゃう宝くじ | 184
- 十六. お酒は20、官能小説は18歳から | 198
- 十七. 良薬は口に苦しとは言えども | 209
- 十八. さらにもう一発! | 220
- 十九. 五里霧中 | 232

二十・ 献血はご計画的に | 248

ヒナイ修伝 | 自来也豪傑物語 閑話 | 263

第四章 蛇と鶏

二十一・ 脳筋ドクター&生臭坊主&ビツチ娘 | 276

二十二・ 『いや、忍べよ』 | 289

二十三・ お肌ツヤツヤの秘訣 | 299

二十四・ 親孝行、ちゃんとしてますか? | 312

第五章 友と暁

二十五・ 行けたら行くは基本行かない | 326

二十六・ お体に障りますよ | 340

二十七・ 不死と不死 | 351

二十八・ 紡ぐ糸 | 365

二十九・ 持つべきは友 | 382

終章

滝隠れ秘伝 | 祝言日和 | 394

第一章 滝と風

一． 契約はしつかりと確認を

世の中、不思議なことは数多く存在する。

僕の人生において最も不思議であった出来事は、未来で起きるだろう出来事を教えられたことだ。

“人事を尽くして天命を待つ”。本来であるならば、未来——結果などは全てを行った後に知るものだ。何もしない段階で結果だけを伝えられたとしても、ただ単に興を削がれるだけだろう。

しかし、一つの未来に失意する僕に告げられた次の言葉はこうだ。

『天命を変えたくば、人事を尽くした上で人外の手を借りるべし』と。これが、今までぼんやりとしていた僕の人生において、一つの目標を立てる瞬間だった。

彼——『たきの シライト』は釣りをしていた。

これが日課とでも言おうか。十歳の彼は、故郷である滝隠れの里の学校の授業を受け終わった後、放課後の時間は全て釣りに費やしている。

元々は、祖父の趣味であった釣りだ。そこに孫のシライトが付いて来る形だったのだが、最近腰が悪くなってきた祖父は家に留まり、こうしてシライト一人で釣りを満喫している。

悠々と時間が過ぎるのを楽しむシライト。

人付き合いは疲れると、同年代の子供たちとも遊ぶこともせず、一人呑気な時間を過ごして居る。

しかし、その時間をにわか雨の如く突然現れた少女がぶち壊す。

「ひゃっほ〜！」

陽気な声を上げ、里の断崖を猿よろしく飛び降りてくる人影が一つ。

凡そ常人には出来ない真似事をし、釣りに興じていたシライトの下へ駆け寄ってくる褐色肌で黄緑色の髪少女は、満面の笑みでこう告げた。

「シライト！ 遊びに来たっすよー！」

「……フウ」

ローライズな服装に身を包む少女の名を呼ぶシライトは、能面のよくな表情を浮かべつつ、一旦釣り糸を垂らすのを中止した。

遊んでくれそうな雰囲気を目を輝かせるフウ。

だが、シライトは『ちよつと待つて』と言わんばかりに掌を翳す。

「……また……脱走してきたの？」

脱走。

不穏な言葉だが、これは別にフウが犯罪者であり、牢屋に投獄されていたという訳ではない。

彼女は滝隠れの里において、少々変わった人物。活発で天真爛漫。その場にじつとして居られないような性格だ。にも拘わらず、里内において彼女を知っている同年代の子供はあまり存在しない。

まるで、彼女の存在が秘匿されているとも言わんばかりだ。

そんなフウとシライトの出会いはずだった。

ある日、日課の釣りをしていたシライトの下に、滝の上から彼女が落ちてきたのだ。それから二人は知り合いになり、時々こうしてフウの方から遊びに来るのだが、毎度毎度途中で迎えるの忍者らしき者がフウの首根っこを掴み、どこかへ連行していく。

余程、大層な家柄のお嬢様なのかもしれない。

きつと、こうして遊びに来るのもお忍びなのだろう。シライトはそう思っている。

故に、フウが自分の下へ遊びに来るのは、彼女が家から脱走してきた時なのだとばかり考えているのだ。

しかしシライトの問いに、フウは『ちっちちち』と人差し指を揺らす。

「今回は大丈夫っす。影分身を置いてきたっすから！」

「……そう」

影分身がなんたるか分からないシライトであるが、自信に満ち溢れているフウの様子に、とりあえず何かしら対策はしてきたのだと理解した。

因みに影分身とは、自分の実体を作りだす高等忍術。実体そのものがある程度の自我を持ち、オリジナルの思考に基づいて行動したりするのだ。

本来は諜報活動に用いたりする術なのだが、シライト同じく十歳のフウは、遊びに出てきたいが為だけに、自分の身代わりとして影分身を置いてくるべく、この術を習得したのである。執念はおそるべしといったところだろうか。シライトのあずかり知らぬ場所で、彼女は無駄な方面で技術を磨いている。

「……それで今日は……何をして遊ぶの？」

「ふっふっふ、よくぞ聞いてくれたっすね！」

仰々しく、柄にもない笑い声をあげるフウ。

いい意味でも悪い意味でも分け隔てなく接する彼女は、同級生から「ナメクジみたい」と称される性格のシライトにも同様に接してくれる。

「そんなフウが今回提案する遊びとは……」

「……それよりも、ちよつと汗掻いちゃったから滝行するっす！」

「やめて」

それよりも彼女は、分け隔てが無さすぎる。

あどけない少女がすっぱんぼんになって滝行することは、何とか押しとどめることができた。

因みに、仮にフウが全裸になつて滝行したとしても、その華奢な体は轟々と唸る瀑布に呑み込まれて全く見えない。理想と現実とは剥離しているという訳だ。

それは兎も角として、シライト憩いの場は一応里の子供たちが訪れる場でもある。水場で真っ裸で遊んでもいいのは幼児までだ。既に

十歳のフウが全裸になるのは、色々と問題が生じる。
閑話休題。

「……それで、今日は何するの?」

「今日は、あつしがシライトに忍術を教えるっす!」

「……ほう」

藪から棒になにを。

そう言わんばかりに目を細めるシライトであるが、彼自身忍術に全く興味がないという訳ではない。

事実、彼は釣りをする時に水面に立っている。これは忍術を発動する際に使用するチャクラを足裏から放出し、ちょうど水面に立てる程度のつり合いを保つことにより、その芸当を成り立たせているのだ。

滝隠れの忍塾には通っていないシライトではあるが、幾度の忍界大戦を経験している祖父に、遊びがてら木登りの業や水面歩行の業を学んでいる。加えて、それを用いての釣りが日課になっていることから、チャクラコントロールに関してはそれなりに上手い方だ。

そんなシライトは、上述の技能を生かし、断崖絶壁に映えているタケノコやキノコを採取している。

今回フウが教えてくれる忍術を学べば、何かしら生活の役に立つのではないか? シライトはそんな仄かな希望を胸に抱きながら、フウの次の言葉を待つ。

「昨日あつしは、ゼンジから口寄せの術を習ったっす」

ゼンジとは、里長ヒセンのお付き人であり、尚且つヒセンの息子であるシブキの教育係である老人だ。

そんな老人に術を学んだということは、[〃]フウ、お偉いトコのお嬢様説[〃]が濃厚になってくるのだが、シライトは聞いたこともない術に眉を顰めるだけ。

「……口寄せの術?」

「まあ見てるっす」

そう言うや否や、フウは徐に自身の親指をカリッと噛み、血を出して見せる。

それから手早く印を結び、地面に掌を押し付けると、煙と共に一匹

の――

「……鯉」

「どうっすか!？」

ピチピチと地面の上で跳ねる鯉。いや、錦鯉か。

暫しの沈黙。最初は元氣よく跳ねまわっていた鯉も、次第に疲れてきたのか全く動かなくなり、果てには、

『はあ……はあ……フウ、貴様……! 地面で妾を呼び出すとは気が触れているのかっ……!! しかも水場のすぐ近くで……生殺しとはこのことじゃ……!!』

「血で契約した生き物を好きな時に好きな場所に呼び寄せる術、それが口寄せの術っす!」

「フウ、それよりもこの鯉を水場に……」

息も絶え絶えとなっている鯉を余所に術の説明をするフウを窘め、シライトはすぐさま鯉を近くの滝壺へ放つ。

あやうく一命が犠牲になるところだった。

そして、『覚えておけ』と滝壺から呪詛のような言葉が聞こえてくる間にも、術を披露できて興奮冷めやらぬフウは説明を続ける。

どうやら今口寄せした鯉は、滝隠れに契約巻物が置かれている忍鯉にんこいの一種らしい。固有の術として、金色の龍に変化する「龍神変化」りゅうじんへんげなる術を使えるのだ。

里長ヒセンも、忍鯉の一匹『龍鯉丸』りゅうりまると契約している。

優美な朱と白の鱗を持つ龍鯉丸も、一たび龍神変化にて龍へ変われば、どのような忍も一飲みしてしまう猛々しさを有す。

美と力の共存。滝隠れの忍鯉は、それら二つを有す口寄せ獣として、里の誇りとも称されている。

無論、他にも鯰だったり多種多様な口寄せ獣はいるが、『滝隠れといえば忍鯉』という者が多いのは事実だ。

「……それを僕に覚えてほしいの?」

「そうっす!」

わざわざ忍術を教えに来ているのだから、彼女は自分に口寄せの術を覚えてほしいのだろう。その意図を汲んで問えば、思っていた通り

の反応が返ってくる。

「印は亥、戌、酉、申、未っす」

「……印……分らない」

「あ、そうっすか？　じゃあ、あつしの見て真似するっす！」

そもそも印を学んでいないシライトが困ったように声を上げれば、ニカッと笑うフウが彼に迫り、ゆっくり印の形を作ってみせる。

それを真似るシライトは、指の皮膚を少しばかり齧って血を流してから、しっかりと体内——特に丹田でチャクラを練ることを意識した。術を発動するには、まずチャクラを練らねば話にならない。

(こんな感じかな……)

しっかりとチャクラを練れた感覚を覚えながら、たどたどしく印を結び終えたシライトは、『さあ！』とフウに音頭を取られるがままたまに掌を地面に翳した。

次の瞬間、シライトの体は巨大な煙に包まれる。

煙の合間からは、期待が籠ったフウの瞳も見えた。

しかし、シライトはふと視界が揺らいだことを感じる。

(……ん？　これって……)

得も言えぬ不安感を覚えたシライト。

その予感は的中してしまった。

「……あれ？　あれれ？」

煙が晴れた途端、忽然と姿を消した友人を探し、挙動不審になって辺りを見渡すフウ。

——彼女は知らなかったのだ。未契約の状態で時空間忍術を行使した時のリスクを。

「シ……シライトが神隠しに遭ったっす……!!？」

「くはっ」

今迄感じたことのない流れを覚えながら身を任せていけば、シライトは突如、湿った地面と接吻する形で地面に落下した。

かなり湿った土だ。立ち上がるうと地面に手を着ければ、ぐにやりと土が歪み、結果としてシライトはまたバランスを崩して倒れることとなる。

立ち上がるまで数度トライし、なんとか泥まみれで立ち上がったシライト。鬱蒼とした木々の群れ、そして濛々と立ち込める霧を目の当たりにし、頬を引きつらせる。

——これは口寄せではなく、逆に口寄せされたのではなからうか。

完全に予想外の出来事に焦燥を抱く。

その心情は、頬に張り付く霧が水滴となり、ツーツと汗のように流れ落ちる形で本人に自覚させる。

初めての時空間忍術で、まったく知らない場所に飛ばされた。

忍術も扱えぬ子供にとって、それがどれだけ恐ろしいことか。

(……………どうしよう)

——夕飯までに帰らないと、家族が心配する。

割と、彼は肝っ玉が据わっていた。

遠い目が見据えるは、自宅の食卓。今日のおかずはなんだったのだろうと、少しだけ空いてきた腹を擦りながら妄想する。

「おやおや。此処に人の童が訪れることがあるとは」

そんな時だった。

ヌルリとどこからともなく現れるかの如く、艶っぽい声が背後から響いてくる。反射的に振り返れば、そこには形の見定まらぬ靄が佇んでいた。

確かに靄は近づいてくる。

されど、それが何者であるのか、シライトにははつきりと見ることができなかった。

「……………あのう……………申し訳ないんですが……………たきのシライトと言うんですが……………道に迷ってしまいました……………」

「ほおう。あちきの家に土足で上がり込むとんと礼節無き野暮かと思

えば、名乗るだけの礼節は有り、と」

「……すみません……本当に……思いもよらぬ出来事だったもので……」

「ふふっ、そう考えるのが妥当。でなければ、この秘境とも言うべき場に、只の童が来ることなどできささんす」

霧が歩み寄ってくる。

すると次の瞬間、霧は一人の優美な花魁の姿に変貌したではないか。変化の術だろうか？ それをシライトが知る手段など持ち合わせていないが、例えまやかしであつたとしても、なんと美しい容貌だろう。

異性にほとんど興味を持ち合わせていない（そこもまた『ナメクジ』と称される理由であるが）性格の彼でさえ目を奪われる美女は、クツクツと笑い寄る。

「漸くあちきの『形』が定まったようでありんすな」

「……っ？」

「まあ、こういう喋り方であるのだから、そうなるのは致し方なし」

茫然と佇むシライトに、何かを納得する美女は、『こつちへ』と彼を手招く。

どうするのかと悩むシライトであつたが、このままこの場に留まつても進展はないだろうと判断し、目の前の美女について行くことにした。

鬱蒼とした霧の濃い森の中、美女と少年が歩んでいく。

「主さんの境遇を思えば、蝦蟇のトコの自来也を思い出すでありんすなあ」

「じ……その方は……どなたですか？」

「ふふっ、こつちの話。さあ、お出でなんし」

自来也。

聞いたことのない名前だ。

どこかの界限では有名な名前なのだろうか？

この不可思議な状況の中、呑気に思考を巡らせる——というより、巡らせることにより平静を保っているシライト。

五里霧中。自分一人だけでは身動きすることすら憚られていたであろう状況の中、彼は目の前の美女に連れられるがまま進む。彼女が子供を攫う妖怪でなければいいのだが。

不安と共に、どこか達観した考えを持ったところで、ふと霧は晴れた。

「——ようこそ、我が城“湿骨林”へ」

「……二人？」

霧が晴れた先の玉座らしき椅子にふんぞり返るのは、間違いなく自分を連れてきた花魁風の美女だ。

まさか双子なのか。至って冷静な思考のまま、先程まで美女が居た場所に目を遣れば、不敵な笑みを浮かべる美女が霧散する直前だった。

「……狐さんですか？」

「狐につままれている、と。安心しななし。そもそも、今まで主さんが見ているあちきの姿は全て幻」

「……へ？」

「湿骨林に満ちる霧は、余所から来る者を拒むのみならず、足を踏み入れた者に幻術をかけささんす」

「……はあ……」

「分からぬ、と言いたげじゃ。人とは形に囚われる生き物。全ての形は人間の偏見。主さんがあちきを花魁の姿と見定めたのも、あちきが廓言葉を使っているから。そうでありんしょう？」

「……あ……はい」

「……童にしては朴訥ぼくとつな。いや、理解できていないと言うのが正しいか。はてさて……」

余りにも口数の少ないシライトを見かねた美女は、パチンと指を鳴らして見せる。

すると、どこからともなく降って来た巨大なナメクジが、『お呼びでしょうか？』と可愛らしい声を上げた。見た目のおどろおどろしさとは打って変わって、少女のように高くも、澄んだ落ち着いた声だ。

「カツユ。その童の下へ」

「畏まりました、太夫」

「……………」

「む？ おお、名乗らささんしたな」

『太夫』という言葉に目を丸めていたシライトに、自分が自己紹介していなかったことに気が付く美女。

その艶やかに潤った唇を歪ませ、目を三日月のように細めた彼女はこう言い放つ。

「——あちきが、蛞蝓が秘境・湿骨林の主、人呼んで大蛞蝓仙人おおなめくじせんじんでありんす」

かくかくしかじか。

「——という感じですか。ご理解いただけただけでしょうか？」

「……………」

大蛞蝓仙人なる人物の自己紹介を終えた後は、同じく湿骨林に住まう大蛞蝓の一体『カツユ』による説明を一通り受けたシライト。大蛞蝓と言うだけあって、普通に里で見る蛞蝓よりはるかに巨大な体躯をしている彼女（そもそもナメクジは雌雄同体であり、性の区別はないことを付け加えておこう）だが、今の大きさでも本来の何千分の一にしかならないというではないか。

「……………仙人様も……………大きいんですか？」

「はい。大蛞蝓仙人は、その巨躯故、人と話す際は幻術で自分の姿を作ってみせています」

「……………合理的手段と」

「それもあります、仙人という高尚な地位に居る故、おいそれとは人前に出たくないという理由もあります」

「はあ……………」

やけに平然とナメクジと話していることに疑問を覚えつつ、シライトは状況を整理する。

ここは、蝦蟇の秘境・妙木山と蟒蛇の秘境・龍地洞に並ぶナメクジ

の秘境・湿骨林。本来ならば、外部の者が侵入できぬよう、幾重にも幻を見せる霧に包まれている秘境なのだが、未契約の状態の時空間忍術を行使してしまったシライトは、ランダムに空間を移動した挙句、ここにたどり着いてしまったという訳だ。

「……………ここから滝隠れの里に帰るには、どうすればいいですかね？」

「滝隠れ……………ああ、木ノ葉と合同で中忍試験を行う里ですね。そこ出身なのですか？」

「はい」

「ここ湿骨林は雨隠れの里に近い火の国に存在します。ここから滝隠れに向かうとなると、歩いて……………貴方が子供なのを鑑みると、三か月はかかるかと……………」

「……………」

「あああ！ 安心してください。これも何かの縁。私が責任をもって里までご案内いたしますから！」

「あの……………はい……………ありがとうございます」

三か月。

その言葉を聞くや否や、シライトの双眸に影が差す。辛うじてカツユの優しい声に我に返ったが、ドアップのナメクジの顔面を前に一瞬肩が跳ねる。

不味い。三か月も行方不明となると、家族がこれ以上なく心配する。もしかすると何者かに攫われたと誤解され、トラブルに発展してしまうかもしれない。

いや、目の前で見ていてくれたフウが事情を説明すれば、口寄せの術の知識を有す忍者が状況を察してくれるかもしれないが、それでも行方不明と認知されることには変わらない。

「はあ、主さんが仙力を身につけていれば、きんとん 舐斗雲の術でひとつ飛びなのであります……………」

「舏斗雲の術……………？」

「雲に乗って移動する術のこと。その乗り心地の爽快たるや、天にも昇る快感でありんでしょう」

「おお……………」

雲に乗って飛ぶという浪漫ある術を口にする大蛞蝓仙人に、目を輝かせ感嘆の息を漏らすシライト。

しかし、一つ気がかりな部分もある。

「……その……仙力を身につけていないとどうなるんですか？」

「移動速度に耐えかねて四肢がもげささんす」

「お、お……」

次の瞬間には引いた声を上げてしまった。

例えるならば、豆腐を凄まじい速度で投擲すれば、的に当たるよりも前に速さに耐えかねた豆腐が自壊する感じだろうか。

「……地道に歩いて帰ります」

「まあ待ちなんし。童が三か月歩くには相応の準備があるというものの。どれ……」

肩を落とすシライトの下へ、ふったびヌルリと大蛞蝓仙人が近寄る。

と言っても、それは意図的に見せている幻の姿なのであるが、シライトが廓言葉から連想した花魁の姿をした彼女は、徐に手をシライトの頭に翳した。霧に濡れた濡羽色の髪は、雨天の下の鳥を思わせる。

「ほう」

手を翳す大蛞蝓仙人は、何かに気が付いたのかニヤリと笑みを浮かべる。

「主さん、し……いや、フウという少女と友であるな」

「え……」

「何故知ってる？ という顔をしているが、仙人のあちきにとって他人の心の内を除くなど容易いこと。平静を装っても、里の者を心配している考えは筒抜けでありんす」

「はあ……」

「まあ、仙人でなくともチャクラさえあれば、他人の思考を読み取ることなど容易いもの……」

掌をシライトの頭から退ける彼女は、こう続ける。

「世にチャクラを広めた六道仙人曰く、チャクラとは人と人の精神エネルギーを繋ぐもの。この穢土に生まれ落ちた瞬間より、潜在する量

が決まっている身体エネルギーとは違い、理論上は修行や経験で際限なく増え続ける精神エネルギーに彼は重きを置いていた。言葉を交わさずとも、人と人が……否、この世に生を受けた生き物全てがチャクラによつて意思を繋ぐ。それが、六道仙人が広めた忍宗であります」

「……糸電話みたいなものですか？」

「まあ、そういう理解も有りでありんしょう」

「……有りなんですか？」

「理解の仕方は人それぞれ。他の“形”に置き換えて理解するのも人らしいと言うべきか……」

「？」

「いや、こちらの話」

長々と語ってくれた六道仙人が広めた“忍宗”を聞いていたシライトは、あろうことか“糸電話”と置き換えた。

そのことを少しばかり可笑しいと言わんばかりに微笑む彼女は、口元を着ものの袖で覆いながら言葉を紡ぐ。

「で、そのフウという童だが……」

「はい」

「ここで一拍。」

それからにもなく、彼女は言い放つ。

「——殺されるぞ」

「え」

二． 行きはよいよい帰りは怖い

「殺され……」

余りにも唐突な内容に言葉を失うシライト。

それもそうだ。突然、『お前の友人は殺される』と殺されて『ああそうですか』と理解できる人間が居るとすれば、それは生きるか死ぬかの世界で長年過ごして居る者だけであろう。

例えば、忍者など——。

「……というより……なんでそんな予言染みたことを……」

深呼吸し、一旦自分を落ち着かせたシライトは、そもそも何故大蛞蝓仙人が他人の未来を視ることができてくるかに疑問を持つ。

そういう能力を持っていると言われればそこまでだが、例えそうであつても信じたくないのが人間というもの。

人間いつか死ぬ。

だがしかし、死に方はできるだけ穏便はものがない。殺害など物騒な死に方ではなく、天寿を全うするような——そんな死に方が一番いいと、シライトは考えている。

忍を目指しているフウが、戦場に死に場所を求める性格ではないことも鑑みての判断だ。

兎に角、友達が殺される未来から目を背けたいという思いがあつたのは確かである。

「落ち着きなんし。万物の理は、円の如き形をしているでありんす。生の行き着く場所は死。死の行き着く場所は生。輪廻とはそういうもの。穢土での死は、浄土での生が始まることを意味する……ここまでは理解ささんす？」

「……いまいち」

「……まあ、主さんほどの童にすぐさま理解されては逆に困るというもの。それよりも、何故あちきが先の少女の未来を予言したか、と申しんしたな」

輪廻について語っていた大蛞蝓仙人は、本題に移ると言わんばかりに『さて』と手を叩く。

緊張の一瞬。ゴクリと生唾を飲む音が、静寂に包まれている湿骨林に響く。

「主さんは、寄生虫を知りませんか？」

「……きせーちゅー……ハリガネムシとか……ですかね」

「左様。先に申し込んだチャクラの応用で、その存在をあちきは確かめしんした」

今度は寄生虫について語り出す大蛞蝓仙人に、シライトは一体なんなのかと目を丸める。

「寄生虫に宿られた者の末路は二つに一つ。寄生虫に体を食られるか、また別の生き物に食られるか。どちらにせよ、天寿を全うした時点で宿主は『殺された』と言うのが正しい状態でありんす」

「……フウに……寄生虫が巣食っているという感じでしようか？」

「ふふつ、言い得て妙。確かに虫と言えば虫だが、主さんが思っているよりも随分大きな虫でありんしょう」

「……お薬で……治るものですか？」

「治ら……いや、一つだけ薬は有りませんか？」

「それは一体……？」

寄生虫に巣食われ、その結果殺される運命を辿ることになるフウ。友人である以上、一定の幸せを願っているシライトは、治る見込みがあるのであればと藁にも縋る想いで問いかける。

真摯な眼差しを向けるシライトに、大蛞蝓仙人は不敵な笑みを浮かべ、こう言葉を紡ぐ。

「……愛、でありんす」

「……その虫さんは……精神病かなにかを患っているんですか？」

処方箋が『愛』とは如何なものか。

一瞬、そんな考えが脳裏を過ったシライトであったが、そういえば先程会話で意思疎通できたナメクジが今も横に居ることを思い出し、フウに巣食う虫もまた意思があるのではと考えた。

きつと、意思があるタイプの寄生虫なのだろう。

(……意思があるタイプの寄生虫ってそもそもなんだろう?)

ノリツツコミのようなやり取りを自身の脳内で行う。

「病に患っていることは間違いなささんす。心の餓え……それによる人間不信。人間という籠に閉じ込められた彼の虫は、自由を奪われ、彩りのない毎日を過ごすのみ……嗚呼、まるで遊郭の遊女のように悲しき運命を背負いし生き物でありんすなあ」

「……あつ……自発的に寄生した感じじゃないんですか？」

「左様」

話を聞く限り、その虫とやらは「寄生した」のではなく「寄生させられた」とのこと。

何の目的で？

一体誰が？

何故、その対象がフウに？

疑問は尽きることがないが、少しだけ見えてきたものがある。

「……僕に……なにかしてあげれますかね……？」

——己が何を為すべきか。

「ほう。主さんが何かできるのでは、と」

俯き気味に呟くシライトに、大蛞蝓仙人は意味深に顎に手を当てながら思案する。

「さて、ここからはあちきの提案でありんす」

「……はい？」

「答えは二つに一つ。一つ、このまま彼の少女の天命に対し見ぬふりをかまし、殺される様を外野で眺めるか。一つ、あちきのあがりを潰すついでに、もちつとマシな生涯を終えさせてやるか……さあ、どちらにささんす？」

「太夫……それは最早誘導尋も——」

「カツユ。お黙りなんし」

二つの提案をした後、呆れた様子で物申そうとしたカツユであったが、すかさず鬼のような形相になった大蛞蝓仙人に黙らせられる。

しかし、カツユの言う通り、選択肢の内容の言い方的に前者を選ばせるつもりがないことは、子供ながらシライトもひしひしと感じていた。もしこれで前者を選べば、人間的にどうしたものかと問われるレベルである。

ぼんやりと選択肢の内容を吟味するシライト。

「……じゃあ、後の方で」

「口調が軽い！ いいんですか、貴方は!？」

「……ちやうど将来の夢とかなかったので、まあ、目標が立てられるかなど……」

承諾に際し、余りの口調の軽さに思わず声を上げてしまうカツユ。
ナメクジながらも、案外彼女は常識人のようだ。

「ふふっ、カツユ。諦めなんし。主さんがそういうのだから、致し方あるまい」

「いや、だから太夫の誘導じ——」

「カツユ。お黙りなんし」

得意げにほほ笑む大蛞蝓仙人に再度物申そうとしたカツユであったが、またもや黙らせられる。デジャヴだ。天井だ。

ぼそりと『綱手』と言ひ、どうしてこんなにも理不尽な方が私の周りに……』と呟いているのが聞こえてくる辺り、彼女も中々苦労人なのだろう。ナメクジだが。

それは兎も角とし、割とあっさり大蛞蝓仙人の提案に乗ったシライトは、ジトつとしながらも真つすぐな目で彼女を見上げる。

「……とりあえず、一旦家に帰らせて下さい」

「もちつと待ちなんし」

——彼はマイペースだ。

「以前人が訪れたのは数十年前……あちきはこの湿骨林で、延々と茶を挽いていたでありんす」

「……お茶が好きなんですか?」

「茶を挽く」は「暇だった」という意味です」

「まあ、だと言えども生きた年月に比べ、数十年など刹那の一時。それにあちきはこう見えて蟒蛇」

「……仙人様は蛇なんですか?」

「『蟒蛇』は『お酒をたくさん飲む人』という意味です」

「湿骨林が誇る仙酒・八塩折の酒を始め、かつて各国を回って手に入れた酒を呑み、悠々とあがりを潰しささんす」

「……ナメクジでいらっしやるのに、塩の字がつく銘柄のお酒を呑んで大丈夫なんですか？」

「『八塩折』とは『何度も醸造を重ねた濃い酒』という意味です。実際にお塩が入っている訳ではございませんのであしからず」

大蛸螭仙人が語り、シライトが疑問の部分問い、カツユがそれに答える。

なんとも珍妙な光景が広がっているが、これは全て彼らのこれからについての重要事項を話し合う為だった。

「……つまり、仙人様は見返りに各国のお酒を献上しろと」
「左様」

内容は至って単純だった。

仙人なのに酒豪である大蛸螭仙人に、修行をつけてもらう代わりに、世界中の旨い酒を献上しろというものだ。

「……僕、まだ十歳ですよ」

「なに、今すぐに故郷を出ろという訳ではありません。しかるべき下地を整えた上で、主さんには各地を巡ってもらおうと算段でありんす」

「……忍術も習ってないですよ」

「護身術程度は教えささんす。それからは……そうじゃ、綱手姫にでも弟子入りさせるとするか。どうせ火の国を放浪していることだらう」

「つ、綱手様にですか!?!」

大蛸螭仙人が口に出した名に反応するのは、これまたカツユだ。

一方で、まったく分からないシライトはただただ聞きに徹するのみ。

「む? なにか問題でも……ああ、そう言えば以前よりグレしんしていたか」

「そうです。忍界大戦で負った心の傷も癒えず……」

「がさつで男勝りなくせに、そういう所ばかりは女々しい女よ……」

まあ、それについては追々考えるところでしょう」

『さて』、と口にする大蛞蝓仙人が、話を聞いていたシライトに振り返るや否や、指を鳴らして見せる。

すると、どこからともなく煙と共に、巻物を背負うナメクジが現れたではないか。

それなりに分厚い巻物だ。

それを背負っているナメクジの姿は、まるで、

「カタツム——」

「だあれがカタツムリや!! ウチはナメクジや!! あんな殻背負ってトロい奴らと一緒にすんなや!!」

「すみません」

ありのままに感じたことを述べようとしたら怒られた。あまりの剣幕に、いつものたどたどしい喋り方も息を潜め、流暢に謝罪する。

そんなしゅんとして肩を落とすシライトに、カツユは同情の視線を送った。

「そこに居るは巻物蛞蝓の『マイマイ』。そして背負っている巻物は、代々ナメクジと人の口寄せ契約に用いる契約書。さあ、これから良き関係を築く為にも、あちきらと主さんの間で契約を交わしなう」

言われるがままに、既に塞がっている親指の傷を見つめ、数秒思案するシライト。

「あの……」

「む、なにか問題でも?」

「契約しないと……口寄せって使えないんですか?」

「当然。口寄せ猥然り、忍具然り、契約せねば口寄せはできささんす」

「……因みに……しないまま術を使うとどうなりますか」

「……成程。話が見えしんした。主さんは未契約の状態で口寄せし、湿骨林に飛んできたでありんすな」

「……はい」

事の顛末を理解した大蛞蝓仙人がクツクツと笑い、その横で居た堪れない様子のシライトが、親指をジツと見つめる。

——無事、滝隠れに戻った後には、フウにどのような仕返しをし

てやろう。

自分の性格を把握しているが故、大した仕返しはできないだろうが、こうも迷惑（精神的な）を被ったことを鑑みれば、仕返しの一つや二つはせねば気が済まない。

必死に頭をこねくり回して思いついた仕返しは……——

「……鮎を砂糖で焼いたモノを食べさせよう」

至ってしよぼいものだった。

ペタペタペタ。

そんな擬音が似合う音を奏でているのは他でもない、シライトだ。どこからともなく取って来た葉の上で、様々な食材をこねくり回し、兵糧丸を作っている最中である。

事の発端は、滝隠れへの帰路につく前にと、大蛞蝓仙人が一つの提案をしたからである。

『時空間忍術の修行でありんす。湿骨林で幾つか兵糧丸を作り、旅の道中で口寄せしなんし』

要するに、現在お弁当を作っているという訳だ。

しかし、ここは人の手が届かぬ秘境。凡そ、人の口に合うような食材が都合よく生えている訳ではない。

その為、辛うじて手に入れた薬草や山菜、そして蜂蜜をペーストにして丸めている。

見た目は最悪。とても美味しそうには見えない。

「……一口……ぐっふっ」

味見の為、小さく齧ってみたシライトであったが、舌に兵糧丸の欠片が乗った瞬間に、薬草の苦みが波濤のように広がり、思わずえずいてしまった。

とても口寄せしてでも食べたいモノとは思えない。

「……地産地消が……一番だと思えます」

「ふむ。では、食材を小分けにしなんし」

「……ッ！」

わざわざ兵糧丸にせず、個別に分ければいいのではないか。
そう述べる大蛸輪仙人に、シライトは絶句するしかなかった。

(……めげそう)

帰り道は長そうである。

「太夫。何故彼に仙力を教えようと……」

「ん？ 申しんしたじやろうに。あがりだったからでありんす」

「そんな気まぐれで……」

三、敬称をつけた上での固有名詞

里を目指して三か月。

道中、金品目当てに襲ってくるごろつきに遭うこともなく、無事滝隠れに戻ることのできたシライトは、まず家に帰ると家族から『化けて出た』と目を丸くして叫ばれた。

だが、経緯を詳細に話せば、それは大層生きていたことを喜んでくれるではないか。

後々フウにも顔を合わせば、涙と鼻水をダラダラと垂れ流された状態で迫られ、『ごめんっす〜!!』と大泣きで謝罪され、大蛸蟪仙人の予言もあつて、居た堪れない気持ちになったことは言うまでもないだろう。

三か月分の授業は、後日配布されるプリントをやることで取り戻すことも決まり、これでまた普通の生活に戻れる……と思いきや、

「……」

「何か言いたげな顔でありんすな」

「……いきなり呼ぶのは……ご遠慮いただきたいと……」

「ふむ。善処しよう」

逆口寄せの術により、再び湿骨林に呼び寄せられたシライト。

幸い学校のない日曜日だったからよかったものの、これが平日の昼だったら、神隠し事件の再来である。

それは兎も角とし、滝隠れから歩いて三か月の場所にある湿骨林へ通う手段は、今の逆口寄せの術がメインだ。契約者の血があればあら簡単。ものの数秒で、遠方から目的の人間を呼び寄せることができるのだ。

因みに、逆口寄せにはカツユの分裂体に手伝ってもらっている。今、シライトの肩に乗っているのは掌サイズではあるが、それではナメクジの中では大きい方。しかし、三か月共に歩んできた仲である為、この肩のヌメヌメ感には慣れたものだ。

閑話休題。

「……それで……なにをすれば……」

「そうじやな……まず主さんには、仙術チャクラとは何たるかを教え
しんしょう」

手に持った盃を傾け、一杯酒を口に含んでから大蛞蝓仙人は続け
る。

「仙術チャクラとは、通常身体中の細胞一つ一つが生み出す身体エネ
ルギーと、修行や経験により蓄積した精神エネルギーを元手に練られ
るチャクラ。これに加え、外的要因である自然エネルギーを取り込
み、バランスよく練ったものが仙術チャクラでありんす。ご理解でき
ささんすう？」

「……あんまり」

「普段のチャクラが水と味噌だけでできた具無し御御御付だとして、
仙術チャクラは野菜や肉、他諸々を入れた美味なる御御御付と言った
ところでありんしょう」

「わかりました」

例えが微妙だが、普通に練るチャクラより凄いことは理解できた。
うんうんと頷くシライトであったが、『しかし』と彼女は付け加え
る。

「そもそも仙力を扱うには、それ相応の膨大なチャクラが必要。精神
エネルギーは兎も角、身体エネルギーは生まれた瞬間に限度が決まり
ささんす」

「……はあ」

「単刀直入に言えば、主さんは見込み無し。忍の世で言えば、生涯鍛え
ても精々中忍程度でありんすな」

「……うえ……ええー」

突然のカミングアウト。

生まれ落ちた瞬間に決まった要因が関わってくるとは、まさか思わ
なんだ。顔は平静を装っているものの、内心はかなり大きなショック
を受けている。

いや、これもまた選ばれし者と選ばざれし者の差。この世は平等で
はないのだ。一応、祖父が忍者をしていたと言っても、シライトの家
——たきの家は至って平凡な家庭。秘伝忍術を有すような一族と

は、そもそも生まれ持つ才能に差があるのだ。

しかし、彼は運だけはあった。

「安心しななし。足らぬのであれば、自然エネルギー同様外部より取り込めばいいだけの話」

「……？」

「自然エネルギーと、自然界に満ちるチャクラは別物。主さんには、自然エネルギー収集の術、自然界のチャクラの吸引術、両方を伝授しましょう」

「……至れり尽くせりですね」

「生憎、湿骨林は娯楽がないもので」

「……気まぐれなんですか？」

「左様」

気まぐれで仙力を伝授してもらうことに得も言えぬ気持ちになりつつ、これも将来の自分の為だと言い聞かせ、モチベーションを保つ。尤も、シライトのモチベーションなど平地程に平坦なものでしかないが……、

「女心と秋の空。女とは移り気な生き物でありんす」

「……」

無言で佇むシライト。

今一度言おう、ナメクジは雌雄同体だ。幻術体の大蛞蝓仙人は、それは見事な花魁姿ではあるが、本体はナメクジである。雄と雌の区別などない。

しかし、以前会った巻物蛞蝓のマイマイに『カタツムリ』だと述べようとした際に激怒されたことを思い出した。その為、また面倒事にさせたくはないと、グツと言葉を呑み込んだのである。

「さて……次に、ナメクジの仙力の特徴について語るとしんしょう」

「……ナメクジ……他にもあるんですか？」

「左様。以前申しんした妙木山の蝦蟇、龍地洞の蟒蛇など、仙力にもある程度区別はござりんす」

「はあ……」

「まあ、具体的な違いの説明は省くとして……」動きながらも自然

エネルギーを集められる”。これがナメクジの仙力の特徴でありんす」

——動きながらも自然エネルギーを集められる。

「……前提が……分かりません」

「本来、自然エネルギーは動きながらでは収集することができません。仙術を戦に用いようとする者にとって、それが欠点であることは理解できささんす？」

「……なんとなく」

チャクラを使う者がほとんど忍であることを鑑みれば、仙術チャクラを用いるのも、大半は忍——戦いに身を投じる者だろう。

なんとなしにその結論に至ったシライトは、忍の仕事風景を想像してみた。

——……なんだか……ピョンピョン跳ねてそうだなあ。

強ち間違いではない想像だ。

そう、忍の戦いは常に動いていると言っても過言ではない。

目まぐるしく変化する戦況に対応すべく、忍もまた風となり、戦場を駆け抜けていくのだ。

「……戦う予定はないんですが……」

「然り。しかし、覚えておいて損はない。どれ……近う寄れ」

「？」

徐に手招く大蛞蝓仙人に、シライトは首を傾げつつ歩み寄っていく。

一体何をされるのだろうか。そんな不安と期待の籠った視線を向ける彼は、玉座に座る彼女の目の前まで辿り着いた。

するとゆっくり立ち上がった大蛞蝓仙人が、しやなりしやなりとした所作で眼前まで近寄り、シライトの前髪を掻き上げる。

そして、そのか細い指を額に——

「……ッ……イダ、イダダダダッ……！」

額に指が触れた瞬間、全身に奔る灼熱。

普段能面のシライトでさえ、余りの痛さに顔を歪め、途端に身を振り始める。

「則天去私の印。それが、たった今主さんの額に刻んだ呪印の名でありんす」

「今っ……それどころじゃ……ないです……ッ」

「ゆるっくり深呼吸しなんし。少しだけ楽になりんしよう」

言われるがままに、可能な限りゆるっくり深呼吸をしてみる。

するとどうだろうか。わずかに、体を襲っていた痛みが引いていくではないか。本当に僅かだが。

それから数分間、人生でこれまでにないほどに深呼吸を意識し、呼吸を整えていく。

気持ち的には、眠りに入っている時のような呼吸の深さだろうか。ここまで来て、漸く人と話せるだけの痛みに治まった。

「……これは……一体」

「ナメクジ流の自然エネルギー収集術の基礎、名付けて『波紋呼法』。要するに気功法の一種でありんす。その波紋呼法を会得してもらおうべく、正しくない呼吸法をすると痛みが奔る呪印を刻みささんした」
「……具体的に……どんな感じの……呼吸をすればいいんですか……」

文字通り、息も絶え絶えとなって問いかけるシライトに、大蛞蝓仙人は嗜虐的な笑みを浮かべつつ応えてくれる。

「まず始めは、長く大きく呼吸し息を止める『調息』。それから慣れてきたら、無呼吸の如き『胎息』にて過ごしんせ」

「……ロクに……運動できない……と思うんですが」

「運動しても呼吸を一定に保てるよう、今の印を刻みささんした。つべこべ言わず、一年はそれで過ごしんせ」

たった今、シライトは現世にて鬼を見たのであった。

「シライト！ 鬼ごっこするっすー！」

鬼がもう一人居た。こちらは小鬼だが。

「……鬼ごっこするの……？」

「いやっすか？」

あからさまに嫌そうな顔を浮かべるシライトに、フウはコテンと首を傾げた。そのあどけない様子に、少々心が痛くなるシライトではあるものの、額に刻まれた呪印の所為で、日常生活に支障が出るレベルで体が痛いのだ。

流石に慣れるまでは許してほしい。そう心の中で謝った。

「……もう少し……動かないヤツでお願い」

「じゃあかくれんぼするっす！」

「かくれんぼ……」

十歳にもなってかくれんぼとは如何なものか。

傍からすれば些か幼稚な遊びではあるが、忍者見習いの彼女が本気を出すと、かくれんぼも熾烈なものとなる。

彼女が隠れる側に回れば、特殊な忍術で身を隠されてしまい、発見が容易ではなくなるのだ。

逆に、彼女が見つける側に回れば、その生来の優れた感知能力でものの一分で探し出されてしまい、勝負にならなくなる。

「……釣り勝負でいい？」

「合点っす！」

しかし、最終的には釣り勝負に決まる。

同意を求める声に、良い笑顔で頷くフウは、お手製の竿をシライトの秘密基地へ取りに行く。

その間にも、友人との会話で乱れた呼吸を整えるシライト。まるで今際の人間が眠りにつかんばかりに深くゆっくりな呼吸だが、今の彼にとつて、これが最も楽な吐納なのだ。

『これは才能より性格で会得期間に差が出ささんす』

大蛸蟪仙人の言葉を思い出しつつ、この息苦しさを噛み締める。

波紋呼法は、激情型の人間ほど会得しにくく、常に平静を保つような穏やかな人間ほど、会得しやすい。

かつて湿骨林に訪れた者の多くは感情が揺れるような者が多く、会得に至らなかつた者がほとんどだと言うではないか。それに比べ、シライトは感情の起伏が緩やかである為、『見込みがある』とのお墨付き

を受けている。

とはいふものの、平常心を超えて無心にならない限り、体の痛みが治まる気配はない。

(常時全身筋肉痛みたいな……)

一挙手一投足に痛みが伴う。

動く様は、関節部が錆びた傀儡そのもの。

逆に、物言わぬ傀儡となれば、どれだけ痛みがマシになったろうか。夜中、布団の中でシライトは何度も考えた。

しかし、常に楽な状態——ほとんど静止したままで居ると、今まで感じなかったモノまで感じ取ることができるようになってくる。

“静”の世界では“動”が際立つ。

それは視覚に訴えるものであり、聴覚に訴えるものでもあり、嗅覚、触覚、果てには味覚にまで。

ふと吹く風にしても、木の葉を揺らす様、さざめき、運んでくる森の香り、肌を擦る感触、空気を美味しいと思う瞬間など、生まれてこのかた覚えたことのない感覚だった。

(……あれ……体……痛くない)

自然を存分に満喫したことを自覚した瞬間、痛みが鳴りを潜めていることに気が付いた。

しかし、気が付くや否や、再び筋肉や骨が軋むかのような痛みが全身を縛り付ける。

「はうっ」

小さい悲鳴が木霊する。

まだまだこの地獄は続きそうだ。

「今日こっそり釣ってるぞっ、エイエンゴイ~~~~っ♪」

「……」

陽気に歌いながら釣り糸を垂らすフウの横で、シライトは只黙ったまま釣り糸を垂らす。

滝隠れ周辺の水は澄んでいる。里内に流通している魚などは、ほとんどが里付近で釣りあげられたものだ。

アユ、イワナ、フナに加え、石をひっくり返せばサワガニも見つかる。

何より、滝隠れの代名詞と言えば鯉だ。里内では、よく食卓に鯉料理が並んでいる。

鯉と言えば、大抵は普通の鯉かニゴイかに大別されるかもしれないが、もう一つ、滝隠れ周辺にはある鯉が住んでいた。

名を『エイエンゴイ』。一口食べれば、永遠に忘れられぬ美味を誇るという幻の魚だ。

成体は非常に巨大で、体長は優に一メートルを超す。でつぷりと太った身体に加え、鎧のように生え並ぶ鱗は鯛の如く鮮やかに赤く、されども光の反射で虹色に輝く。

滝隠れでは、目出度いことがあればエイエンゴイが振舞われる。例を挙げれば、結婚式だ。

——二人の愛が“永遠”に続くように。

思い出の味。永遠に忘れられぬ美味を舌に記憶し、二人の新生活の門出を祝うという訳だ。

「釣つるぞ〜釣つるぞ〜♪」

しかし、隣に居る少女は行事など関係無しにエイエンゴイを釣り上げようと試みている。

理由は実に他愛ない、“夢はおつきくなきやダメっす!”、そんな子供らしい思いからだった。

微笑ましいことこの上ない。だが、そんな友人の様子を温かく見守る余裕など、今のシライトには微塵も残っていないなかった。

——この状況で魚が掛かってみろ。引きずり込まれるぞ。

何故か、確信があつた。

下手に呼吸を乱せば激痛が奔る。今は些細な事柄でさえ命取りな状態だ。

掛かってくれるな。切実に祈るシライトの双眸からは、光を一切感じられない。すぐ傍で明るく無邪気に燥ぐ少女が居るのだから、尚更

だ。因みに彼ら、どちらも十歳である。

片や石像のように固まる少年。

片や年相応に明るく遊ぶ少女。

対極的な二人であるが、割と仲はいい。尤も、何を以てして「仲がいい」と言えるかは人によって変わるだろうが、時々遊んでいるのだから、仲が悪いと決して言えないことは明らかだ。

ああ、あの頃が懐かしい。

六歳にして、独りゆつくり過ごすことに楽しさを見出した少年の下へ、嵐のように舞い込んできた元気溘刺な少女の笑顔が。それからだっただろうか。友人と一緒に居ることに楽しさを覚えたのは。

(だからなのかな……『殺される』って聞いて、何かしてあげたいと思ったのは……)

なんとなしに思う。

理由は単純明快、「友人だから」だ。だからこそ、シライトは現在進行形で痛い目を見ている。

(……あれ。でも……具体的に何するか……決めてないや)

しかし、とあることに気が付いた。

仙力を伝授してもらっている彼だが、具体的に彼女に何をしてやるかまでは決めてないことを。そもそも、仙力を会得した時点で、それが将来どのような場面で役に立つのだろうか？

(……カツユ様に……訊こう)

目標に対するモチベーション維持に危機を見出したシライトは、口寄せ獣のカツユへ、仙力会得の利点を教えてもらおうと、心に固く誓った。因みに、彼はカツユのことを『カツユ様』と呼んでいる。呼び捨てでも「さん」付けでも「ちゃん」付けでもない、カツユ様なのだ。「様」が一番しっくりくるのである。と言うか、『カツユ様』という固有名詞が、既に彼の頭の中で成り立ってしまっているのだ。

カツユ様はカツユ様以外の何物でも——

「こら、フウー！ こんなところに居たのか！」

「あつ、シブキ！ しまった、バレたっすか！」

「影分身なんか屋敷に置いて抜け出して！ お前は忍術をなんだと

思ってる!？」

突然、里を囲む断崖から飛び降りてくる人影が一つ。

それは里長の息子、シブキだった。黒い長髪を靡かせる彼は、少々頼りなさを思わせる面構えをしている優男ではあるが、見た目通り優しい性格である為、里の子供や老人からは大人気の青年だ。

どうやらフウを連れ戻しに来たらしく、釣り糸を垂らす彼女の背後へ、それなりに軽い身のこなしで回り込み、襟を掴んで見せた。

しかし次の瞬間、フウの姿は煙に包まれ、あろうことか木片に変わったではないか。

「変わり身の術!」

「おまつ……無駄に器用なことをして!」

(……すごいなあ)

自身と己の身の符を貼った物体と、瞬時に身を入れ替える基本中の基本とも言える忍術、変わり身の術。いくら基本忍術と言えども、あそこまで綺麗に術を発動させた様を間近で見れば、感嘆の念を抱かざるを得ない。

「おい、フウ。里の忍だつて全員暇じゃないんだぞ。だから勝手に屋敷から抜け出すなとあれほど……」

「一人で勉強なんてつまらないっす! あつしだつて、たまには外でぱあ〜つと遊びたいんすよ!」

「そ、それも分からなくはないけどなあ……」

「へへ〜んだ! そんなにあつしを屋敷に連れ戻したいんなら、捕まえてみるっす!」

「あ、待て! つたく……元気が有り余っているな……」

やれやれと頭を掻くシブキ。

ふと、隣で釣り糸を垂らしていたシライトに気が付き、たははと苦笑を浮かべる。

「悪いな、君。え〜と……」

「……シライトです」

「シライトか! そうか、覚えておくよ。あんなじゃじゃ馬に付き合わされて大変だろ?」

「……それほどでも」

「そうか、ならよかった」

何か思う所があったのか、シブキは柔らかい笑みを浮かべ、先程フウが立ち去っていった場所を見つめる。

「フウの奴は、色々事情があつて屋敷の外に余り出られないんだ」

「それは……本人から何度か伺いました」

「ああ。でも、あんな性格だろ？ ずっと屋内に居る性質じゃないのはオレだつて分かる。生まれて途端に何かを強制されるつて、案外窮屈でさ……」

まるで自分を重ねるかのように語るシブキに、シライトは黙つて耳を傾ける。

里長の息子として生まれたシブキは、次の里長候補として最も有力である為、相応の鍛錬を子供の頃から積まされてきた。それが実つたか実らなかつたで言えば、後者に該当するものの、年相応に遊びたかつた過去は拭い去れるものではない。

あんなにも窮屈な子供時代を、わざわざ他人にも経験させたくはない。だが、それに勝る事情があるからこそ、こんなにもシブキは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべているのだ。

「……ははっ、なに言つてんだろうな。まあ、アレだよ。アイツはまた抜け出して遊びに来ると思うから、仲良くしてやつてくれ。お願いだ」

「……畏まりました、シブキ様」

「や、やめてくれよ。オレはそんな大層な身分じゃない、つて言うかなりたくない……」

「……分かりました」

しみじみと語るシブキに、シライトは彼も苦労しているんだなあと察した。

いい生まれの者は、平民が経験し辛いような悩みを抱えているらしい。それは滝隠れの里のみならず、他の国や里でも言えることなのだろう。

疲れたようにため息を吐き、『それじゃ』とシライトの前から立ち

去ったシブキ。

『仲良くしてやってくれ』……かあ……

去りゆく背中を見つめながら、たった今言い放たれた言葉を頭で反芻する。

自分がフウの何で在れるか。

——暫定は“友達”だ。

四． 仙人だつて酒は飲む

最近、薄くなった。

いや、髪の毛の話などではない。影の薄さだ。

則天去私の印を刻まれ、吐納法を強制されてからというもの、シライトは自然と影が薄くなり始めた。言い換えれば、気配を殺すことが上手くなったとも言える。

——波紋呼法の神髄は、自然と一体化することに在り。

波を荒立てるな。

流れに逆らうな。

最初こそ、何一つ理解できなかったシライトであったが、呪印の作用である痛みを伴わぬ吐納法を求めらるうちに、ぼんやりとはあるが理解し始めていた。

呼吸が深く、長く。

もとより、生物が動かずに居るままなど不可能に近い。

動物のみならず植物でさえ、日進月歩。日々成長を重ねているのだ。

“動かず”を基本とする仙力ではあるが、“動”の許容限度はある。表面上動いていない生物でも、心臓は、肺は、血管を流れる血潮は、経絡系を流れるチャクラは絶え間なく動いているのだ。

だがそれは、あくまで体内で動いているに留まっている。

例えば、水に沈んでいる箱の中身がどうなろうと、周囲の水へ与える影響などは微々たるもの。問題なのは、箱を水中へ沈ませる時だ。もし、箱をそっくりそのまま水中へ沈めたとしたら、箱の体積分だけ水が押し退けられ、水面は荒波立つことだろう。

されども、仮に箱が蓋を開け、ゆっくり沈めたのならばどうなるだろうか？

水が押し退けられるのは、ほとんど最初だけ。後は、調和を図ろうと箱の中に水が満ち満ちていく。

さて、ここまでの話でシライトが何を感じたのだと言えば、それは彼自身“器”でなかったということだ。

具体的に言えば、自然エネルギーを受け入れる器ではなかった。そもそも、生きていく中で自然エネルギーを感じ取る機会などあるうか？

『ああ、ここには大自然の力が溢れてる……』などと、風水の話ではない。マイナスイオンなどの話でもない。

人間生きていく中、自然エネルギーを取り込むことを絶対とはしていない。そういう体だからだ。必要としていない、加えて取り込むことさえ難しい。取り込んだら取り込んだで、コントロールできなければ異常が発生する危険性もある。そのような毒にも似たエネルギーを、わざわざ取り込むように体は出来ているのだろうか、いや出来てはいない。

今迄のシライトは、その受け入れる隙間が——隙間へ導く為の“蓋”の開け方を知らなかった。

しかし、則天去私の印を刻まれたことによる呼吸矯正に伴い、微々たる程度ではあるが、自然エネルギーを感じ取れるようになってきたのである。

「まあ、かねがね想定していた通りでありんすな」

「……それと……このつ……水の上で……スクワットをやらされているのは……関係っ……あるんですか？」

「無論。つべこべ言わず、ちやきちやきチャクラを使い切るまでスクワットしななし」

漸く自然エネルギーを感じ取れる段階に入り始めたシライトに、大蛞蝓仙人が科したのは、水上スクワットという何とも珍妙な修行だった。

「はい、シライトくん。ファイトです！ 頑張つて！」

表情には出ないものの、かなり疲弊してきたシライトに激励を送るカツユ。

可愛らしい声も相まって、僅かながらシライトに活力が湧く。僅かだが。

スクワット——それは直立した状態から膝関節の屈伸・伸展を繰り返す運動であり、『下半身運動の王様』と呼ばれる程にポピュラーな

筋トレだ。

同じ筋肉量を増やすとしたら、スクワットが15回で済むのに比べ、腹筋だと500回もしなければならぬ。痩せたい体を作るならコレ！ という筋トレこそスクワットだ。

そんなスクワットを水上で行うシライト。水面に立つには、つり合いが取れるよう足裏からチャクラを放出し続けなければならない。加えて、チャクラを消費し続ける分、スクワットしながら補給分のチャクラを練らなければならないのだ。

そして、極めつけに吐納法。漸く慣れてきたとは言っても、それはあくまで日常生活においてだ。激しい運動の最中に、一定の呼吸リズムを保つことは容易ではなく、回数を重ねれば重ねる程に、スクワット一回に掛ける時間が長くなっていく。

「大切なのは数ではなく質。数は、月日を重ねれば自然と伸びささります。継続は力なり。石の上にも三年。ほれほれ、限界まで絞りしんせ」

見物を見るかの如く、仙人流スクワットに勤しんでいるシライトを肴に、大蛞蝓仙人は盃をチョコチョコ傾けている。

「……仙人がっ……お酒……飲んで……いいんですか？」

「仙人と僧は異なる存在。酒を嗜んでも、問題は全く無いでありんす」
クツクツと笑い大蛞蝓仙人は、更なる酒を仰ぐ。

仙人と聞けば、徳の高い……それこそ寺の僧侶の極致のようなイメージがあるが、実態は全く違うようだ。

火の国にある「火ノ寺」なる名刹には、「仙族の才」と呼ばれる特別な力を有す忍僧が居るが、「仙」という言葉が付いたとしても、なにかしら関係があるという訳ではないらしい。

閑話休題。

「……そもそも……僕は……なんで……修行してるんですか？」

「ほう、目標さえ見失いしんしたか」

「いや……具体的に……仙力を学んで……何に役立つのかと……」

「ふむ」

成程と首肯する大蛞蝓仙人は、数秒思索し、口を開いた。

「——それは、自分で見つけなんし」

「……へ？」

意外な答えだった。

思わずピタリとスクワットを止めてしまったシライトであったが、即座に続けるよう視線で促される。

終わりの見えない修行に辟易しつつも、次の言葉を待っていると、彼女はどこか遠くを見つめるように視線を空へと上げていた。

「……そもそも、人の扱う忍術は生活を便利にする為のものでありません」

「……はあ」

「されど、忍術の発明により、それまでの精神的な修行に重きを置いていた忍宗は、術を中心にした修行へと変貌したと、あちきは記憶しませんが」

ポツリポツリと語られる歴史。

この世に隠れ里などという制度が生まれるよりも遙か前——太古を過ごした生き証人である彼女の話がどれだけ価値のあるものか。子供ながらにシライトは、ひしひしとその言葉の重みを実感しつつ、屈伸と伸展を続ける。

「なにも、始めから忍術が戦いを生み出すものではありません」

人を治す為の薬を、人を殺める為の毒に変えるように。

食材を切る為の包丁を、人を傷つける為に振るうように。

人間とは戦いの歴史。知恵の歴史。過去より築き上げられし先人の知恵が、次世代の人間の未熟な心によって新たな武器を生み出し、それがまたこの大地に血を滴らせ、空に悲鳴を響かせる。

未来を生きる者達へ、よりよい暮らしを。最初こそ、澱みなき思いで次世代に託された知恵が、また新たな悲劇を生んだ。

「……所詮、〃力〃などは持つ者により千差万別な扱いがなされささんす。刃一つにしても、医者人は人を助ける為、料理人は食材を捌く為、大工は家を建てる為、忍は……なんでありんしょうな」

クスリと一笑。

忍の任務は多岐に渡る。一概に何とは言えないだろうが、彼女が

笑ったのはまた別の理由だろう。

「あちきは、たまたま湿骨林に来た主さんが、たまたまあちきの仙力を会得し易そうな性格で、たまたま主さんが友を助けたそうだった故、たまたま気分が乗ったあちきが、こうして修行を見ている所存でありんす」

やけに『たまたま』を強調してくる。

「……さて、一つ問おう。主さんは、偶然手に入れた機会を生かし、凡そ凡人が生涯の内に会得することが無いであろう仙力を得た後、何を為したいと望みささんす？」

キツと、今までにない鋭い眼光で睨まれる。

あくまで幻術。されど、滲み出る威圧感の本物だ。気候と運動が相まって汗を流していたシライトであったが、途端に脂汗が額からにじみ出てきた。

(何を為したい……?)

初心に帰れば、『フウをなんとかしたい!』になるが、それでは宝の持ち腐れだ。

仙力がどの程度凄いのか、まだ身をもって実感していないシライトは、頭の中で木魚がリズム良く鳴り響くのを錯覚しつつ、思案を巡らせる。

「何をと言われても……」

自然と口が動く。

「無難に……世の為人の為に……」

内容は、取って付けたような他愛ない内容。

「困ってる人を見過ぐささないような……そんな、優しく在るからこそ為せる……みたいなきことを」

「他人の苦境を見過ぐさぬ、と」

「まあ……はい」

「……ふふつ、善しや善しや。それは四端の心が一つ、『忍びざる心』でぐざりんしょう」

「……そうなんですか?」

「左様。童なりににも忍道を備えているようで、あちきは安心しきさん

した」

妖艶に笑う大蛞蝓仙人は、盃を直覚に傾け、最後の一滴をその舌の上に転がせた。

あの酒は甘いのか、それとも苦いのか。未成年のシライトには分からぬことではあるが、いつか成人した時、友人と共に酒を仰いだ時に分かるであろう。

そして今は、その友人との未来を共に過ごすべく、こうして修行している。

「さて、道徳的な話はこれにて終い。次に、技量の観点から語るとしなしょう」

「あ、はい」

この切り替えの早さ、秋空の如く。

次なる酒瓶を開けようとしている大蛞蝓仙人は、現時点でかなりの酒を飲んでいながらも拘わらず、ケロリとしたまま次に話に移る。

「忍術において、『印』と『術』が因果関係にあることは理解できささんす?」

「……印って……あの……手の型? みたいな」

「左様。基本は子・牛・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十種類。術は、この印の組み合わせにてチャクラを練り、コントロールし、術を発動する。……ああ、これは人間に限定しての話。あちきらのような人外のほとんどは、印を結ばず術を発動できささんす」

「……はあ」

「理論だけで言えば、チャクラ量が足り、チャクラコントロールもできていれば、どのような術も発動できささんす。しかし」

「しかし?」

「生きとし生ける者、すべて皆違う存在。『人間』と一括りに言っても、先天的な才は人それぞれ。その一つが性質変化」

「せーしつへんか」

「その声色、存せぬようでありんすな」

「すみません」

「素直でよろしい」

性質変化。チャクラには「性質」と呼ばれる特性があり、基本は火・水・土・雷・風の五つから成り立っている。

これらの性質のいずれを持つか、それは遺伝子的な要素が非常に大きい。

火の性質を持つ者であれば火遁を。

水の性質を持つ者であれば水遁を。

土の性質を持つ者であれば土遁を。

雷の性質を持つ者であれば雷遁を。

風の性質を持つ者であれば風遁を。

持ち合わせた性質に合致していれば、より強力な術を会得することが叶い、逆に持たざる性質を極めようとしたとしても、会得には長い時間を要し、更には限界が見え易いのである。

「とまあ、長々語ったが、あちきが申したいのはチャクラコントロールさえできささんしょうものなら、程度はあれど五代性質変化全て会得できるということ」

「はあ」

「そして、あちきが主さんに伝授しんせようとしているのは、チャクラコントロールが非常に難しい仙力。これと比べれば、他の術のチャクラコントロールなど赤子の手をひねるほど容易きこと」

「……本当ですか？」

「比喩じゃ。それだけ仙力の会得が至難の業と考えしなんし」

依然として、術を何一つ大蛞蝓仙人から教えてもらっていないシライトは、半信半疑といった様子で問いかけてみるが、鋭い眼光によって否応なしに黙らせられる。

「それ、あちきが言いたいことが理解できささんす？」

「……とにかく……土台を固めよう……みたいな」

「明答」

大蛞蝓仙人は首肯する。

「基礎が固ければ応用が広がる。後は、主さんが己が道を切り開きなんし」

(……と言われても)

崖に垂直に立ちながら滝壺に釣り糸を垂らしながら、シライトは悩んでいた。

傍から見れば、面妖にもほどがある体勢での釣りではあるが、修行の過程で慣れてしまったものなのだ。所詮、足裏で壁に吸着しているとは言っても、体勢を維持するために全身の筋肉は使う。つまりこれは、余り動きたくない人間なりの筋肉を酷使するトレーニングなのだ。

チャクラコントロールだけならば、同世代の中でも秀でている方だろう。

尤も、彼自身忍者学校に相当する「忍塾」に通っていないことから、比較する相手がほぼ居ないのだが。

(今更忍者になろうっていうのはアレだし……)

折角鍛えているチャクラコントロール、まったく使わないというのももったいない。

だからと言って忍術を使うイメージが最も強い忍になるのは、シライト的には避けたい所であった。特別忍を忌避している訳ではない。寧ろ、里を守る為に命を懸けて任務に勤しむ姿には、尊敬の念さえ覚える。

だが、尊敬するのと実際にやりたいと思うのは、決して同義ではない。

シライトは平和主義。血生臭い仕事はやりたくないと考えている。となると、チャクラコントロールによる身体強化を扱う仕事に絞られるだろうか。

大工……悪くはない。重い角材でも、練度を高めればちよよいのちよいで運べ、高所でもなんなく作業をすることが可能だろう。

しかし、どうにもしっくりこない。

いや、仕事をえり好みしている訳ではない。ただ、仙人の前で言い放った『世の為人の為』になれるような仕事が一体なんなのだろうか

……できれば、誰が見ても『ああ、それはそうだ!』と理解を示し、賛同してくれるような仕事が良かった。

別に大工という職が悪い訳ではない。

なのだけれども、『大工Ⅱ世の為人の為の仕事』とイメージが直結し難い。あくまで、シライトの頭の中では、だ。

「じゃあ、医者とかはどうだ?」

「医者」

それはまた別の日、里の子どもたちの遊び場で、ちようどいい切株に座るシブキがシライトに言い放った。

里長の息子である彼は、忍術の修行は余り好まないと聞いているが、里の子どもたちと遊びがてら、忍術を教えているようだ。

教えているのは、水遁、水手裏剣”。水で創り出した手裏剣を相手に投擲する、至ってシンプルな忍術だ。

護身用にと教えられた忍術で、子供たちは木の枝に吊るされた的を狙い、手裏剣と呼ぶにはいささか鈍らな水の塊を放り投げる。

そんな光景が横で広がる中、シライトは思いつかなかった選択肢を提示され、大きく心が揺れ動いていた。

「なんでも、忍術は忍術でも医療忍術という分類があるらしい。怪我の治りを早くしたり、細胞を再生させたり、毒を抜いたり……みたいな感じだったか? でも、かなり緻密なチャクラコントロールが必要みたいっぽくてな……」

「おー」

とりあえず『チャクラコントロールを鍛えている』という部分だけ話し、相談したのだが、中々いい情報を手に入れられ、表情には出ぬものの満足そうにするシライト。

成程、忍術にはそのような分類があったのか。これは初耳だ。

普通の医者にはこなせぬ……それこそ、緻密なチャクラコントロールを有しているからこそできる業。

繊細なチャクラコントロールを求められる仙力修行と平行して学ぶには、ちようどいいではないか。

(そうだ、医者になろう)

月日を重ねていくごとに、シライトの目標は固まっていくなのであった。

「ふむ、医者になりたいと」

「はい」

「都合がい……—ごほんつ。ちょうどいい。あちきの知り合いには、医療忍術に長けている者が居る」

咳払いした大蛸蟪仙人は、目指すべき方針が具体的になりつつある報告をシライトから受け、一人のくノ一を脳裏に過らせながら言葉を紡ぐ。

「あちきが課す業が終わり次第、主さん自身で探して師事すれば良いでござりんしょう。なに、顔が利く故、あちきが一言添えささんす」
「どうも」

「さて……則天去私の印を刻んで早半年。そろそろ次の段階へ移る頃合い。近う寄れ」

「あ、そのパターン……」

なにか口クでもないことが起こる。

そんな予感を覚えつつ、向かわなければ話にならないことも理解している為、続きの言葉を呑み込んで大蛸蟪仙人の下へ歩み寄る。

「ふふつ、今日は一つ術を授けることに致しんす」

「……どんな感じの……術ですか？」

「己がチャクラを元に、周囲の生きとし生ける者を繋ぎ、身体エネルギーを拝借する術——術の名を『異身伝心の術』」

「……はあ」

どの程度凄いのかは全く理解できていないシライト。

このリアクションについては予想通りであったのか、特に触れることなく大蛸蟪仙人の説明は続いた。

まず、話を整理しよう。

この修行は、シライトに仙力を会得してもらおうべく行っている。

だが、彼には将来仙力を会得するに足りるチャクラ——特に身体エネルギーがない。潜在チャクラ量もたかが知れている。これでは、折角の修行で増えた精神エネルギーも、宝の持ち腐れだ。

ならば、他の生き物から身体エネルギーを貰おう！　そういう魂胆で発明されたのが、異身伝心の術である。

「普通、チャクラは身体エネルギーと精神エネルギーをバランスよく練りささんすな？」

「はい」

「しかし、この術のミソは精神エネルギーを多めに練ること」

「ほう」

「割合で言えば……ふむ、2：8くらいでありんす」

「成程」

言っている意味がさっぱり分からない。

しかし、内容だけはしっかりと記憶しておく。

具体的にどのような理論なのかを問えば、精神エネルギーが元の陰遁で、身体エネルギーが元になっている陽遁。相反する二つが引つ張り合うとかなんとか……磁石のN極とS極が引き合うような理論で身体エネルギーを貰うとのこと。

対象は生き物でなくてはならない。何故なら、石や土などの無機物に身体エネルギーは宿っていないからだ。

逆に言えば、生き物であればなんだって構わない。

人は勿論、鳥や魚、果てには植物まで。

そう、大自然を共に生きる生命を味方につける術こそ、この異身伝心の術なのだ。

「しかし、植物の身体エネルギーを拝借するのは容易くとも、意思強き生命の身体エネルギーを拝借することは至難の業。例えば、人間などはな。尤も、心通わせた者同士などであれば、何十人、何百人とでも繋がりを持てるのがこの術の強み」

「……具体的に……どんな感じで力を借りるんですか？」

「ん？　むう……精神世界で綱引きでありんす」

「つなひき」

それは「拝借」と言うより、「強奪」なのでは？
思っていたよりも乱暴な術の習得を迫られ、シライトは頓狂な声を
上げるのだった。

五． ナチュラル窃盗

「シライトくんは勉強して偉いね〜」

「……それほどでも」

里のとある診療所。

良いことなのか悪いことなのか、診療所内はガラガラ。人気がほとんどない室内で、この診療所に務める里医者である老爺と話しているのはシライトであった。

人が居ないからと、畳の上に机まで用意してもらい、借りた医学の本を読み漁る。

人体の構造や薬草についての知識、薬の調合方法など、ありつたけの知識を頭に詰め込んでいるシライトの姿は、老爺からしてみれば勉強熱心にしか見えないだろう。

しかし、彼がわざわざこうして診療所で医学について学んでいるのかと言えば、手っ取り早くお金を掛けないで医学を学べる場所が、ここしか思いつかなかったからだ。

里の忍でもないのに、医療忍術を教えてもらうのは不可能。

本格的な病院に赴いたとしても、相手にしてもらうことは難しい。となれば、比較的出入りし易いこの診療所しか選択肢がなかったのだ。

この診療所は普段、内科として機能している……のだが、余りにも来院する人が少ない為、大抵昼間は里の老人たちの井戸端会議に使われるような場所だ。

緩い雰囲気。

シライトのような子供が赴けば、かなりの確率でお菓子をももらえたりする。

さて、ここで何故シライトがお金を掛けないことを視野に入れているかを説明しよう。

彼は、湿骨林での修行を終え次第、大蛞蝓仙人の知り合いであるという『綱手』なる者へ弟子入りするため、里を離れて旅するつもりなのだ。

何をするにも金は要る。

そう、彼が毎月貰っている五十両をコツコツ溜めているのは、路銀として用いようとしているからだ。

好物のきな粉餅を買うのも我慢し、修行漬けの毎日。

そんな時、『じゃんじゃん読んでいいよ』と医学の本をタダで提供してくれ、あまつさえ持ち合わせたおやつを山ほどくれる老人たちが集うこの診療所は、シライトにとって絶好の場所なのだ。……と言っても、老人たちがくれるおやつのはとんどが飴なのだが。

外科については、後々師事する予定の人が教えてくれるはず。

大蛞蝓仙人の言葉を受け、今はただ自分にできる範囲で勉強しようとするシライトは、ただただ文字を頭に叩き込む。

「……ドクダミって……食べれるんだ……」

旅の道中での食事の幅も広がりそうだ。

「さて……一年間の吐納法の矯正。加えて、ついでの鍛錬。雀の涙ほどはチャクラが増えてござりんしょう」

(雀の涙……)

あの割とキツかった水上スクワットで、雀の涙ほどこかチャクラが上昇しないのか。

元々それほど期待していなかったとはいえ、面と言われたら言われたでシヨックだ。何とも言えぬ表情で大蛞蝓仙人を見上げるシライトは、何故か霞む視界を晴らそうと目を擦った。

「異身伝心の術の進捗具合はまずまず。まあ、後は自分で進めなんし」
(そこは放任なんだ……)

「さて……波紋呼法にて、自然エネルギーの存在自体は感じ取れるようになりさきさんす?」

「まあ……フワツと」

「なら良し。では、そろそろ仙術チャクラの練り方を伝授するとしんしょうか」

「せんじゆつチャクラ」

「近う寄れ」

修行もそろそろ本番のようだ。

言われるがままに歩み寄っていくシライト。すると、その途中で違和感を一つ覚えた。

——なんか……いつもに増して潤ってるみたいな。

大蛞蝓仙人が潤っている。

いや、湿骨林そのものが常時より濃霧に包まれ潤っているようなもののだが、それにしても今日の彼女は瑞々しい。

と言うか、水々しい。

「ふふっ、今日は水分身にて此処に赴きささんす」

「あつ、だから……」

成程、今日は幻術ではなく水分身の術で目の前に佇んでいるという訳か。

自分と同体積の水を用い、分身体を作り出す術——〃水分身の術〃。本体の十分の一程度の力しか発揮することができず、尚且つ今の彼女の姿は人間。本来の力を発揮することなど叶わないハズだが、一体何をするのか。

怪訝そうに眉を顰めるシライトであったが、徐に歩み寄ってくる大蛞蝓仙人の姿に、ピタリと体の動きを止める。

「則天去私の印はもう要りんせん。代わりに……土遁・地牢^{ちろう}」
「？」

ふとシライトの身体に触れる大蛞蝓仙人。

すると、衣服の合間から、彼の皮膚に土色の縄文が刻まれたではないか。

そこで察する。

「……また……なにか矯正される感じですか？」

「察しが良くなってきたでありますな」

またか。

口には出さぬものの、また則天去私の印のように痛みが伴う術であるのは嫌だと考える。

「安心しななし。この術は、体内のチャクラに反応し、体を石のように縛り付けるもの。普通に過ごす分に問題はなし」

「では、どういった用途で……」

「その前に、まずは仙術チャクラについて話しんしょう」

大蛸蟪仙人曰く、仙術チャクラは普段は身体エネルギーと精神エネルギーで練るチャクラに加え、自然エネルギーをバランスよく練ったもの。これ自体は以前も聞いた内容ではあるが、取り込んだ自然エネルギーが少なかった場合と多かった場合の欠点の説明がまだだった。

簡潔にまとめれば、少ないとそもそも仙術を扱えない。多いと、姿が元になった動物へ変化し、最悪は石像になってしまう。

「そこで使うのがこれ……湿骨林に伝わる仙酒、八塩折やしおりの酒でありんす」

「お酒……」

「これには過剰に取り込んだ自然エネルギーに反応し、飲んだ者を強い酩酊状態に陥れ、取り込みを困難にさせる効果がありさきんす」

妙木山の蝦蟇油。

龍地洞をちみずの変若水。

そして、湿骨林の八塩折の酒。

これら三つは、仙力を会得する際に用いる道具であり、何かしらのコツを掴めるような効能が秘められている。

中でも八塩折の酒は、自然エネルギーの過剰取り込みを抑制し、最悪の事態を防ぐ効果があるのだ。

「更に地牢は、普通のチャクラには反応しんすが、仙術チャクラには反応し難い術……ここまで申せば理解できさきんしょう」

試すかのような視線。

流石にシライトもそこまでバカではない。

練ったチャクラに反応するも、仙術チャクラに反応しない術。

そして、過剰な自然エネルギーに反応してくれる仙酒。

「……ちようどいい塩梅を見つけれ……という訳ですか？」

「明答」

大事にならぬよう練られた修行内容にホッと胸を撫で下ろす。

「しかし、心しておきなんし。ここからが至難の業。一朝一夕では為せぬと思いなんし」

安堵を押し潰すかのような、重く冷たい声。

この日からシライトは、毎日吐き気を催す修行を行わなければならなくなった。

最悪の気分を、シライトは味わっていた。

これが二日酔いなのか？ 齢十一にして二日酔いを体験することになるうとは、まさか思いもしなかった。

修行に用いている八塩折の酒は、実際にアルコールが入っている訳ではない。

只、過剰な自然エネルギーに反応して、酩酊状態に陥れるものであるのだが、予想以上にその酩酊状態が酷かったのだ。

頭の中で鐘が鳴っているようだ。

煩惱を消せ、無心になれと鳴り響く年越しの鐘の如く、頭がガンガン唸っている。

成程、確かに自然エネルギーの扱いは難しい。これは一週間や一か月程度ではどうにもならなさそうだ。

そもそも、足りない身体エネルギーを周囲の生物から借りる異身伝心の術も併用せねばならない為、会得難易度が尋常ではなく高くなっている。

片や身体エネルギーと精神エネルギーを2：8で練れと言っている反面、片や身体エネルギー・精神エネルギー・自然エネルギーを1：1：1で練れと言う。

頭がこんがりがりそうな手順を踏まなければならないのだから、難しいのも無理ではない。

『万人が仙力を扱えるように』というコンセプトの下で編み出された手順ではあるが、それにしても難しいではなからうか。先天的な才を重視しないとは言いつつも、これでは本末転倒……とは言いい切れない。

い。

どうしようもないチャクラの上限を何とかできるだけでも、彼女の発明した術は素晴らしいのだろう。

いや、だがそれにしても頭痛が酷い。

「ふう……」

「呼んだっすか？」

「……そっちの意味じゃないけど……うん……まあいいや」

滝隠れを囲む断崖の上で寝そべっていたシライトに影が差す。

なんのことはない。ただ、たつた今ここへやって来た少女が、身を乗り出して彼を見下ろしているだけだ。

『そうっすか！』と笑うフウは、大きな荷物を抱えたまま、彼女の特等席である断崖に腰を掛ける。

「どっこいしょっと！」

「……大荷物だね」

「にししっ、なんだと思うっすか？」

かなり巨大なように見える巻物を地面に置くフウは、悪戯つ子のような笑みを浮かべながら言ってきた。

やけに笑顔が輝いているのを見るに、それなりのブツなのだろう。とはいっても巻物は巻物。用途はある程度絞られる。

この忍者の卵が、大層興奮して持つてくる巻物に書かれているもの、それは――

「……凄い忍術でも……書い」

「ピンポーン！ その通りっすー！」

食い気味に正解を言い渡された。

続きの言葉は呑み込み、ワクワクと巻物の紐をほどくフウを温かい目で見遣る。

「里長の倉からこっさり持ってきたこの巻物……きつと、それはもうド派手でカッコよくてすんごい術が記されてるハズっすよー！」

「……待って……それは要するに……窃と」

「おーっぶん!!」

友人の凶行を止めようとするも一歩遅かった。

紐解かれた巻物を勢いよく開いて見せるフウは、瞳を爛々と輝かせ、食い入るように巻物に記されている術を眺める。

「どれどれ……んんっ？　じ……じ……じ……『地怨虞』^{じおんぐ}って読むんすかコレ？　相手の心臓を取り込んで……うえ〜！　気持ち悪い術っすねえ」

ゲエと舌を出すフウ。

彼女が最初に目にしたのは、『地怨虞』というなんともおどろおどろしい名の術だ。体から黒い頑強な繊維を生やし、生きたまま相手の心臓を抜き取り、自身の体へ埋め込むことにより寿命を延ばす——なんとも恐ろしい術である。だからこそ、『禁術』と銘打ってあるのかもしれない。

フウもお気に召さなかったようであり、すぐさま別の忍術へ目を向ける。

が、

(……心臓移植とかに使えるかなあ?)

割とシライトは食いついていた。

しかし、術の内容が倫理に反している。医療に使うには、どうにも問題のありそうな術だ。

少々胸に期待が込み上がっていたが、実用性に欠けると判断するや否や、冷や水を掛けられたように冷静になる。

その後は、フウと共に様々な忍術の存在を目に焼き付けた。

仙方同様、一朝一夕にて会得できるような忍術は記されていないが、子供という生き物は、その存在に歓喜する。夢を見るのだ。

シライト自身、多少罪悪感があったものの好奇心には勝てず、最後までフウと一緒に忍術を読み進めた。

それから、巻物を元の場所へ戻すべく去っていったフウを見送り、再び酔いを覚ます為の昼寝に勤しむ。

温かな日の光。

柔らかく吹き渡る風。

ちようどいい塩梅の気温に、夢見心地な気分になるには数分とかならなかつた。

瞼を閉じれば、先程まで実に楽しそうに巻物を眺めていた少女の笑顔が蘇る。

「フウ……」

呼吸ついでに名前を口に出した後は、笑顔の残像を脳裏に過らせ、そのまま眠りに入る。

今日は良い眠りにつけそうだった。

だが、この時彼は知らなかった。

禁術が残す禍根。

そして、後に降りかかる凶刃の存在を。

湿骨林に初めて来てから、もう二年が経とうとしていた。

シライトももうそろそろ学校を卒業する時期。両親からは、普段読み漁っている医学の本を見られ、『医者になるのかしら』と期待を込められた視線を向けられているが、彼自身卒業後は里を出て旅するつもりだ。

その為には、

「おっ」

石の上で座禅していたシライトの目の周りに、スウつと濃緑色の隈取が浮かび上がる。

その様に、やや歓喜の滲んだ声を上げる大蛞蝓仙人であったが、隈取は五秒と立たずして消えてしまう。

「ふむ、仙術チャクラの練り方自体は大分慣れてきたようでありんすな。しかし、今のチャクラ量はこれが限度……あとは長い目で見ささんしょう」

「……そうですか」

ぴよんと石から飛び降り、水面に映る自分の目の周りを凝視する。

仙力を発動した——仙術チャクラを体に巡らしている状態を、俗

に「仙人モード」と呼ぶ。仙人モードが発動していれば、証拠として目の周りに隈取が出るのだが、シライトはその発動時間の短さ故、自分では鏡で確かめることさえできない。

ここで彼女が言う『今のチャクラ量』とは、異身伝心の術を用いた上での、シライトの最大限度収集し、練れるチャクラ量だ。他の生き物から身体エネルギーを借りれるとしても、借りるにもチャクラが必要であり、尚且つ自身の精神エネルギーも多くてはならない。こればかりは、長い時間を掛けて増やしていく他ない要因だ。

要修行である。

そんなことを考えているシライトの下に、いつの間にやら歩み寄っていた大蛞蝓仙人は、掛けていた地牢を解く。

これでシライトは晴れて自由の身。

無駄に呼吸を矯正されることもなく、チャクラを練って体が全身痺れて石のように動かなくなることもない。

余りの感慨深さに、流石のシライトも目尻からほろりと雫を零す。

「あちきがわざわざ手順を立てたとはいえ、その齢にして仙力を会得する……ふっ、大した童でありんす」

「……お褒め頂き恐悦至極」

「さて、これで一応主に仙力を伝授致しんした。これからは、あちきが兼ねてより申しんしていたように、綱手姫の下に赴いてもらいさ
さんす」

「つなでひめ」

「人相はカツユが知りござんす。アレは医療忍術の専門家。医者になりたい皆さんの師には適任でござんしょう」

「はあ……」

「それと、約束通り各国の酒を献上しんせ」

「あ、はい」

大蛞蝓仙人にとって、メインは最後の酒だ。

仙人はここまで飲んだくれるものなのかと最初は幻滅したが、飲めども飲めども一切酔わぬ様を見て、『嗚呼、彼女は仙人だな』と思ったものである。ふと彼女が漏らした『あの世に酒は無い』という呟きは、

至言とさえ思う。

「まずは……ふむ。空区に赴き、蜂蜜酒を手に入れて湿骨林にお出でなんし」

「はちみつしゅ」

仙力会得の余韻を感じさせぬまま、大蛞蝓仙人に課された任務は、それはそれは甘そうな酒を持つてくることであつた。

六． 一先ず暫定ニート

『旅に出る!?!』

学校を卒業した後、両親に語ったこれからの進路について、父と母は両方驚愕の声を上げた。

十二歳の子供が旅に出るというのも勿論、どこかでのんびりすることが好きそうな自分の息子が、突然アクティブな事を言い出したことも驚愕の対象だろう。

半信半疑。両親は、ピクニックを旅と言い換えているのだと勝手に理解し、あれよこれよと心配しつつも、旅に出ることを許してくれた。そんなシライトは、旅に必要ななりそうな物を準備し、背囊へ詰め込んでいく。

「……まあ……重そうなのは口寄せすればいいかな」

荷物としてかさ張りそうな物に関しては、巻物に口寄せの術式を書き込み、いつでも口寄せができるようにしておく。これだけで旅がし易くなるというものだ。反面、巻物を無くしたり壊れたりした途端、何もできなくなってしまうが。

医学を学ぶ上で、薬草についての知識も得、道中生えているであろう野草や山菜が食べられるかも判別できる。湿骨林へ赴く上で、弁当にと何度も作った兵糧丸は、主婦顔負けの出来で作成可能。

滝の国を歩き回る上では、知識も技術も十分得た。

このまますぐにも旅立てる用意は出来ているが……

「……釣りに行くこう」

やり残したことがある。

「エイエンゴイ……釣らでおくべきか」

里にほど近い吊り橋。谷間の下からは、清らかな川の流れが聞こえてくる。

そこへ釣り糸を垂らすシライトは、エイエンゴイを釣らんと張り

切っていた。

理由は割と単純だ。フウへの祝いである。

釣ると意気込んで数年、昨日までは遂に釣ることが叶わなかった獲物ではあるが、ここで一匹釣りあげ、友人として何かをしてやりたいところだった。

旅に出る前に、一つでも多く思い出を作りたい。

子供なりに考えての行動。もし釣り上げることが出来れば、彼女はとても喜んでくれるはず。

次にフウが遊びに来るのは明日だ。

それまでがタイムリミット。

「……まあ……そんな簡単には釣れないとは思ってますけど」

「そうですねえ」

呑気に雑魚寝しながら、竿が撓るのを待つシライト。肩に乗るミニサイズのカツユが、同意を示し、流れる雲を眺める。

根気強さはこの二年で得た。

一日待ち続けることなど他愛もない。

緩やかに流れる時の中、辺りに広がる自然に目を向け、じっくりその時を待とう。

そんなことを思っている時だった。

「あ、シライトくん！ 竿が！」

「あ」

地面に刺していた竿が、突然グワリと大きく撓る。これはかなりの大物だ。

期待を胸に抱きつつ竿を手に持ち、身を乗り出して谷間の下を見れば、今まで見たこともないような巨大な魚影が、飛沫を上げつつグルグルと泳いでいた。

——そう。この少年、運は良い方だ。

だがしかし、これは想像を絶する戦いの始まりに過ぎない。

「あ、これ……竿折れますね」

「ええっ!？」

かつてない程に撓る竿を見て、冷静に呟くシライト。

竹で出来ており、柔軟性には富んでいるハズなのだが、どこからともなくビキビキと裂けているような音が響き渡ってくる。

折角の獲物を前にし、まさか道具の限界がこうも早く訪れかけていることに、焦燥を隠さぬカツユ。

しかし、次の瞬間シライトは、何を思ったのか谷間へ飛び降りた。「何しているんですか!?!」

100%驚愕の声。

このままでは水中へ落ちる。ナメクジは有肺目。一応カタツムリ同様、巻貝に分類されている生き物ではあるが、水の中へ落ちれば溺れ死ぬ。分裂体の一体が死んだ所で、本体のカツユにはさしたる影響がないとは言え、突然入水しようとする少年を目の前には慌てざるを得ない。

しかし、二年でチャクラコントロールを鍛えた彼だ。

そのまま入水する訳もなく、巨大な魚影が渦を巻くように泳いでいた水面の中心へ降り立った。

ホッと一息つくカツユ。彼女に弁解すべく、シライトは結んでいた口を開いた。

「いや…………その…………竿折れそうだったので…………だったらこっちから行こうと…………」

「お、おお…………豪快ですね」

若干カツユに引かれることとなった。

だが、悠長に話している暇などない。

思っていたよりも魚の抵抗が激しい。竿を持っているシライトから離れようと、水中を暴れ回る獲物は、川の上流へ上流へと泳いでいく。

「どうなさるんですか?」

「…………釣りは…………魚が疲れた所を釣り上げる…………そういうものです」

「と、言うことは…………」

「追いかけてみましょう」

これより始まるのは、前代未聞の魚との鬼ごっこ。

行く先を導かんばかりに、水中へ誘われている糸を頼りに、逃げお

おせようとする魚を追いかけるのであった。

鬼ごっこが始まり、早三時間。

谷間を抜け、森を抜け、時には人が踏み入ることが不可能な断崖絶壁にさえ足を運ぶことになった。

竿が折れぬよう細心の注意を払って追い続けるシライトの額には、玉のような汗が滴っている。流石に三時間の鬼ごっこには疲弊してしまうという訳だ。

しかしそれは相手も同じ。心なしか、魚の抵抗も緩くなってきた。

ここが正念場だ。先にシライトと魚、そして竿も含め、折れた方が敗北を喫することとなる。

熾烈な戦い。

友が為に力を振るうシライトは勿論、魚にとっては命がかかっているのだ。激闘にならないはずがない。

「頑張って下さいい！ 生き物は、今際の時こそ力を振るうもの！ 油断せず、着実に釣りあげましょう!!」

だが、一番興奮しているのはカツユだった。

耳のすぐ傍で行われる実況。柄にもなく、その可愛らしい声に熱がこもっている。そして熱くなっている所為か、いつもに増してヌメヌメしている気がした。

(…………このままじゃ罫が明かない…………)

カツユのヌメヌメ具合は置いておき、膠着状態の中で思案を巡らせるシライト。

このままでは釣り上げるのに決定打が欠けている。チャクラコントロールで身体能力を向上させ、無理やり引っぱり上げようとするれば、竿が折れてしまつて逃げられるだろう。それでは今までの苦労が水泡に帰す。

どうすればいいものか。

一時間前から考えていたお題に、実は彼は既に答えを一つ出してい

た。

上空で、キー！ と啼いた鷹の声が木霊する。

(ここだ……っ！)

刹那、シライトの目の周りに濃緑色の隈取、同時に額にも二重丸が浮かび上がった。

「そ、それは仙人モード!? まさかシライトくん、貴方は……」

「ずつと……異身伝心の術で……チャクラを集めて練ってました……」

信じられないと言わんばかりに、カツユの声が震えている。

そう、今に至るまでの——一時間ほど前から、シライトは仙人モードを発動すべく、地道に身体エネルギーを集めた上で、仙術チャクラを練っていたのだ。

緻密なチャクラコントロールを要求される仙力……それを、巨大魚と格闘している中で集めているとは。

波紋呼法は、動きながらも宙に漂う僅かな自然エネルギーを、呼吸と共に体内に取り入れることのできる吐納法。その特性を最大限に生かしている。

その神経に驚いているカツユ。仙力を釣りに使用していることについては、一切驚いてはいない。

「ですが、貴方の仙人モードは……いや、まさか!?!」

シライトは数秒しか仙人モードを維持できない。とてもではないが、戦闘に用いるには実用性がない。

しかし、時にはその数秒——刹那と呼ばれる一瞬であっても、力を発揮できれば流れを変えられることが出来る場面が、人生には訪れる。

今日、今、この場面がその時であった!

(見える……動きが見える)

僅か数秒の仙人モード。

しかし、仙人モードが発動している際は、身体能力、知覚能力が大幅に上昇し、並みの感知タイプの忍をも凌ぐ察知能力を得ることがで

きる。

その数秒、五感の全てが鋭敏化しているシライトは、未だ水中に佇む巨大魚の動きを見極めようとした。

この時初めて、秒の世界というものを体感したような気さえする。時間がゆっくりと流れていく。鋭敏化された感覚より脳へ伝えられる膨大な情報量に、脳が沸騰しそうな気分だ。

そんな中シライトの脳裏に過った複数の案の内、彼が選んだのは――

「とう」

「えっ？ きゃあああああ!!」

竿、そして釣り糸を手繰り寄せるかのように、自ら水中へ赴くことだった。

この糸の先に獲物が佇んでいる。決して離すものか。

澄んだ水の中、しっかりと相手を見定めようと瞼を開けば、何度か見たことのある美しい鱗を持った巨大魚の姿を確かめられた。

――エイエンゴイだ。間違いない。

尚のこと、敗北することができなくなったシライト。

しかし、ここで仙人モードが解けてしまう。途端に元の身体能力に戻ったが、それを察したのか、少し大人しくなっていたエイエンゴイが、最後の力を振り絞らんと、体を大きくくねらせ始める。

最後の抵抗。

そう、これが最後だ。

ならばコレを乗り越えよう。

負けじと力を振り絞るシライトは、残ったチャクラを総動員し、身体能力を上昇させる。

着実に糸を辿り、獲物に近づいて行く。ここは水中。筋肉を酷使していることもあり、長く息は続かない。

――しかし、捕らえた。

糸を辿った先には、ギョツとした瞳を浮かべるエイエンゴイの口。シライトは糸を辿り終えた後、マウント（強いて言えばバックマウントポジションに当たるだろうか）を取りかのように背に乗った。

(鯉のメ方はまず……)

徐に手刀を構える。

その様子が見えているのか、エイエンゴイは水面に水柱が噴き上がるほど、尾びれを振るって暴れ回った。

しかし、勝負は決まる。

(額を叩いて気絶させる……!)

血と汗と涙も混じっている清らかな水の中、鈍い音が鳴り響いた。

「ほおおおおおおおおおッ……!」

感嘆の息を漏らし、瞳を爛々と輝かせているのは他でもない、フウだ。

「おつきいつすね!」

「……おつきいね」

興奮が収まらないフウは、ちょうどいい石の上に置かれているエイエンゴイを前に、鼻息を荒くしている。大きさは勿論、その鱗は光の反射で虹色にも輝き、見る者の心を奪う美しさも兼ね備えていた。

改めて自分が釣り上げた(?)獲物の大きさにしみじみと感慨深さを覚えるシライトであったが、ふと聞こえてきた涎を啜る声にハツとする。

フウに目を向ければ、何やら口の端で手の甲で拭っているではないか。

「……食べたい?」

「食べたいつす!」

これほどに目を爛々と輝かせている相手に、『食べさせてあげない』とは言えない。

だが、この大きさだ。この場に居る二人の分は予め切り分けておき、残りはご近所に配る旨を伝えれば、フウは快く了承してくれた。

「よーし、じゃんじゃん捌くつすよ〜!」

「……魚の捌き方……知ってる?」

「知らないっす！」

「……分かった」

この笑顔百点。

満面の笑みで知らないと言われれば、教えなくてはならないだろう。とはいっても、軽く一メートルを超す魚を捌ける包丁など、一般家庭にあるはずがない。

海に面する国であれば、多少は家庭にも巨大な包丁があるかもしれないが、滝隠れの里は内陸部に位置する。

しかし、滝隠れには便利な術が一つあった。

「滝隠れ流、水切りの刃！」

印を結ぶフウの手に現れる、一振りの刀。

水で刀を形成する術、それが「水切りの刃」だ。切れ味はかなりのものであり、人体を貫く程度には鋭い。魚を捌くには充分だ。

鯉は、鱗をひく場合とひかない場合で、二通りの捌き方がある。

エイエンゴイも鯉ではある為、一応それらの捌き方が適応されるとは思うが……。

「……鱗は唐揚げにして食べるから……まず鱗をひこう」

「合点承知っす!!」

鯉の鱗は唐揚げにし、塩を振りかけると、酒が実に合うおつまみへ大変身する。

時折、シライトも自宅で父が酒のつまみにしている鱗の唐揚げをつまみ食いし、カリカリとした食感に病みつきになったものだ。

エイエンゴイの鱗を使えば、恐らくは歯ごたえ抜群になることだろう。

そんなことを思いつつ、楽しそうに鱗をひくフウの傍らで、飛び散る鱗をざるの上に収集するシライト。後で食べようとは思いつつも、つつい鱗の光沢に心奪われてしまう。

(……美味しく頂きます)

淡々と集めること十分、ざるの上には山盛りの鱗が積もっていた。

鱗もほとんどひき終え、後は身を捌くのみ……なのだが。

「忍鯉と契約してる手前、ほんのちよつと抵抗があるっす」

「……今更な気もするけど」

「そう言われればそうっすねー!」

フウが口寄せ契約している忍鯉のことを口に出し、エイエンゴイに刃を入れることを少し躊躇していたが、鯉は滝隠れの食卓に欠かせない食材だ。

動物を飼っている飼い主のような悩みを覚えたフウであったが、一瞬のうちに乗り越え、『どこに入れてもいいっすか!』と、シライトの指示が来るのを今や今やと待っている。

その後は、切り口から溢れ出る血にフウが騒ぐといった出来事はあれど、比較的なんの問題もなく捌き終えた。

今日のたきの家のご近所では、夕飯にエイエンゴイが出て、贅沢な気分になることができるだろう。

そして実食タイムだ。

シンプルに切り身を焼き、持参した塩をちよこっただけ振りかけて口に運ぶ。

「おいひい~~~~~!!」

余りの美味しさに、落ちそうになったほっぺを手で押さえつつ、恍惚とした表情を浮かべるフウ。

一方でシライトもまた、食したことの無い美味に舌鼓を打っていた。

しっかりと締まっているものの、歯を立てた瞬間にホロホロと崩れ落ちる柔らかい身。

解ける身の間からは、魚にも拘わらず甘い脂がジュワリと溢れ出る。しつこくない上品な甘さだ。甘露とはこのこと。川魚特有の生臭さもなく、実に食べやすい——否、どんどん食べ進めたい。

わざと剥がず、焦がすように焼いた皮は、カリカリと歯ざわりがよく、尚且つ身の間詰まっていたコラーゲンがプリプリと舌の上で踊る。

そして、それらをちよこどよくめるのが塩だ。ご飯があれば進むことだったろうに。

「美味し」

そんな複雑な味わいを、シライトは三文字で表現した。

つまるところはそれだ。旨いのだ。今まで食べてきた絶品の料理が霞んでしまうほどに。

「こりや、永遠に忘れられない味っすね！」

「……そうだね」

結婚祝いに食べるとされるエイエンゴイ。もし離婚でもすれば、永遠に苦い思い出を舌に刻むことになってしまいうだろうが、流石にそれを口には出しはしない。

フウは実に幸せそうに、竹串に刺したエイエンゴイの切り身を頬張る。

その笑顔が見ることが出来ただけで、昨日三時間奮闘した甲斐があつたというものだ。

「……ああ……そういえば」

「ん？　どうかしたんすか」

「忍者になって……おめでどう」

「おー、知ってたつすか！　どういたしましてっす！」

ドヤ顔で、右腕に着けられている滝隠れの忍であることを表す額当てを見せつけてくるフウ。下に向いている矢印の中心を、縦にくり抜いたような文様は、滝が重力に従い流れ落ちている様を表しているのだ。

これを着ければ、あどけない顔をしているフウも立派な忍者。この里を守る忍の一人なのだ。

少々落ち着きがないものの、それも時間が流れる共に彼女が成長することでもなるだろう。

新品の額当てを指でなぞるフウを眺めつつ、そう思ったシライトは微笑みを浮かべる。

「……あと」

「あと？」

「……暫く旅に出るから」

「えっ？」

一瞬、フウが固まる。

「ええ——っ!!?」

エイエンゴイの美味など忘れたフウの驚愕した声が、青い青い空に木霊した。

やや長めの黒髪を、後ろへ流れるように抑える白いヘアバンド。

必要な荷物（と、それらを口寄せできる巻物）を全て詰め込んだ背嚢。

杖代わりに、子供の頃から使っている唐傘を一本。

そして、肩乗りカツユ。

準備は全て整った。

（まずは……空区に行つて蜂蜜酒探しかな……）

大雑把な地図を眺め、滝隠れの東に値する廃墟群、空区へ進路を定める。

どこの国にも里にも属さぬ地域ではあるが、一説には闇商人が屯する危険な場所とも言われているらしい。

すっかりピクニックに行くものだど勘違いしている家族に別れを告げ、里の出入り口まで来たシライトは、一旦断崖の上まで軽やかに上り、進むべき方向に目を遣った。

世界を二分する緑と青。

それでも、全体からしてみればちっぽけなものだと思つと、自分の旅の果てしなさが身に染みて分かつというものだ。

もし、故郷に用事ができたのだとすれば、里に置いて行く分裂体のカツユに逆口寄せしてもらえばいい。いつでも帰ることのできる旅程、気楽なものはない。しかし、決して危険がない訳でもないことは承知だ。

それでもかなえない夢がある。

託された責務（と言う名の酒探し）がある。

「さて……」

「シィ〜ラァ〜イィ〜トォ〜!」

「……ん？」

背後から聞こえてくる大声。

聞き慣れた声に振り向けば、そこにはゼエゼエと息を切らすフウが、大急ぎで走ってくるのではないか。見事なフォームの忍者走り。様になっている。

「どうしたの……そんな急いで」

「んっ！」

「……？」

徐に突き出される小指。

何かと視線で問えば、次の瞬間に少女はパアッと太陽のような笑みを浮かべた。

「約束してほしいっす！ 里の外がどんな感じなのか……旅が終わったら、いっくっぱい土産話するって！」

「……わかった」

『十二にもなって……』など恥ずかしがする必要はない。

真つすぐな思いには答えるべく、シライトもまた小指を突き立て、指切りげんまんをする。

その時彼女が歌った内容が、『指切りげんまん嘘吐いたら千本で点穴を射抜く』と、本当にやりかねないのではないかという内容で内心驚いたものの、終わると同時にフウは、シライトの背中を押しと同時に激励を送ってくれた。

「ファイトっす、シライト！」

「……うん。頑張る」

背中を押されるがままに、見送りに来てくれたフウへ軽く手を振りつつ、断崖の下へ降りていく。

忍者でないにも拘わらず、ほぼ直覚の壁を降りることに慣れたものだ。

あつという間に地面に足を着いたら、視界はほぼ鬱蒼と生い茂る木々に埋め尽くされる。

「さて……行きましよう」

「はっ」

一息吐き、故郷の空気を今一度堪能してから歩み出す。
まず目指すは空区。
手に入れるは、森の千手一族に伝えられし蜂蜜酒。
これより、たきのシライトの冒険の始まり始まり。

滝隠れ秘伝 — 新しい風 —

滝隠れの里。

かつては優秀な上忍を輩出したことで、尾獣の一匹・七尾を譲り受けた忍の隠れ里だ。

更には、里の中央に佇む巨木——そこから百年に一度搾り取れるという「英雄の水」を用い、小国ながらも猛威を振るつた里でもある。

そんな里内の一つの屋敷。

侘びを感じ取ることのできる枯山水を見渡すことができる縁側に、透き通った緑色の中に茶柱が立った湯呑を携える老婆が、一人佇んでいた。

弾力がありそうな座布団の上。

巨大な傘の如き大木の木陰にて、何を思っているのか老婆はじつと空から降り注いでいる雨を見つめる。

「……雨は……嫌いですか？」

『ああ。天気雨ならまだしもな』

心の内より声が帰ってくる。

腹の奥底に響く重低音。凡そ、子供が聞いたならば臆してしまうほどの声色だ。しかし、老婆は『そうですか』と落ち着いた様子で茶を啜るだけ。恐怖などという感情は一切見て取れない。

「天気雨……狐の嫁入りですねえ」

『だな』

「でも、お友達の狐さんのことは、それほどでもないんでしょう？」

『……ありやあ化け狐だからなあ。しかも尻尾が九本ありやがる。』

九^苦なんて縁起が悪い』

クスクスと含んだ笑い声を口元から漏らす老婆は、不機嫌そうな彼の声に耳を傾けた後、庭先に置かれている狸の信楽焼に目を向けた。

「狸を見ても、お友達を思い出すんですけどっけ？」

『つつても、友達と言えるかは疑問だけだな』

かつての話を思い出す老婆。

客寄せに用いられる置物の定番である、狸の信楽焼。それを見ると、彼は知り合いのことを思い出すらしい。

狐の知り合いが居たり、狸の知り合いが居たり、昔の自分であれば信じていることがなかったであろう話に耳を傾ける老婆は、実に楽しそうだ。

そんな中、老体には堪える雨の肌寒さにブルリと身を震わせた彼女は、再び茶を口に運んでから、『話は戻りますけれど』と口火を切る。

「私、雨は好きですよ」

『そりやなんで？』

「雨が降った後は、虹が出ますもの。虹は七色。貴方にピッタリ」

『っ……っ』

どもる声の主。

何と言いつ返せばいいものかと戸惑っているようだ。

その様子が老婆にはまたおかしく思え、柔らかい笑みを浮かべつつ、湯呑の中に映し出される自分の顔を見つめるのだった。

——こんな風に笑えるようになるのに、何年かかったことか。

達成感や充実感。

彼女はそういつた感覚を覚え、友達との一時を楽しんでいたのだ。

細長い布が何枚も束ねられているはたきを振るい、部屋の高い場所に積もった埃を叩き落とす老婆。しかし、普段からマメに掃除しているからか、埃が舞い散るようなことが起こることはない。

十分に日光を取り入れられるような間取りの部屋は、晴れていれば、里中を吹き抜ける清涼な風も入り込み、微睡をもたらず空間を作り出す。

『毎日毎日掃除して、飽きねえもんなのか？』

「マメな掃除は風水の基本ですから」

『フウスイだけにつてか?』

『さて、どうでしょう』

そう、この清潔に保たれている部屋は、風水を嗜んでいる老婆があつてこそ。

そして彼女の名前は——フウスイだ。

これもまた縁ということなのだろうか。読みが同じということ、彼女が風水にシンパシーを感じたのかは、本人しか知らぬところ。しかし、こうして部屋が清潔に保たれているところを見れば、悪いことではないと彼は思った。

『だがよ、その……幸せを呼び寄せる呪いだったか? んなモン効果あるのか? 胡散臭いったらありやしねえ』

「おほほっ、縁起物に詳しい貴方の言えたことじゃないと思いますが」
『なんだと?』

「七のつくもの見たら、途端に機嫌がよくなりますものね」

『……七はラッキーな数なんだよ』

「七夕なんかは、目に見えてウキウキしてて、それはもう……」

『……七夕は元々縁起のいい日だろうが』

手に掛かる息子にかけるような優しい声色で語るフウスイ。

対して、彼は『このババアは……』と少々呆れ、ブー垂れたような声で返答する。凶星だったのだ。人であれなんであれ、凶星を突かれるというのは余り気分のいいものではない。そして事実であるが故、強く言い返すことができないこともまた事実。

「貴方は本当……昔に比べて丸くなりましたねえ」

『しようがねえだろ』

さらに、強く言い返せない理由がもう一つ。

『……年寄り縁起物って知ってるか?』

先程までの力強い声色は息を潜め、ぼそりと呟くような声で言い放たれた。

視線を逸らして言い放ったかのような理由に、フウスイはクスリと一笑。『そういうところが丸くなったと言っているんですよ』とは、敢て言わなかった。もし言ってしまうば、そのまま不貞腐れてしまうこ

とだろうから。

だが、このような考えもまた、長年連れ添ってきた彼にはお見通しなのだろう。

そんな以心伝心の相手の存在に、彼女はどことなく嬉しい感覚を覚える。

自分という存在を見つめなおしながら。

「自分を閉じ込める籠……言うなれば虫籠である相手にしても、ですか？」

『籠に閉じ込められてるのはお互い様だろ』

「……ええ」

憐憫が込められた声は、そっくりそのまま憐憫の情にて返された。

彼女は、里の上役の決定により、幼少期より屋敷から出ることを禁じられた“箱入り娘”といったような存在だ。極力人との接触を禁じられた彼女は、友も少なく、接する相手は家族や護衛の忍者のみ。淋しい幼少期を過ごした彼女にとって、常に一緒に居てくれたのは、今もまだ自身の中に囚われている悲しい獣だった。

お互い本意ではなかっただろう。

しかし、話し相手が居ないのは寂しい。孤独は耐えがたい。故に、か細い蜘蛛の糸のような繋がりを辿り、彼女は彼とお喋り友達になろうとしたのだった。

初めの内は、つつけんどんな彼の態度に困り、時には打ちひしがれたものだ。だが、徐々にそれが自分よりも——それこそ人間が全うする天寿の何倍もの時の流れの間、積もりに積もった人への不信感であることを理解すれば、尚の事“唯一”である自分が彼との繋がりでなければいけないと誓った。

里の興りから今に至るまでの何十年、それこそ先立たれた夫よりも長く共に居る。

時間はかかってしまったが、こうして気兼ねなく話せる程度の関係には昇華したようだ。

その関係に昇華した理由の中には、彼女の彼への献身のみならず、同じく“籠”に囚われているという部分にシンパシーを感じたこと

に他ならない。

「……でも、貴方とのお話はとても楽しかったから……」

不意に思い出を語るフウスイ。

「籠の中の生活も……思っていたよりは苦じゃなかったわ」

『……ほとんど一生籠の中の生活じゃ、そういう価値観にもなつちまうもんなんだな。だから、部屋をしょつちゆう模様替えするような、陰気な趣味を嗜んじまう』

「そうねえ。終には外へ出ることも叶わなかったわ」

『一度自由を知つてる者とそうじゃねえものじゃ、自由への渴望の具合が違いのさ。なあ、フウスイ……手前は——』

想う所があるように言葉を紡ぐ彼。

だが、『そういえば』と思ひ出したかのように、フウスイがハツと顔を上げた。

「今度……孫が生まれるんですよ」

『……そりやあ目出度エ話だな』

「ありがとうございます。子供もまた縁起物ですからねえ」

『ラツキーだったな。生きてる内に、孫の顔見れそうで』

「ええ」

孫が生まれると言う彼女は、実に嬉しそうに笑う。

しかし、彼女の笑顔にはどこか影が差さっている。

「……次は……恐らく」

『オイオイ、冗談キツイぜ』

意味深な口振りに、すぐさま事を察した彼は、複雑な感情が絡み合った声色で応える。

『陰気なババアの話に付き合つて十年経つて、今更ガキにか?』

「子供だからこそです。国を……里の未来を担っていくのは、子供なんですから。きっとその子なら、私達よりもっといい関係を築いていける……私はそう信じていますよ」

『手前に似ねえで、バカみてエに目出度い頭になった娘みたいにか?』

「おほほっ、後ろ向きじゃ前は見れないでしょうから」

皮肉る彼に対し、朗らかな笑いで応えるフウスイ。

彼女には娘が居る。母親である自分に似ず、豪快で向こう見ずな性格に育ってしまった娘であるが、里では一目置かれるほどの忍だ。

『笑う門には福来る』。その諺をモットーにしている彼女の笑い声に釣られ、人々は彼女の下へ集っていく。自分の娘に対し、こういうのも気恥ずかしい気持ちはあるが、例えるならば彼女は太陽のような存在だ。

人然り虫然り、明るい場所へ向かって集うもの。

「人柱力になったら、人と触れ合う機会は少なくなるかもしれないわ……でもね、明るい子に育ってほしいの。きっとそれが、人生に華を咲かしてくれるきっかけになるから」

『生まれる前から気が早エこと。流れるかもしれないねえぞ』

「そんな縁起でもないこと……そういうことを嫌うのは、貴方自身でしよう？」

『……ふんっ！』

『思ってもいないことを』と言わんばかりに微笑むフウスイに、彼は鼻を鳴らす。

彼も昔はこのような性格ではなかった。もっとはつちやけているような——ファンキーでノリのいい性格であったのだが、相手が老婆だということもあるのか、生真面目な人が憚るようなテンションは息を潜めている。

もし、これが子供と一緒にになったならば、どういった反応が見られるのだろうか？

非常に気にはなるものの、そうなる時を見るよりも前に、自分はこの世を去ることになる。そう思えば、孫の顔さえ見ることができれば未練がないと決めていた意思が、揺らぐような感覚を覚えた。

しかし、自分は朽ちかけの枯葉。

後は土に還り、後に生る葉の養分となるだけ。

「……そうだ」

『どうした？』

「後進の為に、貴方との触れ合い方について書き残しておこうと思つて」

『ペットの飼育方法みたいなノリで言うな』

「あら、お気を悪くさせたならごめんさいね」

『全くだぜ』

「でも貴方、縁起の悪いもの見た途端に機嫌が悪くなるし……不安だわあ」

『……』

しみじみといった様子で呟くフウスイに、彼は何も言い返すことができない。

心当たりがある。大いにある。あり過ぎる。

「四^死”や”九^苦”のつく日や個数を始め、鳥などの縁起が悪い生き物を見かけた途端にも機嫌が悪くなることは承知済みだ。

大人げないと言われようと——そもそも、そう言ってくれる相手は居ないが——それこそ太古の昔からの習慣や思考が全身に染みつき、自然と体が反応してしまうのだ。

『それはもうしょうがねえんだからよお、なんとか覚えていつてもらうしかねえだろ』

「うくん……まあ、貴方の反応で縁起物について学べると思えば、多少の譲歩は……」

『俺が縁起物博士みたいな言い方はやめろオ!』

「事実でしょう?」

『他人に言われると腹が立つんだよ』

「そう……でも、安心したわ」

『?』

話の流れを断ち切る物言いには、彼は不思議そうな息遣いをする。安心するとは、一体なんのことなのか。

今の会話で安心する要素がどこかにあったらどうかと、彼はついさっきの会話を思い返す。

しかし、彼が答えに導きつくよりも前に、フウスイは優しい笑みを浮かべてこう告げる。

「貴方が、触れ合うことについて前向きに考えてくれることに……」
『……気のせいだろ。それに、新しい器に移った途端、気が変わるかも

しれねえぜ?』

「それは新しい人次第ですよ。貴方がそう思えなくなったら、貴方と新しい人が合わなかったというだけですから」

フウスイは、やけにあっさりと言割り切るような言葉を紡ぐ。

「でも……独りは寂しいでしょうから……」

それから続く言葉は、外でしとしと降り続ける雨が木葉を揺らす音に吸い込まれていった。

(——なんてこともあったな)

彼が思い出していることは十年以上も前の事。

いつも見ていた景色も、新たな「器」の身長の関係か、少し低い視点から見るようになってしまっていた。

だが、どこことなく懐かしい感覚でもある。数十年以上前も、同じような視点で景色を眺めていたからだろう——ハッキリとした記憶こそないが。

そして、新しい器はと言うと、一人でコロコロとサイコロを転がし、双六を興じていた。

サイコロは必ず目が出ることから、『芽が出る』縁起物として知られている。

「ふんふんふん♪」

鼻歌を歌いながら双六を興じているのは、黄緑色の髪の毛が目を引き、肌が浅黒い少女だ。

先程から、一人四役で遊びを進めている彼女だが、本来複数人で楽しむ盤上遊戯を一人で嗜むのは、本当に楽しいものなのか、彼にとっては不思議でならない。

しかし、今彼にとって気になるものは、少女の双六などではない。外でカーカーと、大量の鳥が鳴きながら里の上を飛び回っている。

さらには、その鳥を追ってキーー! と鳴く鷹がやってくる始末。

騒々しいにも程があるというものだ。

何より、鳥は縁起が悪い。

『フウ』

「ん？　どうかしたつすか？　あつし、今双六が中々に白熱してきていいところなんすけど……」

『あの空をバカみてえに飛び回ってる鳥どもを追っ払うんだよ！』

「えく、またつすか？　七尾、鳥嫌いつすねく」

『なんのために力貸してやってると思ってるんだ！　今こそ、翅と鱗粉隠れの術が輝く時だろうが！　きつと、里長の野郎も見直してくれろぞ』

「本当つすか!?　ふふん、それなら……!」

彼——七尾の口車に乗せられた少女・フウは、即座に腰から美しい光沢を放つ翅を生やし、颯爽と屋敷の縁側から飛び立っていく。

本日の滝隠れの空にて、刹那、星と見間違うような鱗粉が光を放ったのは、また別の話。

——目出度い頭で、よく笑う少女が新しい人柱力だ。

第二章 糸と綱

七. 口寄せのじゅちゅ!

鬱蒼と生い茂る竹。あまりの密度に、昼間にも拘わらず日光が地表へほとんど差し込まない。

少しの肌寒さを覚えながら進むシライトは、竹の根でがっしりと固められている地面を踏みしめながら、とある人物の下へと歩を進めていた。

歩を進めていたのだが……。

「……迷いましたね」

「そうですね」

たきのシライト、只今空区の竹林にて迷子。

事の始まりを説明しよう。

シライトは、木ノ葉の三忍の一人・綱手の下へ弟子入りすべく旅を始めた訳なのだが、大蛞蝓仙人に、道中にて森の千手一族に伝わる酒『蜂蜜酒』を持ってくるよう頼まれた。

元々、各地の銘酒を献上する約束で修行をつけてもらっていた身。断るハズもなく、大雑把な地図を片手に空区まで辿り着き、蜂蜜酒を探すべく行動を開始したのだった。

「……廃墟」

『空区』と仰々しく掲げられた看板、そして巨大な門を潜った先に広がっていたのは、無数のボロボロなビル群であった。

人気はあまり感じられない。衛生状態も余りいいとは言えなさそうだ。本当にここに蜂蜜酒が売られているのか、甚だ疑問ではあるものの、入ってみなければ話は進まない。

気乗りせぬまま、肩にカツユを乗せたまま空区に足を踏み入れるシ

ライトは、初めて都会に来た者のように、高くそびえ立っているビル群を見上げる。

(ボロボロとは言え、滝隠れよりも近代風に見えるのがなんとも言えない所だなあ……)

故郷と今いる場所を比べ、物思いにふける。

滝隠れは、木ノ葉などに比べると田舎だ。古き良き暮らしを大切にしているという節はあるものの、巨大な崖の上という立地が、里の近代化を妨げている要因であることは、想像に難くない。

そんな滝隠れに比べ、空区は「衰退」といった栄枯盛衰を思わせる物悲しさこそ漂っているものの、存在する建物の数々はシライトにとって目新しいものばかりだ。不謹慎であるかも知れないが、多少の好奇心が沸き上がってくる感覚はあった。

そして更に奥へと進んでいけば、これまた奇妙な通路が広がっている。

無数の配列されたパイプ管。色がチグハグな壁。

何度も増築を重ねたように思える通路は、広々とした田舎で育ってきたシライトにとっては、かなり息苦しく、不可思議な光景だった。

「ちよつとカビ臭いですね……」

「私は平気ですが、シライト君には少々厳しいかもしれませんね」

逃すことのできない湿気がとどまり、あちこちにカビが生えている。これも、息苦しさを覚えさせる原因の一つだろう。マスクが欲しい所ではあるが、この狭い通路で荷物を漁るのは厳しい為、シライトは服の袖で口元を覆ってみせる。

「こんな場所に、蜂はおろか人が居ると思えないんですけれど……」

「猫なら居るニヤ」

「……？ なにか言いましたか、カツユ様」

「いいえ、私では……」

「上を見るニヤ」

不意に響く声。

音が反響する為、一瞬声がどこから発せられたものか分からなかったシライトであったが、続きの言葉を聞き、即座に上へと視線を遣つ

た。

そこに居たのは、灰色がかった毛の猫。鼻先だけは白く、爛々と光る瞳を以て、真下に居るシライトたちを睨みつけていた。

「……猫」

「見て分かんかニヤ？」

「シライト君。あの猫は、恐らくこの空区に住まう忍猫です」

「忍猫？」

聞いたことのない言葉に首を傾げるシライト。

しかし、猫が喋っているという時点で、只の猫でないということは理解していた。続きの説明を求めるような視線を彼がカツユへ向ければ、彼女は再び話に戻る。

「空区は、猫たちの楽園という裏の顔があります。この空区を取り仕切っているのは闇商人の一族なのですが、彼らに仕える獣こそ、今目の前に居る忍猫です。彼らは昼夜問わず空区全体に監視の目を光らせ、侵入者を即座に追い払う……つまり、実質的な空区の支配者というところでしょうか」

「よく知っているニヤ。ここはお前のような尻の青い子供が来る場所じゃないんだニヤ。さっさとマタタビだけを置いて帰るといいニヤ」
マタタビを置いて去るよう催促する忍猫。

「ここで『ム』と口を結ぶシライトは、怪訝に眉を顰める。」

「……なんでマタタビがあるの分かるんですか？」
「そんなもん、匂いで分かるニヤ」

一度たりとも『持っている』と告げた訳ではないマタタビの存在に気が付いて居た忍猫。どうやら匂いで気が付いて居たらしいが、かなり鼻が利いているようだ。

道中、夕飯におひたしにでもして食べようとしていたマタタビ。味はそれほどいい訳でもないが、マタタビには多少の薬効がある。尤も、薬効が存在するのは樹皮であって、食べられる部分は葉であるが……。

「……」

「どうしたニヤ？ 早めに渡せば、痛い目を見ずに帰れることができ

るニャ」

「……マタタビを手に入れて……何するつもりですか？」

「変なことを聞くニャ。そんなもん、嗅いで気持ちよくなってゴロゴロするに決まってるニャ」

「……マタタビは、猫にとって麻薬のような代物ですので……そう簡単に渡すわけには」

「ニャんだと!？」

シライトの言葉に、フシャー! と毛を逆立てて威嚇するような行動を見せる。

あの忍猫はマタタビが好きであるようだが、たった今シライトが言ったように、マタタビは猫にとって麻薬のような存在であると言われてる。

麻酔が何故人間に効くか分からないように、マタタビが猫を恍惚とした状態になるかは、未だ詳しくは解明されてはいない。しかし、マタタビの成分であるマタタビラクトンという物質が、猫の上あごにあるヤコブソン器官——フェロモンを感知する器官に反応し、大脳を麻痺させ、眠気を引き起こし、運動中枢や脊髄などの反射機能を鈍らせることで起こっているとは分かっている。

これが、マタタビが猫にとつての麻薬と言われるが由縁だ。

マタタビを服用することによる麻痺が重度になると、呼吸不全により、最悪死に至るケースも存在する。

そんな危ない代物を、医者を目指しているシライトがホイホイと手渡す訳がない。

威嚇してくる忍猫に憶することなく、その場に立ち続ける。

膠着状態とはこのことか。

時間が止まったかのような静寂の間を、冷たい風が吹き抜けていく。

「モモ、なにしてるの?」

「ニャ。タマキ、何しに来たニャ?」

「何しに……あれ、お客さん?」

突然、通路の奥からひよっこりと現れた栗色の髪の少女。歳はシラ

イトと同じぐらいだろうか。陰気な空間とは裏腹に、明るく活発そうな少女の登場に多少空気が和らいだところで、シライトは『あの……』と声を上げる。

「蜂蜜酒……知りませんか？」

「蜂蜜……酒？」

不思議そうな声色の少女の声は、寂れたビル群の谷間へ吸い込まれていった。

「蜂蜜酒を作ってる養蜂家さんなら、この竹藪の先に居るって、お婆あちやんから聞いたことがあるよ」

「成程……ありがとうございます」

少女——タマキに連れられ、竹藪へと導かれてきたシライト。

朽ちたしめ縄で巻かれている石碑は、どうやら道祖神のようらしい。道祖神があるように、此処は神聖な場所であるようだ。

廃墟群を抜けた先にある竹藪。どこか摩訶不思議な世界へといぎなわれているようで、少々肌寒さや恐れを感じてしまうところだ。

「ちなみに、どういった感じの人でしょうか……？」

「えつと……ごめんさい。わたしも直接見た訳じゃないの。ただ、ここにお野菜とかのお供え物を置いておくと、また来た時に蜂蜜とか蜂蜜酒の入った瓶が置いてあってね。便宜的に養蜂家だって、空区の人……」

「はあ」

空区の商人の一族だと、道中自己紹介してくれたタマキは、そう説明してくれた。

誰もあつた事のない養蜂家。只でさえ不気味な場所だというのに、シライトは今の説明で鳥肌が立ってしまう。

（幽霊とかじゃないよね……）

一目でも見る人が居れば、こんな心配なぞしなくてもいいのに。

そんな考えを頭に過らせるシライトであるが、ここは空区だ。忍猫

という優秀な監視者は、時としてお尋ね者にとって有益に働く。ひっそり静かに隠れながら過ごすには、ちょうどいい場所でもあるのだ。この竹藪の中に居るとされる養蜂家（仮）も、そのようなお尋ね者が、残りの人生を蜂蜜製品造りに費やしているのかもしれない。

閑話休題。

「じゃあ、行ってみます……案内ありがとうございます」

「ううん。うちのモモが迷惑かけてごめなさいね」

「フンだニャー！」

タマキの腕に抱かれている忍猫——モモはそっぽを向く。

「タマキは不用心なのニャー！ 仮にも商人を血を引いてるなら、どんな些細な情報でも見返りを求めるべきニャー！ ギブアンドテイク、これが基本ニャー」

マタタビがもらえなかったことが不服なのか、モモの機嫌は大層悪い。

まだまだ子供であるタマキがお人好しであった為、シライトとモモの邂逅は穏便に済んだ。だが、彼ら忍猫の仕事を考えれば、追い払おうという所業に対しては致し方なかった部分もある。

色々と納得できない点があるのだろう。損なってしまったモモの機嫌を取り戻すには、どうすべきなのだろうか。

シライトは一瞬思索し、『仕方ない』と言わんばかりに背囊の中を漁る。

そして、

「これ……」

「え？ いいの？」

「案内料だと思ってください……ただし、用法・用量は守って……」

「そう。ありがとー」

彼が取り出したのは、モモが渴望していたマタタビだ。

効果が麻薬と同じとは言え、用法と用量を守れば、猫にとっていい効果を発揮する。薬は毒にもなり、毒もまた薬となるという訳だ。要は使いよう。

マタタビを受け取ったタマキは、礼儀を弁え、しっかりとお辞儀を

して感謝の意を示してくれる。

「ほら、モモもー」

「むっ、ぐう……」

中々礼を言わないモモ。彼なりのプライドがあるのだろう。

唸ること数秒、モモは苦虫を噛み潰したかのような顔で、シライトの顔を睨みつける。

「……一つ情報を教えてやるニヤ。この先の竹藪は、空区の猫たちでも迷う場所……迂闊に入るより、食い物でも供えて、養蜂家の方からやって来るのを待つべきニヤ」

「……迷いの森ということですか？」

「今言った通りニヤ。今の情報で手打ちだからニヤ」

フンツ、と再びそっぽを向くモモ。少々ひねくれているのか、よっぽどシライトにマタタビの礼を言いたくなかったようだ。

しかし、その代わりに情報を教えてくれる辺り、ある程度義理を大切にしようだ。これもまた、闇とはいえ商人に仕えてきた故の性格なのだろう。

——それから、特に悩むことなく竹藪に入ったシライトであったが、見事迷ったという訳だ。

「一体全体どうしよう……あ、たけのこ。ちよつとだけ……」

迷っていることについての焦燥を欠片も見せないシライトは、道端——そもそも道と言えるかも怪しいが——に生えているたけのこを見つけ、夕飯のおかずとすべく収穫に取り掛かった。

霧深い竹藪の中、呑気なこと……カツユは口に出さぬものの、呆れたようにため息を吐く。

そんな時だった。

竹藪の奥から、耳障りな羽ばたきが聞こえたのは。

「シライトくん、何か来ます」

「えっ」

完全にたけのこへ気が向いていたシライトは、一瞬、迫って来た存

在に気付くのが遅れた。

それを見かねたカツユはと言うと、やって来る危険な存在へ向け、口から濃硫酸を吐き出す。

『舌菌粘酸』——吐き出された濃硫酸は、見事襲来した存在に直撃した。

「ふう……危ないところでしたね」

「……ありがとうございます、カツユ様。これは一体……？」

「スズメバチのようですね。それもかなり大きな……」

濃硫酸を喰らった物体は、少々溶けてしまっているものの、黒と黄色の縞々模様という特徴的な姿から、すぐにスズメバチだと判明した。

鬱蒼とした竹藪に蜂が居ること自体はなんらおかしくはない。

しかし、これから空区に住まう養蜂家の下へ向かうという状況での蜂の襲撃は、一つ考えさせられるものがある。

「……なんか……奥から凄いい音が聞こえるのは気のせいですかね？」

「気のせい……じゃ、ないですね」

ヴヴヴヴヴツ、とおおよそ虫の羽ばたきでしか奏でられない音が聞こえてくる。

すると、霧深い竹藪の奥から、なにやら巨大な影が迫ってくるのがシライトの目に見えた。一定の形を保たず、まるで竹の合間を縫うように泳ぐ様は、得体の知れない生き物と錯覚してしまうほどだ。

だが、シライトはそれらが何なのかをハッキリと視認するよりも前に、その場から走り出した。

「……逃げるが勝ちとはこのこと」

「シライトくん！ スズメバチの大群です！ 気を付けて！」

「みなまで言わないでください」

信じたくなかった現実を、カツユの声によって突き付けられた。

そう、只今シライトたちを追っているのはスズメバチの大群だ。巣一つ分では収まりきらないであろう数のスズメバチが、同胞に手を掛けた少年たちを迎え撃たんと、尻の先にある毒に濡れた針を向けている。

「あの統率のとれた動き……間違いないありません。忍に飼いならされたスズメバチのようですね」

「あまり……知りたくはなかったです」

カツユの冷静な分析から導き出された結論。

それは、シライトにとつて良いものではないことは、言うまでもないだろう。こちらが忍術を齧った一般人であるのに、相手は本職かそうであった者。実力の差など、考えるまでもない。

逃げるが勝ちとは言うが、果たして逃げ切れるかどうかすら怪しい状況だ。

足場は悪い。

一面霧と竹で視界も悪い。

おまけに、出口も辿り着く場所もどこにあるか分からない。

「シライトくん、こうなってしまうては仕方ありません！ 今こそ、彼を呼び出すべきです！」

「ツ……分かりました」

カツユに何かを示唆され、指を少し噛み、血を流してから印を結び始めるシライト。

しかし、

「えつと……亥……戌……酉……と、なんでしたっけ？」

「亥、戌、酉、申、未です！」

印を結ぶのが異様に遅いのが、今後の直すべき課題と言ったところか。

大蛸輪仙人に教わった術のほとんどが、印を必要としないものだった弊害なのかもしれない。忍としての基本の基本である印も、今のシライトにとつては『あれがこんな形で……』と考えながらでないときないのである。

それでもカツユが居たお陰で、何とか印を結び終えた。

そこへちようど、スズメバチの軍勢が、なんとシライトを囲むように陣形を組み、尻の針を彼へめがけて発射するではないか。

「シライトくん！」

「口寄せのじゅちゅッ！」

表情に出ないものの、その焦りは滑舌に出た。

迫りくる無数の針が当たる寸前で、口寄せの術を発動したシライト。彼の姿は、元々霧深い竹藪の中、突如として巻き上がった煙によつて消えていく。

瞬間、放たれた毒針は固い物体に弾かれたような甲高い音を響かせ、辺りに散らばる。

まさか弾かれるとは思っていなかったのか、スズメバチたちの間に動揺が奔った。

だが、すぐさま統率を取り戻し、煙の中に居るであろう者たちへの警戒をさらに強める。

片時も目を離さず、触覚の感覚も研ぎ澄ませるスズメバチたち。

するとどうだろう。もくもくとその場に立ち込めていた煙が、何故か螺旋を描くようにして上空へ巻き昇っていくではないか。次第に細くなる煙。同時に、煙の中に潜んでいた巨大な影が正体を露わにした。

漆器のような鈍い光沢を放つ甲殻。

無数に生え並ぶ足。

大蛇のように長い節くれ立った胴体。

その姿を見るだけで、常人であれば総毛立つ思いをすることだろう。カサカサという移動音を錯覚させるその虫は、たつた今自身を呼び出した主人を守るべく、己の身を城壁とせんととぐるを巻いていた。

「……シライト殿、如何様に?」

「……スズメバチに襲われているので……助けて頂きたいです」

「承知」

刹那、その物体はとぐるを巻くのを止め、周囲のスズメバチを蹴散らさんと長い胴体を振るつて見せた。

「主の命を受け、百地^{ももち}タンバ……参る」

——一瞬龍と見間違ふかの体軀を誇るその正体は、大ムカデだった。

毒が滴るキバを振るい、スズメバチを一蹴していく大ムカデ——

百地タンバは、湿骨林での修行にてシライトが新たに契約した口寄せ獣だ。

どうやら、湿骨林のナメクジと大ムカデの一族は、古くより良好な関係を結んでいるとのこと。

その甲殻は並みの刃や牙を通さず、仮に守るべき対象を取り囲むようにとぐるを巻けば、ものの数秒で頑強な城壁が完成する。

しかし、功に転じれば一辺として、猛毒滴る鋭いキバで相手に噛みつき、体が溶けていくような激痛を与えるのだ。

攻撃と防御——どちらをとってみても優秀な能力を持つ。それがこの大ムカデだ。……見た目の気持ち悪さを除けば。

だが、彼の一族の特徴はそれだけではない。

「土遁——」

今まさに、一族の最たる特徴とも言える技を発動しようとするタンバ。

「土流割!!」

地中を流れる特殊なチャクラの流れ——“龍脈”を操って術を発動し戦う。それこそが、彼らの特徴だ。

たった今地面にキバを突き立て発動しようとしている術も、龍脈を操り、大地を二つに裂く術である。

……であつたのだが、大地は唸りさえすれど、本来の術の内容ほど大地が隆起して裂かれることはなかった。これではただの地割れだ。

スズメバチが飛び回る音が響く中、何とも言えない空気が漂う。

「シライト殿、一つよろしいかい」

「なんででしょう」

「……ここは竹藪故、竹の根が地中に深く硬く蔓延り、思うような土遁を発動できません」

「それは……死活問題ですね」

落ち着いて話す状況ではない。

現に、こうしている間にも、好機と言わんばかりにスズメバチは特攻してくる。

『不味い！』と叫ぶタンバは、すぐさまシライトをスズメバチの毒針

から守る為に取り囲んだ。

しかし、次の瞬間にスズメバチは、甘い香りを発する黄色い蜜へ変貌し、とぐろを巻いたタンバに降りかかる。

これは蜂蜜だ。本来であれば、滋養強壮にもよく食欲そえられる食材であるものが、今は敵を捕らえる為の道具として働いている。

かなりの粘度であるのか、タンバは身動きすることができなくなり、その場に留まってしまう。

残ったスズメバチの羽ばたきしか聞こえなくなり、再び竹藪に静寂が訪れる。

すると、敵が沈黙したと判断したスズメバチの主が、竹藪の奥より正体を現した。

蜂を模した暗部の面。更に全身は無数のミツバチに覆われており、顔どころか体さえ望むことができない人物。彼こそが、蜂を操りし養蜂家と言ったところだろうか。

養蜂家は蜜に固められたタンバ、そして中に居るであろうシライトたちの下へ静かに歩み寄る。

「ツ……ム!？」

しかし、そんな養蜂家の足元から、地表から空目掛けて伸びるかのよう到大ムカデ——タンバが出現し、養蜂家の体を締め上げる。

抵抗を試みようとする養蜂家。スズメバチたちも、主の危機を察知して再度臨戦態勢に入る。

一方で、タンバのキバから滴る毒は、竹藪の地表を覆っていた笹を溶かす。それだけで毒がどれほど強力なものであるのか察することは難しくない。

キバをカチカチと鳴らし、『すぐにでも首を噛むことができるぞ』と威嚇するタンバ。それでは蜜に固まっていたのは何なのだ？ その答え合わせをするかの如く崩れ落ちるタンバの皮を前に、養蜂家は諦めたようにハアとため息を吐く。

「脱皮して抜け出すとは……大した奴だ。それから地中に潜って移動したんだな？」

「思うように土遁を発動できぬとは言えど、某のキバと毒があれば、地

中を掘り進めることなど容易いこと」

養蜂家が述べた内容を肯定し、続けて解説するタンバ。

彼は蜜で完全に固められるより前に、脱皮することによって抜け出したのだ。そして、そのまま竹の根が張り巡らされている地中を掘り進め、奇襲する形で養蜂家を襲い掛かったのである。

「どっっいしょ……」

タンバが飛び出してきた穴から、続いて姿を現すシライト。土にまみれて汚れては居るが、これといった怪我は見当たらない。無論、カツユもだ。

「まいったな……こんな子供に負けるとは、私も衰えたものだ。目的はなんだ？ 敗者たる者、命をとられる覚悟はもうできている」

「……いや、その……」

重苦しい声色で話す養蜂家に、的を外れた憶測を言い放たれたシライトは、実に複雑な表情を浮かべ、穴から上半身だけ出したまま告げる。

「蜂蜜酒……ください」

「え」

「蜂蜜酒を……」

「……ウチに……来るか？」

「……はい」

「ほう……」

透き通った黄金色の液体を一口含み、存分に甘みと香りを味わった後、大蛞蝓仙人は一息ついた。

懐かしい味だ。

この酒——蜂蜜酒を飲むと、かつて湿骨林を訪れた男のことを思い出す。

思い出に浸りながら飲む酒というものは、一味も二味も変わってくるといふものだ。

これを見事手に入れてきたシライトは、もう湿骨林を発った。

経緯を説明すると、彼は蜂蜜酒を手に入れた後、特殊な結界が張られていた竹藪を抜けることが叶わず、奥の手として湿骨林に居るカツユに逆口寄せして脱出したのだ。

滝隠れから空区へ。そこから急に火の国から再出発になろうとは、彼は思いもしなかつただろう。

だが、そんなことは大蛞蝓仙人にとって最早どうでもいいこと。

「はあ……柱間。いい男でござんしたなあ」

かつて仙力を得る為に訪れた初代火影を思い出して酒を飲めば、酒の中に、僅かに酸味があることを錯覚するのだった。

八． 適齡期は思っているよりも早いもの

彼女は焦っていた。

それは、彼女の師である人物が大枚をはたき、現在進行形でスロツトルに興じていることに対してではない。いや、勿論これから水泡に帰す確率の高い金の額を思えば、思わずクラリと気を失いそうになるが、問題はそちらではない。

ある時を期に、師の付き人として各地を渡り歩こうとしたのはいいものの、木ノ葉の二十代女性と比較すると、なんと華のない生活だろうか。

師は、賭博か酒に没頭する。

大抵賭博は負けてくる。

それでおいて、借りた金の額は考えたくない程に巨額。

負けたのだから、到底返せるはずがない。

そして借金取りから逃げつつ、師は借金を返すべく、再び賭博に興じて負けてくるため、借金はさらに膨れ上がる。

こんな生活を続け、一応忍者である自分はもう結婚適齡期を迎えてしまった。

忍者は、職業柄殉職することなどもある為、他の職よりも結婚は早い方がいいとされている。

二十代後半に差し掛かってしまった自分は、まさに適齡期のど真ん中を射抜く年齢となってしまうた。それにも拘わらず、なんだこの男との縁の無さは。

放浪という言葉が似合う、借金取りから逃げつつの賭博と酒の日々。

成程、これでは確かに男と縁がないのは納得できる。

いや、そうではない。問題なのは、この歳にもなつて男性経験さえもないことだ。

彼女の焦燥に拍車をかける様々な事実。

嫌な汗が頬を伝う。

自分はこのまま一生独り身なのではないか？

自分という存在は、自分の先祖全員が番になれたからこそ居るのであつて……。

「あひひ……」

「ブー……」

クラリ、と眩暈がした。

その様子に心配する子豚が、『大丈夫か』と言わんばかりに鳴き声をあげる。

「大丈夫、トントン……まだ……まだチャンスはあるから」

子豚——トントンを撫でつつ、いつか現れるであろう（と言うように、現れてほしい）男を妄想する。

そうだ、まだ三十路じゃないだけチャンスは十二分だ。

このくらいの歳の女性が好きな殿方など、探せばいくらでも居るハズ。胸も貧そ……ギリギリ標準サイズなのかもしれないが、このくらいの慎ましやかなサイズが好きな殿方もきつと居る。

「あのう……」

「はいっ!？」

突然背後から声をかけられ、思わず驚いてしまった。

まさか、今このタイミングで？

欠片ほどの期待を抱きつつ、声が聞こえてきた方へ振り返る。

だが、そこに居たのは思ってもみなかった人物だった。

「綱手という方を……存知でしょうか？」

上目遣いで、自分の師のことを訪ねてきたのは、『少年』という言葉がよく似合う男の子だった。

湿骨林を後にし、火の国を散策することになったシライト。彼は力ツユの情報から、賭場がある賑やかな宿場町を巡って綱手を探そうと、一先ず最も近い宿場町を訪れた。

これまた滝隠れとは比べ物にならない賑やかさ——いや、五月蠅さだろうか。

人波に流されるとはこのことかと実感しつつ、賭場を探し始めた彼であったが、一時間も経たぬうちに、カツユが見知った顔が居ると声を荒げた。

カツユが見つけた人物は、黒い着物に身を包む、幸薄そうな女性だ。どこことなく苦勞していそうな雰囲気を漂わせる彼女は、見つけた当初、子豚を抱きつつ虚ろな目で空を見上げているなど、かなり話しかけづらい状態だった。

しかし、話しかけなければ事は進まない。

意を決して声をかければ、何故か期待の籠った瞳で見下ろされた後、唾然とされてしまう。

それがなんの意味を指すのか、シライトには到底理解できなかったものの、『綱手を知っているか?』という旨の問いを投げかければ、女性は無言で硬直した。

「……あ、カツユ様!? 何故ここに」

「シズネ様。少々用事があり、ここに居る少年と共に綱手様の下へと参った所存です」

まったく知らない少年の登場に放心状態だった女性——シズネであったが、少年の肩に乗っているナメクジとは面識があったようだ。

「えっと……たきのシライトです。はじめまして」

「あつ、どうも……シズネと言います。あははっ……」

カツユの視線による催促を受けたシライトの完結な自己紹介に、シズネもまた乾いた笑みを浮かべてお辞儀を返す。

簡単な自己紹介を済ませれば、残る用件は綱手の行先だ。

「綱手様は、この賭場の中にいらっしゃるんですね?」

「ええ……まあ……はい」

消え入るような声色で、カツユの推測を肯定するシズネ。

(……昼間から賭場に入り浸ってるって……大丈夫なのかなあ……)

シズネから漂ってくる『苦勞してる感』。

そして日が高く昇っている時間帯から賭場で賭け事に興じていることから、綱手という人間に対しての心配が湧き上がってくる。

大蛞蝓仙人の言葉も思い出し、目的の人物が女性であることを想像しつつ、賭場に入り浸っている姿を想像してみた。成程、凡そ医療に精通しているような容貌でないことは確かだ。

(……ダメかもしれない)

弟子入りする——そもそも顔合わせするより前から、危機感が募ってくる。

しかし、百聞は一見に如かず。うだうだと妄想をしているよりも、実際会って話をしてみる方が早い。

「あの……差し支えなければ、その綱手という方の下に案内してほしいです」

「シライトくん……だったっけ。一体どんな用事で綱手様の下に？」

「弟子入り……です」

踏ん切りがつかないような心中であったが、最初の目的を思い出し、弟子入りにきたと伝える。

すると、鳩が豆鉄砲を食ったような顔で暫し固まったシズネは、熟考をした後に『わかったわ』と了承してくれた。

弟子入りを快く思ってくれたのか、はたまたこの小さな少年であれば、師に刃を向けたとしてもすぐに対処できると考えたのか。それはシズネにしか分からぬものであるが、素直に弟子入りしに来たシライトにすれば、変な気を起こそうという気は一切ない為、ほとんど気兼ねなく綱手の下へ向かえるというものだ。

シズネの後に続き扉を潜れば、賭けの結果に一喜一憂する者達の喧騒が響く賭場が、眼前に広がっていた。

回胴式遊技機——所謂、パチンコ型スロットマシンがずらりと並び店内。

滝隠れでは目にもすることもない遊技機を前に、シライトは文明の差を目の当たりにし、自分の故郷がいかに田舎であるのかを再び実感した。

もしこの場に友人が居れば、目を爛々と輝かせて全力に遊ぶことだろうが、シライトにそういった欲はそれほどない。

聞き慣れぬスロットが回る音、ボタンを押す音に耳を傾けつつ、導

かれるがままについて行けば、一人の女性が台の前で難儀な顔をして
いるのが見えた。

「だア——っ！ くそうっ、また外れか！ 次だ次……っ、げ。も
う一枚しか——」

「綱手様！ ちょっとよろしいでしょうか」

「ん、シズネ？ って、その子はなんだい」

「お久しぶりです、綱手様」

「カツユもなんだい。そんな肩に乗ったりなんかして」

立った今、スロットで負けて声を荒げていた彼女こそ、医療スペ
シャリストである綱手だ。

見た目は二、三十代と思しき妙齡の美女。『賭』と書かれた羽織。そ
して目を見張るほどの巨乳が目を引く。

「あの……はじめまして。たきのシライトといいます。今回は……医
療の弟子入りにと」

「弟子入りイ？ 医療オ？ ふーん……あり得ないな、断る。生憎、私
はもう医療を辞めたんだ。ほら、これやるから遊んで帰りな」

「……え」

ポイっと一枚だけコイン手渡されるシライト。

ニツコリマークが目を引くコインであるが、余りにもあつさりとし
た弟子入り拒否に、流石のシライトも茫然とする。

「っ、綱手様……」

「お前ならわかるだろう、シズネ。それに……お前。どこ生まれだ？
キツとした鋭い視線がシライトを射抜く。

「？ ……滝隠れです」

「ふんっ。滝ねえ……私のじいさんを殺してきた忍が、滝忍だった
ねえ」

「えっ」

「まあ、軽く捻って追い返したみたいだが……私はね、他里のガキにな
にかしらの技術を教えるなんてバカな真似するつもりはないよ。将
来そいつが自分の里に害為すかもしれないのねえ。さあ、分かった
んなら帰った帰った」

しっしつと、野良犬を追い払うかのような挙動。

一方でシライトは、弟子入りを拒否されたことも勿論そうだが、彼女の口より語られた内容に唾然としてしまった。

——他里の忍が、自分の身内を殺しに来た。

忍の世界では、特段不思議なことでもないのだろう。

だが、そういった血生臭い世界とは無縁の生活を送って来たシライトにとっては、少なくとも衝撃が、電撃の如く脳天を突き抜けたのだった。

言われてみればそうだ。

忍とは、殺すか殺されるかの世界。

任務であれば、他里の人間を殺すことに何の躊躇いも無しに刃を振るい、その命を刈り取っていく。

何より、医術然り忍術然り、技術とはその里の財産と言い換えてもいい。

そうホイホイと外部の人間に、技術を伝えるなど、彼女にとってみればバカのする真似だということなのだろう。どこか想う所があるような口調で語ったのは、過去のそのような出来事があったのか否か。真実は彼女しか知らない。

数秒の間に思考を巡らし、納得できる綱手の言葉に、一度は弟子入りを無理だと結論付ける。

が——。

「そこを……なんとか」

何故ここまで来たのか、当初の目的を考えればこそ、引くわけにはいかなかった。

ペコリと一礼し、食い下がる。

その様子にふんと鼻で笑う綱手は、『じゃあ』と条件を提示する。

「そのコイン一枚で、私がこの店で負けた分取り戻しな。それでちょっつとは考えてやる」

「ええ……」

「どうだ？ やるのかやらないのか。答えはどっちかだよ」

「うっ……」

これはまた無理難題だ。

そもそも綱手が負けた額すらも分からないのに、たった一枚でどうにかできるものなのか。

苦々しい顔を浮かべるシライトだったが、折角相手が譲歩した機会を逃す必要もない。

分の悪い賭けだがやるしかない。深呼吸をし、投入口にチャリンとコインを入れる。

横のレバーを引けば、様々なマークや7が掛かれたリールが回り始めた。

ゴクリと生唾を飲み、ストップボタンを押すタイミングを見計らっている間にも、背後に佇むシズネは気の毒そうな顔を浮かべている。

(……ええい、ままよ)

ボタンを押した。

縦の中央の列、一番左端で止まって見えたのは7の数字。

「むっ?」

綱手が唸る。

続けざまに真ん中のボタンを押せば、7の横にこれまた7が並んだ。

「むむっ!」

驚愕の色を隠せない綱手であったが、辺りに気をかける余裕もないシライトは、最後のボタンを勢いよく押した。

止まるリール。

同時に、スロット台が絢爛な光を放ちつつ、排出口からこれでもかという程にコインが溢れ始める。

「んなっ!」

「……これ……当たりなんですか?」

ルールもほとんど分からぬまま当たりを出したシライト。

彼が出したのは、スロットで最上位の当たりとっていいスリーセブンだった。

「なんて強運……綱手様とは大違——」

「なんか言ったかい、シズネ!」

「あひい」

「くっ……私が負けた額は、そんな一回の当たりじゃ返せやしないよ！」

慄くシズネを一喝し、半ばやけくそといった様子の綱手は声を荒げる。

まさか一枚でフィーバーするとは思っていなかったのだろう。それは無論シライトもだ。コインが全て排出されたところで、たった今得たコインを投入し、再びリールを回し始める。

そして適当にボタンを押せば、今度は蛙の絵が揃い、先程のスリーセブン程ではないものの、それなりのコインがスロット台から出てきた。

「……えっと」

「ぐぐっ……ええい、まだまだ！ そんなもんじゃ足りないぞ！」

「あ……はい」

たった二回でかなりの額を儲けたシライト。

次第に光明が差してきた状況に乗り、再びコインを投入することで、彼の弟子入りの試練の火蓋が切られるのだった。

一人は何とも言えぬ表情で。

一人は納得いかずに苛立って。

一人は思わぬ収穫に安堵して。

シライト、綱手、シズネの三人は、パチスロ屋を後にして居酒屋で食事をとっていた。

結果としては、あのフィーバーの後もシライトが勝ち続け、綱手が負けた分を返す所か、二割増しで綱手に儲けをもたらしたのである。

シライトとしては、提示された条件を無事消化できたことにホッと一安心と言ったところなのだが、完全に追い払うつもりだった綱手としては、賭けに負けた上で付いて来られることとなり、不機嫌極まりないだろう。

焼き鳥を食べつつ、日本酒をグラスで煽る綱手は、見る者を強張らせる程の眼力をシライトに向けている。

そんな瞳に憶することなく、かつお節が散らされた絹豆腐を一かけら頬ぼったシライトは、意を決して口を開いた。

「……あの……これで弟子入りを認めてくれる……感じですかね？」

「なに言ってるんだい！ 私は『考える』としか言ってるよ」

「はい」

玉砕。

ドンと勢いよくグラスを置く音で、体がビクリと飛び跳ねる。

有無も言わさぬ眼力を前に固まり、居た堪れない心境のまま再び豆腐を食べた。因みに、シライトの実家は豆腐屋である。忍者であったのは、祖父だけだ。

それはともかく、蛇に睨まれた蛙の如く身動きがとれなくなったシライトに、子豚のトントンを腕に抱くシズネが、彼へ助け船を出す。

「ま、まあ綱手様……遠路はるばる綱手様の下に来たんですし、ちよつとくらいは。あ、勿論綱手様のご懸念もわかりますよ!? 流石に子供と言えど他里の者に、あれこれ教えることに忌避があるのは……」

「……随分このガキの肩を持つじゃないか、シズネ」

「へ？ い、いやあくそんなことないですよー！ あはははっ……」

「ホントかい？」

酒癖の悪い親父のような絡みでシズネに詰め寄る綱手。

シズネはと言うと、やけに棒読みな笑い声を上げてシライトをチラ見している。

（言えない……！ 綱手様とは比べ物にならない賭け運があるこの子が居たら、これ以上借金を膨らまさずに済むんじゃないかって思っていることなんて！）

綱手を貧乏神と例えるなら、シライトは福の神と言ったところ。

あの賭け運の強さは天性のものだ。綱手の賭け運がほとんどないことを鑑みた上でも、あの勝ちようは手放すには惜しい。

医療忍者である故、若作りには詳しいと自負しているものの、借金取りに追われるストレスで老けたくない。

そんな思いが、今日の前に居る少年を追いやろうとする綱手を止める、シズネにとつての原動力となっていた。

(それに……新しい弟子を迎え入れたら、少し気が安らぐかもしれないし)

綱手は傷を抱えていた。一生消えることのない心の傷。

その傷を埋め合わせるように——否、忘れるように賭博に没頭している。

弟子の立場上、強く言えることではないが、余りいい隠居生活とは言い難い。無論、彼女は大战で負った傷がそうそう癒えるものでないことは理解しているが、これでは余りにも……。

「この子も、別に木ノ葉の奥義を教えてくれと言っていている訳じゃないんですし……ね?」

「……フンツ。そこまで言うんならね、シズネ。アンタがこのガキの面倒看な」

「へ?」

「いきなり余所から来ていきなり弟子なんて、凶々しいにも程がある。まずは、付き人としてだ。私の身の回りの世話の仕方いろはを教えたりやいな! シズネ、アンタがね!」

「あひい! そ、それは……」

「文句あるかい?」

一瞥を以てしてシズネを黙らせる綱手。

後は、シライトの返答を待つのみだ。

いつの間にか豆腐を完食していた彼は、シズネに同情の瞳を向けつつ、一拍置いてこう答えた。

「……じゃあ……よろしくお願ひします」

「ブー」

「……よろしくね」

トントンの鳴き声に応えたシライト。

こうして、彼の綱手の下での修行(?)は始まるのだった。

九 弟子と言うよりは小間使い

「シライト。荷物を持って」

「……はい」

ある時は荷物を担ぎ、

「シライト。お酌をしろ」

「……はい」

ある時はお酌をし、

「シライト。ちよつと金を借りてこい」

「それはちよつと……難しいです」

「……それもそうか」

金を借りに行かされかけました。

「……トントン、僕は疲れたよ」

「ブーブー」

師(?)の飼い豚であるトントンを撫でながら、一日を振り返る。

民宿の部屋の角。酔った後にすぐ眠った綱手と、すやすや寝息を立てている姉弟子のシズネを横目に、シライトはどこか遠い所を見る瞳を浮かべていた。

弟子入りして一か月。

ロクに綱手に修行もつけてもらえないままだった。

「はあく、ちよつと肩を揉め」

「あ……はい」

「歳の所為か、最近肩こりが酷くてねえ……まったく」

(……歳の所為より……胸の問題だと……)

自動球遊器——所謂パチンコの台の前に佇む綱手の後ろで、つま先立ちのまま彼女の肩を揉むシライト。

肩こりに悩んでいるようだが、それは歳よりも豊富な胸による負担

ではないかと考えるシライトだが、当人を目の前にしてサイズを口に出すほど失礼ではない。

「あー、いいねー。うんうん、大分いい感じに慣れてきたじゃないか」
「……ありがとうございます」

恍惚とした声を漏らし、パチンコ台のハンドルを回す綱手。

しかし、見ていて清々しいほどに当たらない。

無情にも、ただひたすらに落ちるのみの銀色の玉。滝のように一定の流れを保つことのない玉の流れは、遊びに興じる者の意思に反し、ハズレの場所へと吸い込まれていく。

「だー！　なんで当たらない！」

（全て……賭け運の悪さだと思います）

騒ぐ綱手の後ろでシライトは、すでに悟ったような顔を浮かべ心の中で呟く。

それから小一時間、肩もみをしながら綱手のパチンコに付き合っていたシライトであったが、結局彼女が当たる光景を見ることなく、店を後にすることになった。

綱手の荷物を持つのは勿論シライト。

彼女からしてみれば、いい小間使いなのだろう。

師として何かを教えることもなく、この一か月間は雑用を押し付けるだけだ。

なんとなく追い出そうとする高圧的な雰囲気さえ感じ取れるが、そんな姑にいびられる嫁の感覚を覚えていても、彼女へついでに行くだけの価値はあった。

「医療忍術の基本術……掌にチャクラ集中させて、傷ついた部位に当てることで傷の治りを早くする。これを掌仙術って言うの」

「ほー……」

「あ、でも必要以上に流し込んだら、相手が昏倒するから気を付けるのよっ。」

「はい」

綱手の付き人・シズネの教えを受け、基本的な医療忍術『掌仙術』を学んでいる。

暇を見つけては、人を治療する者としての知識を授けてくれるシズネの存在は、シライトが綱手という傍若無人な賭け狂いの傍に居続けるモチベーションとなっていた。

シズネはああ見えて木ノ葉の上忍。選りすぐりのエリートなのだ。そんな彼女の言葉を聞きつつ、掌仙術習得に励む。

対象は、綱手が先導となつて立ち寄る賭場のある宿場町……その魚屋の生け簀で飼われている魚だ。可哀そうではあるが、一度瀕死にさせてから掌仙術で復活させるのである。

成功すれば、穫れたてと見間違うほど新鮮な魚を食すことのできる一石二鳥な修行方法だ。

(でも……仙術チャクラを練るのとはまた違うし……)

しかし、医療忍術は緻密なチャクラコントロールを必要とされる。

緻密は緻密でも、仙術チャクラの練り方とも一味違う技術を要求されるため、シライトもまだ会得はできていない。

(鮎は犠牲になった……僕の掌仙術の修行の犠牲に……)

小さく『ごめんね』と呟きながら作ったのは、鮎の塩焼きだ。

ほどよく焦げた香ばしい皮と、絶妙に塩で味付けされた塩焼きは、釣りを趣味とし、釣った魚を調理してきた賜物だろう。

「はあく……魚ばつかじゃなくて、ささみとかで作れないのかい？」

「……頑張ってみます」

夕方、民宿にて。

熱燗でひっかけている綱手は、ほろ酔いしながら鮎の身を摘まんでいる。

文句は言っているものの、しっかり綺麗に骨から身を外して食べているあたり、不味いという訳ではないようだ。

(あんなにお酒飲んで……そんなに美味しいものなのかな?)

綱手がパカパカ熱燗を飲んでいるのを目の前に、シライトは不思議そうな瞳を浮かべつつ、自分の分であり塩焼きをおかずに白米を食べ進める。

仙力会得の際、湿骨林に伝わる八塩折の酒を飲んだシライトであるが、あれは厳密には酒ではない。体内の過剰な自然エネルギーに反応

し、酒を飲んだ時のような酩酊を覚えるというだけのものだ。

因みに、大蛸輪仙人の修行の下で、嗜みの一つとして体内のチャクラをコントロールし、酔いをコントロールできるという技術を学んだことがある。現時点、それが役に立ったのは、悪酔いした綱手に無理やり勧められ日本酒を飲んだ時だけ。

だが、将来人付き合っていく上で、割と重要な技術なのかもしれないとも考えていたりもしている。

「綱手様……そろそろお酒はそのくらいにしましょ？ 体にも悪いでしょうし……」

「何を言っている、シズネ！ 酒は百薬の長だぞ！」

「薬も過ぎれば毒となる、です！ 綱手様あゝ」

「ええい、私はまだ飲むぞ！」

「あひイー！」

(……ホントに大丈夫なのかな)

酒を更に仰ぐこうとする綱手と、それを阻止しようとするシズネ。この一か月間で既に見慣れた光景だ。

「ブーブー」

「……トントン、おいしい？」

「ブー！」

シライトの横で、彼が用意した餌を食っているトントン。

内容にはご満足なのか、バネのような尻尾をピョコピョコ揺らし、喜びを表してくれている。

癒しだ。

酒と賭博に入り浸っている勝気な女と、行き遅れそうな女との生活の中で、動物との触れ合いはシライトにとって癒しとなっている。

(これが……アニマルセラピー)

トントンとの触れ合いで、アニマルセラピーを実感する。

一方、綱手たちはと言うと、

「私の酒が飲めないってのかい!？」

「あ、あひイー……」

酔った綱手に絡まれたシズネが、これでもかというほどに酒を飲ま

されていた。

——大人の世界というものは、矢張り面倒なものなようだ。ひしひしとシズネの苦勞を感じ取ったシライトは、自分の分の食器を下げに立ち上がるのだった。

そして翌日、事件は起きた。

「無い……無い、無い!? 無い無い無い!」

民宿を出ようと支度するシライトとシズネを余所に、一足遅く起床した綱手が、何か探すかのような挙動で部屋を探し回っている。

仕切りに、胸元と自分の荷物があつた辺りを探す。

時には、その豊満な胸の間に腕を突つ込み、まるでポケットを漁るかのようにゴソゴソとまさぐっているではないか。

「綱手様、どうしたんですか?」

「首飾りがないんだ!」

「ええー!?!」

首飾りがないと騒ぐ綱手。どうやら、物を無くして騒いでいたようだ。

事が重大であると理解しているシズネはともかく、具体的にどのような物であるのかさっぱりわかっていないシライトは、茫然と立ち尽くしている。

「首飾りって……あの……翡翠みたいな、柱状の……ですか?」

「そうだ! まさかお前が盗ったんじゃないだろうね!?!」

「盗ってないです」

「……それもそうか。私が、お前みたいなトロそうなのに首飾りを盗られる訳がないな」

(……さらつと酷いことを言われた気がする)

一瞬シライトを疑う綱手であったが、仮にも彼女は火の国でも有名な忍者だ。今は酒と賭博に入り浸っているものの、それなりの自負というものがある。

目の前に居る少年に盗られるハズがない。仮に盗ったとするのならば、自分が寝ている内に民宿から逃げ出せばいいのだ。

二日酔いで頭痛に苛まれながらも、曆戦の忍らしく頭を回した所でシライトが犯人でないと判断した綱手は、もう一度と言わんばかりに部屋中を探し回る。

「……大事なものなんですね」

「そりゃあ、あの首飾りは綱手様のお爺様の形見のような——」

「くそっ、全然見つかりやしない！　こうなったら……昨日立ち寄った賭場、手あたり次第探しに行くよ!!」

やはり首飾りは見つからなかったらしい。

大切な首飾りを無くした綱手の焦りは二日酔いの頭痛にも勝るよううで、頭を抱えながらも、大急ぎで外へ飛び出していく。

「あひい……今日はゆっくり観光の予定だったのに……」

「旅なんて……そんなもんじゃないですかね」

「うくん、確実に私の方が旅してるハズなのに、その説得力。一体なんなの？」

飛び出す綱手に続くシズネとシライト。

他愛のない会話をしながら、ヒールにも拘わらずすさまじい速度で走る綱手に置いて行かれぬよう、彼らも全力で足を動かす。

パチンコ店を始め、丁半を興じれる賭場など、賭場だけでも五店。

その都度、店員に落とし物が無かったか尋ねてはみたものの、どの店でも綱手の首飾りと思しき物はないと告げられた。

「くっ……やつぱりお前か!？」

「く、首っ、絞まっています……きゆう」

「綱手様〜！　仮にも弟子の首を、往來のど真ん中で絞めないでくださいー！」

疑心暗鬼になった綱手が再び疑うのはシライトだ。

どの店にも落ちていないとなると、可能性が高いのは、民宿で眠っていた夜に盗まれたというもの。昨日はかなりの量の酒を飲み、更には付き人のシズネも無理やり飲まされた挙句に寝落ちたことから、警備はガバガバだったと言える。

そんな中、最も盗める可能性の高い容疑者は、弟子入りして一か月のシライト他ならない。

だが、シライトは自身がやっていないことは他の誰よりも知っている為、首飾りが見つからない今は『やっていない』と弁明する他ない。綱手の馬鹿力で、骨が折れることを錯覚するほどの首絞めを受けたシライトだったが、シズネのお陰で九死に一生を得た。

しかし、心当たりのある場所は全て探した。

つまり、既に手詰まりといった状況であるということ。

薄々察しているのか、綱手の顔からは悲壮感が滲み出ている。

——どうしたものか。

誰もがそう思っていた時、ふと、三人の中央で佇んでいたトントんがハツと顔を上げた。

「ブー！」

「ん？ どうしたの、トントん」

「ブーブー！」

「え……あれは……ネズミ？」

「ブー！ あ、ちよ……トントん!？」

人混みからチョロチョロと姿を現したネズミに反応し、全力疾走でネズミの追跡を図るトントん。思わぬトントんの行動に、三人は流れるがままにトントンを追いかけていく。

追手の存在を察知し、走る速度を上げるネズミ。

だが、相手が悪かった。

一人は伝説の三忍の一人。

一人は木ノ葉の上忍。

一匹は忍の走り回る速度に追いつける豚。

そして、プラスαで仙力を会得している少年だ。プラスαのシライトだけは、普段は下忍の下レベルの身体能力しか有していないため、それほど脅威ではない。

だが、他の二人と一匹は常人(常豚)離れた身体能力がある故、ドンドンネズミとの距離を詰めていく。

「あれは……財布？」

「ブー！」

ふとシズネが、ネズミが啜っていた物が何なのか口にした。

がま口財布。小銭がたくさん入っているのか、パンパンに詰まった物だ。それを容易く運ぶネズミ……やはりただのネズミではないらしい。

「成程……スリのために飼いなされたネズミって訳かい。つまり、あのネズミを追いかけて、飼い主の下に行けば——」

「綱手様の首飾りがある！　そういうことですね!?　もしかして、あのネズミから綱手様の匂いを嗅いだのね、トントン！」

「ブーブー！」

合点がいった。

どうやら、トントンがネズミに反応したのは、その個体から綱手の匂いを嗅ぎとったかららしい。

「つ、まり……あのつネズミが……首飾り、を、盗んだ……とつ」

「シライトくん、大丈夫!？」

「情けない奴だ！　それでも男か！」

一人、今にも息絶えそうな表情で、必死に綱手たちを追いかけるシライト。

まだまだ体力面は成長途上の子ども。歴戦の忍の全力疾走に追いつけるほどのスタミナと走力はないという訳だ。

数メートル離れながらも、必死に食らいついているが、余裕は一切ない。

それから一分ほど続いたネズミとの鬼ごっこであったが、終わりは唐突に訪れる。

「チューー！」

「むっ?」

財布を啜えたネズミが、不意に歩いていた少年と思しき人物の懐に入り込む。

商人なのか、背負う大きな籠の中には様々な物品が入っている。ツボであったり玩具であったり、ジャンルが統一されている訳ではなさそう。これから売りにでも行くのだろうか。

しかし、ネズミが懐に入ったにも拘わらず、一切リアクションをとらないのは不自然極まりない。

即座に瞬身の術で少年の目の前に現れた綱手は、般若の如き形相で、少年の胸倉を掴む。

「おい、ガキ！」

「な、なんだよ急に！ 人の胸倉掴みやがって、コラ！」

周囲の人々も怯えるほどの剣幕で詰め寄る綱手に、掴み上げられた少年は、気圧されながらもキツと睨み返す。

そんな二人の間に、シズネとシライトは割って入り、『穏やかじゃない』と綱手を落ち着かせる。

そうして下ろされた少年は、『まったく、なんなんだ！』と不機嫌そうに、着崩れた衣服を整えた。

「ブー」

「ん、なんだこの豚……って、うおあ!？」

だが、クンクンと鼻で何かを探っていたトントンが、少年の膝裏に突進し、膝カックンをしてみせた。それに伴い少年は仰向けにこけ、背負っていた籠の中身もバラバラと零れ落ちる。

すると、その中に混じっていた巾着を器用に鼻で漁り、中から翡翠のような宝石がついている首飾りを取り出して見せた。間違いない、綱手の首飾りだ。

それを見るや否や、綱手が、『あつ!』と声を上げる。

「お前がそれを盗ったのか！」

「な、なに言ってるやがるんだ！ 言いがかりはやめろよな！ 他のと勘違いしてんじゃないかねえのか、コラ！」

「その首飾りの石は、この世に二つとない鉱石なんだ！ 見間違えるわけじゃないだろう！ それに、豚の嗅覚を舐めるんじゃないよ！」

「な〜にイ〜!？」

往来のど真ん中で口喧嘩する綱手と少年。

場違い感があることを否認しないシライトであるが、弟子という立場上、一人そそくさとこの修羅場を去る訳にもいかない。

その後もシライトは、綱手と少年のギャーギャーとした喧嘩を眺め

ることになる。

綱手は、形見である首飾りを諦める訳がなく、一方で少年も自分の物だと主張を続け、一向に首飾りを渡す様子もない。

あくまで、少年が持っていた首飾りを綱手の物だと判別できたのは、トントンの嗅覚のお陰だ。実際に犯行現場を見た訳ではないため、綱手も無理やり奪い取るような強硬的な手段には出ていない。もしかしたら、すでにどこかの質屋に売られていたものを、この少年が買い取っただけという可能性も否定できないからだ。

しかし、持っていたのは事実であるが故、綱手の手が出るのも時間の問題と言ったところだろう。

一触即発。

いつ、綱手の拳骨が少年に飛ぶかも分からない。

「あ、あの……」

「?」

思わず綱手と少年の間に割って入ってしまったシライトは、オドオドとした様子のまま、少年の方へ目を遣る。

深く被っている笠の陰からは、血のように紅い髪の毛が覗いていた。

こちらを見る眼力は子供とは思えない。

だが、ゴクリと唾を飲み込み一呼吸おいてから、満を持して言い放つ。

「あの首飾り……この人の家族の形見なんです……」

「っ!」

「だから、その……盗んだとか、そういうのはそれほど大事じゃなくて……ただ返してほしいってだけで……」

「……ふんっ!」

シライトの話に耳を傾けていた少年は、徐にトントンが啞えていた首飾りを分捕り、そのまま勢いよく彼の胸へ押し付けるように渡した。

すると、『ちよっ……』と困惑するシライトにも目も暮れず、その後は散らばった物を籠へ回収し、鋭い瞳を三人と一匹へ向けてから一目

散に走り去ってしまおう。

「待て、こんのガキヤあー！」

「ま、まあまあ綱手様！ とりあえず首飾りは見つかったわけですし、ね?! 落ち着きましようー！」

「ああいうガキは、いつペン痛い目見なきや何度も繰り返すんだ！

それに、一発拳骨かまさなきや、私の気も晴れないんだよ！ 放せ、シズネエー！」

「あひイー！ 綱手様に殴られたら、もれなく死んじやいますよー！」

首飾りが戻ってきてても、収まらぬ怒りをまき散らす綱手。

シズネは必至に殴りに行こうとする綱手を食い止めているが、シライトは神妙な表情で、強引に手渡された首飾りを見つめていた。

（あの時、一瞬……）

脳裏を過るのは、『形見』とシライトから聞かされた際の、少年の悲痛な顔。

（なんでなのかな……？）

「チャクラをコントロールして、身体能力を向上させることができるのは知ってるわよね？」

「はい」

改めて民宿から出かける支度を整える三人と一匹。

その間、軽くシズネから講義を受けているシライトは、チャクラコントロールによる身体能力向上について聞いていた。

仙術チャクラを練れている——仙人モードが発動している間は、格段にパワーアップすることを知っているシライトにとっては復習のような内容ではあるが、聞いてみれば聞いてみるほどにチャクラは奥が深い。

「綱手様は、それを応用してあの馬鹿力を発揮してるわけなのよ！」

「誰が馬鹿力だ、シズネエ……」

「あひイー」

「私の力の話なんかどうでもいい。今日は、ねずみ石がある寺だとか
なんとかに行くんだろ？」

えっへんと得意顔で語っていたシズネだったが、綱手の一声で情け
ない声を発しながら肩を落とす。

そんなシズネは置いておき、今日シライトたちが向かうのは、ねず
み石という小さな穴が開いた石のある寺だ。ねずみ石からは水が流
れており、朝に飲めば長寿の効果が。夕方に飲めば若返りの効果があ
ると、地元では言われている。

効果については眉唾ものではあるが、この辺りの町では有名な寺で
あるため、観光に行ってみようと言うシズネの提案の下での出立だ。

(ねずみ……って言われると、昨日の子のこと思い出すなあ)

忙しない出立の中、シライトはふと昨日の出来事を思い出す。

どこかひっかかりを覚える出来事だったが、さっさと先へ進んで
いってしまっている綱手たちの姿に、一旦思考を中断させて足を動か
す。

——この時彼は、二度目の出会いが起こることなど、思いもしな
かった。

十．賭けるのは

岩。

三人は、目の前に堂々と存在する物体を目の前に、ただその一言を頭に思い浮かべた。両側にそびえ立つは断崖。

その間にあつたハズの道は、巨大な岩や土砂によって塞がれてしまい、前方を望むことすら難しい状況となっていた。

「なんだ、土砂崩れでもあつたのか？ シズネ、本当にこの先で合つてるんだらうね？」

「え、ええ。地図を見る限りは、この先で合っているんですが……」

本当に、この岩の先に目的地があるのかと尋ねる綱手に、シズネは今一度手に携えている地図を確認する。

「まあ、行つて見ればわかることか」

しかし、そんなシズネを置いてけぼりにするように、綱手は軽快な動きで岩に対して垂直に立ちながら、スタスタと前へ進んでいく。

『綱手様あく！』と急いで続くシズネを、彼女らの後ろに立っていたシライトとトントンが追いかける。チャクラコントロールによる吸着は既に会得済みだ。地面に直角な壁であつたとしても登れると、シライトは自負している。

だが、彼がここで一番気にしているのは、目的地である寺のことだ。（観光目的で行く人が多いハズなのに……道塞がって大丈夫なのかな？）

観光地が人気である主な理由の一つには、“行きやすさ”も含まれている。

無論、人の手が付いていないような秘境も、人によってはどんな道であつても行きたいと思うだろうが、一般人にしてみれば行きやすいに越したことはないだろう。

そしてその心配は現実となる。

岩を乗り越え、更に道の先へ進んでいけば、それなりに立派な寺が一軒建っていた。しかし、活気というものは毛ほども感じられず、枯葉を箒で掃く修行僧らしき子供が居るだけだ。

寂しい。ただ寂しく冷えた空気が、寺の敷地内を満たしている。これは、お世辞にも賑わっているとは言いがたい。

観光地というものは、そこを訪れる人々の熱気に包まれてなんぼだろう。

どこことなく期待を削がれた三人。そこへ、寺の奥からしわがれた声を発する老僧がトボトボと現れた。

「これはまた……道中、大きな岩がありましたでしょうに。こんな寺にわざわざご足労おかけいたし、誠に申し訳ございませんねえ」

「爺さん、随分ここは活気がないね。いつぐらいからなんだい？」

「三か月ほど前からでしょうか……嵐で崖が崩れ、岩が道を塞いでしまったのです。それから人の足も途絶え、めっきり人足もなくなりまして。まあ、立ち話もなんでしょうから中へどうぞ」

「む……そうか、失礼するぞ」

老僧に招かれるがままに綱手は、寺の中へ入っていく。

シズネも綱手も続き、シライトも寺へ足を踏み入れようとした。だがその時、抱きかかえていたトントンが何かに反応し、鼻をピクピクさせ始める。

何事かと怪訝な顔をシライトが浮かべれば、トントンは腕からすり抜け、どこかへ走っていつてしまうではないか。

「ブー！」

「えっ。ちよつ、すみません……連れ戻しに行つてきます」

「あ、シライトくん！」

「放っておけ、シズネ。小さいガキじゃあるまいし、その内戻つてくるだろ」

トントンを追いかけるシライト。

咄嗟にシズネが振り返るが、綱手はその制止を止める。

シライトのことを未だ弟子とは認めていない彼女ではあるが、この一か月でどのような人物であるかは理解しているつもりだった。

自分の弟とは違い、それなりに落ち着きがある性格だ。藪に手を突っ込んで蛇に噛まれるような出来事には巻き込まれないだろう。そんな、信頼にも似た感情を綱手は抱いていた。

一方、そんなことを思われているとは毛ほども感じていないシライトは、横に目も暮れず全力疾走するトントンを追い続ける。

速い。豚なのに速い。いや、豚だから速いのか？

現実逃避するかのような思考を巡らせつつ必死に追い続けていると、トントンはふと法衣を身に纏う少年僧の目の前で止まった。

「……トントトン？」

「ブー……」

竹ぼうきでせっせと落ち葉を掃いている少年僧。笠を深く被っているため、シライトの位置からは顔を窺うことはできない。

しかし、下から覗いているトントンの顔は、実に訝し気なものだった。

——豚に、これほどまで訝し気な顔を浮かべさせられるものなのか？

一体、トントンの目の前に佇む少年僧が何者なのか。

暫し、沈黙が二人と一匹の間に流れる。心なしか、少年僧が竹ぼうきで落ち葉を掃くついでに、トントンを追い払うかのような動作をしているようにも見えた。

怪しい。

心のどこかでひっかかりを覚えた時、シライトの口は既に動いていた。

「あの、すみません……」

「……」

「ちよつと、お話を……」

「……」

「……聞こえていますか？」

「……」

根気よく話しかけるも、少年僧は一切応えない。

一メートルほどの距離。シライトの声が小さいことを鑑みても、十分聞こえるほどの距離ではあるはず。

『「近づいたら」と一歩近づく。』

すると、少年僧は距離をとるように一歩退く。

一步近づくと。
一步退く。
近づくと。
退く。

このようなやり取りを数度繰り返すと、痺れを切らしたトントンが、豚ならざる軽快な動きで飛び上がり、少年僧が被っていた笠を奪い取った。

「あ、この豚野郎！ コラ！」

「……あっ」

「はっ！」

露わになる少年僧の顔。

それは違うことなき、昨日綱手の首飾りを持っていた赤髪の少年だった。

「……僕は、たきのシライトと言います。君の名前は……」

「……ヒナイってんだ」

二人と一匹は場所を移し、境内の内の腰かけるにちょうどいい切株の上に座っていた。

居心地悪そうに地面を睨みつけている少年僧・ヒナイ。彼の存在を見破ったトントンはと言うと、シライトの膝の上で寝っ転がっている。

そんなトントンを『悠々寝やがって』と言わんばかりに、殺気に満ちた一瞥を送るヒナイ。このままだと、トンカツにでも調理されてしまいそうな雰囲気さえ漂っている。

「あ、あの……」

「んだよ」

「……ここで暮らしてるんですか？」

「……ん」

恐らくは肯定の言葉。

唇を尖らせている彼は、消え入りそうな声で応えてくれた。

見た目が僧の彼が盗みを働いていたとなると、酷く不徳な行いをしていたことになるが、そのことについて責めるほどシライトの胆は据わっていない。そもそも、盗みについてアレコレ言わないと言ったのはシライトの方だ。何故、あのような働きをしていたのかも問えぬまま、ただただ時間だけが過ぎていく。

木葉がざわめく音に暫し耳を傾けていると、深くため息を吐いたヒナイが口火を切った。

「ここはな、寺だけど孤児院でもあんのさ」

「孤児院……？」

「ああ。路地裏に捨てられたような奴から、親が死んだような奴らが集まる……な。オレも、元々住んでた里が潰れてから、あつちやこつちやを歩きまわるような一族の生まれでな。まだ小さいガキんの頃に親が死んで身よりもなくなった時に、この寺の和尚に拾われたんだよ」

「なるほど……」

元々住んでいた居場所を追われ、各地を渡り合う運命になった一族。

自分にとっては想像もつかない暮らしをしていたに違いない。シライトは、ただヒナイの言葉に耳を傾け続ける。

「和尚は、火ノ寺で修行積んだ徳の高い坊さんでさ。こここの寺——鼠ノ寺も、元々あったねずみ石の知名度もあって、観光客のお布施とかで孤児院をギリギリやりくりしいけるだけの稼ぎはあったのさ。三か月前まではさ……」

「もしかして……あの岩が」

「ああ。あの岩の所為で観光客の足がぱったり途絶えちまってよ！稼ぎがねえ！ それじゃ、食い物は自給自足でなんとかできるにしても、病気になった時に薬も買えやしねえ！」

「……それで……その」

「っ……認めるよ、盗みしたのはさ。でも、現にチビ共中には病気の奴が居る。んでもって、病気治したとしてもあの岩があったままじゃ

根本的な解決になりやしねえ。だから、岩撤去する忍雇うのに金が必要なんだ」

一般人の力ではどうしようもできない大岩。

しかし、忍の力があるならば話は別だ。金さえ払えば、大抵の仕事なら断らずにやり遂げてくれる。

今回のような岩の撤去という名目であれば、ほぼ確実に受けてくれるはずだ。

だが、問題は金額。忍という万能な労力を雇うにはそれなりに高い金額を要求される。一番安いDランクの任務でも、最低金額は五千両からだ。

今回のような大岩の撤去は、少ない可能性ではあるが任務遂行者に負傷が予想されるため、任務のランクとしてはC。最低金額は三万両だ。それを、孤児院も経営してカツカツな寺が払えるかと問われれば、難しいと言わざるを得ない。

「でも、泥棒は……」

「……分あつてるよ。でも、病気にかかってグズってるチビ見てるとよお……自分の手も汚さねえで、『手遅れじゃなかったかも』なんて後悔すんの、死ぬほど御免だつて思つてよ」

悲痛な顔を浮かべて語っていたヒナイは、突然立ち上がり、シライトの目の前に移動したかと思えば、周囲に響きわたるほど勢いよくその頭を地面に叩きつけた。

土下座だ。

余りにも唐突な土下座に、シライトはあたふたと慌てるばかりである。

「頼むっ！ このことは、岩なくなるまで誰にも言わねえでくれ!! この通りだっ!!!」

「あ、あのっ……どうか顔を上げて」

「オレのことは、全部終わった後に煮るなり焼くなりしていい!! だから——」

「わ、わかりましたからっ……」

「ホントかつ!」

気圧され、思わず『言わない』とシライトが約束すれば、ヒナイはぱあつと晴れた笑顔で彼を見上げる。

先程までの鬼気迫る表情はどこへやらと言わんばかりだが、その笑顔で平静を取り戻したシライトは、今一度状況を整理した。

「でも……」

「『でも』？」

「泥棒は駄目ですので……他の方法でなんとかしましょう」

「まさか、こんな辺鄙な場所で伝説の三忍が一人、綱手殿に会えるとは……長く生きてみるものですか」

「止めとくれよ。今更、そんな呼ばれ方はしたくないさ」

寺の中、綱手とシズネは鼠ノ寺の責任者である和尚と話し合っていた。

やはり、伝説の三忍の一人という知名度は、火の国内で知名度が高いらしい。僧に有難がられるとは何とも恐れ多いことだが、綱手本人としては、僧よりも賭けの神様にでも見初められたいものと考えている。

はあ、と深いため息を吐いた後は、どこか遠い場所を見るような瞳で和尚に目を遣った。

「……で、そんな長生きした老人の頼みつてのが、私にあの岩をどかして欲しいってことかい」

「ええ……なにせ、この寺は状況も状況で、忍を雇えるだけの金がありません。どうにか捻出しようと、家財を質屋に売ろうとも考えてはみましたが、それでも足らぬと……」

神妙な面持ちで語る和尚を前に、綱手は差し出されていた茶を啜る。

粗茶だ。渋い。応じて綱手の顔も渋くなる。

「……筋違いさ。なんで、私の得にもならないことをせにやならんだ」

「無礼であることは承知しております。ですが、この寺に住む子供たちのことを思えば、藁にも縋る想いなのです……何卒。何卒お慈悲を……」

「綱手様……」

シズネの声に、これまた渋い顔を浮かべる綱手。

無論、綱手が本気を出せば、あの大岩の撤去など不可能ではない。だが、単純に今彼女は気乗りしないのだ。自暴自棄——スレて自棄になっているような心境のまま数十年の時を過ごし、今更人の為、世の為にと無償で働ける気にならない。

突っぱねるつもりだ。

善悪の問題ではない。

いくら悪評を広められようと、気乗りしないものはしないのだ。

——『断る』。

ただその一言を無情に言い放とうとしたその時、後方から声が響いてくる。

「僕からも……お願いします」

「……なんだ、帰ってきたのか」

外から差し込んでくる光に影が重なる。

シライトだ。しっかりとトントンを抱きかかえつつも、神妙な面持ちで和尚の嘆願を聞き入れるように、彼もまた綱手に嘆願する。

そんな彼の言葉に、綱手は眉を顰めた。

「なんで私が、正式な弟子でもないお前の願いを聞かにならんのだ」

「……弟子というよりは……一人の人間としてのお願いです」

「だったら尚更、そんな凶々しい真似は止すんだね。虫唾が走る」

「そこをなんとか……」

「……ちよつと来い」

「？」

ふと綱手に手招かれ、歩み寄っていくシライト。

すると綱手は、徐に右手を彼の額へと突き出し——、

「っ!!? ~~~~~!!」

空気が爆ぜるような音。

綱手がシライトにデコピンした音だ。たかがデコピン。しかし、されどデコピンだ。綱手のデコピンを受けたシライトは、思わず抱きかかえていたトントンを手放してしまうほど、後方へ弾き飛ばされてしまう。

余りの痛みに悶絶する。不意打ちで無防備であつたのが激痛の原因でもあるが、何より元の威力が高すぎるのだ。

「あんまり出しゃばるんじゃないよ。あれかい？　少しの間、私の小間使いで居れたからって、自分が弟子だと勘違いしてんのかい？」

「つ、綱手様……！」

「お黙り、シズネ。……どうせ、私が有名だからっていう適当な理由で弟子入りしたんだろう。それに、お前は医者になりたいようだけど、私の弟子になつたところでポンと医者になれるほど、医療は甘くないんだよ」

畳みかけるような辛辣な言葉。

慌てふためくシズネに、悶えるシライトに駆け寄るトントンなど、状況は混沌としている。

そんな中、綱手はトドメの一言と言わんばかりに、シライトを見下すようなポジションを取り、口を開いた。

「私の弟子が医者への近道だと思つてんなら、さっさと国に帰りな！」
「——近道つて……要するに……主観的な問題じゃないんですか？」

「……は？」

仰向けで悶えていたシライトの冷静な声に、綱手は一瞬呆気にとられる。

目の前の少年の顔を見れば、痛みで目尻に涙を浮かべているものの、激情が顔に現れている様子はない。

なんだ。

主観的な問題とはなんだ？

綱手の怪訝な視線を受け、シライトは言葉を続ける。

「生まれた時の環境とか……才能とか……人間関係とか……他の色々な要因とかが相まって、当人の歩幅とか歩く速さが変わるだけで……

道の始まりから終わりまでの距離は、誰でも一緒だと……僕は思いません」

「それで……なんだい」

「だから、僕は医者になりたくて、その道を歩いているつもりなんですけど……近道を歩いているつもりなんてないです……」

「だから、私の弟子が近道じゃないって？」

「……それはそれで失礼な言い方な気もしますが……でも、この道じゃなきや得られない経験があると思うから……そこに価値を見出したから、弟子入りしたんです」

ポツリポツリと、雨粒が滴り落ちるようなテンポで紡がれたシライトの言葉に、沸々とした苛立ちを覚えていた綱手の心は落ち着きを取り戻す。

ただ、伝説の三忍の名の下で甘い汁を啜ろうとする、不純な動機で弟子入りしたと思っていた。だが、今の話を聞いて、ほんの少しばかり見直したとも言おうか。

だからこそ知りたい。

この一か月曖昧にしていた答えを。

適当にあしらっていた少年の心の内を。

「……なんでそこまで私の弟子になりたい？」

「誰かを助けたい時……助けられるだけの力を持つていたいからです」

「……仮に私の弟子になったら、命を懸けることになるぞ？」

「相手の命がかかってますから……助ける側が命を賭けるのは……割と妥当だと」

「——ふっ」

言い回しが独特で鈍い喋り方に苛立つが、面白い答えに思わず笑みが零れた。

——少し、あの日の情熱^火を思い出したような気がした。

「……付いてっ」

「？」

徐にシライトを呼びつけ、どこかへ歩み出す綱手。

頭上にクエスチョンマークを浮かべつつ、黙々とシライトが付いて行けば、たどり着いた先はあの岩だった。

まさか、岩を退かす気になつてくれたのか。

嘆願を聞き入れてくれたのかと期待するシライト。

しかし、綱手はそんな少年を余所に辺りを見渡し、一メートルほどのそれでも大きな石に目を遣り、『これでいいだろう』と一人で納得してみせる」

「よく見えている」

「？ ……はい」

「ふんっ！」

「あ」

何をするのかと目を凝らして居れば、次の瞬間、あろうことか綱手は人差し指一本でその石を粉々に砕き割った。

信じがたい光景に、シライトは普段開いているか怪しい瞼が全開となる。

開いた口が塞がらないとは、今の彼の状態を指すのだろう。暫く、シライトの間抜けな表情は直らない。

「見ただろう？ 今の技を」

「……はあ」

「やったことは単純だ。最大チャクラを一瞬で練り上げ、使う部位に集中して攻撃する。緻密なチャクラコントロールは要求されるが、練り上げたチャクラを無駄なく使うことから燃費も非常にいい」

「なるほど……？」

「これが使えれば、除去作業も捗るだろうな」

「へ？」

綱手の言葉を汲み取れないシライトは、呆けた表情のままだ。

そんな彼へ、綱手はたった今石を砕き割った人差し指を突き出す。

「おまえは、今日から一週間でこの道を塞ぐ岩を、人が通れるぐらいに撤去しろ!!」

「…………ふえ？」

「砕くのは己の拳で！ 怪我を治すのも己の術で！ 砕いた破片を運ぶのも己の身一つで！」

「…………色んな意味で…………死にかけると思うんですが」

「命を賭けるのは妥当なんだろう？ 男に二言はないよ!! やってみせろ!! やり遂げたら、お前を正式な弟子として認めてやる!!!」

デコピンされた額がジンジンと痛むのを覚えながら、シライトは眼前に堂々と立ち上がる巨岩を見上げる。

(…………マジっすか)

ふと、友人の語尾が出てしまうほど、シライトは目の前の“壁”から現実逃避したい気分になった。

これより一週間続く、シライトにとって辛く苦しい修行の始まりだ。

十一． 新しい扉が開かれるのはふとした時

拳が岩に叩き込まれる。

チャクラコントロールにより威力が強化された一撃は、蜘蛛の巣のような亀裂を岩に入れ、同時に幾つかの破片を辺りに飛散させる。

——— 今のは中々いい拳だった。

僅かばかりの進歩を実感。ほとんど気休めだが、ゴールへ向かって
いる間に歩幅が大きくなったことは素直に喜ぶべきだ。

しかし、余りにもゴールは遠い。

綱手に言い渡されたお題——— 人が通れる程度に、谷間を塞ぐ岩を
除去する作業のことだが、途方もない作業量になるだろうと、一日目
にして既にため息が出てしまう。

達成できれば正式に弟子として認められる訳だが、初めて会った時
の賭け並みに、シライトにとって不利なお題と言える。

だが、今更引き下がるつもりはない。

誰かのために頼んだ仕事を、そっくりそのまま自分が引き受けただ
けだ。他人任せのまま事を収めるよりも、達成後の感慨はより一層深
いものとなろう。

自分自身に励みを送り、再びチャクラを練り始める。

(最大チャクラを……一瞬で……拳に……っ！)

全身の経絡系を通り、身体エネルギーと精神エネルギーより練られ
たチャクラが拳に収束する。

冷水が一気に沸騰するかのような感覚。

刹那、己の拳が最大の矛となるのを見計らい、拳を岩に叩き込む。
先程広がった亀裂の中心に叩き込まれた拳は、さらに亀裂を広げ、一
層多い破片を舞い散らせる。

だが、まだまだだ。無駄が多い。これでは岩を削ることはでき
ても、砕くことはできない。

「……………」

辺りに散らばる破片もそうだが、手の甲に滲む血を目の当たりに

し、シライトは一息つく。

休息のついでに、傷を負った己の手は未熟な掌仙術で治癒する。必要以上にチャクラを込めれば自身が昏倒してしまう為、細心の注意を払いながら、だ。

ここで言う休憩は、あくまで肉体的な休息。緻密なチャクラコントロールを必要とされる「破壊」と「治癒」——どちらも、気を抜いて事に当たる訳にはいかない。

それからある程度傷が癒えれば、辺りに散らばった破片を邪魔にならない場所まで抱えて運ぶ。時折、除去作業に当たって小さな岩——それでも子供には重いだらう物——は、これまたチャクラコントロールで身体能力を底上げし、ヨタヨタとふらつきながら運んでみせる。

(……なんやかんやで……考えられてるメニューなんだなあ……)

作業を数度繰り返した所で、シライトはこの除去作業の意図に気が付き始めた。

医療忍術に必要とされるのは、何より緻密なチャクラコントロール。これは一朝一夕で為せるものではなく、出来るようになるまで試行回数を多く求められる。

そして、この除去作業はどのような医療忍術を会得する過程で必要なチャクラコントロールを得られるメニューとなっていたのだ。

一瞬で最大チャクラを練り上げ、必要な部位に集中させる作業。必要以上にチャクラを込めない作業。

持続的にチャクラを練り、身体能力を向上させる作業。

どれをとつても、緻密・繊細なチャクラコントロールを会得することが必要と言える内容だ。

ただ言い渡した訳ではない。しっかりと、必要な技術を会得できるように考えられている。

一週間という設けられた期限。それに伴う焦燥。されど、焦ればコントロールが乱れ、結果的に作業が滞る結果となろう。なによりチャクラは有限だ。雑に作業し、無駄にチャクラを浪費すれば一週間持つハズもなく、無論、岩の除去も不可能となろう。

「ふい〜……」

現在の作業量は、全体の一割にも満ちていない。

どうにかして破碎作業についての技術を身につけなければ、お題を達成することは現実味を帯びてこないだろう。

故に止まってなど居られない。

焦ってもいけない。

一歩ずつ着実に進まなければならないのだ。

責任感にも似た焦燥を律し、深呼吸で心を整え、再び眼前の巨大な岩に臨む。

「頑張つて下さい！ もっと腰を入れて！ こう、ぐっ、ドーンという感じで!!」

「……カツユ様……抽象的です」

後ろで声援を送るカツユが、今この場の癒しだ。

一日目の作業は、結局こなすべき作業の一割にも満たない程度で終わってしまった。

拳は勿論、着ていた服も飛散する破片や塵でボロボロ。なによりチャクラをほとんど消費してしまい、一直線に歩くことができないほどにヘトヘトとなった。

そんなシライトの面倒をしてくれたのは、鼠ノ寺の和尚だ。

綱手は一週間待つ間、賭場のある町の方に泊まる予定である。本来ならば、シライトは綱手たちが泊まる民宿まで足を運ぶべきなのだが、如何せん作業が重労働過ぎて、いちいち町の方まで歩く体力をとっておけない。

そこで、事情を知っている和尚が、一週間の間はシライトの面倒を看てくれることになった訳だ。

全ては鼠ノ寺の者のためとは言え、和尚には頭が下がる想いであるシライトは、明日の作業を一層励まんと誓いながら、死ぬように床についた。

そして二日目。朝食も振舞ってもらった後、朝早くから除去作業に取り掛かる。

昨日の作業で少しコツは掴んだとはいえ、まだ試行錯誤の段階だ。決して速いとは言えぬ速度で、それでもコツコツと岩の破碎、手の治療、破片の運搬をこなしていく。

三日目。

まだまだ終わる気配はないが、それでも一割は超えただろうか。

一撃の威力はだんだん強くなってきたが、一方で、散らばる破片も多く、飛び散る勢いもそれなりに強まってしまったため、いちいち顔に当たって痛い思いをしていた。

旅の始まりより身につけていたヘアバンドのポジションも試行錯誤し、なんとか破片が当たっても痛くならないようにと頑張る。

結果、医者が手術の際に布で口元を覆うスタイルから、更に布の位置が頭へと上がっていき、目元も隠れるスタイルとなってしまった。傍から見れば、不審者でしかない。

しかし、背に腹は代えられない。周囲から送られる視線（は、ほとんど無いが）に気恥ずかしさも覚えつつ、それを紛らわさんと拳を振るう。

四日目。

まだまだ終わらない。四日目となってくると、碎け飛ぶ破片の大きさもそれなりとなる。腰の入ったイイ一撃が入り、大きな破片が落ちれば、自分の成長を実感することができ、一人岩の前で不敵な笑みを浮かべる不審者となってしまうていた。

『この破片の形……中タイカしてる』や『ああ、この形……イイ』など、飛び散る破片がスローモーションで見える世界の中、現実逃避のようなことを考える。

シライトが、我ながら変態染みてきたと自分を悩ましく考えるのは、致し方ないと言えよう。

そして、四日目になってきた露見してきた問題がある。

最初は普通に地上に立ち、地道に削って来た訳であるが、大岩に窪みができた光景を目の当たりにし、バランスが大丈夫であるのか心配

になってきたのだ。

——ふとした瞬間、岩が自分の方へ転がり、押し潰されやしないだろうか。

そんな不安から、シライトはちよこちよこ殴る位置を変え、横や上からなど様々な位置からの破碎を試みることとなった。

こうなつてくると、殴る際のチャクラのみならず、岩の側面などに吸着するチャクラのコントロールも要求され、より一層作業が難しくなってきたのである。

これはまた難儀なこととなった。

しかし、異身伝心の術を用いての仙人モード発動の修行に際し、物を同時に平行することには多少慣れている。

幸か不幸か、難易度は仙人モードよりも簡単だ。慣れるのもそう時間はかかるまいと、シライトはゴツゴツとした足場を素足で踏みしめながら、拳を振り下す。

五日目。

段々削れて小さくなつてきている岩に、充実感を覚え始めた。

物が削れて覚える充実感など、今まで考えたことがなかったが、思い返してみれば小さい頃は意味もなく地面を木の棒で削ったりしていた——ような気がする。

窪みが好きなのかもしれない。

窪みフェチになつてきたのかもしれない。

「……いや、それはナイ」

ふとした自分の新たななる扉の発見に対し、拳を以て自分自身へツツコミを入れる。

轟く破碎音。飛び散る破片も中々の大きさだった。今日一番の威力が出たようだ。

自己嫌悪による一撃が最も威力が大きいとは、中々悲しい結果である。数秒、青い空を見上げて心を洗い流すことを試みた後、血の滲んでいる拳を掌仙術で治療する。

二日目の時点で痛み能耐えかね、気休め程度に拳には包帯を巻いていた。だが、始めは白亜であつた布地も、一日が終わる頃には血と塵

で赤黒く染まっている。それが気休めと分かかっていても行ってしまうのは、人の性なのだろうか。擦り切れた包帯と、次第に傷が塞がっていく手の甲を見て思案する。

「……やっぱり、この握った時の骨のゴツつとした窪みが……。」

「……ふんっ!!」

我に返らんと振るい落とした一撃は、今日一番の威力を誇った。

そして——六日目。

周囲に激震が走った。轟く音は空気も震わせ、木々の上で囁つていた小鳥たちを周囲から追いやる。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

息も絶え絶えとなりながら、拳を何度も振るうシライト。

日が昇り、そして日が落ちるまで岩を殴り続けた拳は、いくらチャクラで強化されていても、ボロボロになってしまっていた。

六日目となると、掌仙術もこなれてきたものだ。

タイムリミットが設けられている中、繊細なコントロールが要求されれば、誰でも焦るものだろう。だが、だからこそ一回一回の試行が丁寧となり、結果的に短期間での習得を可能足らしめた。

今のシライトの掌仙術は、医療忍者としてやっていけるほどに洗礼されている。

だが、治療の時間は短縮できたとしても、問題なのは岩だ。

まだまだ岩は健在。全体の五割ほど削ることができ、最初ほどの威圧感はなくなったが、人が通る道ができていないことには変わりない。

あと一日。

状況は絶望的と言っても差し支えない。

「……っ」

朝から晩まで動き続けた疲れが出、シライトは空を仰ぐ形で倒れた。

倒れたついでに休憩しようと、暇つぶしに満天の星空を見上げる。月明りが眩しい。穏やかな光は、少しでも気を抜けば微睡みを呼び寄

せてしまいそうだ。

結局、倒れたままでは寝てしまうと考えたシライトは、一分と立たぬうちに立ち上がり、再び眼前の岩へ相對した。

「律儀だな、アンタも」

「……ヒナイさん？」

「見ず知らず……赤の他人のために、なんでそこまでボロボロになってやるんだよ？」

月光により伸びる影が近づいてくることに気が付いたシライト。

振り向けば、チャポチャポと液体が揺れる音の鳴る竹筒を携えたヒナイが立っていた。

「……寝てなかったんですか？」

「和尚に、倒れてねーか見てきてくれてくれて頼まれてよ。案の定来てみたら倒れてたじゃねえか、コラ。もう寝ろよ」

「すみません……時間がもったいないので」

「……顔」

「……はい？」

「貸せ」

「……はあ」

一度ヒナイの質問をはぐらかしたシライトは、すぐさま作業に戻ろうとするも、ヒナイの呼びかけを無視することもできず、一旦断りを入れた。

そんな彼の様子に、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるヒナイは、徐に親指をカリツと噛む。ツーツと滴り落ちる真紅の血。月明りしか光源のないこの場では、真紅の血はそれこそ墨汁のように真っ黒な色合いに見える。

一方、ヒナイに顔を貸せと言われたシライトは、何をするのかと疑問に思いつつ歩み寄った。

次の瞬間、ヒナイはたつぷりと血にまみれた親指を、半開きになっていたシライトの口へ突っ込んだ。

「ぶっ……!？」

仄かな塩気。

舌の上を転がる鉄臭さ。

ああ、血だ。違うことなき血である。

指を口へ突っ込まれたこともそうだが、何より血を舐めさせられる現状に、シライトはグロッキー状態となった。因みに、指を突っ込まれた際、割と強めに爪が歯に当たっている。まさかここにきて歯茎が痛い思いをするとは、思ってもみなかった。

「おえっぷ……わ、割と本気で何を……？」

「手え見てみる。治ってんだろ」

「……血を舐めて傷が治るなんて……どこの民間療法な——」

ヒナイの言葉に半信半疑で手の甲に目を遣るシライト。

ぱっくり開きかけていた傷口は、仄かな緑色の光——ちようど掌仙術のような光に包まれ、あつという間に塞がっていた。

「……治ってますねえ」

「だろ？ なにがなんだか知んねえけど、オレの血イ舐めつと傷治ったりすんだよ」

「……本人なのに知らないんですか？」

「和尚は、〃ケツケーゲンカイ〃だかなんだとかじゃねえかつつてたぞ」

「ケツケーゲンカイ」

「おう」

よく知らない単語を聞き、呆けるシライト。

その後、近くに居たカツユに話を聞き、特殊な血筋を持つ人の特殊な能力であると理解した。親のことをあまり覚えていないと言うヒナイであるが、彼の両親も、特殊な血筋の者だったのかもしれない。

そのド派手な髪色を見れば、尚更だ。

シライトは人生の中で、地毛が黄緑色の人間は見たことがあるが、真っ赤な人間を見たことはない。だが、人間は千差万別。地毛が真っ赤な人々も居るのだろうという結論に至る。

「……なんか……その……凄いですね」

「月並みか、コラ。でもまあ、この能力がありやああつという間に怪我治るだろ？ 和尚にや、あんまり人に見せるなつて言われてるんだけ

どよ、頑張ってるアンタになんにもしねえで居ると、尻の穴がムズムズすんだよ。だからよ、怪我したんならオレに言え。何回でも舐めさせてやつぞ」

「……遠慮させて頂きます」

「血イ舐めんのが嫌なのか？ そう思つて、口直し用の水持つてきてやったんだからな」

「いや、そういう問題じゃ……まあ、そういう問題じゃないと言えばウソになりますけど……本当に大丈夫です」

良心で、人に見せぬよう言われていた能力でわざわざ治療してくれたヒナイ。

だがシライトは、遠慮する旨を告げ、擦れてボロボロになった拳の包帯を投げ捨てた。滲む汗を撫でる夜風に運ばれる包帯。しかし、塵と血で重くなっていた包帯は、ほどなくして地面にバサリと舞い落ちた。

「これを一人でやるのは……僕自身のためなんです」

そう言い、振るう拳。

いい一撃が入った。既に入っていた亀裂が更に岩の表面を奔り、バラバラと幾つか板のように表面が剥がれ落ちる。

「でもよ、聞いたぜ？ それ、明日の内に全部退かさなきゃ、ちゃんと弟子になれねえんだろ？ 人の善意突っぱねてまでよオ……もしできなかつたら、アンタの努力全部無駄になんぜ？」

食い下がるヒナイは、シライトが課されたお題が達成できなかつた場合の時のことを説く。

確かに、現状は達成できない可能性が高い。

その時は綱手が愛想をつかし、見切りをつけられ、故郷を返されかねない結果となるかもしれない。

が――、

「……無駄になんかなりませんよ」

「は？」

「無駄になんか……なりません」

「……どうしてそういうこと言えんだ」

「その……目標を達成するまでに培った技術は……事実だから、です。たしかに達成できなかったら、努力が全部水の泡同然かもしれないですけど……その時は、『無価値』が価値あるものになれるよう……また新しい目標を立てればいいだけですから」

岩を退かせなかった時、『正式に弟子として認めてもらう』という目標においては、今までの目標は水泡に帰す。

しかし、例えそうなってしまったとしても、鼠ノ寺の人たちを救うべく、岩を退かすという目標の下では決して無駄にはなっていない。

「間に合わなくても……やり通します……！」

この岩は退かず。

今一度誓うシライトは、何度も拳を振るう。

何度も。

何度も何度も。

何度も何度も何度も。

何度も——飛散せし破片は、花卉となりて舞い咲く。

その様を後ろで眺めるヒナイは、只管に真つすぐな視線をシライトへ送る。

するとどうだろうか。

時が経てば経つ程、数をこなせばこなす程、その拳の鋭さはどんどん磨かれていく。

そして、空が白み始めた頃——彼は賭けに出た。

「さて……どんなもんか見物じゃないか」

「シライトくん、大丈夫ですかね……」

「ブー……」

約束の七日目。

今日一杯で道が出来ていなければ、弟子の話はなかったことになる訳であるが、先頭を歩む綱手は考えを読み取れないような無表情だ。心配そうにしているシズネとトントンとは大違いである。

暫く歩み、そろそろあの岩が見える地点にまでやって来た。

どの程度まで進んでいるか、純粹に疑問であったためか、綱手たちの足取りは自然と速くなる。

岩は——在った。

大分小さくなっている。それでも、道というべきものは出来上がっていない。

しかし、綱手たちの目が向いたのは岩そのものではなく、その上で座禅を組んでいたシライトの姿だった。

——何をしているんだ？

全員が、少年の行動に首を傾げていると、不意に動きが見え始めた。徐に立ち上がるシライトは、高々と拳を掲げる。

そして、

「あひい!!?」

「ブー!?!」

振り下された拳が岩に当たれば、地面が唸っているような振動と轟音が辺りに響く。

同時に、拳を天辺に叩き込まれた岩はと言うと、悲鳴のような亀裂の入る音を奏で、ゆっくり……ゆっくりと左右へ開かれるように転がり倒れた。

道が開かれたのだ。

岩が砕き割れ、破片が花卉のように舞い散る中、少年は軽快な動きで地に足を着ける。

スツと消え入る限界の一方で、限界を超えた拳は傷が開き、ぼたぼたと血が滝のように流れ始めた。

その様に綱手は震える。

「綱手様……!」

「……治しておやり、シズネ」

「はいー!」

シライトの拳を目の当たりにし、目を手で覆い隠した綱手。

そんな綱手を心配したシズネであったが、彼女の促しにより、シライトの治療へと赴かされる。

(……まったく、ホントにやりやがったんだねえ)

目を背けた光景。

血は恐ろしい。

かつて、恋人を戦場で看取った時のトラウマがあるからだ。

だが、今この瞬間の震えは、血に対する恐怖だけではない。

『桜花衝』。……ふんっ、及第点だな」

事をやり遂げた少年を目の前にした興奮と感動。

この震えは——案外悪いものではない。

桜は、確かに舞った。

十二 繋がりの糸

「この度は誠にありがとうございました……」

『ありがとうございます!!』

中央に立つ和尚が礼をすれば、続けて左右一直線に並んでいた子供たちが一斉に頭を下げる。

どこか晴れ晴れとしている彼らの笑顔を見れば、未だ拳の骨に鈍痛が残るシライトも、やり遂げて良かったと心から思えるというものだ。

照れ隠しに頬を軽く掻き、目を泳がせる。

すると、泳ぐ視界の奥からそそくさと歩み寄ってくる影が一つ見えた。

「ちよいちよい。耳」

「……はい?」

ヒナイが、周りの者達に聞こえぬよう、そつとシライトに耳打ちする。

「(すぐには無理だろうけどよ……盗んだモンは、返せるもんはすぐ返すけど、そうじゃないヤツはちゃんと働けるようになったら、孝行して返すことに決めただぞ)」

「(それは……はい。それがいいと思います)」

「(世話んなったな)」

「(お大事に……)」

「(お互い様だろ、コラ)」

悪戯な笑みを浮かべ、再び子供たちの列に戻るヒナイ。『ヒナねえ、何話したの?』と年少に問われているのが目に見えたが、彼は『なんでもねーよ』とはぐらかしたようだ。

(……あれ?)

この時、若干の違和感を覚えた。

だが、事を成し遂げた現状に比べれば些細であると、すぐに考えることを止める。今は彼らの笑顔だけが全てだ。

大蛸輪仙人に酒を届けるという取引以外で、こうして人のために力

を使ったことは初めてである。得た力に対し、ロクに使う機会もなかったものだが、実際に助けた人々を目の前にすれば、またやりたいと思えてきた。

これが善の輪廻。人助け、そして感謝。感謝されることによって充実感を覚え、また人助けをしたくなるという輪廻がこの世の全ての人に広がれば、どれだけ素晴らしいことだろうか。

今なら、拳の傷も誇りに思える。

そう思った時、徐に綱手の手がシライトの頭を乱暴に撫でまわす。

「ちゃんと見えるかい？ おまえのお陰で、皆笑ってるじゃないか」

「……はい」

「笑顔にはちゃんと医学的効果もあってな……どんな薬にも勝る百薬の長と言ってもいい」

「……そうなんですか？」

「ああ。だが、本当に腹から笑えるようになるにも、それなりに色々と施しをしてやらにやならん。その点、おまえはしっかりと薬を処方してやれたようじゃないか」

綱手の言葉に、シライトはハツとする。

医療とは何か。

病気の人間を治療することだろうか？

怪我人の傷を癒すことだろうか？

否——どれも間違っではないが、正しくはこう言うべきだろう。

——相手を笑顔にすること。

今回、薬草を用いて薬を使った訳ではない。

だが、シライトはその血と汗で道を切り開き、結果として鼠ノ寺の者達に笑顔をもたらした。これは立派な治療を言えるハズだ。

「悪いモンじゃないだろう」

「……それはもう」

自分にも言い聞かせるような言い草の綱手に、シライトは首肯するのだった。

「さて……次はどこを目指そうか。娯楽を探すんなら湯の国がいい。温泉に浸かって、酒も飲んで、賭け事も……うん、それがいいな！」
「湯の国……ですか？ 割と距離ありますよ、綱手様」

「ふんっ、若い者がそんなんでどうする!?! 歩くのにもものぐさとなつたら、嫁入り前に取り難いセルライトが太腿に付くぞ〜?」

「あ、あひい」

綱手に太腿をタップと揺らされるシズネ。

まだ二十五のシズネだが、筋肉量は年齢に伴い減少していくだろう。にも拘わらず動くことに倦怠感を覚えていれば、あつという間に脂肪は増え、醜いセルライトがついてしまうかもしれない。

脂肪とは、欲しい場所には全然つかないくせに、欲しくない場所にはこれでもかというほどに付くものだ。

師の胸元を眺めつつ、シズネはこの世の不公平を呪う。

「そ、それはいいとして……シライトくん、大丈夫なの?」

「一応……持てないことはないです……一応」

自分の胸の平地から目を逸らしたシズネは、三人と一匹分の荷物を背に背負ったシライトに目を遣った。遠出して売りに出る行商人の如き荷物は、齢十二の少年にはいささか重荷に見える。

だが、一週間の修行の甲斐があつてか、辛うじて背負って動けることはできるようだ。

しかし、見るからにきつそうな表情。

そんなシライトを叱咤激励するかのよう、綱手は勢いよく人差し指を突き出す。

「それは師として弟子のおまえに課す修行の一つだ！ 真摯に取り組め！」

「はあ……」

(なんか……師弟関係を引き出しに、いいように扱われている気が……)

この荷物の運搬もシライトのため。

そう謳う綱手だが、背負っている当人にしてみれば、寧ろ以前よりも雑になつていような自分の扱いに首を傾げざるを得ない。

綱手たちが軽快に歩み出す一方で、そんなシライトはのっしのっしと亀のように緩やかな歩みで前へ進む。これも緻密なチャクラコントロールを扱えるようになれば、容易く事を進めていけるようになるものなのだろう。

ポジティブシンキングを心掛ける。

でなければ、これからやっていけないとシライトは確信した瞬間だった。

それなりに長い期間滞在した宿場町を出、綱手たち一行は湯の国へ向かうべく、北東に向けて歩を進めた。

忍であれば三日ほどあれば十分な距離。

しかし、彼らの旅は任務などではなく、誰に急かされる訳でもない旅だ。強いて言えば、綱手にとつての慰安旅行とでも言うべきか。兎も角、どのようなペースで進むのかは、綱手次第である。

暫し、流れる雲、風に靡く草原、漂う国の空気を楽しむ。

次なる宿場町に着くころには、すでに夕方。一日中荷物持ちだったシライトは、大岩除去ほどではないがヘトヘトになっていた。

「情けない。医者はスタミナが大事なんだぞ。患者よりも先に医者かへばつたら、目も当てられん」

「……おっしやる通りです」

「今日はもう飯を食ってさっさと寝ろ。私は、シズネと一緒にちよっつと出掛けてくるがな」

（……また賭け事に）

一日中歩いたというのにこれから賭場に行くことを匂わす綱手に、シライトは呆れのような、そのスタミナへの純粹な感嘆を覚える。

それと、何故負けると分かっているにも拘わらず、ああしてまで賭け事に興じるかに疑問が……。

「あの……」

「ん？ なんだ」

「荷物持ち以外の修行は……いつ見てくれるんでしょうか？」

「む、そうだな……だが、教えることはさほど多くもないし、大抵は座学だからな。直接見るものはほとんど無い」

「はあ……」

「しかし、どうしても言うのであれば、特別な修行をつけてやってもいい」

「え？」

特別な修行とは何だろうか。

響きは悪くない。特別と言うくらいなのだから、相応に厳しいだろうが、得られるものはそれなりに多いはず。

少し思案し、内容までは告げられていないものの首を縦に振る。

すると綱手は不敵な笑みを浮かべた。

——なんだ、この拭えぬ不安は。

その笑みに、得も言えぬ不安を覚えてしまった。悪だくみでもしているかのような笑みは、間違いなくロクでもないことを考えているに違いない。

何故か、『おまえの苦しんでる姿を酒の肴にしてやる』という幻聴が聞こえた。

「あ、あの……因みに修行の内容は……」

「さあーて！ おまえも今日は寝ておけ。明日はスパルタで行くからな」

そう言つて綱手は、結局内容は明かさぬまま夜が訪れようとする町にシズネと共に繰り出していった。

あの怪力を持つ人物のスパルタな修行。

考えるだけで総毛立つ。

「トントン……」

「ブー」

少しでも不安を拭おうと、心配そうな表情でこちらを見つめていたトントンを撫でまわす。

今日、彼は眠れぬ夜を過ごすのだった。

「にゃんー!」

自分からこのような叫び声が出るとは、人生で一度も思っていなかった。

だが、現実にて生命の危機に直面した時、声帯は意思に反して震え、肺から空気が吐き出されることで、想像してもみなかった悲鳴が隙を突いて出てくる。

「どうした!? アカデミー生の方がマシな動きが出来るぞ!」

「はあ……はあ……僕、忍者学校には通ってなかったので……」

「言い訳するな!」

「え……」

理不尽だ。この世の不条理を身に沁みて実感した。

理由と云い訳は紙一重だ。合理的な説明ができれば、相手に「理由」と受け取ってもらえると思いきや、相手の心情次第では如何なる「理由」も「言い訳」とされてしまう。

岩の除去作業で音を上げなかったシライト。彼が死に物狂いで受けている特別な修行とは、伝説の三忍の拳をひたすら避けるという修行だった。

一発一発が即死級の威力だ。無論、死なぬよう手加減されているとはいえ、喰らえば骨に罅が入ることは覚悟せねばならないほどに威力は高い。もし喰らったとすれば、『自分で治せ』と言われるのが関の山。これも、伝説の三忍から医療を習っている故の運命なのだろう。

「ほら、ドンドン行くぞー!」

「つゆ……!!」

言葉にならない悲鳴を上げ、綱手が次々に繰り出すストレートを交わす。

風を切る音ではない。空気が破裂するような音が耳元で炸裂するのは、余りにも心臓に悪い。

心臓が縮む思いをして回避を続けるシライトは、全身の神経を鋭敏化させる。

忍者学校に通っていない彼にとって、戦闘など専門外だ。ただただ、獣としての生存本能に従うがままに動く。

それではここで、何故彼が慣れない攻撃の回避などの修行を受けているのか説明しよう。

綱手曰く、

一つ、世の中は物騒であるため、護身術として覚えておいた方がいいから。

一つ、医療忍者は攻撃を受けてはならないという持論から。

一つ、賭けで負けたストレスを発散させたいから。

最後の一つに関しては、十割十分私情である。更に二つ目に関しても、シライトは医者を目指している訳であって、医療忍者を目指している訳ではない。

だが、そのことを綱手に伝えれば、『医療忍術を扱っている者なのだから、医療忍者と言っても差し支えないだろう』と一蹴された経緯がある。

納得できたのは一つ目の理由だけ。

特別な修行と言う名の、生死を懸けたサンドバック状態（直接殴られ続ける訳ではないが）に、シライトは一発一発ごとに走馬燈を見ていた。

というより、一発躲してからの次弾への間隔が早い。

三秒に一発。それを十五分間躲し続けなければならないのだ。因みに十五分である理由は、集中していられる時間が大体その程度だからとのこと。しかし、筋トレなどと同じように、追々一セットに掛ける時間・量は増やしてくらしい。これは最早、処刑宣告に近いだろう。

そのようなスパルタトレーニングを傍らで眺めるシズネは、トントンを抱きながら、どこか落ち着かない様子だ。師の一撃の重さを知っているが故に、気が気ではないのだ。

やる側も見る側にとっても、長い長い十五分。

終わった頃には、シライトの顔の血色はとてもいいとは言えないも

のとなっていた。顔面蒼白。今にも死に絶えそうな表情だ。

「ひい……ひい……ふう……」

「ラマーズ法なんかじゃ呼吸は整わんぞ」

「……わざとじゃ……ないです」

「そうか」

大蛸輪仙人直伝・波紋呼法が乱れるほどのスパルタメニューに、思わず呼吸がラマーズ法に則ったものとなってしまふ。

そんな疲労困憊のシライトに、綱手は実に満足そうな笑みを浮かべている。

散々弟子をいびり、ストレスが発散できたのだろうか。状態が状態であるため、変に勘ぐってしまうシライトだったが、ひとまずは呼吸を整えることに意識を向ける。

地面に大の字となつて寝転び、流れゆく雲に目を遣つた。

流動的な形と、背景の果てしなく広がる青空は、余裕のなかつた心に少しばかりの安らぎと落ち着きを与えてくれる。

同時に、すぐ隣で咲き誇つていた野花の香りが鼻を擽つた。

極限までに集中した後のコレ。体は、すぐに眠らんと重くなつていく。

瞼も同じだ。次第に視界がぼやけていく感覚を覚え、抵抗する間もなく暗闇が視界を支配しようとした。

その時、倒れるシライトのすぐ隣で、わざとらしく音を立てて綱手が胡坐をかく。

「まったく……そんなんでどうする」

「……だつて僕……忍者じゃないですし……」

「ふんっ。忍者なんて肩書、その気になれば誰だつて名乗れるもんさ。大事なのは、そいつが抱く『忍道』さ」

「忍道……っ」

「ああ。そいつさえしつかり貫き通せりや、職業忍者なんかじゃない……自分が思う忍者に為れるんだらうね」

抱く忍道の大切さを説く綱手は、徐に空を見上げる。

ふと見上げた空には三羽の鳥が優雅に待っていた。だが、その内の

一羽がなんの予兆もなしに、他の二羽とは全く別の方向へと向かっていく。

まとまりのあった三羽。一羽が離れた途端、小さい群れであったそれは瞬く間に瓦解し、各々全く違う方向へ飛んでいってしまふ。

「……どっかの誰かは、忍者とは『忍び堪える者』って言った」

「忍び堪える者……?」

「そして、また別の誰かは『忍術を扱う者』のことを指すって言った」

「忍術を……はあ」

「シライト。おまえにとつての忍者ってなんだい?」

「僕にとつての……ですか?」

「ああ。忍を指摘しているかなんて問題じゃない。ただ……ああ、なんとなく聞いてみただけさ」

綱手の声はどことなく暗い。

彼女が考えなど、シライトにとつては知る由もないことだが、このまま黙っているのも忍びない。

じっくり思索し、自分なりの考えをまとめた。

「………受け売りですけどいいですか?」

「たっぷり間を使ったな。まあ、いいだろう」

「僕にとつての忍者は……『忍びざる心を持つ者』です」

「忍びざる心だと?」

「はい。困った人が居たら見過ごさない……仮に僕を忍者と呼ぶ人が居るなら——」

見上げた空に浮かぶ隙間から、燦々と輝く太陽が覗く。

そんな太陽に負けない笑みを浮かべ、シライトは言葉を紡ぐ。

「……そういう者で在りたいと……思っています」

「……そうか」

弟子の答えに満足したのか、綱手はスツと立ち上がる。

「さてと。休憩も十分した頃だろう。続きやるぞ、続き!」

「……!」

「ほら、そんな顔したって無駄だ! 立て、立つんだシライト!」

「はい……」

綱手に急かされ立ち上がるシライト。

これから辛い修行が始まると思うと憂鬱だが、決して無価値な時間にはならないはず。何故ならば、その時間に価値をつけるのは自分自身なのだから。

これから何年続くかも分からない三忍の下での修行。

辛く苦しい生活が始まるかもしれないが、本当に「力」が必要となったその時、彼はこの時間の大切さを確かに感じるだろう。

綱手とシライトの間で繋がった糸は、どこかの誰かの命を繋ぐ糸となる。

そう、この世は結局繋がっているのだから。

滝隠れ秘伝 — 遊戯編 —

息を潜める。奴に気づかれぬように。

忍び足で近寄る。奴を捕らえられるように。

緊迫した状況の中、彼らは対象である物を見逃さぬよう、じつと奴を見つめていた。

だが、ふとした瞬間に誰かが枝を踏み、音を立ててしまう。これに伴い、奴はこちら側の存在に気づき、その場から逃げようと走り出す。

不味い。焦燥に駆られた三人の内、一人が全力で駆け出した。

奴との距離はドンドン縮まっていく。もう少し、もう少しだ。

手を伸ばし、奴を捕らえんと飛び込む。

——捕らえた。

奴の体を確りと両手で掴んで見せた。

しかし、その所為で受け身を取る為の手が塞がってしまう。せめてもの衝撃吸収のため、柔道よろしく肩から転がり、数回ゴロゴロと落ち葉や枝が散らばっている地面の上で止まる。

「フシャー！」

「つつかつまえたアー!!」

毛を逆立てて威嚇する猫を掲げる金髪の少女は、任務の達成を声高々に叫ぶのだった。

滝隠れの里は、かつて優秀な上忍を何人も輩出したことにより、忍び五大国以外で唯一尾獣を割り振られたという歴史がある。

だが、若い世代のほとんどはそのような歴史など——そもそも尾獣という存在さえ知らず、自分たちの故郷を小国らしい小さな隠れ里だと認識していた。

三度に渡る忍界大戦。滝隠れは地理上、火の国と土の国に挟まれているため、雨隠れや草隠れ同様に、土の国の火の国侵攻のために国土を踏みにじられることも少なくなかった。それでも、里に伝わる秘宝

である。『英雄の水』を用い、その一時の爆発的な力を見せることにより、辛うじて里を守っていたという経緯もある。

だが、近年になって英雄の水は、使用すると寿命が縮むという副作用が改めて危険視され、使用することが固く禁じられた。

故に、今の滝隠れはかつてほどの力は有していない。

尾獣という強大なアドバンテージがあれど、結局は忍一人一人が高いことに越したことはないのが、忍者の世界というものである。

そんな滝隠れだが、今年も新しい下忍が誕生した。

今回は、滝にて生まれたひよつこたちの激闘の物語。

「フクロダ先生エー！ もっと忍者らしい任務ないんですかー!?!」

「クン……君という子は顔を合わせたらすぐそれですね」

「ややや、やめろよクン。先生怒っちゃうかもしれないぞ?」

「トッチは男なのに、そんなナヨナヨしないでよね!?!」

滝隠れの里にて、様々な任務が集う受付所。

そこで今、一つの班が今日の任務を受ける為に集まっていた。

班の長——所謂、担当上忍である眼鏡の男性・フクロダは、ピーピー騒ぐ金髪の少女・クンに対し、やれやれと言わんばかりに首を振っている。

一方、上司に対して物申すチームメイトを窘める茶髪の少年・トッチは、フクロダの堪忍袋の緒が切れないかと不安になっていた。

クンとトッチは、今年になって下忍になれた新米だ。

滝隠れの忍者塾——誰もが憧れる忍者という職業に就く為の登竜門である施設を卒業し、漸く下忍になれた彼ら。

どんな任務が待ち受けているのかと期待に胸を膨らませていた二人であったが、待ち受けていたのは任務とは名ばかりの雑用ばかり。トッチは『これも任務』と割り切っているが、クンは違った。

現実と理想のはく離に失望し、『忍らしい任務を受けたい』と毎日騒ぐ始末だ。

長い金髪を、銀杏の葉を模した櫛でまとめているクンは、今日もまた上司に物怖じすることなく騒いでいる。

いくら彼女が忍者とは言え、まだ年齢は十二。子供なのだ。

大人らしくガツンと叱るのも一つの手だが、フクロダの場合は、『そこまで言うのであれば……』といった様子で一つの案を用意して来た。

「なら……今日はいつものDランクの任務ではなく、里長より直々に預かってきたCランクの任務をやりましょう」

「里長より!? 直々に!?」

「ええ。場合によっては、Bランクになるとも言付かっています」

「Bイーっ!? やるやるー!! やりま〜〜すッ!!」

心撥られる単語の羅列に、目を燦々と輝かせて任務を受ける意気を見せるクン。

一方トツチはと言うと、『Bランク』という単語に慄いていた。それもそのはず、Bランクとは中忍以上が受けるのが望ましい難易度であり、場合によっては忍との戦いさえも予想される、命の危険が懸かるかもしれないのだ。子供の彼にとって、死が怖くないはずがない。

「ほほっ、本当に大丈夫なんですか、先生……?」

「ん〜……まあ、そんなに強張らなくても大丈夫ですよ。里内で済む任務ですので」

「?」

若干苦笑いで告げるフクロダに、二人はどういう意味であるのか?

と言わんばかりに首を傾げる。

だが、折角のCランク任務。受けない理由もなく、クンは快くフクロダの提案に乗り、トツチも流されるがままに受ける羽目になるのだった。

そして、向かった先は――。

何故だ。何故こんなことになった。

マスが描かれた盤上を前に正座するクンは、ただひたすらにそのよ
うな思考を繰り返していた。

任務とは思えないほどに麗らかな木漏れ日が差す居間。時折部屋
を吹き抜ける風の心地よさ、そして畳の香りにより、気を抜けば微睡
みが襲い掛かって来そうだ。

だが、クンの心境を支配するのはそのようなものではない。

理解し難い現状、それらに対する疑問、苛立ち、退屈——数多く
が複雑に絡み合い、形容し難い感情が燻っていた。

そんなクンの気も知らず、隣でニコニコ微笑んでいるフクロダ。
直訴しようとして口を開こうとした瞬間、目の前でコロコロと賽は投げ
られた。

「お！ あがりつす！ あつしが一番ノリ〜！」

サイコロの出た目の分だけ、盤上のコマを進ませる人物。

ちょうどゴールに到着してあがり宣言する彼女は、実に楽しそう
に笑顔を咲かせ、座っているクン、トツチ、フクロダの三人に目を向
けてきた。

トツチとフクロダは、あがった少女へ称賛を含んだ言葉や拍手を送
るも、そもそもこの現状に納得していない——あと、単純に負けた
ことにも同上——クンは、眉を顰めて歯軋りをする。

（これがCランクってどういう意味!? ただ、同年代の子と双六する
だけなんて!）

クンは、黄緑色の髪の少女——フウを見遣りながら、依然として
抗議の視線を担当上忍に向けていた。

「次はトランプしたいつす！ 大富豪でいいつすか？」

「ええ、構いませんよ」

「オ、オレもそれでいいよ」

トランプの束を掲げ、大富豪をしたいと豪語するフウに、フクロダ
とトツチは同意の旨を示す。クンだけは答えを有耶無耶にするが、

『いいっすね?』と半ば強引に事を進めるフウに、クンも強制的に大富豪に参加させられることとなった。

——今回のCランク任務。その内容は、どこの馬の骨かもわからぬ少女・フウの面倒を見ることだ。

強いて言えば、護衛任務に分類されるのだろうか。

だが、実情としてはDランクの子どものお守りとなんら変わりがない。一体これのどこがCランクで、場合によってはBランクに変動すると言うのだろうか? クンは現在進行形で、担当上忍と里長に抗議しようと考えていた。

思っていた内容との齟齬。それも苛立ちの原因ではあるが、もう一つ苛立つポイントがあった。

目の前の少女はよく笑う。よく喋る。そして、物事を目出度い方向で解釈してる節がある。

先程の双六で例を挙げれば、フウがあがった際に不機嫌だったクンを見て彼女は、『負けちゃって悔しいっすか? 大丈夫っすよ、次は勝てるかもっすから!』と、若干クンが楽しんでいることを前提にしている物言いに聞こえたのだ。

(全然楽しくないっての……!)

不機嫌な時、人間は何事もネガティブな方へ思考が動いてしまう。クンは現在、まさにそのような状態だった。

むくれたまま、フウがテキパキと配るカードを受け取り、ざっとカードを一瞥する。

——悪くはない。十分勝てる。

楽しんではいない。

楽しんではいないのだが、だからといって負けるのは嫌だ。

気乗りせぬものの、どうすれば勝てるか戦略を練るクン。誰から始めるか決めるジャンケンも済ませ、四人による大富豪が始まった。

着実に減っていく手札。

時にはパスも織り交ぜ、互いの腹を探り合うような雰囲気の中、勝負は着々と進んでいく。

(ふん! 今に見てなさい……強い手札をドローンと出して、みんな

ぎやふんと言わせてやるんだから！)

クンの作戦、それは強い手札を最後まで残し、後半になって一気に攻勢に出るといふものだ。相手になにもさせず、一瞬の間に勝利をつかみ取る。その爽快感たるや、現状の苛立ちを清々させてくれるものに違いない。

そろそろか。

静かにその時を待つクンは、次であったフウに順番を回す。

「8切りっす！」

「へ？」

ここぞとばかりに8を出すフウ。

それに伴い、場は流れ、親がフウとなる。

「5飛ばしっす！」

「ちよっ」

親のフウが続けざまに出したのは、5三枚だ。三人しかいないこの場では、否応なしに順番がそのままフウに回る事となる。

不味い、これはもう決めにかかっているのではないか？

嫌な汗が頬を伝う。

次にフウが出す手札を、これでもかというほどに凝視する。

そして、彼女が出したのは残り三枚の手札全て――、

「ナナサン革命っす！」

「嘘オっ!？」

Revolution
革命だ。

滝隠れローカルールの一つ、7を三枚出すことによって発動する特殊な革命『ナナサン革命』により、数字の強さが逆転してしまった。これでは折角とっておいた強かったカードが、ただの足かせとなってしまうではないか。

『あつがつり〜！』とはしやぐフウの横でまたもや敗北を喫したも同然のクンは、般若のような形相でギリギリと歯軋りする。

「またあつしの勝ちっすね！」

「あらら、強いですね〜」

「ク、クン……そんな怖い顔するなよお」

「ま……まだよ……まだ勝負はこれからだから！」

一人闘争心を燃やすクン。

だがしかし、結果は惨敗だったことをここに記しておこう。

「次は鬼ごっこしたいっすー！」

クンが惨敗した大富豪の次は、外に出たのアクティヴな遊戯である鬼ごっこだ。

『この歳にもなって鬼ごっこ……』という雰囲気隠せない面々であるが、実に楽しそうにしているフウを目の前に、わざわざ口にする者はいない。

そもそも、今回の任務は彼女の面倒を看ること。

任務の対象を満足させることも、また忍の仕事だ。

二度の苦渋を味わされたクンは、深呼吸して心を落ち着かせる。鬼ごっこは思いつきり体を動かすことのできる遊びだ。室内遊戯よりも、溜まった鬱憤を晴らすには適していると言える。

(見てなさい……！……！ 今度こそアタシが……！)

闘争心を煽らせるクン。

最早、任務がどうこうなど関係ない。ただ勝利を掴みたい。今の彼女の頭にあるのはそれだけになってしまった。顧客満足などクソ喰らえだ。

「じゃあ、分かりやすくするために、鬼は額当てを付けましょうか」

「はい！ じゃあ、あつしが最初に鬼やりたいっす！」

「え？」

フクロダの提案に乗り、即座に額当てを取り出し、器用に頭部に巻き付けるフウ。

その姿にクンは驚愕した。

——忍だったの？

思わぬ事実だ。

今迄散々遊んでいたこの目出度い少女が忍だったとは。目を丸く

してフウを見つめるクンであったが、フウは早く始めたいと言わんばかりにそわそわしている。

「術の使用は有りで！　じゃあ、散ってから十秒数えて始めるっす！

じゃあ……散！　いーち……にーい」

「ちよちよちよ……ええい！」

散開の号令を受け、その場から消え去る面々。上忍のフクロダは尤も、トツチも少し遅れて散る。

クンも少しばかり遅れてであったが、その場から飛び去った。

四人が鬼ごっこしに来た場所は、忍者塾でも使用されることのある無数の木が鬱蒼と生い茂る林だ。地上は勿論、恐らしく木々の枝を飛び移って軽快な動きをすることも可能である。

逆に言えば、忍ではない者にとつては逃げ辛い、且つ追いかける辛い場所であることこの上ない。

しかし、フウが忍であるなら話は別だ。

「じゅーう！　さてと……じゃあまず、感知の術！」

瞬時に印を結んで術を発動するフウは、その術名の通り周囲の感知に努める。

忍が相手であれば、十秒もあれば遠くまで逃げられてしまうものだ。されど、相手の位置を把握できたならば話は別だ。

自身の気配を消し、通るであろうルートを先回りすることで、逃げる相手に追いつくことができる。

「むいふっ、そっちっすね……」

チロリと悪戯つ子のような舌なめずりをするフウは、最も近い標的の下へ、つむじ風の如く向かっていく。ついさつきまで彼女が立っていた場所では、僅かばかりの砂埃が巻き起こる。

木漏れ日が眩しい木々の下を颯爽と駆けるフウ。

数十秒ほど忍者走りで駆け抜ければ、ピョンピョン枝を飛び回るクンを視界に捉えることができた。

しめしめ。フウは印を素早く結び、口からチカチカ光を反射する鱗粉を吐く。

それからわざとらしく大声を上げる。

「見—つけたつす!」

「げっ、速——」

「秘伝・鱗粉りんぷんがく隠れの術!!」

「え……眩しっ!!?」

声に反応し振り向くクンであったが、それは悪手であった。

図ったようにフウが両手を合わせれば、舞い散っていた鱗粉が鮮烈な閃光を放ち、辺りを光一色に染め上げる。

完全に想定外であった攻撃に、まともに閃光を直視してしまったクンは目をやられ、飛び移ろうとしていた枝への着地もままならなくなり、足を滑らせてしまう。

これはイケない。

少しばかりやり過ぎたかと反省するフウは、すかさず腰から一對の翹を生やし、忍ならざる移動方法でクンの真下へ滑り込み、地面に激突するよりも前に彼女をキヤッチした。

「目が……目があ……!!」

「えへへっ、ごめんつす。タッチつす」

「く、くっそう……絶対タッチし返してやるから……!」

「あ、意外に大丈夫な感じっすか? なら、今から十秒数えてから追ってきてね!」

「覚悟しなさい……!」

「ちよっと怖いっす!? くわばらくわばら!」

憤怒のオーラを隠さぬクンに恐れを為し、フウはそそくさとその場を後にする。

そして次第に視力が戻り、フウが去ってから十秒経ったのを見計らい、スツと立ち上がった。

——許すまじ……!」

何度も屈辱を味わう嵌めになったクンの怒りは頂点に達していた。断崖にそびえ立つという土地柄故、滝忍の下忍でも習得しているチャクラの反発と吸着を用い、逃げるフウとの距離を一気に詰めていくクン。

げっ、と声を上げるフウにほくそ笑むクンは、牽制のための術を発

動するべく印を結んだ。

「水遁・水手裏剣！」

手裏剣の形をした水が数枚、前を走る少女の周りへ向かって飛来していく。

これで逃げることのできるルートは絞られる。となれば、後は加速するだけで追いつけるだろう。

そのような考えを以ての攻撃であったが、不意にフウは身を翻し、水手裏剣に対抗するべく異なる印を結ぶ。

「風遁・突破！」

「え……嘘おん!？」

水で形成されていた手裏剣を霧散させ、尚且つ追っていたクンの体も吹き飛ばす暴風が一陣、林の中を吹き抜けた。

体勢を崩し、無様な恰好で地面に落ちるクン。

してやられた彼女は、最早戦意喪失気味だ。こうしている間にもフウはさっさと逃げ去り、この場にはクンしか居なくなった。

「……なんなのあの子、もお……」

「Bランクになる場合も言った意味、分かりましたか？」

「フクロダ先生エ……」

ひらりと一枚木葉が舞い落ちたかと思えば、担当上忍のフクロダが、情けない恰好で転がっているクンを見下ろすように枝の上から語りかけてきた。

「どんな任務でも真摯に取り組むべし。今日はいいい教訓になりましたね」

「……Dランクの任務なんかより、よっぽどキツイ任務じゃないですかあ」

「そりやあCランクですし」

「……くう……」

「ほら、まだ任務は続行ですよ。相手が満足するように頑張らないと」「こなくそオ——!! こうなったら、絶対絶対絶対絶対! ぎゃふんと言わせてやるんだからあ——!!」

煽りにも捉えることのできるフクロダの言葉に、再びクンは立ち上

がる。

彼女の雄叫びは林を突き抜け、里中に轟く程のものであったが、実際にぎゃふんと言わせられたか当人たちのみぞ知る事だ。

しかし、一つだけ言えることがある。

フウに新たな友達が出来たということだ。

第三章 波と雪

十三、性欲と医者スイツチの因果関係

古人曰く、忍術に陽忍と陰忍あり。

陽忍。それすなわち情報戦において、敵の意図を探り出すこと。対人諜報などがこれにあたる。

一方陰忍。それすなわち敵地への潜入及び破壊を行うことで、敵の情報を得て、こちらの意図通りの結果を導くことだ。

今、一人の人間が行っていることは後者。

闇に潜み、足音を立てぬように廊下を駆け抜ける。月明りだけが光源の中、彼は全神経をとがらせて目的地へと赴こうとしていた。

急がねばならない。されど、急ぎ過ぎれば敵に感づかれる。

そのようなジレンマの中、自身の為すべきことを済まさんと足を動かす彼は、一秒一秒がとても長く感じられる時間の中、漸く目的地であつた部屋にたどり着いた。

(……鍵がかかつてやがんな、コラ)

物音を立てぬよう、細心の注意を払ってドアノブを捻ってみても、掌に引つかかりの感覚を覚え、一旦ドアノブから手を離す。

そして、すかさず印を結んだ。

「……口寄せの術」

小さな煙と同時に現れたのは、小さなネズミだ。

口寄せ獣が現れたのを見計らつた彼は、端的なジェスチャーで扉の向こうへ潜り込み、鍵を開けるよう伝える。

するとネズミは、その小さな体を生かし、扉の下の僅かな隙間を通つた。

数秒後、静寂の中に響く鍵が開かれた音。

即座にドアノブに手を掛ければ、先程まであつた抵抗感はどこへやら。扉は彼の意思のままに開く。

中に誰も居ないことは既に分かっている。

偵察のネズミたちが、事前に知らせてくれていたからだ。ここまで

誰にも見つかることなく来れたのも、口寄せ獣であるネズミの偵察があつてこそ。ネズミ様様である。

それは兎も角、目的地に潜入することが叶った彼は、求めるものを探すべく物色を開始した。

絢爛な内装の部屋に嫌悪感を覚えつつ、ディスクや置かれていた書類をガサゴソと漁る。

夜目はきいている方だと自負しているとはいえ、探している物の内容が内容である為、搜索は困難を極めた。

(はあ………こういうの苦手なんだよなあ。汚職の証拠つて、どーゆーモンなんだ……?)

ここまで来て、自分の計画のなさを呪う。

もう少し、求めている物がどういった場所に存在するのか考えておけばよかった。だが、すでに後の祭りだ。

収穫の有りや無しを問わず、次に来れば警備は更に嚴重なものとなるハズ。となれば、次回以降の潜入は更なる困難を極めることだろう。

故に、この一度を大切に有効活用せねばならなかった。

ならなかったのだが――、

「っ！」

殺気。

只ならぬ殺気を覚えた彼は、反射的のその場から離れる。

次の瞬間には、先程まで自分が居た場所には大鎌が振るわれ、手放した書類は真つ二つに裂かれていた。もし離れていなければ、自分の運命はあの書類と同じだったのだろう。

「チツ。ガトーの犬かよ、コラ」

「………こそそ嗅ぎまわるネズミが一匹」

暗闇故、襲撃者の姿ははつきりしない。

だが、華奢で小さな体躯から大人の男性であるという線は消えた。そして声だ。小鳥の囁りのような細かい声は、間違いなく襲撃者が女性――それも少女と言つて間違いない歳であることを示していた。

「ネズミだあ？ はんっ、バレちゃ仕方がねえ！ 耳かっぽじつて、よ

おく聞きやがれ！」

「…………？」

「貧窮の者ありや東へ西へ！ 黒死病ペストの代わりに幸せ振り撒く、通称・

鼠小僧と見知りお——！！」

「沸遁ふっடன்・巧霧こうむの術…………！」

「のわっ、てめえ！ 人の見得切りの途中で！」

隠密活動などほっぽりだし、何故か見得を切ろうとした彼であったが、途中、襲撃者の口から吐かれた霧によって妨げられてしまう。

即座に退いて躲すも、着ていた黒づくめの装束の一部が溶ける。

（沸遁…………？ 血継限界ってやつか）

聞いたこともない術に、見たこともない術の効力。

それが深い血の繋がりにより、子々孫々に伝えられる “血継限界” の術であることを確信した彼の頬に冷や汗が伝う。

閉めた扉の先からは複数の足音。

敵の援軍が来るのも、そう時間はかからないだろう。

「しっ—」

「チツ…………！」

しかも、襲撃者は大鎌を振り回し、すぐにでも自分を殺さんとしているのではないか。

潜入にあたって、得意としている獲物は置いてきてしまっている。あるのは、少々心もとないドスが一つだけ。長物である大鎌相手には、自身の力量もあって相手するのは悪手だ。

数秒の剣戟。

幾度か火花を散らした彼は、その時を見計らう。

三枚刃の鎌相手に、少しばかり皮膚を切り裂かれるも、虎視眈々と…………。

大きな音が響く。増援が扉を蹴り破った音だ。

刹那、彼はにやりと一笑し、左手で指笛を吹く。すると、あらゆる隙間という隙間から、総毛立つほどの数のネズミが湧きだし、この場に居る全員を呑み込んでいく。

「な、なんだ!? いでっ、噛まれた！」

「くそ野郎！ ひいいい!？」

「ね、ねずみだけは……!？」

「はっはっは！ ザマアねえぜ、コラ！ そんなじゃ、オレあお暇させてもらうぜ！ あばよっ!!」

景気よく別れの言葉を告げた彼は、派手にガラスを破って外へ飛び出す。

舞い散る硝子。同時に、大鎌を持っていた襲撃者は、自身にたかっていたネズミを振り払い、逃げ去った者を追うように割れたガラス窓から身を乗り出す。

かなりの高所だ。高層ビルの、それこそ屋上に近い階層から飛び降りたとなれば、常人は只で済むハズがない。加えてこの窓の先は断崖と、荒れ狂う海が広がっている。

真夜中であることも相まって、現在地から無傷で逃げだすことは不可能に近い。

「……鼠小僧」

轟々とうねる波と、月光を引き込もうと荒れる渦潮を見下ろしながら、襲撃者は先程の人物の姿を脳裏に過らせるのであった。

「はあ……はあ……ははっ、してやったぜ。こちとらっ……はあ……体力にや自信があんだよ、コラ！」

水浸しになりながら浜に這い上がる彼。

人相を覚えられぬよう被っていた頭巾を脱ぎ捨て、血のように紅い髪の毛を露わにする彼——否、彼女。

潮水滴る彼女の紅いまつ毛は、言うなれば雨水滴る彼岸花の花弁のようだ。

遠くでは、灯台のように光が瞬いているが、それは船を導く光などではなく、波に囲まれた国を脅かす男の会社の一つが放つ光だ。決して船乗りを助けるものではない。

水に濡れて重くなった衣服を恥じらうことなく脱ぎ捨て、動きやす

い姿になる。

だが、体力の有無ではない……他の何かが原因である疲労感が、体にずしりと押し掛かった。

(……毒……か?)

ふと、襲撃者につけられた傷を思い返す。

あの鎌の形状は、相手に傷をつけやすくするため、わざわざ刃の数が多かったものだったのだろう。言い換えれば、少しでも傷を与えられれば相手に致命傷を与えられる細工が施されていると考えるべきだ。

第一に浮かんだ考えは「毒」。古典的だが、単純故に効果的。

(くそ……意識が……)

抵抗やむなく、彼女の意識は暗闇に落ちる。

「本当に……なんとお礼を申し上げれば……！」

「……いえ……医者として、当然のことをしたまです」

とある火の国の漁村。

こう言っではなんだが、みすぼらしい姿をした者達が深々と頭を下げていた。豊かそうには見えぬ恰好。しかし、顔は活力に満ち溢れている。

そして、彼らに活力を齎した者は無表情で佇んでいた。

髪を後頭部へ流すように嵌められた白いヘアバンド。

『賭』の文字が刻まれた深緑色の羽織。

その下には、少々くたびれてはいるものの、清潔な白色が保たれている衣服が覗いている。

「先生……なにか、なにかお礼を」

「……大丈夫ですので……お気持ちだけ」

必死に礼を渡そうとしてくる者達をぬらりと躲すのは、他でもない。

たきのシライト。現在15歳。綱手の下に弟子入りして、もう三年

が経とうとしていた。

しかし、今この場には師である綱手どころか、付き人のシズネ、そしてペットのトントンすら居ない。

その理由は半年前まで戻る。

ここ波の国近くの漁村は、かつては栄えていた。

シライトを含めた綱手一行は、旨いと評判の海鮮丼を食べるべくやって来たのだが、いざ到着してみれば、広がっていたのは寂れた街並みに、憔悴し切った人々。

聞くところによれば、一行が訪れる半年前よりとある海運会社の手により、満身に漁が出来なくなるよう制限されたと言うではないか。魚を売って生活費を稼ぐ漁村にしてみれば、それは死活問題。

なんとか漁以外でやりくりしようとも、そう簡単に行くはずもなく、若い女性の中には身売りする者も少なくなかった。

そして、身売りする女性の中で梅毒を始めとした性病を罹患する者が現れ、徐々にその病が漁村に広がってしまったのである。

性病も立派な病。罹患して長期間経てば、命に係わるものも少なくない。

そこでシライトは、二年半学んだ技術や知識を生かすべく、漁村全体に蔓延する病を根絶しようとして立ち上がったのである。

梅毒ならば、治療完了には二か月から半年ほど要するものだ。

治療法自体は確立されているため、シライトでもさほど治療に苦勞するほどのものではなかったが、如何せん罹患している者が多い。

病には潜伏期間もある。罹っていないと思いきや、実は……などという事例もざらだ。

とどのつまり、長期間の治療期間が必要だった。

留まるシライトは兎も角として、綱手は『お前ならやれる』と太鼓判を押し、『急を要する事態になれば呼べ』と逆口寄せ用の血を託して、漁村から去っていった。

彼女のことを薄情と捉える者も居るかもしれないが、全てはシライトのスキルアップのため。そしてなにより、この漁村を自分に任せて他の場へ赴くよう促したのはシライトだ。

結果、半年もかかってしまったが、治療は完了した。

これで晴れて、胸を張って綱手の下へ戻れるというものだ。

(綱手様……今頃、賭け事でもしてるのかなあ)

以前、師から贈り物として渡された『賭』が刻まれた羽織を指でなぞり、師たちの顔を思い浮かべるシライト。

『礼をしたい』と訴える村民の願いをやんわりと断りつつ、村を後にしようとする。

だが、

「先生、大変だ！ 浜に人が倒れてたべ！」

「？ ……わかりました、案内してください」

不意に、人混みの奥から声を上げる男性。

訛りの利いた声で怪我人が居るような旨を告げる彼に、シライトは即座に駆け出す。

『先生』コールに対して気恥ずかしい気持ちになりながら、颯爽と人が倒れている場所まで辿り着く。

確かに怪我人が居た。

浜にへばりつく真つ赤な乱れ髪は、珊瑚のように見えなくもない。

こんな髪色もあるのだなあと呑気なことを考えつつ、倒れている者の脈を図る。

弱い。これは非常にまずいと、シライトの顔は無表情から一変、険しいものへと変貌した。

「すみません、近くの家に案内してもらってもよろしいですか……？」

「勿論だべ！ 先生の頼みとありやあ！」

「ありがとうございます……」

倒れていた者を抱え、案内される家へ駆ける。

運んでいる間も、弱っている者を掌仙術での回復を試みた。すると、僅かに腕に伝わる鼓動が強まる。

次第に強まる心拍と同時に、青ざめていた顔にも色が戻っていく。

(これなら……)

思っていたよりも軽度の状態に——否、怪我人の生命力に驚きつつ、案内された家に怪我人を寝かせ、詳細な状態を把握するために只

でさえ軽装であった衣服を、チャクラ解剖刀で切り開く。

露わになる上半身。同時に、それまで顕著でなかった胸元の白皙の双丘が目につき、集まっていた野次馬の男性陣は頬を赤らめ、女性陣がそんな邪な考えを持った男共を追い払う。

シライトは、元々睡眠欲・物欲・性欲の三大欲求の内、性欲はそれほど(というよりまったく)ない方だが、それに加えて只今医者スイツチが入っている為、女体を目の前にしても一切反応することはない。変わらぬ表情のまま、白皙の体を一瞥する。

目についたのは、二の腕辺りについた切り傷だ。そのあたりだけ血色が異様に悪い。

(毒……か)

チャクラを集中させた掌を当て、体内のチャクラの乱れを看破する。

それに伴い、現在この少女の体に害をなしているものが毒であることを理解し、すぐさま細患抽出の術により、毒素の抽出と傷口の回復を図る。

治療が始まってからどれだけの時間が経っただろうか？

固唾を飲む緊迫感の中、汗が滴る程に集中し、治療に没頭するシライト。

数分か、はたまた数時間か。時が経つのも忘れる治療だったが、不意にやり切った顔で息を吐いたシライトの様子に、集まっていた者達の間、安堵の空気が広がる。

終わるや否や、自身の羽織を少女の上半身を隠すように被せたシライトは、一拍呼吸を置いてから、

「一命は……取り留めました」

ワツと湧き上がる歓声に、野次馬よろしく屋根の上に集まっていたカモメは驚き、どこかへ飛び立っていった。

「ん……んん……」

凄まじい倦怠感を覚えつつ、彼女は起き上がった。記憶も曖昧な中、今自分がどこに居るのかを把握しようと、朦朧としたまま目だけを動かして辺りを見渡す。

天国にしては味気のない木造の家。どうやら、死んだ訳ではなさそうだ。

身体に奔る痛みや疲労感が、己が生きていることをひしひしと教えてくれる。

「あ……起きましたか？」

「んあ？」

不意に聞こえる若年の男性の声。

徐に声の方へ振り返れば、乳鉢と乳棒を手に持った見たことがあるような少年が、自分の方にやって来るではないか。

ゴリゴリと乳鉢で何かを擦っている。乾燥した薬草でも粉碎しているのだろうか？

「てめえ……どっかで見たことある顔だな、コラ？」

「え」

「確か……しらたき！」

「……混ぜってますね、苗字と名前が」

「あ？」

「……たきのシライトです」

「あく、そうだったな！ 寺じゃ世話んなったな」

「……そういう貴方はまさか……ヒナイさんで？」

「ん？ おうよ」

「(女の子だったんだ……)」

「なんか言ったか？」

「……いいえ」

「そうか」

起きてから休むことなく口を動かす少女。彼女は、二年半前に鼠ノ寺で見知ったヒナイだった。

あの時見知った少年僧が、まさか少女だったとは。

それも驚きだが、二年も経てばこのように女性らしい顔つきや体つ

きになるものなのだ、人体の神秘についても少々驚嘆する。しかし、口調は相変わらず男言葉のようだ。

思わぬ再会である。

しかし、看病するシライトにとって質問したいことは山ほどだ。

「……少し、お話よろしいですか？」

「おうよ。なんだ？」

「……僕は、数か月前から病気の治療でこの漁村に留まっていた。そんな場所の浜辺にヒナイさんが倒れていた訳ですが……差し支えなければ、経緯をば」

「なんだ、そんなことか……あゝ あ!!」

「っ!？」

突如として大声を上げるヒナイに、シライトは手に持っていた乳鉢と中身が零れそうになるほどびくついてしまう。

そんなシライトを余所に、ヒナイは自身の体のあちこちをまさぐる。

何かを探しているような様子だ。

暫し、ヒナイ自身による体の探りは続き、最終的に股——下着の中に手を突っ込んだところで目的の物が見つかったのか、『おっ!』と声を上がった。

「あつたあつた」

「……なんですか、それ？」

「これか？ こりゃあ、ガトーンとこからパクったモンが入ってたよ」

ヒナイが掲げるのは、一枚の紙だ。

何の変哲もない紙に見えなくもないが、よく見れば紙に術式のよな文字が羅列している。

起爆札には見えない。

となれば、口寄せの類の術式が書かれているものだとしライトは推測した。

だが、彼が気になったのはそこではない。

「パクったって……まさか……また、その……泥棒を……」

「おいおいおい、勘違いすんなよ。確かに盗みやしたがよ、そんじよこれらのコソ泥とオレを同じにしてくれるなよ。オレあ、今は義賊だ。掲げてる大義があるんだよ」

病み上がりにも拘わらず、堂々とした佇まいを崩さぬヒナイ。

右膝を開き、左膝を立てている彼女の座り方は、うっかりすれば下着が見えてしまいそうなほどに危うい。

下心のある男であれば、思わず食いついて見入ってしまったいような光景だ。しかし、幸いシライトにパンチラを拝みたいという願望はなかった為、視線は彼女の掲げる紙にだけ注がれている。

「……大儀とは？」

「……今、波の国とその周辺の村は貧窮してやがる。その理由は、海運会社ガトーカンパニーが、波の国の海上交通・運搬を牛耳ったからだ」
「がとーかんぱにー」

「はんつ、表じゃ堅気の会社やってる風に見せかけて、裏じゃ麻薬の密売やらなんやら、あくどい商売してる会社のことさ。そんな会社が今、波の国全てを牛耳ろうと暗躍してやがる」

「はあ……」

「ガトーの所為で、波の国あ貧しいことこの上ねえ生活送ってる。一刻も早く、ガトーの悪事を暴かなきゃいけねえって訳だ」

「ほお……」

「そこで、オレが会社に潜入して悪事の証拠盗んでこようとしたって訳さー」

「……なるほど」

大体の事情はシライトにも理解できた。

同時に、この漁村が貧困に瀕している理由も解る。ここは波の国が近く、波の国との交流も盛んであった地域だ。

もし、ヒナイの説明通りにガトーという輩が波の国を牛耳ろうとしているのであれば、交流のある地域にも手を加え、完全に波の国を孤立させようとしてもおかしくないはず。

神妙な面持ちでシライトが佇む中、ヒナイは『よつこらしよ』と勢いよく立ち上がる。

「さて……オレあ、手に入れたモンから収穫がねえか調べる。だが、一回盗みに入った手前、ガトーがオレのこと探してねえとも限らねえ。オレあさっさとこっからお暇させてもらおうよ。助かったぜ、しらたき」

「シライトです」

「んお？ ああ、悪イ悪イ」

謝ってはいるものの悪びれる様子がないヒナイに、シライトは深いため息を吐く。

その間にも立ち去ろうとするヒナイ。言葉通り、彼女はこの漁村から早々に立ち去るのであろう。

しかし、今のシライトにとって、彼女は看過できぬ存在だった。

「待ってください……」

「なんだあ？ 止められても、オレは行くぜ」

「そうじゃありません」

「……？」

シライトの物言いに、ヒナイは訝し気に眉を顰める。

一方、止めるつもりではないと謳うシライトは、畳んであった羽織を広げ、その袖に腕を通した。

背中『賭』の文字が、蠟燭の淡い火影に照らされる。

「……貧困も立派な病。医者としてお国の病を治療しに、僕も一肌脱ぎましょう」

——自分も共に行く。

「……はっ！ お人好しなのは変わらねえな」

暗に示すシライトに、ヒナイも思わずフツと笑みが零れる。

この二年半、シライトが綱手より教えられたものは三つだ。

一つ、師の身の周りの世話をする家事力。

一つ、卓越した医療技術。

一つ、弱い者が苦しんでいるのを見逃さぬ男気——忍びざる心だ。

濃霧の中、鬼と白雪舞い踊る波の物語。

これより開幕。

十四。 だつて卵好きなんだもん

波の国。そこは水の国にほど近い島国であり、大名さえも金を持たない貧しい国と言われている。

加えて、ガトーの手引きによりただでさえ貧しかった国は、加速度的に貧窮し、国全体から活力というものが失われていた。

一つの大企業による国の乗っ取り。

本来であれば、国が団結して抵抗する姿勢を見せてもおかしくはないのだろうが、抵抗するには波の国には余りにも金がなかった。

忍を雇う金がない。

ならば自分たちが戦力になろうとしても、ギャングや抜け忍を雇っているともうわさされているガトーに、戦ったこともない素人が勝てる可能性は極めて薄いだろう。

「そこでオレの出番って訳だ！」

声高々に胸を張るヒナイ。

潜入した際の衣服は捨てた為、今着ているのは漁村で売られていた動きやすい稽古着のような服だ。旅の道中着ていた服は、波の国のある家に預けているらしい。

経緯を聞くと、ヒナイは絶賛世助けの旅の途中。

世のため人のため、一日一善を目標に火の国を渡り歩いているとのこと。

「それに、オレが有名になったら鼠ノ寺も有名になって、集客効果で賽銭ガツポガツポって算段よ、にししっ」

仮にも坊主がそれでいいのか？

若干の疑問を覚えつつ、訝し気な視線をヒナイに送るシライトは、霧の深い道中を進む。

火の国と波の国は、陸伝いに繋がっていない。故に、とれる移動方は船による移動、もしくはチャクラによる水面歩行を用いての移動だけだろう。後者については余り現実味がないため、残された手段は船による移動だけだ。

船を漕ぐことを生業とする男性に乘せてもらい、えっちらおっちら

と彼が波の国へ舵を取っている間、シライトはヒナイから多くの話を耳にする。

そうこうしている内に、船は波の国に到着し、鬱蒼と生い茂るマンガローブの林を抜け、船着き場に着くことができた。

目の前に広がるのは、木材やトタンをつぎはぎしたような貧相な家屋。滝隠れも中々田舎の方だと感じていたシライトであったが、隠れ里を持つ国とそうでない国の差というものをひしひしと感じる。

「酷いもんだぜ。いつだって搾取されんのは、一番下の階級の平民だ。上は下々の気持ちなんざ考えねえで、贅の尽くす限りを働きやがる」ヒナイは皮肉たつぷりに言葉を吐き捨てる。

「同じ人間なのに、なんでそんな真似ができんのかねえ……」

「……多分、違いますよ」

「はっ」

だが、ヒナイの言葉にシライトが反論する。

鳩が豆鉄砲を食ったような顔を浮かべるヒナイは、『どういう意味だ?』と言わんばかりに視線を送って来た。

一拍置いて、彼は言う。

「……みんな違う人間だからこそ……自分より、より遠い性格、文化、力……そういったものを持つ人々を除け者にしたがるんです。村も……町も……国も……里も……一族なんかも、どうせは似た者同士の小さなコミュニティの集まりですから……」

——だから、異端者は迫害される。

しみじみと言葉を紡ぐシライトに、ヒナイは言葉を失った。

だが、彼は少しだけ微笑み、こう続ける。

「まあ、そういうの僕は気にしないタイプですけど……」

「この愚図がっ!!」

部屋に響く怒声と殴打音。

殴られたのは、まだ成人しているようには見えない少女だ。紫色の

ショートヘアーで、頭頂部を少しばかりまとめている。

白と黒のツートーンカラーのパーカーを着ている少女は、たった今杖で殴られた頬を擦ることもなく、不貞腐れた様子でそそくさと立ちあがる。

「親に売られたようなお前を、わざわざ私の経営する大企業の用心棒にしてやってるといふのに、なんという体たらくだ！」

「……申し訳……ないです」

サングラスをかけている小柄で初老の男性が、怒りが収まらないと言わんばかりに声を荒げていた。

彼こそが、彼のガトーカンパニーの社長・ガトーである。

両側にはガタイのいいボディーパーカーらしき黒服が居り、只ならぬ雰囲気相場に流れていた。

「血継限界持ちでなければ、すぐにでも責任をとってもらうところだったが……私は寛大な人間だからな。今回ばかりは許してやろう」「ありがとうございます……ごいいます」

「だが、何度も許されるとは思ふなよ？　経営において費用対効果は重要だ。人件費もタダじゃあないからな。自ら己の価値を示していかねば……」——あとは分かるだろう？」

「……はい」

床に目を向けたまま首肯する少女に、ガトーは鼻を鳴らして踵を返す。

「じゃあ、今やるべきだと思うことはなんだ……？」

「……タズナを……殺す事」

「正解だ。——行け」

刹那、少女の姿は風に吹かれた霧のように消える。

常人には目にも映らぬ瞬身の術を見届けた黒服は、依然として堂々たる振る舞いを解かぬガトーに耳打ちした。

「濃霧を行かせてよろしかったのですか？」

「構わん。言っただろう、費用対効果のことを。やつには『コロシム』で十分手駒を稼がせてもらったからなあ」

ガトーの脳裏に浮かぶのは、地図にも乗らない孤島に存在する闘技

場だ。

そこでは富裕層が、自身の財力を他に示すべく、手持ちの忍を賭けて戦わせるといふ娯楽場がある。勿論、違法賭博の類だが、場所が場所であるため摘発されることはない。否、それこそ金の力を以てして、忍たちを黙らせているのだろうか。

だが、ガトーにとってはどちらでもいい。

とにもかくにも、その忍同士を戦わせる闘技場——コロシアムで、先程の忍である濃霧を戦わせ、数多くの忍を手に入れることができた。血継限界持ちは、いわばレアもの。試合を申し込んでくる者は数多く居た。しかし、それを退ける程の力を持つのも、また血継限界たる所以とでも言っておこう。

「ククッ。はした金で買った割りには、もう何時捨てても構わんほどに稼がせてはもらった。いい買い物をしたものだ」

醜悪な笑みを零すガトーに、両端に居た黒服は、その能面のような無表情の奥でゾツと総毛立つ思いを覚えた。

人間をただの駒としてしか見ていない。

でなければ、人間を賭けに出す賭博などするハズもなく、平然と自分に仇為す無辜の民に私刑を加えるハズもないだろう。

ガトーにしてみれば、あの濃霧という少女もただの手駒でしかない。

彼女を手に入れたのは水の国。雷の国とは対照的に、血継限界を迫害する思考があり、厄介払いのために血継限界持ちの子どもが売りに出されることも少なくない。

彼女もその一人だっただけという話だ。

裏市場で取引される人間一人の価値など、指折りの大富豪であるガトーにしてみれば大した金額ではない。

ガトーは、そういった非合法的取引で、これまで富を得ていた。そして、これからも。

「タズナさえ殺せれば、後は私の……ククッ！」

「しらたき。ここがオレが世話なつてる家だ」

「あの……しらたきじゃ……いや、もういいです。それが渾名つてことで……」

ついに渾名が『しらたき』となりながらも辿り着いたのは、一見何の変哲もない家だ。家の横に立つ風車が目に付く。

『邪魔するぜー！』と景気よく扉を開けるヒナイ。余りにも勢いが良すぎて扉が外れ、後ろに続いていたシライトがギョツと目を見開き、倒れそうになる扉を支える。

中に居たのは、老人と女性。

白く染まる髪とは裏腹にガタイがいい老人は、ヒナイを見るや否や、死人でも見たかのように目を見開き、薄い座布団の上から立ち上がった。

「生臭坊主……！ アンタ、帰ってくるの超遅かったな！ わしア死んだかと思つたぞー！」

「だアレが生臭坊主だ、コラ!!」

玄関開けたら二秒で怒号。

生臭坊主と言われたことに対して憤るヒナイは、早速老人にガンつけるという坊主にあるまじき行為をしている。

そんな彼女をどうどうと宥め、場が落ち着きを取り戻したところで、腰を据えて話が始まった。

「わしが、波の国の橋造りの超名人・タズナというもんじゃわい。で、こつちが娘のツナミじゃ。で……そつちの赤髪坊主はともかく、アンタは誰じゃ？」

「あ……初めまして……たきのシライトと言います。旅をしながら医者を目指しています」

「医者あゝ？ 旅しながら医者目指すなんざ、呑気なもんじやのオ」

「はあ……」

「……なんか、超頼りなさげな医者じゃねーの、オイ？ 赤髪坊主」

「あゝ あ？」

名前を呼ばれぬことが不服らしいヒナイは、怪訝な視線を向けてく

るタズナに、ドスの利いた声を発しながらガンを飛ばす。

傍から見ればヤンキーそのもの。髪色も相まって、ヤンキー具合は中々だ。

閑話休題。

タズナとヒナイのガンつけ合いはツナミより強制終了され、話は戻る。

タズナが語るのは、波の国が貧窮している事態。そして、その理由。加えて、カイザという英雄の死と、唯一の希望の架け橋である橋がガトーカンパニーに妨害されようとしていることだった。

ガトーカンパニーが波の国に手回しをしていることは知っていたが、その裏で繰り広げられていた悲劇に、能面なシライトの顔の眉間にも、次第に皺が寄っていく。

「ガトーが阻止しようとする、わしらの造つとる橋は波の国の最後の希望……そして、亡くしてしまった逃げない精神を取り戻すのに、絶対に完成させなきゃならんのだ」

「んで、橋造るの待ってんのがまどろっこくなつたオレア、ガトーの会社から色々分捕つてきた訳だな」

「ふんっ！ 汚職の証拠なんざ掴んだところで、ガトーにとっては痛くもかゆくもないわい！ 金でもみ消されるに決まっとする！」

「んだと、コラー！」

「まあまあ、お二方……そこらへんで……」

何度目かの制止に、止めに入ったシライトもツナミも呆れた様子だ。

確かに、タズナの言い分も分かる。

ガトーほどの財力があれば、ちよつとやそつとのスキャンダルなどもみ消せるだろう。それどころか、掴んだ証拠が決定的なものであればあるほど、ガトーによる妨害は熾烈を極めることとなり、多くに人間に被害が及ぶ可能性が高くなる。

とれる手段の一つには、忍に依頼しガトーを暗殺するというものもあるが、相手が相手だ。依頼にかかる金は莫大だろう。

すると、現状残された手は、タズナの言う橋を完成させることただ

一つ。

「なるほど……事情はわかりました。じゃあ、微力ながら僕もお手伝いさせて頂きます」

「お手伝い？ 医者見習いのあんちゃんみたいなひ弱そうなものに、手伝わって言われてものオ……」

「……大丈夫です」

徐に袖をたくし上げるシライト。

覗くは程よく引き締まった上腕二頭筋。どうやら、シライトは着痩せするタイプのようだ。

「ほんの少し……力には自信がありますから……」

しかし、その腕に秘める力は、常人の想像に及ばぬ域に達しているということを知らない。

次の日。

水面から立っている朝霧は深く、遠くを望めないほどだった。

ほんのり肌を撫でる空気はうすら寒いように思える。

橋造りは朝早い。このような早朝に起床したシライトとヒナイは、タズナ宅の朝食にも混ぜてもらった。メニューは米に味噌汁、少しばかりの漬物だ。

朝ごはんの一日のエネルギーとなる。しっかりと咀嚼するシライトの一方で、ペロリと平らげたヒナイが好物は親子丼だとカミングアウトする場面などもあったが、比較的穏やかに朝食は終了した。

そして、昨日は顔を合わせる事がなかったタズナの孫・イナリとも会ったのだが、特に会話が弾む訳でもなく、イナリはさっさと食器を台所に下げ、自室へと帰っていつてしまふ。

義父であるカイザを殺された「傷」は、非常に深いようだ。

「超酷いもんじゃわい。あれだけ慕った義父を殺されて、超辛いじゃろうに……」

「……心の傷の厄介なところは、人の目に見えないところです。体の

傷は、血が流れたりしてちゃんと見える……だけれども、心の傷は目に見えない。だから、時に想像以上の傷を与えてしまうこともあるのです……」

「……じやのう」

心の傷について説くシライトに、タズナは首肯する。

だが、『でも』と付け加えるシライト。

「例えどんな理由があっても……人殺しは理不尽です。医者を目指す身としては……」

「だから、オレらが一肌脱ぐって話なんだろう？」

人殺しは理不尽である。

そう呟くシライトの後ろから、法師らしい法衣を身に纏ったヒナイが、ズイと身を乗り出して現れる。

法衣は勿論、手に持った錫杖に加え、一番目を引くのは頭部だ。

背負い籠をひっくり返して被ったような外見である笠——深編笠を被るヒナイは、一見では彼女であるかどうか判別できない。

一度盗みに入った手前、外で顔を出すことはできないということなのだろう。

不審感が凄まじいが、背に腹は代えられないとシライトたちは橋へ向けて歩を進め始めた。

歩くこと数十分。

仕事場である橋がもうすぐといった時、ヒナイの歩みがピタリと止まった。

「……どうしたんですか？」

「しつ。ちよい待ち……」

不思議に思ったシライトに静かにするよう告げるヒナイは、徐に印を結び、ジツと立ち尽くす。

（——神楽心眼！）

他人には見えぬ変化。しかし、ヒナイのチャクラ感知範囲が普段とは比べものにならぬほど広がる。

自分たちの方へ向かってくるチャクラの動きが八つ。

東西南北全ての方向から囲んでくるように接近してくるチャクラ

は、凡そ常人の移動速度ではない。

これは、忍そのものの疾^{はや}さ。

「間違いねえ……忍がこつちに向かつてきやがってんな」
「え」

「それに、あからさまに霧が深くなつてきやがってる。大分チャクラ練り込んでやがるな。こいつあ霧^{きりがく}隠れの術だ」

霧隠れの術——文字通り、霧で辺りを覆うことにより相手の視界を奪つたり、身を隠したりする術だ。チャクラを練り込めば練り込むほど霧は深くなり、敵側からの視認を困難にするといった芸当もできる。

敵に悟られることなく標的を殺すに、余りに適した術の一つだ。

「な、な、な。そりやあ、つまり……」

「アンタ風に言やア、敵さんがタズナのおっさんを超狙いに来てる……ってことだな」

「それならすぐにでも超走つて逃げんと——」

「無駄だぜ、おっさん。狙われてるおっさんの足で、忍から逃げ切れつと思うか？」

「そ、それは……」

一般人が忍に走り勝てるハズもない。

ならば、ただ黙つて殺されるのを待てと言いたいのか？ そう言いたげな視線をヒナイに送るタズナであるが、当のヒナイは深編笠の奥で不敵な笑みを浮かべ、まったく焦る様子を見せないシライトに声をかける。

「しらたき。随分余裕そうじゃねえか。戦えんのか？」

「……表情に出てないだけで、内心心臓バクバクですよ。でも……黙つてやられるつもりはないです」

「なら良かったぜ」

シヤン！ と錫杖に付いている輪つかを鳴らすヒナイ。

一方シライトは、既に印を結び始めている。ヒナイのお陰で、敵襲を事前に察知することができたことは大きい。この場面で、手を打つておかないハズもないだろう。

訪れる静寂。

霧に包まれる白亜の世界は、自分がどこに居るかさえ分からなくさせる。

だが、ふと遠くで風を切る音が僅かに聞こえてくる。

数秒後、濃霧の中で爆発が巻き起こった。

(……やったか?)

霧を進む中、濃霧は一人思案を巡らせていた。

過去、コロシウムにて勝ち取った忍により結成されたガトー直属の忍集団。個人個人の練度は兎も角として、そんなじよそこのギャングなどよりは力はあると、各々が自負している。

彼らが言い渡されたのは、橋の建造の要である人物・タズナだ。彼さえ殺せれば、僅かに残った波の国の希望を潰すこともでき、波の国掌握もより容易いものとなるう。

一方で、失敗すれば自分たちの居場所はなくなる。

失敗しオメオメガトーの下に戻れば、最悪処刑されることもあり得た。

故に、全員が死に物狂いでタズナを殺しにかかっている。個人の抱く思いは違えど、全力であることには間違いない。

濃霧は大鎌の柄に手をかける。

先程の、起爆札つきのクナイで爆殺、若しくは刺殺できれば儲けものではあるが、もし息が残っているようであれば、直々にその首を刈り取らねばなるまい。

霧を進む中、焦げ臭い場所が近づいてくる。

そろそろだ。

尚も息を潜め、静かに、忍び足で――。

「ぎゃあああ!!」

「っ!? チツ」

すぐ近くで悲鳴が響いた。

アレは標的のものではない。知っている声——味方のものだ。反撃を喰らいやられたのならばそこまでである。即座に切り捨てるまでだ。だが、問題なのは悲鳴を上げる味方が、何故か自分の方へ向かって飛んでくることである。

その場にしゃがみ込み、迫る味方を回避する濃霧。

よく見れば、振り回される味方の身体には、なにやら光を放つ鎖のようなものが巻き付いていた。

(チャクラの鎖か?)

見たこともない術だ。

警戒を強めた時、今度は前方から巨大なムカデが襲い掛かってくる。

それを大鎌でいなす。斬り裂けなかった。かなり甲殻が固い。大鎌でいなされたムカデは、何事もなかったかのように、出てきた霧の奥へスルリと消え去っていく。

(どういうことだ……?)

明らかに一般人でない者が、タズナを守っているらしい。

次第に霧と煙が晴れ、漸く望むことのできた景色。

それは、

「はっ！ 守り切れたら、明日の朝飯にや目玉焼きつけてくれよな、タズナのおっさん」

「……ヒナイさん。それはもう……生臭坊主です」

「あ、あん!? いいだろ別に。卵料理好きなんだよ、コラ！」

「……そうですか」

ふざけた会話。

奥に佇むのは、袖の奥からムカデを伸ばす優男と、錫杖からチャクラの鎖を伸ばしている僧。

彼ら二人の間には、爆発で腰を抜かしたらしきタズナが座り込んでいる。

「の、濃霧さん……!」

「……邪魔が増えただけ。全員でかかって……——殺れ」

竦む部下に指示を出す濃霧。

戦いの火蓋が切られるのだった。

十五. ついつい買っちゃう宝くじ

一人は既にヒナイが倒した。チャクラの鎖——ヒナイ曰く、『金剛封鎖』なる封印術の類らしいが、それを用いて敵を絡めとって振り回すという、なんとも大胆な攻撃で敵を倒すとは、何とも坊主らしからぬ攻撃だ。

一方シライトは、袖から口寄せしたムカデで起爆札付きのクナイを一蹴した。

頑丈が売りの大ムカデ。ちよつとやそつとの起爆札程度でやられることはない。

しかし、多勢に無勢だ。

非戦闘員であるタズナを守りつつ、残りの九名と戦うのは、正規の忍ではないシライトたちに厳しい状況である。

「タズナさん……少しの間、すみません」

「んオ!? おおおオ!」

そこでシライトは、タズナを取り囲むよう、口寄せしたムカデにとぐるを卷かせた。

これにより、大抵の攻撃は防げる。ムカデが苦手とする雷の性質変化でもなければ、持ち前の甲殻により築かれた鉄壁の城塞を貫くことは叶わない。

ただ、自分よりも大きなムカデに四方八方取り囲まれるという、虫嫌い……そうでなくても鳥肌が立つ状況に陥ってしまう。なんとかタズナに我慢してもらいたいところだ。

「で……どうしましょう……」

「ここまで来て、んな心配そうな声出すんじやねえよ、コラ」

消え入りそうな声を漏らすシライトに、ヒナイが彼の背中をバンと叩いて喝を入れた。

「死ねー!」

その時、襲ってきた忍の一人がクナイを振りかざして迫ってくる。咄嗟にその場を離れる二人。分断した二人に対し、クナイを振りか

ざした忍はシライトの方へ飛びかかった。

錫杖を持つヒナイに対し、シライトは丸腰だ。得物を持たぬ相手から先に倒そうという魂胆なのだろう。

一気に距離を詰める忍は、クナイを一閃、また一閃と振りぬく。

だが、振るえど振るえどクナイが、シライトの首どころか皮一枚すら掠らない。全て、軽快なフットワークで躲されてしまっているのだ。

(こいつ……！)

業を煮やした忍は賭けに出た。

姿勢を低くし、そのままシライトの懐へ潜り込んだのだ。

インファイトは、こちらの攻撃も当てやすくなるが、相手からの反撃も受けやすい諸刃の剣のようなもの。相手が得物を持っていないというアドバンテージを捨ててまで肉迫したのは、他でもない、一撃でも切りつければ勝てるという確信——言い換えれば、慢心があった。

懐に入った忍は、クナイを振り上げた。

だがしかし、これもまたシライトが顔を少し横に逸らしたことにより、回避されてしまう。

「なッ……」

振りぬかれたクナイ。

攻撃直後は、ほとんどの場合無防備になってしまう。個人の練度や、繰り出した攻撃によって差異はあれど、この時は仕留めるべく深々と踏み込んだ上での攻撃であったため、隙はかなり大きいものとなってしまった。

シライトの顔と忍の顔の距離は、ほんの数センチ。

攻撃を躲された忍の頬には、冷たい汗が伝っている。

「ぐぶッ!？」

「あっ……」

次の瞬間、肺から空気が絞り出されたような悲鳴を上げる忍。そのまま宙を舞う相手を見つめ、拳を鳩尾に突き立てていたシライトは、『やってしまった』と言わんばかりの表情で立ち尽くしていた。

なんてことはない。繰り出したのは、只のボディブローだった。しかし、繰り出した人物が不味かったと言う他ない。

綱手との修行で、回避「だけ」は上手くなったシライト。

一方で、攻撃に関しては素人に毛が生えた程度だった。

つまり、折角躲しても反撃に転じられない。守勢から攻勢に転じる
ことができないのだ。

本人が医者を目指していることを自覚して、攻撃についての指導を
ほとんど受けなかったのが理由である。

だが、この時ボディブローを喰らった忍の不幸だったのは、素人
ならざる力を持つ相手が上手い加減も分からないまま、ほぼ反射的に
反撃されたところだ。

加減は、練度が高くなればなるほど、緻密にコントロールできるも
のである。

その加減を覚えるには、ほとんどの場合は実践あるのみ。多くの失
敗を重ね、徐々に手に入れられるのだ。

しかし、シライトの今までの試行には、全力の場合の経験値しかな
かった。

最大チャクラを一瞬で練り上げ、必要な部位に集中させて放つ攻撃

——桜花衝。

素人は知らなかった。その一撃の威力が、ただの忍のみならず上忍
さえも殴り倒せる威力があったことを。

長い……とても長い時間だった。

宙を舞い、地面に落下した忍は、口から蟹のようにぶくぶく泡を吹
き、白目を剥いて気絶していた。

「ひい!」

ちようど殴り飛ばされてきた味方が近くに落ちた忍は、直視するの
も憚れる攻撃でやられた味方を前に、怯え竦んだ声を発する。

「いい拳持ってたんだな、コラ」

「今のは……不本意です」

感嘆するヒナイの言葉に、シライトはやっちまった感を滲ませた声
色で応える。

本人が言う通り、不本意な一撃であったが、結果的に相手の士気を下げられたのは幸運だっただろう。

少しタジタジと後ずさりする忍たち。

だが、不意に響く金属が擦れる不快な音が鳴り響くと同時に、一同の視線は一人の少女に集まる。

白内障を患っているかのように、右目が白く濁っている少女――

濃霧は、辺りに満ちるうすら寒い霧の如き冷たい威圧感を滲ませる。

「……逃げるな。逃げたら、私が刈る」

何を、とは敢て言わない。

しかし、濃霧の言葉を聞いた者達は皆、首筋に冷たい感覚を覚えるに至った。

人を人と思っていないかのような物言い。それは彼女自身が自らへの扱いを経た経験からなのか。

どちらにせよ、シライトたちに濃霧の真意など分からぬことだ。

今はただ、あの大鎌の餌食にならぬよう抵抗するのみ。

警戒を最大に高めたシライトとヒナイ。

刹那、素早く印を結んだ濃霧が、口から霧を吐く。

――霧隠れの術か？

しかし、すでに霧が濃い場所で更に霧隠れを繰り返す必然性は感じられない。

シライトが怪訝に眉を顰めれば、ハツとしたヒナイが声を上げる。

「気イっけろー！ それに触れっつと溶けるぞ、コラー！」

「溶け……ッ!?!」

触れば溶ける霧など穏やかではない。

そして、今の状態ではほとんど物理攻撃しか攻撃手段を持っていないシライトにとって、接触技を封じられるような術は天敵だ。

(……なら)

徐に地面に両手を突き立てるシライト。

腕に血管が浮き出るほど力を込め、彼が腕を振り上げれば、巨大な土の塊が畳のように返されるではないか。

(畳返しの……術っ……!)

いかにも忍者らしい術名。

しかし、内容はもれなく腕力がモノを言う脳筋仕様だ。

内容は兎も角として即席の防壁は、接触したものを溶かす霧——
巧霧の術を防ぐ。

さらに、返した土の塊に桜花衝を叩き込むことで、土の破片を前方へ拡散するように吹き飛ばす。

吹き飛ぶ破片は、相手を牽制するにとどまらず、風の流れを作ることで功霧の術が向かってこないようにもできる。

望むことなら、この一撃による破片が当たって気絶でもしてくれば儲けものだったのだが、砕けた視界の先に濃霧の姿はない。

代わりに、辛うじて日光が届く霧の中に佇むシライトに影がかかった。

「っ……っ！」

風を切る音と共に、大鎌が振り下されたが、シライトは紙一重でその一閃を回避する。

強い。先程クナイを振るってきた忍とは比べ物にならない。

綱手とのスパルタな修行がなければ、今の一撃で開きにされていただろう。じつとりと額に脂汗が浮かぶ。

——嗚呼、だからこういう物騒なのは嫌なんだ。

しかし、心の中でばやくシライトなど構わず、濃霧は次々と大鎌を振るう。

無表情ながらも、どこか鬼気迫る様子の彼女。強迫観念のようなものが、あの華奢な体を突き動かしているのだろうか？ 相対すシライトは、そう感じざるを得なかった。

そんなシライトと濃霧のやり取りの傍では、ヒナイと他の忍との戦いが繰り広げられている。

片や1対1で戦っているのに対し、片や1対6だ。不釣り合いな戦力だが、濃霧が相手しているならば一人で十分という認識を、襲撃してきた忍が抱いているのだろう。

それだけ彼女の実力が高いとなると、シライトが相手できるのか心配になってくるヒナイだったが、彼女も他人に気をかけるほどの余裕

はない。

反りのない忍刀を振るってくる忍に、ヒナイは錫杖から仕込み刀を抜く。

激突する刃の間から、眩い閃光が爆ぜる。

深い霧の中、長時間待機していて暗闇に順応していた視界を持つていた者にとって、舞い散る火花は一瞬の隙を生み出すのに十分な光だった。

細くなる忍の瞳。一方で、深編笠を被っているヒナイは、それほど火花が目眩むような事態には陥ることはなかった。

刹那の隙。

ヒナイは、腰辺りから放った金剛封鎖で忍の体を絡めとり、少しだけ己の方へ引き寄せる。

不意に引き寄せられたことで体勢を崩す忍に対し、ヒナイは渾身のエルボーを喰らわせる。

相手は『ぎゃつ！』と短い悲鳴を上げて倒れ、チャクラの鎖も解かれたことで力なく地面に伏せた。

——一人。

エルボーの流れで背後を見れば、今まさに斬りかかろうとしていた忍が二人、クナイを構えていた。

投げられるクナイは、そのままヒナイの体に突き刺さる。

髪と同じ赤が、彼女の口から吐き出された——かと思いきや、たった今ヒナイが立っていた場所に居たのは、人の形が成るよう積み重なっていた無数のネズミだ。

「鼠分身の術ってな、コラ」

口寄せしたネズミを集めてできた分身——鼠分身の術。

本物のヒナイが自分たちの背後に居ると忍たちが気付いた時には、既に彼らの身体に鎖が絡まっていた。

引き寄せられる鎖。宙で身動きを取れるハズもなく、二人の忍は互いの頭部が激突する形でぶつかり、強い衝撃が頭部に奔ったことで絶する。

——三人。

三人を伸ばしたヒナイ。だが、そんな彼女の両腕に水の鞭が絡まった。

敵の忍二人が、水遁・雷鞭迅の術を用いたようだ。

雷鞭迅の術は、チャクラで制御した水の鞭で相手を打ち据えるか、絡めて捕らえる活用方法の他に――、

「つゝゝゝ!!」

水の鞭を伝い、全身を奔る衝撃。

どうやら雷遁チャクラを伝わらせ、絡めとっているヒナイを痺れさせたようだ。

感電とは非常に厄介なものである。自分の意思とは裏腹に、体が動かなくなってしまうのだ。

現にヒナイは、身動き一つとることができなくなり、ただただ全身に襲い掛かる衝撃を耐えるしかない。

そして、そんな隙を敵が見逃すはずもなく、残っていた最後の一人が霧の奥から颯爽と現れ、携えていたクナイをヒナイの胸に突き立てた。

今度は分身などではない。本体だ。

胸にクナイを深々と突き立てられたヒナイは、口から紅い粘性の液体を吐き出し、ガクリと項垂れた。

――殺った。

無言で頷き合う三人は、倒したヒナイを捨て置き、濃霧と交戦しているシライトの下へ向かおうとする。

だが、ふと金縛りにかかったように体が動かなくなった。

「なッ、なんだこれは……!?」

「――……ごほっ、え、ほっ！　よくもやってくれたな、コラ……！」

身動きのとれぬ三人の中心で、激しく咳き込みながら立ち上がるヒナイ。

印を結んでいる彼女の足元からは、三人の足元まで広がる陣が展開されている。

一糸灯陣。陣の中に居る相手の動きを封じる、封印術の基礎のよう

な術だ。

印を結んでいるヒナイは、自身の口の端から零れる血を舐め取りつつ、三人が動けぬよう一糸灯陣で動きを縛っている。

「こ……こんなアカデミーで習うような術で……ッ！」

「あ、焦るな……すぐに力尽きるさ。それから確実にやればいい……！」

「ああ、そうだな……！」

「そりゃあ……どうだかな、コラ！」

「!!?!」

ヒナイの体力が尽きるのを待とうとした三人であつたが、彼らの足元に蠢く影。

ネズミだ。先程ヒナイが口寄せした大量のネズミが、動けない三人の体を覆っていくではないか。

「口寄せ・窮鼠噛猫の術！」

「ひ、ひいいいい!!」

「ね、ねずみい……！」

「そこは噛んじやダメエ——!!」

阿鼻叫喚の絵面である。

全身を覆ってくるネズミに至るところを噛まれた忍たちは、心身ともにやられてしまい、ヒナイが一糸灯陣を解除すると同時にその場に倒れ込んだ。

一方で、胸にクナイを突き立てられたヒナイは、ケロリとした様子で佇んでいる。

普通であれば、瀕死に陥るほどの重傷だったはず。

しかし、彼女の胸に既にクナイによる傷はなく、残っているのは血の滲んだ法衣が斬り裂かれて残っている痕のみだ。

(うしっ……一丁上がり。次はしらたきのトコに……)

自前の能力で怪我は治癒できていた。

それでも失くした血までがすぐに戻る訳ではない。

フラリと立ち眩みを覚えたヒナイは、その場に膝を着いてしまう。なんてことはない、疲労と貧血に伴う症状だ。

「ちつくしよ……！」

動けないことが自分の根性のなさだと考え、直ちに援護へ行けぬことに歯がゆさを覚える。

だが、ヒナイが思っていたよりも、シライトは濃霧と戦うことができていた。

綱手との修行が生きている。あの、一撃でも喰らえば病院送りになる修行を、死に物狂いでやった価値はあった。

大鎌という得物を前に、全て紙一重で躲し続けるシライト。

刃には毒が塗られているのだが、知ってか否か、掠り傷さえも受けていない。

対して、大鎌を振り続ける濃霧は、その重い得物を絶え間なく降り続けている所為で息が上がっていた。

やや表情には焦燥が浮かんでいる。

どうして刈れない？

どうして、どうして？

濃霧を突き動かす強迫観念が、ただでさえ鈍ってきた太刀筋を、更に荒くしていく。

自分は道具。

親に売られた時から、*「普通」*の人間の扱い方をされるとは期待していない。否、期待できないように調教されてきた。

反感を抱くことを許されず、遂には反感を抱くこともなくなり、ただだ主の命令を聞くだけの存在になり果てたのだ。

与えられた任務を達成できねば、待っているのは凡そ一般人の堪えがたき折檻。

恐怖が背中で蠢いている。

理不尽が背中を押している。

やらねば、やらねばやられるのは自分だ。

鬼気迫る様子は顔に出ていたが、一層気迫が滲み出たようだ。

躲すシライトの表情も、威圧されたように歪む。

——もう、こうなったらアレを……。

忍具を使つての攻撃は最早無駄と判断した濃霧。

味方もむぎむぎやられている。

だが、こちらの目的はタズナを殺せばいいだけだ。手段は択ばなくともいい。

それこそ、味方を巻き込んで殺しても問題はない。

道具は、補充が利くのだから——。

「沸遁……巧ツ!？」

印を結び、チャクラを練る濃霧だったが、ふと足が地面に引きずり込まれるような感覚を覚え、そのまま体勢を崩してしまった。

ぞわぞわとやせ細った足に絡みついているのは、がっしりと対になっている脚でホールドしているムカデ。タズナを守っているムカデよりは小さいが、それでも規格外の大きさだ。

よく見れば、ムカデは毒液滴るハサミで足に噛みつけている。ズキツと足に走る激痛。ムカデの毒は強力だ。すぐに処置せねば、三日三晩ロクに眠ることができなくなる痛みが残るだろう。

激痛にチャクラが乱れる。

そのまま、事前にシライトが口寄せしていたムカデは、土遁・心中斬首の術で濃霧の体を地面に引きずり込む。

これで無力化できるはず——攻撃が苦手なシライトは、毒と体の拘束で敵の無力化を図ったのだ。

だが、その見通しは忍を止めるには至らなかった。

地中に埋もれつつも、なんとかチャクラを練った濃霧は、血走った眼を浮かべ、口から多量の霧を吐き出す。

——沸遁・巧霧死息の術!!

「ギギイ!!」

「? ……ッ、みんな離れて下さい……!」

濃霧を拘束していたムカデが、突然霧に触れて悶え始める。

そして数秒後には、力なく地面に倒れてしまった。

その様子に危機感を覚えたシライトは、膝を着くヒナイを抱え、ムカデに守らせていたタズナを袖から口寄せしたムカデで引っ張り、その場から逃げ出す。

ムカデが掴める定員的な問題で、敵である倒れている忍は連れられ

なかった。

敵でさえも逃がそうとしたシライト。結果としてそれが叶わなかった彼の嫌な予感の的中する。

濃霧が吐き出した霧……それが倒れている者の近くを漂った途端、気絶していた者達もがき始め、ムカデと同じく数秒後には動かなくなった。

(シズネさんの『毒霧』と同じ……一吸いでもしたら不味いタイプの術……！)

姉弟子のシズネの術である毒霧は、体内のチャクラを特殊な化学物質に変化させ、大気中に放った瞬間、猛毒の霧へと変化する術だ。

シズネの術を知っていたお陰で、ある程度早く反応することができた。

だが、見た目が見えた目だ。毒霧は空気に触れば紫色へと変色するが、濃霧の練り出した術は、霧隠れの術や巧霧の術などと外見に大差がない。

もし、防げるとみてその場から動かなかつたら、致命傷は免れなかったはず。

背筋に寒気が襲い掛かってくる感覚を錯覚した。

次の攻撃に警戒し、少し離れた場所に着地したシライト。

そんな彼を見て、ムカデによる拘束が解かれた濃霧は、自力で土の中から這い出て、再び忍術を練り出した。

やはり霧だ。

見分けがつかない。

相手に一吸必殺の術があるとするなら、迂闊に近づくことができないのは当然と言えよう。

「ここは……逃げます」

「お、おう。そうじゃな。超逃げてくれ！」

「て、鉄分……」

戦略的撤退に移るシライトに、ムカデに巻かれた奇々怪々な状態で運ばれているタズナは、声を大きく発しながら首肯する。一方、貧血気味のヒナイは鉄分を求める旨の呟きをしているが、今この場で鉄分

を摂取させてもなにもならないため、彼女の発言をスルーして逃げ始めるシライト。

度々後方に目を遣って敵が来ないが警戒するも、一向に敵がやって来る気配はない。

結局、霧が晴れるところまで逃げ切ったところで、三人は一息を吐く。

波の国に来て二日目。

前途多難とは、まさにこのことだと、シライトは頭を抱えるのだった。

痛い。

体が痛い。

灼けるように痛い。

全身の骨が溶けるかと思うほどに痛い。

どうしよう。

失敗して帰れば、何をされるか堪ったものではない。ムカデの毒を解毒してくれる可能性は小さい。

ならばどうするか？

「殺すまで……帰らない……」

激痛に苛まれる体と大鎌を引き摺り、濃霧は霧の深い森の中へ姿を消すのだった。

「ガーツ……ガーツ……ムニヤムニヤ……」

「……こいつ、女らしからぬ寝相で寝とるわい」

「……頑張っていましたから……大目に見てあげましょう」

結局その日は、橋造りに向かうことがなかったタズナたち。

疲労と貧血で倒れたヒナイは、現在布団の上でいびきを掻きながら

爆睡中だ。寝相がかなり悪い方なのだろう。服の裾がめくれ、へそが丸出しになってしまっている。

そんな彼女のお腹が冷えぬよう、献身的に布団を掛けなおすツナミ。

「でも、どうするの父さん？　今回みたいにもた襲われたら、橋造りどころじゃ……」

「ううむ……」

娘であるツナミの言葉に、唸りながら悩むタズナ。

今回はシライトたちが居たからこそ生き残れたようなもの。もし、普段通り一人で出勤すれば、たちまち忍たちの手に掛かって死んでいただろう。

こうなれば、医者や坊主を護衛につけるのではなく、正規の忍を護衛につけるべきだ。

そんなことはタズナにも分かっている。分かっているのだが、やはり金がないのだ。

「む、むむう……なあ、先生」

「……あ、僕のことですか？」

「ああ、そうじゃ。ちよいと聞きたいことなんじゃが……いや、やっぱり大丈夫じゃ」

「？　……そうですか」

「こうなったら、背に腹は代えられんわい」

深々とため息を吐くタズナは、決心した顔つきで、頭に巻いていたねじり鉢巻きをまき直し、言葉を紡ぐ。

「護衛の依頼を出して、わしら橋造りの面子を超守ってもらう他ないわい！」

息巻いて言い切ったタズナ。

しかし、『じゃが、やはり……』と消え入るような声を漏らした後、何故かシライトに向かって土下座をし始めた。

デジャヴを感じるシライト。

「超頼む、先生！　少しだけでいい、金を貸してくれ！」

「お金……ですか？」

「ああ。わしらにはまともにも忍に依頼をできるだけの金もない！ 将来、必ず返す！ じゃから……」

「……まあ……構いませんけど……」

「すまん！ 超恩に着る!!」

「宝くじで当たったお金ですので……こういう用途で役に立つなら……」

依頼金を貸してくれるよう頼まれたシライトは、ごそごと財布を漁り、去年の火の国ジャンボで当選した五万両をスツと差し出す。因みに、共に買った綱手は当然の如く外れていた。

しきりに頭を下げるタズナと、横でこれまた礼を言ってくれるツナミ。

金ですぐに解決できる問題でもないが、正式な忍を護衛につけてもらえば、安心であることには変わらない。

『ギリギリ……』と呟くタズナの声を、シライトが不思議に思う場面もあったが、波乱の一日は漸く幕を下ろそうとしていた。

因みにだが、シライトの差し出した五万両と、タズナ家の貯蓄を合わせても、木ノ葉のBランク任務を依頼するにはギリギリ足りない金額であったことを、ここに追記しておこう。

十六。 お酒は20、官能小説は18歳から

ガトーの手先であろう忍たちの襲撃を受けた翌日。

シライトは、ツナミと共に町へ買い出しに来ていた。往来はそれなりだが、道行く人々の顔に活気はない。皆、死んだ魚のような瞳で、諦観した雰囲気を漂わせながら歩いていった。

これもまた、ガトーの手による影響なのだと思うと、腹の底がグツグツと湯だつていくような感覚を覚えてしまう。

だが、それをなんとかするべく、わざわざシライトは波の国に訪れたのだ。

カツユの、分裂体の意識は共有するという特性を生かし、綱手には少し出発が遅れるとは伝えた。どれくらい時間がかかるかは分からないものの、タズナの話を聞く限り、余程の妨害がなければ一か月以内には完成するという見通しだ。半年、漁村に滞在して村民の治療に勤しんでいた期間に比べれば、なんてことはない。

「それにしても……店に並ぶ食材もこんなに少ないなんて……」

「ガトーが来てからこんなもんよ。野菜なんかは、ほとんど他の国からの輸入に頼っていたから……」

八百屋に立ち寄り、店内に置かれている野菜の数を見て唾然としたシライト。

大根や白菜など、あるにはある。

だが、昼時とは思えないほど残っている数は少なく、皮や葉がしんなりしていたのだ。新鮮とは言い難い外見。本来ならば、このような野菜は値引きされるか、商品棚から降ろされるのだろうが、仕入れられた野菜がないため、苦肉の策でこうして商品棚にとっておいたままなのだろう。

聞くところによれば、漁業権さえも取り上げられているらしい。

では、波の国の者達は一体なにを食べて生活しているのだろうかと不安になってくる。ガトーがこの国を手中に収めようと暗躍し始めたのは一年前だ。栄養失調で死んでいる者も少なくないのではなからうか？

もし、栄養失調で倒れそうになっている者が居るのであれば、早急に治療してあげたいところだ。

しかし、栄養が足りない状態の患者を治療するには、足りない栄養を補給させてあげる他に治療法はない。

点滴など売っている店は見当たらず、作り置いていた兵糧丸も急場しのぎにしかないだろう。

やはり、波の国の貧困という病を治すのに最短なのは、タズナが橋を完成させることのみ。

今日、タズナは火の国へ依頼を出しに出かけた。

波の国から木ノ葉隠れまでは、遅くとも夕方には帰って来られる距離だ。

シライトは、道中襲われないものかと行きの護衛を申し出たが、家でグロッキーになっているヒナイ共々、ツナミやイナリの方を守ってほしいという家長の願いを受け、こうして街中に来ている。

だが、もしもの時の為に逆口寄せ用のカツユと、護衛代理のムカデが同行させているため、緊急時でも助けには向かえるハズ。

シライトの見立てでは、昨日の今日でタズナに襲撃はこないと考えている（というより、そうであってほしいと願っている）。

後に町の住民が確認しに行った際、昨日襲撃してきた忍たち八人の内、倒れてその場に残っていた七人は気道や肺が酷く焼け爛れて死亡していた。

最後の一人が繰り出した術の効果であるという結論に至るには、専門でないシライトでさえ理解できる。

しかし、最後の一人はムカデに噛まれて毒を注入された。もし、解毒などの適切な治療をしないようならば、一週間は真面に動けないハズ。死には至らないものの、同情したくなるような痛みに苦しむのだ。

単純に考え、忍八人が戦闘不能になったのである。

大きな損失であることは間違いない。

それでもガトーが新たな手先を用意していないとも限らない為、今この時もシライトは、胃痛に苛まれながら歩いていた。

(ああ……タズナさん、どうかご無事で……あと……綱手様の故郷の忍者さん。頑張つて下さい……)

カツユたちは、タズナが木ノ葉に無事辿り着いた時点で戻ってくる手筈となっている。

この時シライトは、帰り——木ノ葉の忍たちが護衛についた後で、新たな手先にタズナが襲われるとは思っていなかった。

——最近、イライラすることが多い。

少年・イナリは、そう思わざるを得なかった。

義父が死んでからというもの、義父の写真を片手に涙を流す毎日。そろそろ涙が乾いてもいい頃だとは思えども、涙は止まることなく、海水のように塩っ辛いままだった。

そんなイナリの住む家に、最近来たのは二人の見知らぬ男女。

一人は、言動の荒く男のような女坊主……否、女性の坊主なのだから尼と言うべきか。波の国では、海に潜り、貝類や海藻の漁をする女性のことを『海女』と呼ぶのだが、漁業権をガトーに取り上げられてからはめつきり見なくなった。

……尼と海女の話は兎も角、もう一人はどことなく頼りなさげな医者見習い。尼の言動が男らしいのとは対照に、母・ツナミと一緒に食事の支度を手伝ったり、掃除・洗濯をしてくれたりと、無駄に家事力が高く、ナヨナヨとした見た目も相まって、こつちが女なのではないかと思うこともしばしば。

悪い奴らではない。

しかし、心底腹が立つのは、この貧窮している波の国を助けようと息巻いているところだ。

義父・カイザはその所為で死んだ。

結局、波の国の英雄などと讃えられたところで、金と権力によって無残に殺されてしまった。

——男なら後悔しない生き方を選べ

(……父ちゃん……ホントにそれが父ちゃんの後悔しない生き方だったの?)

初めてカイザに出会ったあの日の言葉が、脳裏を過る。

今、こうして釣りをしている栈橋も、カイザと共に釣りに出かけた思ひ出の栈橋だ。

彼は、男の生き方を自分に説いた後、大切なものを二本の腕で守り抜くことで、男の生きた証は残ると豪語していた。

だが、今はどうだ?

カイザがイナリに残したのは、彼の無残な死にぎまと悲しみ、そして無力感。

英雄の——義父の死は、イナリにどうしようもない傷跡を残しただけではないか。

治りようのない傷は膿み、波の国の民と同じように——否、それ以上にイナリは悲観的になっていた。

生前は讃えるための言葉であった『英雄』が、当人の死後では慰めにしか聞こえない。

ウルリと目尻に涙が溜まったその時、ふと竿がしなる。

服の二の腕辺りで涙を拭い、慣れた手際で竿を引き上げれば、イワシが一匹かかっているのが目に見えた。

これでイワシは五匹目。自分を含めた家族の分と、あの坊主と医者たちの分。ちょうど一人一匹食べられる数はある。

昨日、祖父・タズナは、付いて行った二人が命懸けで守ってくれた。わざわざこの為に釣りに来た訳ではないが、これで義理位は返せるだろうと、イナリは引き上げるべく釣り道具を片付け始める。

弱い魚と書いて『鱚』。

見方によれば、雑魚と言えなくもない存在。

雑魚がどれだけ抗おうとも、大きな魚に敵うハズもなく、ただただ食べられるのみだ。

まるで自分のようだと自嘲気味に笑うイナリは、一旦思考を止めて、帰路につく。

「……?」

だが、ふと近くの茂みからガサガサと音が鳴った。
何かが動いた？

イナリは、ほぼ無意識の内に茂みの方へ歩み寄ってしまった。彼はまだ小さい。危険の存否を考慮するよりも前に、体が自然と動いてしまうのだ。

ソロリソロリと音を立てぬよう、茂みをゆっくり掻き分けて進んだ先には……

(人……?)

具合が悪そうに、木の根元に腰かける少女だった。

それだけならば、心配してこちらから声をかけようとする気は残っただろう。しかし、彼女の傍らに転がっている大鎌を見る限り、子供のイナリは一步も近づくと気にはなれなかった。

聞くところによれば、『死神』などという存在は、大人の背丈ほどもある大鎌を振るい、死の淵に居る人間の魂を刈ると言うのではないか。いつ聞いた話かも分からぬ記憶を思い出し、ぞつと悪寒を背中に感じたイナリは、バレぬようにとその場から立ち去ろうとした。だが、恐怖によつて足が竦んだイナリは、落ちていた木の枝を知らず内に踏んでしまい、音を立ててしまう。

「——ッ！」

「ひッ……!?!」

突き刺さる殺意の漲った視線。

失禁してしまいそうなほどの恐怖を覚えつつ腰を抜かしたイナリであったが、すぐに苦しそうに蹲る少女に、数秒ほどポカンと呆気に取られてしまう。

蹲る少女は、少ししてから面を上げ、イナリが子供であることを確認してから、興味が失せたように木漏れ日が差し込む木々の上に目を向けた。

何故だろうか。

その時にイナリには、彼女が捨てられた子犬のように見えた。

関わったら面倒なことになる。見過ごせばいいだけのこの状況。しかし、どうしてもイナリには彼女を見過ごすことができなかつた。

徐に立ち上がり、半歩近づく。

「……なあ、姉ちゃんはこのなトコでなにしてるのさ？」

「……動けない……から、休んでる」

「な、なんで動けないの……？」

「……虫に刺されて、体が痛い」

虫刺されなど大した理由ではないと思ったが、顔色を見ると、一概にそうは言えない気がした。

今頃、母と買い物に出かけている少年の顔が脳裏を過る。

「医者……よんであげようか？」

「いい」

「うっ……医者よばなくてもへいきなら、ボクはもう行くからな！」

すっぱりと善意を拒絶されたことに癪に障ったイナリは、踵を返して再び帰路につこうとした。

——ぐううううう……。

しかし、背後から響いてくる腹の音が聞こえ、めんどくさそうに振り返る。

「……おなか減ってるの？」

「昨日から、飲まず食わずだ」

「……なんで？」

「金が無い。動けない」

端的な理由を述べられた。

救いようのない状態としか言いようがない。このまま放っておけば、餓死でもするんじゃないだろうか？

数日後、気になって訪れればミイラのようにガリガリになった死体を見ることになるかもしれない。

そんな悲惨な光景を幻視したイナリは、自分が手に持っていた魚の入ったバケツと、体にかけている水筒に目を遣った。

数秒の思案。

苦虫を噛み潰したように顔を歪めたイナリだったが、義父の言葉が幻聴のように脳内に響き、一步踏み出した。

怪訝に眉を顰める少女。

そんな彼女の前に、イナリはバケツと水筒を差し出した。

「……食べれば？　でも、明日ちゃんと返してよ」

「……」

「な、なんだよう……そんな顔したって、それ以上持つてる食べ物なんかないよ」

呆気にとられたように目を見開く少女に、今差し出した以上の食べ物をせがまれていると勘違いしたイナリは、タジタジと後ずさる。

だが、次の瞬間、少女は餓えた野犬のようにバケツの魚を手に取り、生のまま齧り始めたではないか。

余りにワイルドな食べ方に、イナリは慄いた。

寄生虫が居る可能性なども考え、『や、焼いて食べるよ！』と注意しようとしたが、見る者全員をドン引きさせるような食いつぷりに、ただただ立ち尽くすしかできない。

魚を骨にだけになるまで食い尽くした少女は、次に置いてあった水筒に手を付け、ものの数秒で中身が空になるまで飲んでから息を吐く。

「ぶはッ……」

「え……あ……」

遠慮つてもものを知らないのか？　と言おうとも考えたが、食べると言ったのは自分の方だ。

余りにも豪快な食べっぷりに暫し放心状態となっていたイナリは、海水だけのバケツと、空になった水筒をそそくさと回収し、少女から逃げるように走り去っていく。

昔飼っていた唯一の友達・ポチも、餌を差し出されたらあのように食べていた。

若干、懐かしい気分になるも、結局ポチには自分が信頼を裏切つたために逃げられたという苦い記憶がある故、頭をぶるぶる横に振るい、ポチの思い出ごと少女を忘れようと試みる。

だが、あの鮮烈な食べっぷりは暫く忘れられそうにない。

——明日、死んでなきやいいんだけど……。

明日、釣りをするならばもつと釣果を得なければ。
イナリはそう思うのだった。

「いやあく……まさか、医療忍者がご在宅だったとは。こりやあ有難い限りですね」

「……医療忍者じゃなく……一応、医者です」

「おつと失礼。ま！ 医療忍者と遜色ないくらい腕がいいっていう称賛だと思って頂ければ……」

「……どうも」

シライトの目の前で、布団の上に寝ているだらしない恰好をした忍。

彼は、木ノ葉隠れの里の上忍——『写輪眼のカカシ』という異名を持つ天才忍者・はたけカカシだ。

しかし、何故各国にその異名を轟かせている彼が、こうしてだらしく横になってシライトの医療忍術による治療を受けているのか説明しなければなるまい。

タズナが木ノ葉まで辿り着く間、これといった問題は起こらなかった。

そして、ようやく依頼を出し、木ノ葉の忍を雇えたと安堵し、波の国への帰路についた後に襲撃を受けたらしい。

霧隠れの中忍——正確には抜け忍と思しき忍が二人。更に、霧の忍の中でもトップクラスの實力を持つ者が、その与えられる忍刀と共に名乗ることが許される忍刀七人衆——だった。霧隠れの鬼人“桃地再不斬が襲ってきたというではないか。

木ノ葉の忍たちは、苦戦したもののなんとか再不斬をあと一步というところまで追い詰めたところ、霧の追い忍らしき少年が再不斬を仕留め、そのまま死体を持ち帰って行ってしまった。

だが、それは仕留めたのではなく、助けに来ただけ。

千本という医療にも用いられるような針状の忍具で再不斬を仮死

状態にしたのだと、後々になって察したカカシは、一緒に波の国に来た部下の下忍たちに修行を言いつけ、少しの間修行を見た後に休むべく帰って来た……という訳である。

修行を言いつけたカカシはと言うと、写輪眼の使い過ぎで現在ダウンしている訳だが、先日より泊っているシライトの医療忍術により、外傷はほとんど完治しかけていた。

しかし、それだけでは写輪眼を用いたことにより体力の消費が戻ることではなく、今もこうして布団に寝っ転がっている。

医療忍術でどうこうできない疲労についてシライトは心配しているが、他にも心配している点があった。

護衛についた忍が、全員自分より年下の子どもという点である。

自分が、護衛に来てくれた下忍より強いと思っている訳ではない。ただ、昨日の襲撃を鑑みた場合、子供三人と大人一人で、果たしてタズナを守り切れるのだろうかと不安になったただだけだ。

しかし、自分は素人、向こうはプロ。

子供でも、忍であることには変わらない。自分などより、タズナをしつかり守れるハズだ。

無理やり自分を納得させるシライトは、滋養にと作っておいた兵糧丸をカカシに差し出す。

『どうも』と感謝の言葉を述べ、目にもとまらぬ速さで兵糧丸を口に放り込んだカカシは、もぞもぞとリュックを漁り、一冊の本を取り出した。

「……イチャイチャ……パラダイス」

「あ、ご存知で？」

「いいえ……」

「あゝゝッ！ よく見りや、自来也先生が書いてんのか、コラ!?」

「あ、ちよッ……!」

イチャイチャパラダイスなる本を取り出し、読書しようとしたカカシであったが、著者名を見て声を荒げたヒナイが、疲労で動けない彼から本を奪い取る。

「オレ、自来也先生の小説好きなんだよな〜!」

「……小説読んでるなんて……意外です」

「ちよ、返して！ 君何歳!? それは十八き——……大人が読むべき書物であって……」

「ド根性忍伝とか好きでさ。どれどれ……」

「ああ〜〜!!」

動けぬ体に鞭うち、本を取り返そうとするカカシであったが、既に元気一杯になっていたヒナイから本を取り返せるはずもなく、本の中に目を通されてしまった。

ペラペラと読み進めること数十秒。

軽くどんな内容か確かめようと速読していたヒナイだったが、その顔は自身の髪色の如く紅に染まっていく。

その間、カカシもまた顔を茹蛸のように顔を紅潮させ、硬直していた。

目をギンギンにさせ、血走った瞳で文章を読むヒナイ。

鼻からは一筋血がタラリと零れた。

そして、本を勢いよく閉じ、華麗なフォームで横になっているカカシの腹部目掛けて投擲する。

「……………これ、エロ小説じゃねえか、コラあッ!!!」

「がはッ!」

「え」

悲鳴を上げるカカシに、なんとも言えない表情を浮かべるシライト。

人の目の前で官能小説を読もうとは、そのなんたる胆力や。そして、なんとも凶太い神経だろうか。

「……………マスクで顔を隠しているとは言え……………人の目の前で官能小説は……………控えた方がいいと思います」

「……………ええ」

無表情で窘められたカカシは、シユンとした表情で布団を被る。

そんな二人の傍らで、たった今投げた本を手に取り、今一度目次からしっかりと目を通し始める人物が一人……………。

「ヒナイさん……………改めて読まないでください」

「ぎくツ!!」

好きな著者の作品とあって、ちゃんと読みたかったのだろう。

だが、聞けばヒナイは15歳。18禁の官能小説を読んではいけない年齢だ。

シライトに窘められたヒナイは、渋々イヤイヤパラダイスをカシに返還し、火照った顔を冷ますべく、外の風に当たろうと立ち上がる。

その時、ガラリと勢いよく扉が開き、三人の少年少女が現れた。

「たーだいまだつてばようくく……あー、^{づが}疲れだあ——! ……ん? カカシ先生、なんで顔赤くして布団中に隠れてんだ?」

「ちよつとナルト! 散々木から落つこちてドロドロなんだから、外で埃とか払ってから入りなさいよね!」

「……ふんツ」

いの一に家に上がる金髪のとげとげ頭な少年——うずまきナルト。

そんな彼を窘める、桜色のロングヘアを靡かせる少女——春野サクラ。

くだらないやり取りだと鼻を鳴らす黒髪の少年——うちはサスケ。

彼らこそ、今回のタズナ護衛に波の国へ赴いた下忍たちであり、木の葉隠れの里の未来を担う若者たちだ。

十七 良薬は口に苦しとは言えども

「そうですか……一度、あなた方はタズナさんと一緒に居る時に襲撃を」

「はい……」

カカシたち木ノ葉の忍が波の国に来て二日目。未だ床に臥すカカシは、第三者ではあるものの目的を共にするシライトと、情報を交換していた。

話していたのは一昨日の襲撃。間違いなくガトーの手先の者達による襲撃だったが、カカシは数秒思索し、口を開く。

「ふむ、となると……その襲いに来た輩で、ガトーの下に帰った者は居ない可能性が限りなく高い」

「……？」

「あー……八人の内、七人はやられて、一人は逃亡。んでもって、翌日——タズナさんが木ノ葉に来てから襲いに来た再不斬たちの襲撃。

二つの襲撃を考慮すると、あなた方の情報がガトーに渡った可能性は低い訳でありまして」

「はあ……」

「まず、二日連続の襲撃。攻撃を仕掛ける間隔として、余りにも短い。畳みかけるといふ意味合いも含まれていたかもしれないませんが、それにしちやあ私たちの下に来た忍が小分けだった。ここで考えられる可能性は三つ。一つ、ガトーにとって差し向けた忍が、それほど大した実力を持つ奴らではなかった。一つ、ガトーに差し向けた忍を撃退したあなた方の情報が渡らなかった。一つ、今言った二つのどちらも……です」

「ほう……」

カカシの推理に耳を傾けるシライト。

だが、いまいち理解していない様子だ。忍の世界の戦術など、彼にとっては専門外だからである。

シライトの理解していなさを察したカカシは、『ま！』と言葉を紡

ぐ。

「幸いだったのは、一齐に敵の忍が襲い掛かってこなかったところですね。じゃなかったら、もう少し重傷を負った怪我人が出たかもしれない……情けない話ですがね」

「……過ぎた話をしてもし方ありません……今は生きてる。それだけで十分かと」

「ええ。おっしゃる通りだ。だから、次こそは必ず……」

床に臥しているものの、語気を強めるカカシの言葉に、シライトは息を飲んだ。

綱手やシズネとも、また一味違う威圧感。それはまさに、鋭く研ぎ澄まされた刃のようだ。

(でも……人前で官能小説を読もうとする……)

しかし、玉に瑕な部分もある。

そのギャップが人間らしいと言えば人間らしいのだが、それにしても今迄出会ってきた上忍という存在は一癖も二癖もあった。

綱手は賭博と酒好きの豪快な女。

シズネは事あるごとに『あひイ』と変な叫び声をあげる。

そしてこの上忍は……言わずもがなだ。

天才ほど、変人が多いという説もあるが、あながち間違いいではないのだろう。

シライトは強くそう思わざるを得なかった。

「ねえ、シライトさん」

「……はい？」

カカシとの話も終わり、建設途中の橋の上でタズナの護衛に来ていたシライトは、雇われた正規の忍であるサクラに声をかけられた。

聞くところによれば、彼女は既に木登りの業を達成し、課題が終了したということ、いち早く護衛に戻って来ているとのこと。

木登り——滝隠れの里では崖登りだが、シライトにとっては幼少

期に体得したチャクラコントロールを使用した技術だ。人は、必要を迫られれば体得しようとする。シライトは、便利だからという理由で勝手に体得した技術であったが、木ノ葉の下忍にとっては、まだ習っていない技術だったらしい。

閑話休題。

不思議そうな声色で応えたシライトに、サクラは興味津々な様子で何かを尋ねようと身を乗り出してくる。

「昨日、サスケ君やナルトにやった、こう、手がパワーってなって傷を治す術ってなんですか？」

「……掌仙術のことですか？ それがどうかした——」

「あれ、教えてもらえませんか!？」

(食い気味……)

目を爛々と輝かせ、掌仙術を覚えてくれるようせがんでくるサクラ。

横で、護衛に来ていながらも、日和見した後に座禅しながら昼寝し始めたヒナイは、大声に反応せず起きることもない。

「ど、どうして掌仙術を……?」

「私、サス……じゃなかった。みんなが傷ついた時、怪我治せてあげられたらな〜って思ってた……」

「成程……」

殊勝な心意気だとシライトは感心する。

だが、サクラの心中と言う名の脳内妄想は違った。

『チツ、掠り傷を負っちゃった……』

『大変! サスケ君、治してあげる!』

『サクラ……ありがとな』

『ううん、気にしないで! 私、サスケ君のためだったら……』

『サクラ……』

『サスケ君……』

『サクラ……』

『サスケ君……』

「——つてな感じで、公私共々サスケ君を癒せる存在になっちゃえるかも！　しゃーんなろー！」

暇を持て余したが故の妄想。年頃の女の子であるため、仕方がないと言えば仕方がないのだが、内なるサクラが暇に乗じて絶賛活動中になってしまっている。

恋心のままに行動に出るサクラ。

彼女の真なる思いなど露ほども知らないシライトは、一向に教えても構わないと考えているのだが、

「……でも、掌仙術然り他の医療忍術然り、一朝一夕ではできない術なので」

「え!？」

「少なくとも……一か月は要するかと……」

「ええー!?　なんだ、期待して損しちゃった……」

どんなに才ある者であっても、医療忍術を扱うに必要なチャクラコントロールを身につけるには、一か月ほどの時間を要してしまう。

今回のタズナの護衛は、見通しとしては一か月以内に終わる。

繊細なチャクラコントロールを要求される医療忍術を体得する上で、過度の焦燥は繊細さを欠き、結果として会得を遅らせる結果となってしまうだろう。

シライトは、大蛸蟪仙人での修行——そして医療忍術のプロフェッショナルである綱手の下で修行したからこそ、あの短期間で掌仙術ができるようになったのだ。

チャクラコントロールが上手いサクラであっても、一か月以内——正確には、次に再不斬が仮死状態から復活して襲撃しに来るまで、掌仙術を会得できる可能性は限りなくゼロに近い。

そのような裏の事情は兎も角、折角意中の人のハートをゲットできると思っていたサクラは、言い渡された言葉にガツカリと肩を落とす。

しかし、『だが』と言葉を続けるシライト。

「術は無理でも……料理ならできます」

「料理？」

「兵糧丸……知ってます？」

「知ってるものにも、食べれば三日三晩戦える秘薬で、高蛋白でカロリーもあって、忍者の携帯食料にも用いられる丸薬のことですよね？」

「……その通りです」

「兵糧丸作りは、くノ一の嗜みとして授業でも習いましたから！」

えっへんと胸を張り、得意げに語るサクラ。どうやら木ノ葉の忍者学校では、兵糧丸作りの授業もあるらしい。

ならば話が早いと、シライトは人差し指を立てる。

「練り込む材料によっては、食べた人のチャクラを回復・増幅させる作用もあります……なので、それを作って友達みんなにあげてみたらどうかと……」

「そっか！ その手があったわー！」

拳をグツと握るサクラの瞳には、猛々しく炎が燃え盛っている。

（男を掴むなら胃袋を掴め！ 美味しい兵糧丸を作って、サスケ君のハートをゲットよ！）

かくして、木登りの業に勤しんでいるサスケ（とナルト）に、兵糧丸の差し入れをすることが決まった二人。

その日の作業が終わり、タズナと共に夕飯の材料をかうとともに、兵糧丸の材料となりそうな物がある程度揃えた一行は、タズナ宅へ戻っていった。

ナルトとサスケはまだ戻っていない。

居たのは、ツナミだけだ。イナリの姿は窺うことができない。

「超腹減ったわい。……む？ おうい、ツナミ。イナリはどうしたんじゃ？」

「あら？ イナリならさつき外に出てったんですけど」

「入れ違ったか？ うーむ、じゃがすぐに帰ってくるじゃろ」

タズナたちが帰ってくるより少し前に出かけたらしいイナリ。

どこに出かけたのか気になるが、時間が時間であるため、そう遠くに出かけることはないだろうと、タズナは余り気にすることなく、

買ってきた食材を台所まで運んだ。

「……手伝います」

「あら、いいの？ でも、先生もみんなも父さんの護衛で疲れてるでしょうし、一番疲れてない私が料理するわよ」

「いえ……家事も疲れるでしょうから。それに、分担すれば夕飯も早くできますから……」

「あっ……わ、私も手伝いますー！」

率先してツナミの手伝いを申し出るシライト。続いて、サクラも名乗りを上げ、腰かけていた椅子から立ち上がり台所へ向かう。

その間、手持ち無沙汰になってしまったヒナイは、橋造りで疲れているタズナに目を遣った。

「おっさん。マツサージしてやろうか、コラ」

「おお、頼むわい。力仕事で、体中超凝ってるからの。超強く揉んでくれ」

「オレに強く揉めたあ……覚悟しろよ」

「おい、なに不穏なこと言つとるんじゃー！」

不敵な笑みを浮かべて手をワキワキさせるヒナイに、冷や汗を掻くタズナは、常識の範囲内で揉み解すよう窘める。

そんな家の中を眺めるカカシが一言。

「いやあく、これぞチームワークでしょ。うんうん」

「カカシ先生は、今は食っちゃ寝してればいいだけなんだから楽よねー」

「……サクラ。もうちよい言い方ってモンがあるでしょ」

教え子の辛辣な言葉にシュンとせざるを得ない、カカシなのであった。

もうすぐ空が茜色に染まる頃、イナリは風呂敷に包んだ箱を片手に、昨日も訪れた場所へ向かって歩いていった。

気分は、親に秘密で飼っている犬に餌付けに向かうようなものだ。

だが、その足取りは嬉々に満ちたものではなく、昨日より家に泊まることになった木ノ葉の忍の存在に苛立ち、地面を怒りのままに踏みつけるようなものとなっていた。

特に、ガトーを倒して将来火影になると息巻いていた金髪の少年の存在が、癪に障る。

苛立ちは歩幅を大きくし、イナリが思っていたよりも早く目的地に辿り着くこととなった。

鬱蒼と葉が生い茂る林の前に、数拍躊躇いを覚えつつ、手に持つ風呂敷をジツと見つめた後、意を決して林の中へ足を踏み入れる。

——死んでなきやいいんだけど。

わざわざ必要もないのだが、音を立てぬようゆっくりと歩を進めていき、昨日と同じ場所に着けば——居た。

フードを深く被っているため、顔までは確かめられないものの、体育座りで寝息を立てている少女の姿が見える。

ゆっくりと上下する肩に安堵の息を漏らした後は、少し考え、近くの茂みをわざと手で揺らした。

それが目覚まし時計代わりになったのか、少女はバツと顔を上げ、瞼が開き切らない目でこちらの方を睨んでくる。だが、自分の目の前に居る者が、昨日出会った少年だと分かると、『何しに来た?』と言わんばかりのジト目で、尚も睨んできた。

——そんな目をされたら、近づこうにも近づけないじゃないか。

少女の態度に心の中で文句を垂れながら、勇気を出して一歩踏み出すイナリは、風呂敷を広げる。

中に入っていたのは、簡素な弁当箱。

蓋を開けば、とても綺麗な形とは言い難い形状の握り飯と、小さな焼き魚が二匹入っている。

豪華とは言えないラインナップ。

しかし、朝から飲まず食わずの少女にとって、これ以上ないほどの馳走ではあった。

ぐう、と腹の鳴る音が響く。

「……食べば」

「なんで？」

「おなか……減ってるんでしょ？」

返事の代わりに、今一度少女の腹が鳴る。

「さっさと食べてよ。ボクもこれから夕ご飯なんだから、早く帰らないと……」

「なんで、わざわざ私のところなんか持ってきたの？」

「へ？　そ、そんなの……今言った通りじゃないか。お腹……減ってる……」

「お腹が減ったらなんなの？」

「……いつか、お腹が空き過ぎて死んじゃうじゃないの？」

「じゃあ、なんで私が、お腹が空き過ぎて死なないように、ソレを持ってきたの？」

続けざまに問いかけてくる少女に辟易するイナリは、多少の——
否、かなりの面倒くささを覚え、思わず声を荒げてしまう。

「つゝつゝ、ここの近くはボクがよく来る釣り場なんだ！　そんな近くで人が死んでみろ！　その……人が居るって知ってたボクがなにもしなかったみたいで、悪者みたいじゃないか」

「知ってて何もしなかったら、なんで悪者になるの？」

「へ？　……そ、そんなの知らないよ！　あゝ、もううるさいな！　ボク、もう帰る！　その弁当箱、明日取りに戻るからな！」

半ば強制的に話を終わらせ、地団駄を踏むかのような所作をした後に、茂みをかき分け、大急ぎで帰路につくイナリ。

苛立つ少年の背中を見送った少女——濃霧は、なぜ彼が怒ったのかわからぬまま、蓋が開けられている弁当箱に目を遣る。

何も知らぬ第三者の施しを受けることなど、ガトーの下で働いていることはほとんどなかった濃霧だが、空腹には抗えない。

とりあえず、不格好な握り飯を手に取り、一齧り。

「……しょっぱい」

白く濁った右目から知らぬ間に流れていた涙ごと白飯を食べた濃霧は、これまた塩味が涙のものと知らぬまま、モクモクとイナリが持ってきてくれた弁当を食べ進めるのであった。

ナルトたちが波の国へ来て三日目。

まだ木登りが完全に出来ていないナルトとサスケは、何度も何度も登っては落ちてを繰り返していた。

木の幹に刻まれた数多もの傷は、彼らが不撓不屈の精神で登り、クナイで印をつけた跡だ。

その努力の跡とも言える傷跡を、次は超え、さらに上へ進もうと駆けあがる二人に諦める様子は一切ない。

しかし、二日続けて朝から晩まで修行することに疲弊しない訳ではなく、零れる玉のような汗と、力を振り絞っているかのように歪む顔が、彼らの疲労を如実に表していた。

「はあ……はあ……！」

疲労により、一旦立ち止まるナルト。

目の前にそびえ立つ木が、初めて見た時よりも高くそびえているような気がした。

「ちつきしょう……こうなったらー！」

苦心に顔を歪め、ナルトが懐から取り出したのは、真っ黒な丸薬だった。

(サクラちゃんの愛情たっぷり兵糧丸を食べるってばよ！)

意中の女の子が、差し入れにと贈ってくれた兵糧丸。

これを食べれば、体力やチャクラだけではなく、ナルト個人のモチベーションを保つことができるというものだ。

ニマニマと笑みを浮かべつつ、ガブリと一気に半分ほど口に入れるナルト。

咀嚼すること数秒。

始めは笑顔だったナルトだが、だんだん何とも言えない顔へ変化していく。

甘いような、渋いような、しょっぱいような、苦いような味。

それでいてボソボソしているような、しかし硬いような、ネチヨネ

チョしているような食感。

「ま、まっじい……」

ゲー、と舌を出すナルト。

ここにきて、漸くサクラが執拗に『味については追及するな』という旨の言葉を言った意味を理解できた。

良薬口に苦し。

愛情たっぷり（だと、ナルトは考えている）だと言えども、不味いものは不味いのだ。

味のよい携帯食料を目指して作ったのであれば、もう少し味や食感
はなんとかあっただろう。

しかし、材料も限られている中、消費したチャクラを回復できるよ
うにと作られた兵糧丸は、そこまで味を追求するのは酷だった。

「うっ……」

隣で『そろそろ……』と兵糧丸を齧ったサスケも、顔を顰めている。
どうやら、サスケにだけ美味しい兵糧丸を作るといふ鼻肩をした訳
ではなさそうだ。

そう、これは平等。フェアだ。

ただ、兵糧丸を食べるだけ。

こんな時にも、ナルトのサスケに対する対抗心が燃え上がった。

顔を顰めるサスケを横目に、残った兵糧丸を一口で食べ、荒く噛み
潰した後一気に飲み干す。

カーッと体の奥が熱くなっていくような感覚。これがチャクラの
回復する感覚なのだろうか。

辛うじて甘みも感じ取れたことから、糖分も入っていたと推測でき
る。

疲れ切った身体に、露ほどの甘みが染みわたっていく。

そしてなにより、サクラが頑張って作ってくれた（であろう）兵糧
丸だ。

ナルトのやる気は、漲るに漲っていた。

「っしやー!! まだまだいけるってばよオ！」

「っ……っ！」

自分よりも早く兵糧丸を食べ終えたナルトを見て、対抗心を燃やして自分の兵糧丸を大急ぎで食らうサスケ。

実力は、ナルトより自分の方が上だという自負がある。だからこそ負けられない。負けたくない。

サスケは一足早く木登りの業を再開し、何度目か分からぬ落下をしているナルトを横目に、胃袋の底の重みを覚えつつ、再び駆け上るのだった。

まだ、バラバラなチームワークの三人。

しかし、確実に三人は互いを高め合う仲へと発展していつていることに、間違いはなかった。

十八。 さらにもう一発！

「このオレが……この世に英雄ヒーローがいるってことを、証明してやる!!」
夕食後、そう息巻いてタズナ宅を後にするナルトは、木登りの業に再度向かっていった。

ふとタズナが漏らしたイナリの義父・カイザの名。続いて話された、波の国にて起きた英雄の悲劇を聞き、ナルトは奮起したのだ。

だが、一日中木登りの業をしたのだから、サクラ特製の兵糧丸を食べているとしてもチャクラは限界に近いハズ。

やんわりと制止するカカシの声を払いのけるナルトの背を見たシライトは、ポリポリと頬を掻き、徐に立ち上がった。

「すみません……今日、皿洗いは休んでいいですか？ あの子を見に行ってきます……」

「ん？ そんな心配しなくても大丈夫ですよ。ああ見えていっぱしの忍者ですから」

「いえ……そうじゃなくて……」

遠慮気味に制止しようとするカカシであったが、シライトは彼を一瞥し、言葉を紡ぐ。

「昔、似たような無茶をしたもので……放っておけないんです。お節介なので……」

「……まー。そこまで言われちゃあ、止める方が失礼だ。ナルトの奴のこと、死なないように見てやって下さい」

「はい……」

カカシの承諾もとれたところで、さっさとナルトの下へ向かうシライト。

ナルトが奮起することについては一向に構わないと考えているシライトであるが、だからといって、頑張り過ぎて死に至ってしまつては話にならない。

ならば、専属医的なポジションで頑張る者をサポートしてあげることが、医者である自分にできることだろう。彼はそう考えていた。

そして何より、今のナルトは、岩石を除去しようと孤軍奮闘してい

た昔の自分に重なる。

これがシンパシーというものののだろう。

最大限の手伝いをして、ナルトが木登りできるようチャクラを回復してあげようではないか。

そう思つて、暗がりの中で必死に木登りするナルトを見上げる。

何度も駆け上がろうと努力して出来ただろう木の皮がはがれている様や、目印にクナイで切りつけた跡は、くつきりと刻まれていた。

「はあ……はあ……ん？ しらたきの兄ちゃん、来てたのか？」

「しらたき……まあ、ええ。ああ、気にしないで……もしもの時のために、監督に來ただけですから」

「そっか！ でも、オレってば『もしも』なんてしでかさねーから、安心して暇潰してくれればいいよー！」

「そうですか……では、頑張つて下さい。ささやかながら、応援しますので」

「おうー」

シライトの激励も受け、額当てのポジションを直し、再度木登りに勤しむナルト。

いきなり数メートルも上へ行けることはないものの、僅かながら登れる高さは伸びてきている。

しかし、登る数が十、二十、三十と増えていき、夜空高くに月が上り、更には下り始めた頃、ナルトの登れる高さは徐々に低くなつていく。

そして、一旦休憩だと言わんばかりに寝転んだナルトは、五分も経たぬうちにいびきを掻きながら、眠りに入ってしまう。

因みに、通常人が眠りに落ちるには十五分ほど要する。五分以内に眠りに落ちる場合は、それは『眠りに落ちた』というより『気絶した』に近い状態だ。それもそうだ、朝から晩まで修行した拳句、尚も休憩なしに三時間以上ぶっ通しで修行したのだから。

寝入っているナルトを見て、ふうと一息吐いたシライトは、起こさぬようゆっくりナルトを背負い、そのままズナの家へ向かつて歩み始める。

寝る場所も、睡眠中の体力回復に大いに関係ありだ。

固い地面より、フカフカの布団。

ナルトが早く木登りの業を成し遂げたいと願うのであれば、体力回復のために寝る場所もしっかり管理せねばなるまい。

(……明日、もう少し兵糧丸の材料探そうかな)

密かに、体にいい兵糧丸を作るための材料のことを考えるシライト。

頑張る者でなくとも放っておけないのは、最早彼の性となっていた。

——また、来てしまった。

そう反省するかのような考えを頭に巡らせるイナリは、わざわざ自分の朝ごはんを残して作った粗末な弁当を携え、あの場所へ向かって歩んでいた。

迷うことなく、今度はわざとらしく大きな音を立てて近づく。

開けた場所に出れば、音に気付いて身構えていた濃霧が、イナリを見るなり警戒を解いた。

そして、仄かにイナリから漂う美味しそうな匂いに、彼女の胃袋が『ぐう』と目覚めの時を告げる。

腹が鳴っても赤面しない凶太い神経をした濃霧を前に、イナリは既に空になった前日の弁当箱を回収し、代わりに持ってきた弁当をちよこんと濃霧の前に置く。

「はい」

「また、持ってきたのか」

「……文句ある？ だったら、早く動けるようになってどっかに行つてよ」

「なんで持ってきたの？」

「う……昨日も言ったじゃないか。見ないフリして死んじゃったら、知ってるボクが悪者みたいだって」

「見ないフリしたら、なんでも悪者になるの？」

「それは……ば、場合に……よる？　　ってやつだよ」

看過すれば、全て悪なのか？

それは非常に難しい問題だ。

だが、イナリが口にしたように、場合による問題が非常に多いとは言える。

困っている人を見過ごせば、それは全て悪なのか？

もし、その怪我をしている人が不慮の事故で怪我を負ったのならば。

もしくは、金遣いが荒い所為で借金を作り、借金取りに追われて暴行を受けていたならば。

時と場合、そして各々の主観によって、見過ごした場合とそうでない場合のどちらが悪でどちらが善かは変わってくる。

——では、お腹が減っている人へ、ご飯を分けてあげるのは善だろうか？

——もし、その空腹な人が、悪行に加担している者であつたならばどうだろうか？

様々な可能性が存在する。

しかし、子供という生き物は思慮深くはなれない。歳を重ね、経験を積み重ねば叶わないものだ。

目の前の人物がどのような物で、どのような経歴を持っているかなど露ほども知らないイナリは、早速弁当に手を付けようとしている濃霧を見つめる。

三日目となると、流石に手を付けるのが早い。

内心どう思っているかは分からないが、徐々に心を開いてくれているには違いない。

まず握り飯に手を付け、モリモリと口の中へ掻きこむ濃霧。

よく見れば、初めて会った時よりも血色がいい。

それでも、目の下に深い隈が刻まれているあたり、全快とは言えなさそうだ。眠れていないのだろうか？　更にその様相、絵本で見たことのあるパンダという生物のようだと、イナリは感想を持った。

気付けば、濃霧が弁当を完食するまで観察が続いてしまっている。
一息吐き、ジト目で視線を向けてくる濃霧に気が付き、イナリは慌
てて空になった弁当箱をまた回収した。

「ま……まだ動けないの？」

「体の節々が痛い」

「……やっぱし、お医者さんに見てもらった方が」

「いい」

「~~~~っ！ 分かったよ、もう！」

やはり、善意を蔑ろにされるのは氣にくわない。

子供らしく憤って帰路につくイナリは、また明日自分はここへ来る
んだらうなど、自分に呆れを覚えつつ、急ぎ足で茂みをかき分けて進
む。

四日目、五日目、そして六日目と時が流れた。

「つしやく！ 今日こそ天辺まで登れるってばよ！」

「氣の持ちようは大切ですからね……」

サスケよりも一足早く、木登りの業をするための林にきたナルトと
シライトの二人。

そそっかしい子供のナルトと、ゆったりとして老人のようなシライ
トではウマが合わないと思いきや、意外と打ち明けている二人は、こ
うして並んで歩いて来ている。

ここまで来る間、語り合う話題は好きな食べ物など、他愛のない話
だ。

しかし、幸いにも木ノ葉出身ではなかったシライトは、ナルトの噂
など知る由もなかった為、これといった偏見無くナルトと語り合えて
いた。

それだけで、ナルトにとっては嬉しいと思えるなど、これまた知る
由もないまま。

とにもかくにも、見知らぬ第三者同士から、学校の生徒と保健室の

先生程度の間柄になれた二人は、草花が咲き乱れる修行場に辿り着いた。

だが、そこには今まで見なかった人影が一つ。

「ん？ あの姉ちゃん、誰だっつてばよ？」

「……地元の方だと」

「んく……それもそっか！」

朝の爽やかな気候に相応しい快活な声を上げながら、手をポンと叩くナルト。

その大仰な所作が目についたのか、桃色の着物を身に纏っていた人物は、二人の方へ視線を向けた。

長い濡羽色の髪。

朝の木漏れ日によって照りをもつ薄紅の唇。

流れるような挙動で草花を摘んでいるその様は、美女が花を摘んでいるようにしか見えない。

しかし、

(……男の人……だろうなあ)

僅かな骨格の特徴から、女性ではなく男性であることを見抜くシライト。

それにしても『美人』という言葉が似合いそうな人物は、少しばかり微笑み、二人の方へ一礼してきた。

「おはようございます。お散歩ですか？」

「いえ……そうでは——」

「あのさー！ あのさー！ 姉ちゃん、何してんだ？」

美人の問いに応えようとするシライトを遮り、ずんずん前へ身を乗り出し、好奇心のままに疑問を投げかける。

すると美人は、しやなりと体を傾け、携えていた籠の中身を見せてきた。

「薬草を摘んでいたんです」

「やくそー？ これが？」

「ええ」

「ふーん……オレも手伝うつてばよー」

「ああ、いいんですか？」

「おう！ ほら、しらたきの兄ちゃんも！」

「……はい」

半ば強制的に美人の薬草摘みに手伝わされるシライト。

だが、この場にある草が薬草になるとは、綱手の下で薬草学も学んだシライトでも知らなかった。

つまり、地元の間人しか知らない情報とも言える。

早起きは三文の徳とは言ったものだ、シライトは内心ウキウキして薬草摘みを開始する。

「因みにこれは……どのような効能が？」

「体の痺れです」

「成程……体の痺れ、と」

「……熱心にメモをとってらっしゃいますが、薬師で？」

「いえ……医者……の、見習いです」

「そうなんですか。波の国の……ではないでしょうか。地元の人なら、この薬草についても知ってらっしゃるでしょうし。もしかして他の国から？」

「ええ、まあ……生まれは滝なんです、今は火の国のあっちこっちを旅して」

「へえ……」

美人は、指を唇に当てながらクスクスと笑みを絶やさない。

これは女と間違えても仕方がない。そう思ってしまうほど、彼の笑みは見る者を魅せるものであった。

薬草摘みに夢中のナルトと、性欲に乏しいシライトでなければ、下心を持って接しかねなかっただろう。

だが、特に問題もなく薬草摘みは進んでいく。

そろそろ籠に薬草が満杯になる……そんな時、美人はふと、流し目でシライトを見つめてきた。

一瞬、美人の表情に影が差していたが、二人は気がつかない。

「一つお伺いしたいことがあるんですが、構わないでしょうか？」

「はい？ あ……はい、どうぞ」

「では、失礼……医者というご職業であるとお聞きしましたが、治療する相手がどのような人物であるか、気になさったりしますか？」

「それは……どういう意味で？」

「いえ、些細なことです。相手の職業とか、出身とか、どういう人柄とか」

「ああ……積極的に聞いたりはいしませんが、話の流れで聞いたりします……けど、あんまり気には」

「そう、ですか……」

憂いを浮かべた表情を見せる美人は、少し顔を俯かせ、言葉を紡ぐ。「では、もう一つだけ。相手のことをあまり気になさらないとのことですが……もし、助けた人が悪人だったら、どう思いますか？」

「……え？」

「どう……思いますか？ お聞かせ頂きたいです」

やや語気を強める美人に、シライトは少しばかり言葉が詰まる。

そこへ、ムツと顔を膨れさせたナルトが、薬草を掴んだ手をブンブンと振るう。

「オレだったら、反省してなきやもっぺんボゴボコにしてやるってばよー！」

「反省してたらいい、と」

「おう！ カンダイな男つてのは許してやるんだって、ヒナイの姉ちゃんも言ってたぞー！」

「？ ……成程」

どうやら、性格が似通っているらしく、この数日ですっかり仲良くなったナルトとヒナイ。ナルトは、そんな似た者同士の教えを受け、今の答えを出したようだ。

ナルトの答えにはクスリと一笑し、納得した様子を見せる美人。

そして、彼の視線はシライトへ向いた。

——あなたは？

そう、促してきた。

「……僕も、ナルト君と同じですかね」

「それはどうして？」

「……医者にできるのは、怪我や病を治して、患者の未来へ命を繋ぎとめること……その方の後の人生については、どのような素性の方であれ、善くて幸せな道を歩めるように……そう、賭けてるんです」

「翻り、羽織の背中に堂々と描かれた『賭』の文字を見せつけるシライト。」

一瞬、ぽかんと呆気にとられた美人は、先程と同じようにクスクス笑う。

「あなたと君は、とても面白い人ですね」

「それにしても、医者がんばる文字背負ってんのって、なんか変だつてばよ。手当してもらおう方は、気が気じゃねーっつーか……」

「ふふっ、君の言う通りですね」

「……これ作つたの、僕じゃないんで」

「医者が『賭』の文字を背負うことに否定的な二名に、苦い顔を浮かべるシライト。」

仕方がないだろう。これを誂えたのは、賭け事が大好きな師匠なのだから。

しかし、よくよく考えてみれば、ナルトの言い分も分かる。ここは彼の言葉の通り、一度考慮しなければいけない案件かもしれない。

人知らず苦悩するシライトがウンウンと唸っている間、ナルトと美人は話し進めていた。

「——人は、大切な何かを守りたいと思った時に、本当に強くなれるものなんです」

「うん！ それはオレもよく分かってるつてばよ」

「どうやら話が終わったらしい美人は、徐に立ち上がって踵を返す。君は強くなる……またどこかで会いましょう」

「うん！」

「あ……それと……ぼくは男ですよ」

「！」

美人が自分を男とカミングアウトしたことに、ナルトは分かりやすくシヨックを受けたリアクションをする。

「この世は不思議だなあ……」

「まあ、事実は小説よりも奇なりと言いますし……」
「ん？ なんだそれ」

「……現実には、創作より不思議で面白いという意味です」
「ほー！ ナルホドな！」

小説作家もびつくりな運に巡り合わせ、東奔西走しているシライトにとつて、その諺はジンと心に染みわたるものなのだ。

こうして、見知らぬ美人との会話を経た二人は、後にやって来たサスケと共に木登りの業（シライトは只の監督だが）に努めるのだった。

「んじゃ、しゅっぱーっ!!」

「なーに張り切っちゃってんのかしら、ナルトったら」

ようやくナルトが木登りの業を成し遂げた翌日、彼は元気百倍で、サスケと共に晴れてタズナの護衛に戻ることができた。

夜中まで修行し、本来なら次の日の昼まで寝込んでいても不思議ではない疲労がたまっていたハズだが、シライトの献身的な世話により、寝坊することなく起床ができたようだ。

「今のオレってば、再不斬が来てもボコボコにしてやれるってばよ！」
息巻いてシャドーボクシングをするナルト。

余程、木登り出来たことが嬉しかったのだろう。

忍者と言えども、まだまだ子供。困難を乗り越えた先で成し遂げた達成感、一入のものであり、喜びを表に出さないと落ち着かないようだ。

そんなナルトに、サクラは呆れている。

「ホント、無駄に元気ねー……」

「これもうずまき一族ならではのしょ」

「うずまき一族？ ねえ、カカシ先生。うずまき一族ってなに？」

「ん？ んー……ま！ 元気一杯で、ご長寿が多い一族のことだ」

「……そんな一族、ホントにあるの？」

「さあーで、今日からオレも戦線復帰だ。皆、やる気出していこうじゃ

ないか」

「先生！ まアーたお得意の嘘!？」

答えをはぐらかすカカシに憤るサクラは、拳を振りかざしている。彼女の言葉を聞く限り、カカシはいつも他愛もない嘘を吐いているようだ。

「……ヒナイさん。お坊さんの、嘘を吐くのはどうなんですか……？」

「不妄語つー戒律があつてな。アウトだ。つーか、嘔吐きまくるのは人間性の問題じゃねえのか？」

「うっ……!」

坊主の言葉が、カカシの心に突き刺さる。

「……因みに、かなりの頻度で虚言を吐くようであれば、虚偽性障害、若しくは統合失調症など……病気の疑いもあるので、一度病院へ……」

「うっ……!」

さらにもう一発!

今度は、医者 of 淡々とした言葉が突き刺さった。

この時、少し……ほんの少しだけ、カカシは嘘を言うのはやめようと心に誓うのだった。

そのように、出発前に家の前でわちゃわちゃしている時、家の中から挙動不審になったツナミが出てくる。

「ねえ、父さん。イナリ見てない？」

「イナリじゃと？ 朝飯は一緒に食ったし、部屋に居るんじゃないのか？」

「ううん。見てみたけど、どこにも居なくて……」

「なに？ むう……弱ったわい」

「じゃあ、オレが探しに行くよ。こう見えて、人探しは得意だからな」
「……もしもに備えて、ついでに僕も」

イナリが居らず焦っているツナミ。

そこへ、ヒナイとシライトがイナリの搜索に名乗りを上げる。後者は兎も角、前者は、ああみえて忍者で言う所の『感知タイプ』とのこ

と。

見知った人物の場所なら、ある程度距離が離れていても見つけられるらしい。

「そうか。じゃあ、頼んだ」

ホツと一息つくタズナは、今一度橋の有る方角へ体を向ける。

「それじゃ、イナリくんはお二方に任せて、私たちは橋の方に向かいましようつと」

「よおーし！ どっからでもかかってきやがれればよー！」

「今から来ること前提に話進めないでよ、もう！」

護衛は正規の忍の仕事。

そう言わんばかりに歩を進めるカカシに、息巻くナルトと飽き飽きするサクラが声を上げ、サスケは無言で付いて行く。

——今日の霧は、いつもより重いような気がした。

十九 五里霧中

「イナリったら、こんな朝早くにどこに出かけてるのかしら……」

息子の安否が心配で、ぼやきながら皿洗いをするツナミ。

九人分の食器洗いは、それなりの労力だ。夏ならばいいば、土地柄も相まって未だうすら寒い波の国では、食器洗いの際の水が冷たくてたまらない。

余所の人間に皿洗いを手伝わせるのは少々憚られるが、こういう時ばかりは、相手の厚意に甘えて、手伝わしてもらいたくなる気分にもなる。

だが、今ここに居るのは一人。

早々に片付け、洗濯に掃除など、他の家事を……。

そう思った時、突然玄関の扉で大きな音が鳴った。

何事かと息を飲んで様子を見に行けば、穏やかでない様子の男二人が、刀を携えながらにやにやとツナミの方を見つめてくる。

「アンタがタズナの娘か？ 悪いが一緒に来てもらおう」

人質に、ツナミの身柄を確保しに来た男たち。

体格のみならず、鋭利な刃物を携える男二人に真面な抵抗ができるハズもないツナミは、心の中で尚もイナリの無事を祈り、ガトーの手先たる彼らに連れていかれてしまうのだった。

一方、ナルトたちの下では既に激戦が繰り広げられていた。

建設途中の橋に辿り着くと、タズナと共に橋造りを手伝ってくれていた波の国の者達が、血を流して倒れていたのだ。

間違いない、これはガトーたちの——再不斬の仕業。

一気に警戒を最大限に高める木ノ葉隠れ第七班。

そんな彼らを取り囲むよう、突如として現れたのは再不斬の水分身だ。オリジナルの十分の一程度の性能しか出ない水分身であるが、以

前は手も足も出なかったサスケ。

しかしサスケは、一瞬のうちに両手のクナイで水分身を一掃し、分身らをただの水へ還してみせた。

「ホー……水分身を見切ったか。あのガキ、かなり成長したな。強敵ライバル出現つてとこだな……白」

「そうみたいですな」

「あ——!! あのお面野郎オ!!」

サスケの活躍に齒軋りしていたナルトは、現れた本物の再不斬と、追いつ忍の仮面を被る少年の登場に、指をさしつっつ大声を上げた。

「どうやら、カカシの予想は的中していたらしく、以前再不斬の死体（仮死状態だが）を持ち帰った彼は、他でもない再不斬の味方であったらしい。」

「余りにも堂々と横に並び、『自分たちは仲間だった』と主張しているようで、ナルトのみならず他の面々も少なからず騙されたことに対する嫌悪感を覚えていた。」

「騙し騙されるのが忍の世界だが、やはり騙されるのは腹立たしいということだ。」

「アイツはオレがやる。下手な芝居しやがって……オレはああいうスカしたガキが一番嫌いだ」

「カツコイイ、サスケ君♡」

「ぐぬぬ! いや、オレがやるつてばよ! サスケエ! おめーは引っ込んでろ!」

「ナルト! ちょっとアンタ黙ってなさい!」

敵前にも拘わらずわちゃわちゃと騒ぐ三人。

正確には、騒いでいるのはナルトとサクラの二人だけであるが、どちらにせよカカシはやれやれとため息を吐く。

「ほどほどに余裕がある分には構わないが、それが油断となつてしまつては元も子もない。」

「来るぞー!」

「っ!」

カカシの注意を促す発言が飛んだ後、刹那の間を突き、白と呼ばれ

た仮面の少年が千本を片手にサスケに肉迫する。

目にもとまらぬ瞬身の術。

だが、辛うじて見切ったサスケは、振るわれる千本をクナイの刃で受け止めた。

今の所、力は拮抗しているらしい。

両者の忍具は押しして押されてを繰り返し、その場から動く様子を見せない。

千日手にも見えない光景。だが、これも白の狙いだった。

辺りに、水分身を破られたことによつて撒かれた水——水遁系の忍術を扱う者にとつて、水は不可欠だと考えれば、それらがどのような狙いで撒かれたのだろうか？

答えは単純。

空いた片手で印を結ぶ白に、誰もが目を見開く。

忍術を発動するには印が不可欠だが、それらのほとんどが両手によつて結ぶものがほとんどだ。

初めて見る片手の印に誰もが驚く中、白の凶刃が牙を剥く。

秘術、千殺水翔。

まき散らされた水が一斉に浮かび上がり、鋭利な千本の形となり、瞬く間にサスケを貫かんと宙を翔けた。

「サスケエー！」

ナルトの声が響く。

純粹に仲間を心配する声だ。

だが、そんなチームメイトの声に応えんばかりに、サスケは襲い掛かる水の千本を掻い潜り、上へ跳ぶことによつて逃げた。

消えた錯覚せんばかりの疾さ。

自ら繰り出した千殺水翔に巻き込まれないように距離をとった白は、つい先ほどまでサスケが居た場所で爆ぜる水に視界を奪われ、上へ逃げたサスケを見逃した。

しかし、上空より飛来する手裏剣が回る微かな音に気が付き、一度、二度、三度とバックステップしてそれらを躲す。

そして、手裏剣が白を橋の端まで追い込み、彼を真横に避けさせた

時だった。

「案外トロいんだな……これからお前は、オレの攻撃をただ防ぐだけだ！」

「!!」

背後をとられた!

すぐさま振り返る白に、今度はサスケのクナイが牙を剥く。

振るわれる腕を止めることによって攻撃を防いでみる白だったが、続けざまに投げられるクナイ、そして躲す為にしやがんだところへの蹴りに対応し切れず、まんまと一撃をもらってしまった。

元々暗部に居た白に勝るスピードで、彼を打ちのめしてみせたサスケ。それだけでうちはサスケという下忍の、同年代の下忍とのフィジカルの違いが、如何に異常であるかが分かるだろう。

(す、すげえ……!)

余りに速い攻防を前に、ナルトは茫然と彼らの戦いを見るだけだった。

ナルトは、この一週間で強くなった——強くなったとばかり思っていたが、サスケの戦いぶりを見ることで、少しだけ自信が喪失するかのような感覚を覚える。

だが、まだだ。まだその時ではない。

今、出しゃばれるポイントがないのであれば、必要になった時に出しゃばればいいではないか。

(うん! それだってばよ!)

必要ない時に出しゃばり、状況を悪化させるのはまさしくバカのやる真似だ。

しかし、サスケがピンチとなり、自分がサスケを助けに行つて白を倒せば……、

『う〜……』

『フツ、世話が焼けるつてばよ!』

『きやー! ナルト、カツコイイー!』

と、なるハズ。

緊迫した状況で、こんなことを考えられる辺り、ナルトの肝は大分

据わっていると見えよう。

だが、状況は思っていたよりも早く変化を見せ始める。

再不斬の催促の言葉に『残念です』と呟く白から、鳥肌が立つような冷気が溢れ始め、瞬く間にサスケを取り囲むように、無数の氷で出来た鏡が浮かび上がった。

一体何だと周囲を警戒するサスケを前に、白はなんと、氷の鏡の中へ入る。

秘術・魔鏡氷晶。まぎようひょうしゅう

「じゃあ……そろそろ行きますよ。ボクの本当のスピードをお見せしましょう」

「っ……うぐうっ！　ぐあああ！」

反響するように四方八方から聞こえる声に、得も知れぬ寒気を覚えたサスケだったが、鮮烈な痛みが体中を襲い掛かる。

余りにも熾烈な攻撃。

四方八方から飛来する千本による攻撃を前に、サスケはただただ急所から外れるよう身を防ぐしかない。

「っ……サスケエー！　ちつくしように、てめエー！」

チームメイトの体に無数の傷が刻まれることに対し、我慢ならないナルトは、怒りのままにクナイを投げ飛ばす。

しかし、投げ飛ばしたクナイは、氷の鏡から上半身だけ現した白に掴まれてしまい、そのまま地面に捨てられてしまう。

その光景に、遠距離からの攻撃ではなんにもならないと悟ったナルトは、感情のままに駆け出そうとした。

だが、

「迂闊に突っ込むな！」

「っ！」

カカシの一喝に、足がピタリと止まる。

いや、それだけではない。

服がピンと張り詰めているような違和感を覚え、振り返ってみれば、プルプルと凍えているかのように震えているサクラが、ナルトの服を掴んでいるではないか。

顔が青ざめている。

無理もない話だ。意中の人が、あれだけ無残にもズタズタにされてしまっているのだから。

しかし、ただ一つサクラにとって幸いだったのは、自分と違って感情——特に憤怒を露わにするナルトを目の前にすることで、至って思考は冷静でいられたままだったことだ。

漂う冷気と、サスケが今すぐにやられてしまうのではないかという恐怖に身を震わせながらも、なんとか息を整えたサクラは口を開いた。

「カ、カカシ先生の言う通りよ！ 考えも無しに突っ込んだんじゃ、返り討ちにされるのが目に見えてるわ！」

「だったら、サスケを見殺しにしろって言うのか!? サクラちゃん！」
「待って！ 考えがあるから！ だから待って。待ってて……！」

「サ、サクラちゃん……」

待ってと何度も口に出しながら、ポーチを漁り始めるサクラ。

ナルトだけではなく、サスケにも伝えるような口調だった。

サクラを目の前にし、少しばかり平静を取り戻しナルトは、今にも動き出しそうな体を自制しつつ、サスケが居る場所を睨む。

そんな中、再不斬と対峙するカカシは、サスケのために奮闘している二人を一瞥し、『そうだ』と小さく頷いた。

（確かに、血継限界持ちのあの子相手に、サスケ一人じゃあ叶わない……だが、一人がダメでも二人なら、三人なら勝てるかもしれない）
「でも、まあ……オレはさっさとお前を倒すことに集中させてもらおうよ」

「ふんっ！ オレにもう写輪眼は通用しねエ。やられるのは……てめエの方さ！」

クナイを構えるカカシに、鬼人が首切り包丁を振るう。

少し時間は遡る。

朝食を早めに食べ終えたイナリは、最近日課となりつつある、とある少女への弁当配達へ向かっていた。

昨日の夕食では、少しばかりナルトとの口論——ほぼ一方的なものであり、ナルトの言葉に黙らされてしまったが——に発展してしまい、普段以上に家に居た堪れない気分になっていたのだ。

——気分転換に、空腹の人間に食料を分け与える善人気分になろうか。

弱虫な自分では、英雄など大層な称号を持つ人間にはなれはしない。

できるのは、少しばかりの善行のみ。

それでも、あの名も聞いていない少女に弁当を届ける度、自分がマシな人間になった気分になれ、荒んだ気持ちが多少楽になれた。

そして、今日もまた来てしまった。

「来たよ」

「ん」

躊躇いなく茂みを抜ければ、端的に応える少女が視線を向けてきた。

「ほら」

さっさと弁当を置けば、少女——濃霧は、無言で弁当を食べ始める。

当初の箸を扱う際のぎこちなさもなく、顔色もよくなっている彼女は、五分も経たぬうちに弁当を完食した。

咀嚼の音も消え、静寂が辺りを包み込む。

イナリは、すぐに弁当箱を回収して帰宅しようかとも考えたが、今はどうにも帰る気になれない。

「……ねえ、ねえちゃん」

「なに？」

「この国の人じゃないよね？ どっから来たの？」

「生まれは水の国……だったはず」

「だったはずって……どういう意味だよ」

「小さい頃に身売りされたから、大して記憶がない」

「！」

衝撃の事実息をのむイナリ。

容易く聞いていい内容ではなかった。子供ながらに、地雷を踏んでしまったかと冷や汗を流すイナリ、尚も平坦な様子で佇む濃霧の顔色を窺う。

「ご、ごめんなさい……」

「なんで謝るの？」

「そういうの、あんまり聞いちゃいけない話だと思って」

「私にとっては、なんの価値もない話。今はただ、私を飼ってる人間の
下で働くだけだから」

「？ だ、誰だよそんなヤツ」

人間を飼うなど、ロクな人間じゃあない。

濃霧の生い立ちに同情しつつ、恐る恐る尋ねるイナリに、濃霧は一
拍置いてからこう応えた。

「——ガトー」

「ひっ……!!?」

「……?」

思われぬ単語に、イナリの腰が抜けた。

濃霧は、そんなイナリに首を傾げている。

（そんな……このねえちゃんが、ガトーの手下だったなんて！）

早く逃げなくては。

様子を見る限り、相手は自分がタズナの孫などとは思っても居なさ
そう。逃げるならば今しかない。

悟られぬ内に、さっさと帰路につこうと翻った。

（ガトーの手下だったんなら、助けなきゃよかった！ 死んじやえば
よかったんだ！ 死んじやえば——）

走り去ろうとした瞬間、脳裏を過つた言葉に立ち止まってしまっ
た。

ガトーの手下だから死ねばよかったなど、思っているいい考えではな
い。

もし、義父カイザが生きていれば、拳骨と共に怒声をあげられてし

まうような考えだっただろう。

「……ねえちゃんは、ガトーが悪いこといっぱいしてるの知ってる?」

「? ……私に、いいことと悪いことの区別なんてつかないから」

「そんなの言い訳さ。ちゃんと……よく考えれば分かるはずだよ」

「……一体なに?」

意図の分からぬイナリの言葉に、濃霧の顔に苛立ちが浮かぶ。

だが、イナリは続ける。

「なんにもしてない人のことを殺すような、そんなガトーの悪いことを知ってて見ないフリしてるなら、ねえちゃんは悪者さ」

「悪者だったらなに?」

「悪者になったら……これから先、きつと英雄が現れてやられちゃうんだ!! ロクな死に方しないぞ!!」

静かな声色から、急に大声を上げ始めるイナリに、一瞬濃霧が竦む。

しかし、ムツと顔を顰めて言い返す。

「ロクな死に方をしなかったら……なに?」

「きつと……きつと……——誰にも覚えられないで、寂しく死んじゃうんだ」

「っ……!」

「でも、英雄は! どんな死んじやい方したって、生きた証が永遠に残るんだい! 温かいご飯食べて、温かい布団の中で寝て、それから……」

言葉に詰まるイナリは、感情をありのまま表現する過程で自然と流れ出した涙を飲みながら、言葉を紡いだ。

「……家族みんなで笑って過ごした思い出が、ずうくと。悪者なんかより、楽しく生きていけるんだよ」

「……そうなの?」

「きつとそうだよ」

「私でも?」

「うん」

「……どうすれば、悪者から英雄になれる?」

「それは……自分にとって大切なものを、命を失うようなことがあつ

たつて、この二本の腕で守り通す!!」

グツと拳を握るイナリは叫ぶ。

「ボクは波の国の英雄カイザの息子だい！ ボクは、波の国の皆が！
じいちゃんがい！ 母ちゃんが！ そして父ちゃんが生きてたこの
町が大好きなんだ！ だから、ガトーなんか波の国は渡さない
ぞーッ！」

「！」

カイザの息子——それすなわち、タズナの孫という意味だ。

目が飛び出んばかりに見開く濃霧は、キツと睨んでくるイナリの氣
迫に圧倒され、大鎌を掴むことさえままならない。否、事実が衝撃的
過ぎたからだということもある。

しかし、どうしてだろう。

本来であれば、人質にでもできるであろうこの子を、人質にする氣
分などにはなれなかった。

『おい、こっちだ！』

『今のはイナリ君の……急ぎましょう』

「っ！」

だが、そこへ聞いたことのある声が聞こえてきた。

一週間ほど前、自分を返り討ちにした者達の声だ。

暫く動かなかったことでなまった身体を無理やり動かし、その場を
後にする濃霧。視界の端で、依然としてこちらを見つめてくる壯観な
顔つきをしたイナリの姿は、脳裏に焼き付いて離れない。

「イナリ！ 無事か、コラー！」

「あ……う、うん」

「怪我は……ないみたいですけど」

颯爽と参上するヒナイとシライトに、格好がつかないと思ったイナ
リは、零れる涙を拭いっつ無事を告げる。

(さっきのチャクラの感じ……あの血継限界使いの野郎だったな)

迷わずイナリを抱きかかえるヒナイ。

イナリは抱き上げられることに抵抗を覚えて暴れるが、ヒナイの腕
力がそれを許さない。

「嫌な予感がするぜ。一旦、家に戻ってツナミさんが無事か確認すつぞー！」

「ええ。僕も、それがいいと思います……」

経緯はどうであれば、ガトーの手先にタズナの身内が接触した。

となると、カカシたちが護衛についているタズナは兎も角として、誰も護衛についていないツナミの安否が心配になる。

すぐさまタズナの家に戻ろうと駆けだす二人。

既に、家もぬけの殻だとも知らず、彼らは急ぐのだった。

「ナルト、はいこれ！」

「おう！」

サクラからとある物を受け取ったナルトは、タズナの護衛をサクラに任せ、サスケの下に行かんと駆け出した。

先程から始まったカカシと再不斬の戦いにより、視界がゼロになるほどの霧が辺りを包み込んだが、ある仕込みをしていた二人にとつて、それらはある意味僥倖だった。

——なにせよ、これでサスケを助けられる……ハズ。

チームメイトを助けられる確証はない。

しかし、やれる限りのことをサクラはしてくれ、託してくれた。

ならば自分もそれに応えなければならぬだろう。

腹の奥底より湧き上がる沸々と燃え滾る想いを感じとり、ナルトもまた、ツルツルの脳みそで絞り出した作戦を実行すべく、行動に出る。そして、霧が開けた。

(なんてことだ……あの両眼は写輪眼。まさか、戦いの中でその才能を开花させるなんて……)

一方、白とサスケの戦いはとある転機を迎えていた。

生殺しのような千本の投擲による攻撃。それらはサスケの体中に傷を作り、時には突き刺さり、貫通し、決して軽くはない傷を数多く負わせていた。

にも拘わらず、サスケの動きは次第によくなっていく。

これだけの緊迫した状況と負傷。運動機能や反射神経、状況判断能力など、全てにおいて低下し始めてもおかしくはない。

それでもサスケの動きが白に対応し始めたのは、彼の赤く光る両目が理由だった。

写輪眼——木ノ葉のうちは一族に発現する血継限界。

サスケのそれはまだ未熟だが、写輪眼の基礎的な力である洞察眼は目覚めているようであり、次第に白の魔鏡水晶にもついていけるようになっていたという訳だ。

(戦いが長引けば、僕が不利になる。ここは……——)

一手仕掛けよう。

そう考える白であったが、突如、視界の端で現れるオレンジ色の塊に気付いた。

「サスケ、助けに来たぞ！　喰らえ、お面野郎！　必殺……手裏剣ありったけの術！」

「っ！」

「っ……あのウストラトンカチ！　一体何を!？」

霧から姿を現すや否や、手元に携えていた手裏剣をありったけ放り投げるナルト。

狙いはてんでバラバラ。サスケのように、狙いが精密とはとても言い難いものだ。

鏡を狙ったのか、はたまたサスケに渡すべく投げたのか。どのような目的で投擲したのかさえ分からぬ手裏剣攻撃であったが、万が一を考えた白は、手持ちの千本の数を考え、サスケの手に渡りそうな物だけを、投げ飛ばした千本で撃ち落とした。

その間も、ナルトは走る。

走る。走る。走る——！

「本命は……こっちだつてばよ！」

「なにっ!」

ふと、上から響く声に、白は不意を突かれたように顔を上げた。走っているナルトとは別に、魔鏡氷晶のドームの上に居るもう一人のナルト。その手には、袋のようなものが吊り下げられているクナイが握られていた。

「どうやら、投げた手裏剣のいずれかに変化していたようだ。」

「再不斬との初戦を彷彿とさせる戦術に、先程まで呆れていたサスケも目を見張る。」

「うりゃああ!」

「ですが……」

投げられるクナイ。

しかし、これまた白の千本の投擲で弾かれた。

同時に、千本はクナイを投げた影分身のナルトを貫きつつ、クナイに吊り下げられていた袋は衝撃で開かれる。

中から溢れるのは、無数の小刻みに刻まれた紙。

ハラハラと舞い散る紙きれは、冬に降る雪のようだ。

「サスケエ、伏せろ!」

「なんだと?」

「サクラちゃん考案……サクラ吹雪の術だってばよ!」

「――!」

魔鏡氷晶を覆う紙切れと思わせていたのは、それなりの数の起爆札だった。

続けざまに爆発する起爆札と共に、辺りは黒煙に包まれ、目の前を見るのも困難になるほど視界が悪くなる。

この程度では碎けぬ魔鏡氷晶ではあるが、敵のいる場所が分からねば、折角困んでいるアドバンテージが台無しになってしまう。

（これが始めから狙いでしたか……!）

ナルトの狙いは、始めから視界を奪うことだったらしい。

では、次はどう出るか?

白は、その鏡の間を移動するスピードの如き思考の速さで、次のナルトたちが出る手を予測し、対策に出る。

(風……空気の流れを！)

黒煙に包まれる視界で、人を発見するのは至難の業。しかし、人が動けばわずかながらに煙に動きが出る。それを見極めようと、白は目を凝らした。

どこに居る？

どこから来る？

どこから逃げる？

——居た。

僅かに煙の合間から見えた、黒い服。

あれはサスケの服だ。

今この場において、最も排除すべき忍は、うちは一族の血を受け継ぐサスケ。

迷う必要はない。

自分は“心”を押し潰し、ただ相手を屠る“刃”となればいい。それこそが“忍”なのだから。

(ごめんなさい)

鏡から飛び出し、千本を携えた手を振りかざす。

捉えた——だが、

(手ごたえが……)

繰り出したのは刺突。

それにしても、肉を突き刺すあの感触が、骨を貫く感触が、
「ない!？」

「かかったな!」

咄嗟に白が振り返れば、寅の印を結んでいるサスケの姿が、黒煙の合間から覗いていた。

よく見れば、彼の服の右袖が大きく千切られているではないか。

やられた、と思い、たつた今自分が突き刺した物を見れば、クナイに布の切れ端を結び付けたものだった。

寅の印で終わる術は火遁が多い。

火遁は、他の性質変化と比較すると、習得難易度にもよるが外傷に直接つながるような術が豊富だ。

それに、相手はうちは一族。下忍らしからぬ高度の火遁忍術を繰り出してもおかしくない。

これから放たれる高熱を想像して悪寒を覚えた白は、ボックスステツプで背後の鏡に飛び込もうとした。

鏡に入れば、いくらでも避け切れるハズ。

そう思った白であったが、鏡に背を付けた瞬間、今まで感じたことのない抵抗感を覚える。

「入れないっ!!?」

「うっしや——!!! 捕まえたあ!!!」

氷の鏡は、煙に包まれたかと思えばナルトへと変化し、背を向けていた白をガツチリとホールドした。

(まさか……魔鏡氷晶に変化していたなんて!)

完全に不意を突かれた白は、無防備になってしまう。

そう、ナルトの狙いはこれだった。

サクラから託された起爆札で相手の気を引き、自分はサスケの下まで赴く。その後、何かしらのアクションを見せた白の隙を見計らい、大量の影分身で地上に近い氷の鏡に変化し、白がまんまと飛び込んでくるのを待つ。

本来は、氷の鏡の中からサスケを連れ出すだけの作戦だったが、サスケ自身チマチマと工作し尚且つ白もそれに引っかけたため、作戦変更で守勢から攻勢に転じたのだ。

「サスケエー! いっけ——!!」

「火遁……——豪火球の術!!!」

「ぐ、あああああ!!!」

口をすぼめ、紅蓮に燃え盛る火球を吐き出すサスケ。

白を捕らえていたナルトの影分身は、文字通りサスケによる意図的なフレンドリーファイアですぐ消滅したが、白は燃え盛る火炎に包み込まれ、逃げ出すことさえも叶わなかった。

(ああ、再不斬さん……ごめんさい……)

身が燃え、服が焼ける中、白は恩人へ謝罪の言葉を心の中で呟いていた。

(僕は貴方の武器になりきれなかった……)

肉の焦げる臭いが鼻につく。

薄れゆく意識の中、白はいつの間にか晴れた霧の奥にある光景を目の当たりにする。

それは、カカシの電光爆ぜる右腕が、再不斬を貫く光景。

「再不斬……さ、ん……」

無意識の内に差し伸べた手。

しかし、いくら伸ばせど再不斬の下へは届かない。

白はそのまま意識を失い、彼が発動していた術のように、儚く崩れ落ちるのだった。

二十。 献血はご計画的に

逃げなければ。

——どこへ？

殺らなければ。

——誰を？

そんな自問自答を繰り返しながら、遁走を図る濃霧は、自分の思考に答えを導き出せず、もやもやと霧に纏わりつかれたような不快感を覚えていた。

自分に数日間、頼んでもいないのに食事を運んでくれていた少年——イナリの言葉が、タズナを殺さなければという囁きを遮つてくる。

どうすればいい。

自分はどうすればいいのか？

反芻する疑問は、次第に濃霧の歩幅を狭くしていく。

自分の歩みに自信が持てなくなった。

いや、そもそも自分という存在がなかったのかもしれない。

両親に売り飛ばされ、ガトーの手先として数々の任務をしていく中で、一切の感情が不要だと判断し、人並みの罪悪感を押し殺してきた。

——そっちの方が楽だった。

やがて、人を殺しても何も感じなくなったが、それはいつ頃だっただろうか。

ただ“刃”として、“心”を押し潰して多くの人を傷つけた。

しかし、今になって考えてみれば、それがいかに恐ろしくあさましい行動であったか、震え上がる思いをしてしまう。

濃霧という人間は、今まで存在させていなかった。

文字通り“霧”のように、正体も掴めぬような形の定まらぬ存在として在り続けてしまっていたのだ。

それが如何に恐ろしいことか。

それが如何に寂しいことか。

誰一人として、自分の存在を覚えてくれない。

それが如何に悲しいことか。
ツ―、と涙が頬を伝う。

忍との戦いの後遺症で、いつしか見えなくなっていた右目から零れていた。

(熱い)

涙がこんなにも熱いものだったとは、気が付かなかった。否、気が付かないフリをしていたのかもしれない。

傷ついて涙を流す自分を、見て見ぬフリをしたままだった。

悪者だ。

自分は悪者だ。

傷つき、涙を流す者を見ないフリをする悪者だったのだ。

しかも、傷つけているのが自分自身なのだと言うのだから夕チが悪
い。

今一度、どうすればいいかと自問自答する。

そんな中、濃霧の視界に人影が見えた。

男二人に、縄で手を縛られた女性が囲まれている。

男たちに至っては、ガトーの手先として働いている侍だとすぐに分
かった。となると、あの捕まっている女性は一体誰なのだろうか？

疑問を思い浮かべている間、無意識の内に三人の前に降り立つ濃
霧。

警戒し、柄に手を掛ける侍――ゾウリとワラジだったが、向こう
も見知った顔の登場に警戒を緩める。

「おまえ……誰かと思つたら、濃霧じゃねえか。一体どこほつつき歩
いてた？」

「その人、誰？」

「ん？ こいつはタズナの娘だ。人質に連れてきたんだよ」

「てめえも連れてくの手伝え。さもなけりや、今すぐに切つてやつて
も構やしねえんだぜ？」

悪党らしい下卑た笑みを浮かべるゾウリと、チキツと刀を少し抜
き、濃霧を威嚇するワラジ。

一方で、タズナの娘であるツナミは、これでもかというほど殺気に

満ちた瞳で、濃霧の方を睨んできた。

それだけで、どれだけ彼女がガトーとその手先に恨みを抱いているか計り知れよう。

だからこそ、濃霧は携えていた大鎌の柄を強く握った。

……そっちの方が楽だ。

ズンズンとゾウリたちの下へ歩み寄る濃霧。

だが、凡そ味方の下へ赴く際の雰囲気でなかったのか、ゾウリたちの額には脂汗が滲み始めた。

『なんのつもりだ！』や『ふざけた真似してつと、斬るぞ！』と怒声が轟くも、濃霧の歩みは最早止まらない。

——英雄^{ヒーロー}の味方の方が、楽だ。

家に戻ったシライトたちが目の当たりにしたのは、もぬけの殻となっていた家だ。

そこにツナミの姿はなく、無残にもバラバラに斬られた扉の木片が転がっている。

最悪の予感が脳裏を過った。

しかし、血の跡はない。それから鑑みるに、この場でツナミが殺害された可能性は小さいだろう。

となれば、ツナミがここに居ない理由は、

「連れ去られた可能性が高いな」

「人質……ですかね」

「だろうな。せこい奴が考えそうなこった。チツ、急ぐぞ！」

ツナミが居ないと知るや否や、神楽心眼にてツナミの探知に移るヒナイ。

まだそう遠くへは行けないハズ。探知にも、そう時間はかからないだろう。

「……見つけた！」

「分かりました……イナリくん。君は……」

ツナミが攫われたならば、イナリの身の安全も確保せねばなるまい。

ヒナイとシライト。どちらがイナリの護衛につくか、視線で会話しようとする二人であったが、彼らの答えを聞くよりも前にイナリは口を開いた。

「ボクは、波の国のみんなを呼んでくるよ！」

「え……ですが……」

「泣き虫のまんまじや、なんにも守れやしないんだって分かったから……ボクもなにかしなきゃ！」

そこに、昨日の夕食にて泣きながら騒いでいた少年の姿はなかった。

まだか弱くも、確りと信念をその身に宿す男が、母を救おうとしている。

その姿にフツと笑みを零すヒナイは、乱暴にイナリの頭を撫でた。

「おうよ！　じゃ、オレらは先に母ちゃん助けに行くからな。あんましチンタラしてつと、折角呼んできてくれた皆に無駄足運ばせちまうかもしんねえ……急げよ！」

「うん！」

力強く頷いたイナリは、颯爽と駆けだしていく。

そんなイナリに、ヒナイは口寄せ獣のネズミを一匹付けさせながらも、彼の意思を尊重し、踵を返す。

「人質使うってことになったら、可能性が高えのは……橋だな」

「ええ。タズナさんたちの目の前で……行きましょう」

「おうよ！」

「は……ははっ。サスケ、やってやったってばな！」

「……」

「サスケ？　おい、無視すんなア！」

「氣い抜くな。まだ、やったって決まった訳じゃないからな」

へたり込む、煤だらけのナルト。

敵を倒せたことにホッとしているようだが、サスケに関しては、豪火球の術で敵を倒しきれたかが不安なのか、クナイを片手に倒れている白に歩み寄った。

『何する気なんだったよ……う』と、ややきよどるナルトを横目に、クナイを白の仮面に突き刺すサスケ。

カツン、と乾いた音がよく響けば、これまた煤けた仮面は一気に罅が広がり、白の顔から砕け落ちた。

「――！」

露わになった素顔に、ナルトは息をのんだ。

そんな馬鹿な、と。

この顔は――、

「あん時のっ……！」

「……知り合いだったのか？」

震えた声を発しながら、今まさに目の前で倒れている少年が、木登りの業の際に出会った美人な少年であることに気が付いたナルト。

まるで、自分自身に確認するかのように声を発したナルトの横で、体の至る所に突き刺さっている千本を抜き捨てる。

いずれも致命傷は避けていた。

いや、避けさせられていたのかもしれない。

そうでなければ、あの怒涛の攻撃の中で自分が生き残っていられた訳がない。

今回の勝利は、相手の甘さが主な理由だ。

決して、サスケの実力が白の実力よりも上だったからではない。

「……くそッ！」

また一本、抜いた千本を乱暴に橋の上へ投げ捨てる。

その間、いつの間にか晴れた霧の奥に、カカシたちの姿が見えてきた。

「サスケくーん！ ナルトオー！」

「おお……超無事……でもないか」

自分達が生きていることが確認できたサクラは、歓喜の声を上げな

がら、クナイを持った手をこつちに振る。タズナも無事のような。
ホッと息を吐いている。

しかし、ナルトもサスケも、そんな彼女の行為にリアクションをと
ることができない。

いずれもショックが大きかったのだ。

片や、顔見知りを知らぬうちに、「敵」として倒してしまったこと
に。

片や、敵に情けを掛けられ、味方にも助けられた上で漸く勝てたこ
とに。

各々のショックに差はあれど、後味の悪い勝利を掴んだ二人は、霧
が晴れた先にもう一つの光景を目の当たりにした。

「ぐっ……がはっ！」

「だから言っただろう。お前の未来は……死だ」

「うッ!!」

再不斬の体から右腕を引き抜くと同時に、再不斬の体に噛みついて
いた忍犬たちが煙と共にドロンと消え去る。

「コピー忍者カカシ」——彼のオリジナル忍術の一つ、「雷切」

により、胸に大きな穴を穿たれた再不斬は、口布の上から血を滴らせ
ていた。体を噛まれ、その上で体に風穴を開けられた人間が長生き
出来ようはずもない。しかし、再不斬は気力一つで、背負う首切り包
丁の重さごと自重を支える。

だが、最早勝敗はついた。

「お前の野望はここで潰える。そうだろう、再不斬」

「ま、まだだ……まだオレの野望はあ!!」

首切り包丁を抜き、カカシに斬りかかろうとする再不斬であつた
が、カカシに辿り着くよりも前に、足がもつれて倒れてしまう。

そんな鬼人の倒れる様を、カカシは思うところがあるような目で見
下ろす。

「オレの……オレたちの野望はあっ!!」

「再不斬……」

「——くつくつく。おーおー、随分派手にやられて。がっかりだよ」

その時、不敵な笑い声が響いた。

複数の足音に皆が振り向いた先には、物騒な武器を携えるごろつきたちの先頭に、杖をついて歩くガトーの姿があるではないか。

優に百人は下らない軍勢。

下忍や一般人であるナルトのみならず、カカシでさえゴクリと生唾を呑み込んだ。

「ガトー……どうしてお前が……それに、その部下共はなんだ!？」

「なあに。ちよいとお前に恨みのある人に手を借りてねエ。お前は、水の国のクーデターで誰かさんの部下を殺つちやつたみたいじゃないか」

「……成程。大黒天善の野郎の」

再不斬の問いに、意味深に応えるガトー。

それから導き出された大黒天善の名。

彼は、水の国の大名の側近だ。表の顔は政治家だが、裏では大盗賊団の棟梁もしており、大名に大量の賄賂を贈ることによって悪事を働く悪漢でもある。

再不斬は、里抜けするきっかけともなった彼自身の起こしたクーデターの際に、その大黒天善の率いる部下を多く倒した。

その恨みを返すべく、波の国に城を持つ彼は、波の国を牛耳ろうとするガトーと手を組み……、

「そうさ。私は始めから、お前を始末するつもりだったのさ」

正規の忍を雇えば金がかかる。

だが、抜け忍であれば後処理もしやすい。使い捨ての利きやすい手駒という訳だ。

最初から金を払う気がなかったガトーは、タズナを再不斬の手で暗殺した後、更には大黒天善の手も借りて再不斬らも始末する手筈だった。

「ま、一つだけ作戦ミスがあったといえば、お前だ……再不斬。霧隠れの鬼人が聞いてあきれれるわ。私から言わせりゃあ、なんだ……ただのかわいい小鬼ちゃん……つてとこだなア」

「今のお前ならすぐぶち殺せるぜエ!!」

ガトーの言葉に続き、取り巻きのごろつきたちが下品な笑い声を上げる。

その光景に、首切り包丁を支えに立ち上がる再不斬は、横で神妙な面持ちを浮かべているカカシを見遣った。

「そういう訳だ。これで、オレらとお前が戦う理由はなくなった訳だ……カカシ」

「……ああ」

「あと、少しいいか？」

「？」

「――」

「！……ああ、頼まれたよ」

何かをカカシに告げた再不斬は、今際の肉体には酷な重さの首切り包丁を担ぎ、ガトーたちを睨む。

その気迫、鬼の如し。

一瞬にして、ガトー共々睨まれた者達は再不斬の気迫に怯む。

その隙に駆け出す再不斬は、真つ先に頭であるガトーに向かっていく。

「ひっ……も、もういい！ お前たち、やっ――」

目の前に迫る恐怖から逃げんと、背を向けて走り出したガトー。

しかし、少し前より軍勢の後ろから物音も立てずすり抜けてきたフードの少女が、ヌツと軍勢の前に躍り出て、向かってきたガトーの腹をドンと蹴り飛ばした。

尻もちをつくガトーは、何が起きたのか分からない様子だ。

しかし、自分を確かに蹴り飛ばした者の顔を――フードの下に隠れるその顔を、しかと目に焼き付けた。

「お、おまえはっ!? の……――のうムツ」

一瞬だった。

遠のくガトーの断末魔。

ガトーは、肉迫する再不斬の首切り包丁により、文字通りその首を切られたのだ。

「最後の最後で飼い犬に噛まれるとは……いい様だな、ガトー」

鮮血を迸らせる首のないガトーの体を邪魔だと蹴り飛ばし、すでにこの場から瞬身の術で消え去ったガトーの飼い犬に礼を告げつつ、再不斬は首切り包丁を横に一閃する。

それだけで数名、ごろつき共の体が上下に分かたれる。驚異的な切れ味。そして、再不斬の膂力。

次元の違う再不斬の戦いぶりに、数で勝るガトーの手下たちも怯え竦み、一歩後ずさってしまふ。

そんな時だった。

ガトーの手下たちが居る場所の後方で、ドドンと太鼓を鳴らしたような轟音と共に、巨大な影が現れる。

「な、なんだありゃあ!」

「バカでけえ!」

「ば、化け物か!」

「い、いいや、あれは……!」

その山のような毛玉の上には、一つの人影があった。

「お控えなすって、野郎ども!」

「あいや、しばらく! さしつけました仁義、失礼でござんす! 生まれ

れは火の国! 鼠ノ寺仕えて数十年! 奇妙奇天烈な縁にて、ヒナイ法師のために東奔西走! そんな俺たちの名あ、ノブ雄。人呼んで『ノブ』だっチューの!!」

ぴよこんと生えている丸い耳。

一陣の風に揺らぐ長い髭。

そして、立派に生えた長い前歯。

そう、その生き物はまさしく――、

(ハムスターだってばよ……)

(ハムスターだな……)

(ハムスターね……)

(ハムスターでしょ……)

(超ハムスターじゃわい……)

ハムスターだった。詳細を言えば、ジャンガリアンハムスターヒメキヌゲネズミだ。

腹巻を巻いていたり、ドスをその腹巻に差していたりするが、違

うことはなき、それはハムスターである。

ネズミはネズミだが、ハムスター。

巨体である故の威厳も、ハムスターの愛らしい容姿によって半減してしまっているように見える。

そんなハムスターの上に乗るヒナイは、錫杖をガシヤガシヤ鳴らすことで、下に居るガトーの手先たちへと警鐘を鳴らす。

「おうおうおう！ それ以上好き勝手やるつつーなら、オレとノブが許さねえぞ！」

「姉御！ ここは俺つちがお任せ、男負^{おま}かせ、波任せ！ あつチューまに、海ン中叩き落として頭冷やさせてみせますよウ！」

饒舌なハムスター……もとい、ノブ雄がドスを抜き、ガトーの手先たちに切っ先を向ける。

その巨体に比例して大きいドスは、それだけで普通の背丈の人間に恐怖を与えた。

それもそうだ。自分の背丈の何倍もの刃物を向けられる機会など、普通ならばありはしない。

巨大なハムスターを前に、流れが悪くなってきたことを悟るガトーの手先たち。

そんな彼らの下へ、さらなる刺客がやって来ていることを、彼らはまだ知らない。

橋の陰からゴソゴソと忍び寄る、巨大な縦長な影。橋と見間違うほどの巨体は、敵が居る地点を触覚で探り終えた瞬間、すさまじい速さで彼らを取り囲んだ。

「ひいひい!! 今度はなんだ!?!」

「む、ムカデだ——!!」

「——ヒナイさんだけじゃありません」

ガトーの手先を囲んだ大ムカデの主たる人物が、ボウガンを携える少年と共に、波の国と橋の境辺りで大勢波の国の者を引き連れつつ、そう声高々に宣言する。

「そうだ！ ボクたち波の国のみんなが、波の国のみんなを傷つけようとする奴らを許さないぞ!!」

「イナリー！」

シライトに続いてイナリが、自分が呼び掛けて連れてきた波の国の町民と共に、国を守ろうと立つ姿は壮観だった。

ハムスターの陰になって少々見えづらいものの、感無量のタズナは、涙をほろりと流しながら孫の名を呼ぶ。

一方でイナリは、とある人物が居ないかも、辺りを注意深く観察していた。

(あのねえちゃん……いないかあ)

ガトーの手先だった少女——濃霧。

素性がバレるや否や逃げた彼女だが、彼女の辿った足跡は僅かに辿れた。

連れ攫われたと思っていたツナミが、濃霧と思しき少女に助けられたと、ヒナイたちがたどり着くよりも前に家へ向かって戻っていたのだ。

何故、彼女がそのような行動に出たのかは分からない。

だが、その報告を聞いた時、イナリは言い知れぬ喜びを覚えた。

そして今、自分の呼びかけで集った町民と共に、大好きな国を守るために立ち上がっている。

その後、ガトーの手先は、巨大な口寄せ獣二体を始めとした勢力の前に、抵抗する気も失せ、町民全員の手によってお縄につくのだった。

『安心してください……ボクは再不斬さんの武器です。言いつけを守るただの道具として、お傍に置いて下さい』

ふと、とある日の白の言葉を思い出した。

白を拾ったあの日から、自分は白と一緒だ。

己の言葉を守ろうと、白はいついかなる時も自分の傍に居て、文句も言わずに付いて来てくれた。

心のどこかで、自分はそれを嬉しく、有難く思っていたのかもしれない。

孤独は耐え難い。

だから、自分を『同じ目』と称してくれた白を拾ったのだろう。血や力だけではない。その存在を傍らに置き続けたいと、無意識の内に願っていたと、今際に来て——いや、もうあの世だろうか。どちらにせよ、傍に居なくなつた途端、自分にとって白がどのような存在か、分かつたような気になれた。

(できるなら……お前と同じ所に居てエなあ……。それにしても、あの世つてのあ随分居心地の悪いとこだな……)

体中に走る鈍痛に、ゆっくり瞼を開ける再不斬。

まず真つ先に視界に入ったのは、見ず知らずの少年だ。汗水たらし、なにやらカカシの雷切で貫かれた部位に光を翳しているらしい。掌仙術か——そんな思考が脳裏を過つた時、再不斬はまだ自分がしぶとく生きていることを理解した。

「お……おまえ、は……」

「喋らないでください……傷口が……」

「白は……白は……」

「白なら、ちゃんと生きてるつてばよ」

目の前の少年——シライトの代わりに応えるナルトは、複雑な表情を浮かべて、再不斬に見えるよう白が横たわっている方を指さした。

その近くでは、青ざめた顔で寝転んでいるヒナイが居るが、彼女に関しては再不斬に輸血するための血を抜いたことで、絶賛貧血中なだけである。

だが、彼女の特異な血の供給の甲斐あって、あの絶望的な負傷からも再不斬は回復していた。

そして、白もまた……。

「……軽い……とは言えないやけどですが、命に別状はありません」
「そう……か」

ナルトに続いて、白の容態を話すシライトに対し、再不斬はホッと息を吐いた。

「それにしても……敵だった奴を治すたあ……随分甘ちゃんらしい

な。てめえらは」

「もうガトーやっつけたんだから、敵もどーもこーもねえつてばよ！

それに……白の大切な奴つて、お前なんだろう？」

「……それがなんだ？」

「白つてば、大切な何か守りたい時に強くなれるつつつてた。きつと、オレたちと戦つてる間も、お前のこと守ろうつて頑張つてたんじゃねえのか？」

ナルトの真つすぐな瞳が、再不斬を射抜く。

最早逃げ場はない。

ガトーが死亡したことで、敵同士でもなくなり、因縁も消え去つたと見えよう。

今際から戻つたばかり再不斬は、夢見心地のまま口を動かし始める。

「……だろうなア。だが、あいつは優し過ぎた」

「？」

「自分が守りたいモンも……大切なモンを守りたい気持ちがかかるからこそ、他人が守りたいモンにも気が向いて……心を痛めていた。小僧、お前もそのクチだろう？」

「……うん」

頷くナルト。

彼もまた、白の大切な物が再不斬であると察したからこそ、つい先ほどまで敵であった白と再不斬の治療をシライトたちに頼んだのだ。

そして再不斬は、己の今際でようやく白こそが自分の大切な物だったと理解した。

拳句の果てには、敵だった忍たちに自分ごと大切な物を守つてもらつてしまったではないか。

「忍も人間だ……感情のない道具にはなれない。ああ……負けだ、負け。オレらの……——負けだ」

鬼人が笑う。

だが、鬼人の笑う様は泣いているようにも見えた。

痛む体に鞭打ち、大切な物を見遣つた再不斬の目には、安らかな笑

顔で眠っている白の姿が映る。

今度こそは、大切な物を離すまい。

鬼人は、季節外れの雪に誓うのだった。

二週間後。

完成した橋の名は『ナルト大橋』。ナルトがイナリの心を変え、イナリが町民の心を変えた。そんな、彼の『勇気』が皆へ『希望』という架け橋を掛けたことから、決して崩れず、いつか世界中にその名が響き渡るような有名な橋となるようにとの願いが込められた名だ。

橋が完成すれば、木ノ葉の忍たちはお役御免。

名残惜しさもあるが、彼らは里への帰路につく。

次に、再不斬と白は、シライトの治療を受けた後に人知れず姿を消してしまった。

元より追われている身。ガトーという庇護がない今、いつ追手が来てもおかしくはないのだから、足がつくよりも前に波の国から去ろうという魂胆なのだろう。

そしてシライトは、待たせている師の下へ行かんと出発した。

何故か、『暇』という理由でヒナイが彼に付いていったが、お互い世助け目的の旅ということで意気投合していたかもしれない。

どちらにせよ、多くの者が波の国を発った。

しかし、発たない者も……。

「ねえちゃん、またここに居たんだ」

「……」

イナリがよく釣りに来る栈橋。

そこでここ最近波風に当たっている少女が、イナリの方へ振り返った。

何とも言えぬ顔。居た堪れないのか、少女は顔を俯かせる。

そんな彼女へ、イナリは満面の笑みで助け船を出す。

「そういえば、名前言ってなかったね。ボク、イナリ。ねえちゃんは

？」

「……濃霧」

「ふーん……あのさ、母ちゃん助けてくれてありがとう」
「ん」

「だからさ、お礼に……ボクの家でご飯食べない？」

思わぬ提案に目を見開く濃霧。

色々と考える部分があるが、ガトーという唯一の巣であった場所さえ失った彼女に、まともに食事をとれる手段など残されていないかった。

だから、今まではイナリの弁当に頼っていたのだが……、

「……食べる」

——誘われたならば、行くしかない。

後に、イナリ家の食卓に一人増えたことと、ナルト大橋に守り人が就いたのだが、それはまた別の話。

ヒナイ修伝 ― 自来也豪傑物語 閑話―

——これはとある来訪者が去った数か月後のお話。

「ヒナイちゃん。次、女湯お願いね〜」

「はい〜！」

番台に対し澆刺とした返事をし、ごしごしとブラシで浴槽を洗うヒナイ。

夕方から夜にかけてやってくる男の垢などの汚れがこびりつく浴槽だが、力が込められた彼女の磨きがあれば、あつという間にピカピカだ。

綱手たちが鼠ノ寺を去り数か月。

道を遮る大岩もなくなったことで、観光客の足も次第に戻っていき、厳しいながらも生活できるほどの収入は得ることは叶っていた。しかしだ。生活できるといっても、あくまでそれは最低限での話。自分より小さい子供たちにも我慢させるような思いをさせたくはないと、ヒナイは少しでも足しにならないかと、近くの町で働き始めたのだ。

真つ赤な髪は、いい意味で目立つ。

男勝りな性格はあれど、いい宣伝になるとヒナイの働きの申し出を受ける店は数多あった。この銭湯もその一つである。

貰える金はそこまでではない。

やることと言えば、浴槽の掃除と番台の代理だけだ。

「——つつつても、ここの一番風呂がたまんねえんだよなア〜……」
ふいくと息を吐き、身を包む少々熱めの湯に頬を紅潮させるヒナイ。

そう、ヒナイがこの銭湯で働く理由は、ここにもあった。

掃除後、番台の厚意によって一番風呂を頂けるのである。鼠ノ寺で

は、風呂などめつたに沸かさず、身を清めるといふ行為は滝での行水のみだ。夏は兎も角、冬は寒すぎて耐えられない。冬の場合、一応水を沸かしてからなどの処置はとられるものの、こうして体の芯から温まることはできないのだ。

「極楽極楽ウ〜……ここが桃源郷よオ〜つと……ん？」

胸より下は熱い湯に浸かり、それより上は涼しい風が火照った体を撫でてくれる。

見上げれば満点の星。ここを極楽と言わずしてどこが極楽か？

恍惚とした表情で身を反らし、岩でできた浴槽の淵にもたれかかったヒナイ。

すると、なにやら綺麗な景色の端に、邪な存在が映るではないか。

「なんじゃあ。まくだガキしか入ってねえじゃねえのオ」

「……あ？」

銭湯と路地を隔てる高い壁。

その淵に腕をかけるのは、獅子舞を彷彿とさせる長い白髪を靡かし、目の下から赤い線が伸びている男だった。『油』と書かれた額当てをつけているが、油隠れなどという里は存在しないため、恐らくは自前の額当てだ。

次に容姿。若くはない。初老ぐらいだろう。

成程、大問題だ。

「ワシあ、もつとピチピチの姉ちゃんが入ってると思ったんじゃが、期待外はず——ぶおっ!？」

壁の淵に寄りかかりながら残念がる男性に向け、円盤投げの如くたらいを投擲したヒナイ。

見事顔面にヒットし、スコーンツ！　といい音を奏でて男性は落ちていった。

「てんめエ！　今すぐとつちめてやつかな、コラツ!!」

湯で火照っただけではない。

男性にしてもヒナイにしても不本意だが、湯に浸かっている姿——裸を見られたことに頬を紅潮させ、憤慨するヒナイ。すぐさま湯から上がり、恐ろしく凄まじい速度で着替え、男が落ちた場所まで駆け

ていった。

ロクに体を拭かず、髪も乾かしていない。

驚く番台に、『ちよつとでかける!』と一声かけ、雫を滴らせるヒナイは、一分も経たずして男性が落ちた地点までやって来た。

しかし、そこに男性の姿はない。

あの特徴的な白髪の男性は、すでに路地の奥へ奥へと逃げていた。

「待てコラあああああ!!」

だが、ヒナイが見逃すハズもなく、彼女も全速力で男性を追いかけ始める。

烈火の如く怒りを男性に向けて迸らせるヒナイは、怒号を上げながら男性との距離を縮めていく。

「おいおいおい! なんちゆう凶暴なガキだ!」

「他人の裸見といてただで済むと思うなよ、コラ!!」

「わしだって、お前みたいになちんちくりんの裸なんざ見とうなかつたわい!」

「んだとオ!? 裸見た上に残念がるたあ、失礼にも程があるつてんだろおうよオ!!」

額当ての文字の如く、まさに火に“油”を注いでいく男性。

熾烈な鬼ごっこは、往来の激しい路地まで続く。

人混みをかき分ける二人。しかし、男性は歳に似合わず軽快な歩みで人混みをすり抜け、グングンヒナイとの距離を開いていく。

無理やり人混みをかき分けるヒナイは、なんとかとつちめようと奮闘するものの、結局は男性を見失ってしまう。

「……つくつしよう」

走って火照った体を撫でる風と向けられる人々の視線は、どこか生温かった。

「く、クビィ〜!?!」

そして、ヒナイの解雇は唐突に言い渡された。

『なんでだよ！』と凄まじい剣幕で詰め寄るヒナイに、番台はおどどした様子で応える。

「なんでもヒナイちゃん……君、昨日往来で随分暴れてたみたいじゃない？　それで、途中で黒駒サンとこの人にぶつかったって言われてね」

「黒駒？　んなの分かんねえよ！　って言うか、そんだけでクビって……！」

黒駒——黒駒ショウゾウは、ここ最近この町で名を上げる極道だ。

本人含め、何人かの忍くずれを雇っており、元々町に居た裏の人間を取り込み、急激に発言力を高めていると巷では噂されている。

「仕方ないんだよ。黒駒サンはこの町で一番名を利かせてる極道の人だ。ヒナイちゃんにや悪いが、ちよつとやそつとの因縁でも、しつかり応えなきやウチの経営が……ねえ？　ほら、今までお世話になった分、お給金も増やしといたから、今日限りで」

最終的には有無も言えずに銭湯を追い出されたヒナイ。

手渡された巾着袋には、いつも以上の重みを感じるが、それで喜べるほどヒナイは単純ではない。

トボトボとした足取りで往来を進むヒナイは、今後の働き口について俯きながら考える。

男勝りな彼女と言えど、憂鬱になることはあるのだ。

「そもそも、悪いのはあの覗きの……」

ブツブツとぼやきながら歩く。

すると、俯いていたために前方より歩いてくる者が居ることに気が付かず、そのままぶつかってしまった。

「てっ！　あ……」

「おー、いてー！　こりや骨折れちまったなー！」

「はっ」

尻もちをついて倒れるヒナイが見上げる先には、わぎとらしく腕を押さえてわめくチンピラらしき男と、それを見てにやにや笑う男が居る。

ヒナイが呆気にとられてみると、にやにや笑っていた男が近寄り、徐にヒナイの前に屈みこみ、胸倉を掴んできた。

「おう、嬢ちゃん。このオトシマエ、どーつけてくれんだよ?」

「んなもん知るか、コラー! あんくらいで骨折れるわきやねえだろ!」

「おー、そうかい。でも、本人は痛がつてるしなあ。一応お医者さんに診てもらわなきゃいけない訳だし……さッ」

「いでッ!」

徐に突き飛ばされたヒナイ。

すると、持っていた巾着袋が手から零れ落ち、中に入った小銭が擦れる音が鳴り響いた。

その音ににやける男たちは、そのまま転がる巾着袋を手取る。

「という訳で、このおこづかいは貰ってくよ」

「はあ!? ぎげんな! 返せ、コラー!」

「痛い目見たくないなら、早くおうち帰るこったね」

「んにやる……コラー!」

「ぎや!」

巾着袋を片手に携えて去ろうとするチンピラであったが、背中にヒナイの飛び蹴りを喰らい、もれなく前方へ無様に倒れていった。

一人が蹴り飛ばされたことに憤慨するもう一方は、意地でも巾着袋を取り返そうとするヒナイともみ合いになり、彼女を羽交い絞めにするまでに至る。

それでも尚暴れようとするヒナイであったが、彼女が拘束より解放されるよりも前に、顔を擦りむいたチンピラが、憤怒に染まった瞳をヒナイに向けた。

「ガキィ……子供だと思って見逃してやろうと思えば付け上がりやがつて! おい、そのまま抑え付けてろ!」

「おう!」

「んにやろう共が! オレだつてただじゃやられねえぞ!! ホントに病院送りにしてやるぐれえボコボコにしてやんよ!!」

「ふん、強がりやがつて……子供だからって手加減してやらねえ!

二度と表出れねえくらい、顔ボコボコにしてや——ッ!」

羽交い絞めにされるヒナイを殴ろうと拳を振りかぶったチンピラ。しかし、拳は振りぬかれることなく、チンピラの背後で止まったままだ。

幾ら力を込めど、微動だにしない。

これはおかしいと、冷や汗を流すチンピラが振り向けば、飄々とした顔つきながらも、剣呑な雰囲気を漂わせる男が立っていた。

その容姿に『あッ』と声を上げるヒナイだが、チンピラたちは突如現れた男に気を取られている。

「女に……それも子供に手を上げようとするたあ……おまえら、男の風上にも置けんのオ」

「だ、誰だジジいてて!?」

「その意気のいい嬢ちゃんに免じて、わしが代わりに相手してやるぞ。なアに、安心するといい。きっちり病院送りにしてやるからのオ」

「は、放せ! いや、放してください!」

腕を背中の方へ持つていかれるチンピラ。

次第に骨が軋んでいくような感覚を覚え、堪らず放すように乞えば、男はスツと手を放してくれた。

只ならぬ男の前に、完全に戦意を喪失したチンピラは、『お、覚えてるよ!』といかにもなセリフを吐き捨て、ヒナイと巾着袋を置いて去っていく。

その様にやれやれとため息を吐く男は、地面に無造作に置かれた巾着袋を手に取り、ヒナイに手渡す。

「ほれ。これで貸し借りは無しだのオ」

「オッサン……おらあ!」

「うおおう!」

巾着袋を手にとったヒナイだったが、いい男ぶった笑みを浮かべる男の鳩尾へ、容赦ないアツパーを喰らわす。

クリーンヒットだ。

前のめりに倒れて悶絶する男は、抗議するような視線をヒナイに向ける。

「お、おまつ……助けた恩人になんたる仕打ちをオ……!」

「るっせえボケア！ こちとら、裸見られた上に、仕事クビになったんだぞ！ これで漸く貸し借り無しだろうが！」

「仕事クビになったことなんざ、ワシあ認知しとらんぞ！」

「認知してるしてねえの問題じゃねえ！ チビ共の生活費のためにあくせく働いてたのに、アンタの覗きが原因で働き口失ったオレの身にもなつてみやがれつてんだ！」

「そ、そりゃあ悪かったのオ……」

若干涙目となって訴えるヒナイに、流石に同情したのか、男から引き下がってくれた。

それからして、ようやく落ち着きを取り戻すヒナイは、目尻に溜まった涙を拭う。

「ったく……つつーか、オッサン誰なんだよ？」

「ワシか？ あいやしばらく！ よく聞いた！ 妙木山、蝦蟇の精霊仙素道人、通称・ガマ仙人と見知りおけ！」

見得を切る男——ガマ仙人に、ヒナイは怪訝に眉を顰める。

「仙人？ ……嘘つけエ！ 仙人がガキの女の裸覗くわきやねえだろ！」

仙人。それは神的存在であり、一種の人間の到達点ともいえる尊い存在。

一方で無欲な存在とも言われているが、目の前に居る男は、無欲と言うにはほど遠い人物のようにヒナイには見えた。

何故ならば、女湯を覗こうとしたから。

しかし、ガマ仙人は声を荒げて反発する。

「勘違いされる言い方するな！ ワシが興味あるのは、お前なんかより年上でピッチピチで綺麗で可愛いナイスバディの女の子だ！ ガキの裸なんざ見たところで、インスピレーションなんざ刺激されねエーつてのオ！」

「裸見て刺激されるインスピレーションってなんだ！ 刺激されんのは、股にぶら下がってるアンタのチ○コだけだろ！」

「お、おまつ!? 女子の癖して、往来のど真ん中でなんちゆうこと言つとるんだ！」

男の一物の名を恥じらうことなく叫ぶヒナイに、ガマ仙人の方が顔を真っ赤に染める。

周りから送られる視線が痛い。

だが、ガマ仙人はゴホンと咳払いし、途端に神妙な顔へと戻り、懐から一本の筆を取り出す。

「なアに。ワシはちよつとした物書きだ」

「……女湯覗いた感想でも書いてんのか？」

「失礼な奴だのオ！ ちゃんとしたのを書いとるわい！」

「ホントか？ どーせ、エロい小説だろ？」

「疑り深い奴だのオ……歯に衣着せぬというかなんというか……」

やれやれと頬を掻くガマ仙人。

だが、彼が言っていることも、ヒナイが言っていることも正しい。

ガマ仙人の著書には、全年齢対象の作品もある。だが、代表作は18禁の官能小説だ。

覗きをしていたから官能小説を書いているハズというヒナイの偏見も大概だが、その期待(?)に漏れず、大人気の官能小説を書いているのがこのガマ仙人という男だ。

(まあ、それはいいとして……赤髪にこの性格、間違いなくうずまき一族だのオ)

ヒナイと言い合う中、ガマ仙人は彼女が何者かを推測していた。

うずまき一族——それはかつて木ノ葉と同盟を結んでいた渦潮隠れに住んでいた、生命力の高い一族のことだ。 “かつて”とは、もう渦潮隠れが存在していないことを指す。だが、生き延びた一族は各地に離散していると、ガマ仙人は聞いていた。

彼には、昔うずまき一族の知り合いが居たのだ。

弟子の妻だったが、どこか娘のように思う節もあり、親交を深めていた。

今はもう故人ではあるが、この赤髪を見れば彼女のことを思い出し、少しばかり胸が苦しくなる。

(うずまき一族は、珍しさからか人攫いの被害にあるって聞くから
のオ……どれ)

「おい、嬢ちゃん」

「ヒナイだ」

「ん、ヒナイって言うのか？　ならヒナイ。おめエ、チビ共のために働いてるつつたがのオ、そんなに家族多いのか？」

「家族つーかなんつーか……オレア、近くの鼠ノ寺つちゅートコで世話なつてんだ。そこア、親の居ねエみなしこの世話も見るトコでさ」

「ほう……で、同じ境遇の年下のために働いてるつてか。そりやあ立派な心意気だのオ」

素直に感心するガマ仙人に、ヒナイは『それほどでもな』とやや照れる。

そんなヒナイへ、ガマ仙人は人差し指を立てて声高々に叫ぶ。

「なら、そんなお前にワシ直々にとっておきのド派手な忍術を教えてやるー！」

「とっておきの……ド派手な忍術……!?!」

(いい食いつきだのオ)

目を爛々と輝かせるヒナイ。

その食いつき具合は中々のものである、ガマ仙人もニヤリと一笑する。

珍しい血族の者は、人攫いを生業とする者の餌食となりやすい。そうでなくとも、特殊な血族を収集する隠れ里の者の標的にもされ、連れ攫われる事件なども、かつてはあった。

ここは火の国。しかし、他国より侵入して暗躍する忍がいなくても限らない。

そしてなにより、身近にいる悪党どもが彼女を狙わないとも限らないのだ。

自衛の手段は持つべき。そう考えるガマ仙人は、それなりに自然な流れでヒナイへ忍術を伝授しようと考えたのだ。

今は亡き故人を彷彿とさせる少女。情が湧いた。情に動かされやすい歳にもなったという訳だ。

「その名も口寄せの術！　どうだ？　やってみるかのオ？」

「やる！」

ガマ仙人——自来也がここに訪れたのは、そもそも小説の取材の他に、木ノ葉の抜け忍であり伝説の三忍の一人・大蛇丸の情報を仕入れるためであった。

拳を交えてまで止めようとした同志。今やどこに居るのかさえ分からない。

だが、田の国にて不審な動きがあるということだけは耳に入っている。

なんでも、大名の話で新たな隠れ里を作るとのこと。

(だが、ここいらではなんの手掛かりも得られなかったのオ。もう少し、あっちゃこっちゃを巡るしかない……か)

団子屋で団子を食べながら、往來を行くカワイ子ちゃんに目を泳がせ、頬を緩ませる自来也。

だが、そんな彼の前に現れる二つの人影が……。

「おい、ジジイ」

「ん？ なんだ……ワシは今、取材で忙しいから野郎と話したくないんだがのオ」

「るせえ！ 今日、この前の借りを返しに来たんだよ！」

「わざわざそのために来たのか。暇なのオ！」

「ぐぐう……好きで暇なんじゃねえよ！ つそウ……軌道にのつたヤクの売買も、どっからともなくやってきた木ノ葉の忍の所為で取り締まられて、黒駒のオジキたちは捕まっちゃったし……」

(まあ、木ノ葉に連絡したのはワシなんだがのオ)

どうやら、所属していた組が忍よって取り潰され、行き場を失ったらしいチンピラ二人。

その原因は、自来也が故郷の木ノ葉に依頼を出したからだ。正式な手続きをすればそれなりの金がかかるが、本の印税でたんまり儲けている自来也にとってははした金。

町一つ助けたと思えば安いくらいだ。

だが、そのような裏の事情を知らないチンピラは、ただ腹いせで手痛い目に遭わせてくれた自来也に仕返しに来た。

「殴らせろ、このジジイ！」

「一応ワシは忍なんじやが……それでもやるのかのオ？」

「こつちだつて元忍だ！ この前とは違い！ 真正面からやり合やあ、おいぼれごときになんぞ負けやしねえんだよ！」

「ふんっ。金欲しさに忍から崩れ、極道に落ち、はてにはクスリにも手を出しおつて……忍者とは忍び耐える者だ！ おまえらのように、金欲しさにクスリに手を染めるモンは、忍とは言わんのオ！」

チンピラの言葉に、剣呑な雰囲気を漂わせ、凄みのある声を発する自来也。

思わず気圧されるチンピラは、そのまま一步、二歩と後退る。

その時だった——彼らの頭上より、大きな物体が落ちてきたのは。

「口寄せ・屋台崩しの術！」

「ぶげらッ！」

「ひでぶッ！」

突如、降ってきた大きなジャンガリアンハムスターに押し潰されるチンピラ。

モフモフで伸縮自在な体だが、大人よりも体の大きいジャンガリアンハムスターに押し潰されれば、ひとたまりもないことは想像をするのは難くないだろう。

そのまま泡を吹いて気絶するチンピラ。

彼らに押し掛かるハムスターの上に仁王立ちするのは、得意げに笑みを浮かべるヒナイだった。

「へっへーんだ！ どうだ、コラー！」

「おーおー。随分派手にやってきたのオ。火鼠も十分懐いとることだし、ワシもお役御免か？」

「へい、蝦蟇のオジキ！ 俺っち、こうして姉御と仲良くやらしてる手前、もうオジキの手工借りなくとも、堅気でやってけるってチューの

「！」
よく喋るハムスター——ノブ雄の言葉を受け、満足気に笑う自来也。

このハムスター……もとい、ネズミこそ、火の国に生息する少々特殊なネズミである。『火鼠』だ。

その毛皮で仕立てられた衣は、如何なる火遁忍術にも耐え、灼熱地獄に放られても紅蓮に染まるだけという伝承がある。

この火鼠こそ、鼠ノ寺の本尊。

火鼠は、クマネズミやドブネズミ、果てにはハムスターなど、姿は様々ではあるが、毛皮に耐火能力がありさえすれば火鼠と呼ばれる。

普通、ドブネズミには近寄りがたいものであるが、可愛いハムスターであれば話は別だ。

大きい大福のような見た目で、巨大な毛布の如き触り心地のノブ雄のお陰で、鼠ノ寺の知名度は上がった。

現在進行形で町行く人々も、たった今ヒナイと共に現れたノブ雄を撫でまわしており、ノブ雄も満更ではない顔を浮かべている。

良好なヒナイとノブ雄の関係。

これならば、口寄せを拒否されるなどという状況にもならないはず。

潮時だと言わんばかりに、振り向かぬまま親指を立てて立ち去っていく自来也。

「そんじゃあのオ！ 今度会う時は、もっとボンキュツボンの美女にでもなっとくれ！」

「るっせえぞ、このエロ仙人が！ くっぞ！ 目にももの見せてやるからな、コラッ！」

「おう、楽しみにしとくぞ！」

そう言い残し、自来也はドロンと消え去る。

やっと去っていったことで、こうして怒鳴ることもなくなり体力を浪費しなくて済む一方で、どこか寂しくもなるヒナイ。

一週間ほどの付き合いだったが、やはり別れは寂しいものだ。

どこかシユンとした面持ちとなり、気絶したチンピラをノブ雄に任

せたヒナイは、なんとなしに往来を進んでいく。

そして自然と導かれて入ったのは、かなり寂れた古本屋だ。

繁盛しているようには見えない古本屋だが、店主が几帳面なのか、しつかりと本が著者名で五十音順に並べられている。

ふと目に付くのはシの段。

シとスの境付近に並んでいた、少し背表紙が日に焼けた本。題名は『ド根性忍伝』だ。

(これ、ガマ仙人が書いた奴か……)

徐に頁をめくり、サツと本の内容に目を通す。

一頁、また一頁と。

そして暫く読み進めている内に、このまま立ち読みするのも気が引けると、ヒナイは携えた小説を店主らしき老人の元まで持っていく。

「おっちゃん。コレくれ！」

「あいよ。十両だ」

「おう！」

嬉々として小説を購入したヒナイ。

我ながら柄にもない買い物をしてしまったと反省しながらも、どこか満足気に笑みを浮かべるヒナイは、懐に小説をしまい込み、帰路につく。

古本の匂いが鼻を擽る。

どこか不快なようで、どこか温かさを覚えるような香りは、まさに自来也のようだ。

(帰って読もつと♪)

——後に、ド根性忍伝に感化されたヒナイが、己を封天鼠太師と名乗るのはまた別の話。

第四章 蛇と鶏

二十一 脳筋ドクター&生臭坊主&ビツチ娘

「ったくよオ、しらたきも懲りねえなア」

「……なにが……ですか？」

道行くシライトとヒナイ。

波の国を発つて数か月、彼らは旅路を共にしていた。若い男女が一緒になって旅をする……二人の距離が縮まることがあると思いきや、そのようなことはない。

性欲に乏しいシライトと男勝りなヒナイの性格から、二人の関係は友人以上になつてはいなかった。

そんな二人であつたが、辟易した様子のヒナイが不服そうに物申す。

「行く先々で人助けして、全然てめエの師匠んトコつかねえじゃねえか」

ヒナイの言葉に成程、と首肯するシライト。

そう、シライトたちは彼の師である綱手の下へ向かつて進んでいるのだが、道行く途中で困った人を見かける度、シライトは人助けしていたのだ。

荷物運びから病の治療まで——『病払いの蛞蝓綱手姫』と謳われた綱手よりも積極的に病を治すどころか雑用までこなす様に、ヒナイは素直に感嘆する一方で呆れにも似た感情を抱いていた。

人助けには相応の時間を要す。

その分、綱手たちの下まで辿り着く時間がかかってしまう。

にも拘わらず、シライトは何度も何度も困っている人に手を差し伸べる始末。

ヒナイ自身、世助けの旅に出てきた手前、今までは強く言えなかったものの、当初の目的を果たすのもままならないのは如何なものかと、このタイミングで口に出したのだ。

「ですけど……何て言うか……放っておくのも忍びないので」

「忍びないって……とことんお人好しだな、コラ」

「……一応……褒め言葉として受け取っておくことにします」

少し申し訳なきように気落ちするシライトに対し、ヒナイはポリポリと頬を掻く。

「ま、人助けもほどほどにして綱手って奴に会いに行こうぜ。話はそっからだろ？」

別に、ヒナイが綱手に会いに行く理由はこれっぽっちもない。

ただ、師を待たせているシライトへの心配で提言しているだけなのだ。

そんなヒナイを前に、無表情ながらも思案する様子を見せるシライトは、ウンウンと頷いて見せる。どうやら、一度綱手の下へ会いに行くことに決心したようだ。確かに今のペースでは、観光がてらあちこちの賭場を巡る綱手に会いに行けるペースではない。最終手段として、カツユに口寄せしてもらおうという手があるが、わざわざ師を呼び出した後に自分を呼び出してもらうなど、失礼極まりない行為と言えよう。だからこそ、シライトは牛歩ながらも己の足で歩んでいたのだ。

だが、その遅き歩みもここまで。

「少し……急ぎましようか」

「よし来たっ！」

忍者ではないものの、彼らはそれなりのチャクラコントロールできるものだ。

身体強化して走れば、一週間もあれば火の国を横断することができる。

その土地の風を、香りを、そして光景を楽しみながら人助けの旅も中々乙なものではあったが、一先ずは師の下へ。

二人の歩みは早くなるのだった。

「——って、言った傍からこれかよ、コラ！」

「……すみません」

「ごめんなさいねえ……お急ぎなのでしょうに、手伝ってもらって……」

酒樽を肩に担ぐシライトとヒナイ。その二人の間には、壊れた荷台を引く老人が居た。

この老人は、近くの町で酒屋を営んでいる人物。しかし、店で売る為の酒を運んでいる途中に荷台の車輪がイカレてしまい、困っていたのだ。

そこへやって来たのが二人。

お人好しなシライトは勿論、ヒナイも助けずには後味が悪いと運搬を申し出て、こうして担いで町まで運んでいるのだった。

向かう先は、火の国の中でも田の国との国境に近い町だ。

稲作が盛んな町なようで、普通に玄米や米、煎餅などを売っている他に、酒も製造しているという訳らしい。老人は、そんな町へ運ぶ酒を、町はずれの酒蔵から運んでくる途中だった。

「本当にありがとうございます……お礼に、お酒をふるまいますよ」

「すみません……僕十五歳なので、遠慮しておきます」

「オレあこれでも坊主だからよ。酒は飲まないぜ、ばあちゃん。悪いな」

「あら……そうなの？」

礼に酒をふるまう気だったらしい老人であったが、相手が酒の飲めない人であると知ると、目に見えて落ち込んでしまった。

手伝ってもらっているにも拘わらず、礼をできないことに罪悪感でも覚えているのだろう。

そんな老人の感情を汲んだのか、シライトは『そうだ』と声を上げる。

「それでしたら……お酒を少し頂けませんか？ 恩人にお酒が好きな方が居るので……」

「ああ、そういうことでしたら喜んで」

シライトの知り合いには酒豪が居る。

一人は大蛸蝮仙人。そしてもう一人が、何を隠そう綱手だ。後者に

は酔った勢いで桜花衝を繰り出され、死にかけてた思い出がある。余り進んで贈りたくはない相手だが、老人の気持ちを考えれば、酒をもらった上で恩人に贈ってあげれば、どれだけ優しい世界か。

にこやかに笑う老人を前に、シライトもフツと微笑む。

その様子を少し前から覗くヒナイは、自分が担ぐ酒樽を見上げ、ポツリと零す。

「酒ってうめエのかな……?」

「……飲んだらダメですよ?」

「の、飲まねえよ!」

生臭坊主に片足を突っ込んでいるヒナイに、シライトは冷静に注意するのだった。

「ん〜……なくんか、酒臭エ町だなあ……」

「お酒が有名とのことですし……」

老人の酒樽を店に届けた後、数本ほど酒を一升瓶に入れて貰ったシライトたちは、今日の宿探しのために町を散策していた。

酒の香りがあちらこちらから漂う。

油断すれば、酔ってしまいそうになるほどだ。

それだけ酒の香りが濃厚な町の中では、あちこちで盃を傾けている人々の姿が垣間見える。皆、ほんのり頬を紅潮させ、恍惚とした表情だ。

「昼間っから酒飲んで、大丈夫なのかねエ……」

「……まあ、土地柄の体質というのもありますし……例えば……一部の内陸部の人には、生海苔を消化できないです」

「マジでか」

「焼き海苔なら消化できるらしいんですが……先祖からの食文化は、そのまま現代の人々の体質に関係するという例……だと思えます」

「ほー。じゃあ、ここらの人は酒に強エーってか」

「どれくらい前から飲んでいるかにもよりますが……」

ちよつとしたうんちくを話したシライトは、感心するヒナイを余所に、辺りを見渡す。

酒が苦手な人には少々厳しい町かもしれないが、一年中酒臭い霧に覆われた湿骨林で修行していたシライトにとっては、この程度の酒臭さなど屁でもない。

時折漂ってくる、煎餅に塗った醤油が焦げる香りに腹を空かせつつ、宿がないものかと目を右往左往させる。

と、その時だった。

「いいじゃねえか嬢ちゃん……ちよつと、俺とお茶してから楽しいことしようぜ〜?」

「だ〜めっ♪」

「いいじゃねえかよオ〜」

「あんまりしつこいと嫌われちゃうわよ? うふっ。じゃあ、アタシはこのくらいで」

酔った勢いでしつこく絡む中年男性を振り払い、一軒の店からすたこらさつさと出てきた人影。

身に纏うのは、帯の代わりに薄紫のしめ縄で締めた、紺色の着流し。

猫目の瞳は、少し切れ長で凛々しく、その色も相まって黄玉のように見える。

少々癖のある水色の髪は腰の辺りまで伸び、酒の臭い漂う往来に、そこはかたなく花の石鹸のいい香りを振りまく。

薄い唇は紅を塗っているのか、熟した林檎のように赤い。

身振り手振りもいちいち艶めかしく、往来に行く男たちの目を惹き、その度に悪戯に微笑んでいる。

美人と言っても差し支えないその者は、酒を飲んでいるのか少々たどたどしい足取りだ。

すると、覚束ない足取りで進んだ後、不意に膝を落として倒れ込もうとするではないか。

だが、寸でのところで駆け寄ったシライトが、倒れ込もうとした美人の手を取り、支えてみせる。

「……大丈夫ですか?」

「あら、ありがと。親切なのね」

紅を塗った唇を半月のように歪ませ、美人は目を細める。

「……もしかしてお医者さん?」

「……見習いですが」

「そつか。アタシ、てつきりこのまま『介抱する』とか言われて、宿に連れ込まれてイケないことされるかと思っちゃった♪」

「……しません」

「紳士ね」

「そこは……医者と言ってもらえれば」

「うふふっ、冗談よセンサー」

シライトより漂う薬草の香りで、彼が何者かを当てた美人。

そのまま手を取られて立ったかと思えば、徐に彼と手を組んで、彼へもたれかかった。

舐めるような視線。毒のように甘い香り。ふと髪を掻き上げた時にのぞくうなじの色っぽさなど、性欲の乏しいシライトでなければ、いちいち男性の下半身が反応してしまいそうな色気を遠慮なしに振り撒いている。

これは治安の悪い町や村であれば、悪漢たちに襲われかねないだろう。

そんな美人は、シライトへ医者（見習いではあるが）であることへの尊敬と、若干の揶揄いを含めたような口調で『センサー』と呼んでみせる。

なんと反応すればいいものかとシライトが困っていると、生暖かい視線を送るヒナイの姿が目映った。

「……どうすればいいですかね?」

「カイホーしてやりやあいだろ。別にオレあ構わないぜ。持ち帰ってずっこんばっこんやつても文句は言わねえ」

「うふふっ、嫉妬? もしかして彼女さん?」

「^違います」

「息ピッタリ♪」

熱い吐息を漏らす美人は、シライトの腕を離れて、何故かヒナイの

方に近寄る。

「男勝りなのね。サバサバした子、嫌いじゃないかも」

「は？」

「アタシ、受けでも攻めでもどっちでもイケるクチなんだけど……どう？」

「お、往来の真ん中でなんてこと言ってるんだ、てめエ！」

顔を真っ赤にして関係を迫る美人を突き放すヒナイ。

彼女の師であるガマ仙人が見れば『お前が言えることじゃないのオ』と言うだろうが、こちらの美人は些か雰囲気が生々しすぎる。

フェロモンに耐え切れなかったヒナイに突き飛ばされた美人は、『ああ♡』と嬌声にも似た声を上げ、再びシライトの下まで戻ってきた。

その際、彼の胸と腕で受け止められるが、その際に『はっ』と声を上げ、徐にシライトの腕を揉み始める。

「……あの」

「凄い……お医者さんって言ってたけど、ケツコー鍛えてるじゃん」

「いや……なんで……腕を……」

「腹筋も触っちゃうね？ わあ……すっごい！ 顔に似合わずバキバキ！」

「その……揉まないでください」

「うふふっ、センサー。アタシ、センサーみたいなギャップすっごい好み……」

潤んできた瞳で見上げ、漏れるような息遣いをしながら語る美人の前に、シライトは頑なに無表情だ。そのあたりは、ヒナイも感心して彼のことを見つめている。

だが、面白くない。

他人がチャホヤされている姿を見るとむかつ腹が立つのは何故なのだろうか？

ヒナイは一度思索し、それが他人への嫉妬だと決めつけると、一度その場で精神統一を図り、気を落ち着かせる。

あの美人はただの酔っ払いだ。

そしてシライトは、酔っ払いに知られている困っている人だ。
ならば、助けようではないか。

「はいはい。ねえちゃん、そこらへんにしとけて、な？ オレの連れも困ってっし……」

「あ、折角なら三人でどう？ きつと夜が情熱的になると思うんだけど……♡」

「……は？」

とんでもない爆弾発言をしなかったか、こいつ。

ヒナイはそう思った。

この時、ヒナイはとある言葉を思い出した。

酒が人をダメにするのではない。酒は、その人の本性を暴くだけなのだ——と。

今日の前に居る美人は、酒に酔って本性を現した、いわば享楽主義の人間だろう。人生を楽しむことにつき込んでいると言い換えてもいいだろう。

——楽しければなんでもいい。

ゾツと、背筋を舐められたかのような悪寒をヒナイは覚える。

要するにドン引きしただけだ。白昼堂々3Pを誘うなど、常人であれば思いつかない。

「すすすつ、する訳ねえだろコラ!! 頭沸いてんのか!?!」

「んもウ、つれなくい。じゃあセンサー……二人つきりは？」

ヒナイを勧誘できなかった美人はジト目を浮かべ、頬を膨らませる。

そのまま真後ろのシライトへ上目遣いをすれば、ピタリと体を密着させ、囁くように誘ってくるではないか。

しかし、

「……すみません」

「そーだそーだ、言ってやれしらたき！」

「僕……そっちの気はないので……」

「貞操観念は大事なんだぞ……って、え」

サツとヒナイの顔が青ざめ、尻もちをつく。

「……どうかしましたか？ ヒナイさん」

「い、いや……なななな、な、なんでもねエ……いや、うん。色々あるよな、ああ。あ、安心しろよ……ダチとしてやってくにやあ……うん」何かを取り繕うように、狼狽えながら視線を泳がせて喋るヒナイ。一方で、首を傾げるシライト。何故ヒナイがそこまで狼狽えているのか分からず、逆に彼も狼狽えてしまう。

そんな混沌とした中、唯一平静を保っている美人は、にっこりと微笑む。

「もしかして……気づいてた？」

「……なにがですか？」

「ああ、ううん。そうね、医者って言ってたもんね」

意味深に語る美人。

一変する様子に、ヒナイは目を丸くする。

「なな、なんだってんだよ……オレももういっぱいいだぞ、コラ」

「はあくあ。この子は反応が単純で面白かったんだけど、センサーは気づいてたから、あんな淡泊な対応だったの？」

「多分……それは元々の性格の影響が大きいかと」

「ぶつ。そう」

狼狽えるヒナイの一方で、美人とシライトは淡々と話を進める。

だが、未だに状況を呑み込めていない様子のヒナイを見かねたのか、にやにやと笑いながら美人が尻もちをつくヒナイに手を差し伸べた。

「立てる？」

「え、お、おう……って、なに二人で納得し合ってたんだよ、コラ！ 詳しく教えろ！」

混乱したまま手を取るヒナイは、そのまま美人に持ち上げられるようにして立ち上がる。

華奢な体に反し、体を引く力はそれなりに強かった。軽々しく立ち上がらせられたヒナイは、そんな美人にガンをつけ、真相を追求するように詰め寄る。

すると美人は、深く深く、それこそ三日月のように唇を歪ませ、そつと口をヒナイの耳元に近づけて耳打ちした。

「アタシ……オ・ト・コ・の・コ♪」

「オトコノコ？ オトコのコ……おとこのこ……男の子オ!？」

素つ頓狂な声を上げたヒナイは、堪らず美人の股間に手を当て、男ならばぶら下げているであろう一物の有無を確かめる。

ムギユ。

フニフニ。

コリツ。

「あんっ♡」

股間をまさぐられて嬌声を上げる美人は、恍惚とした表情で、未だ信じられぬと言った様子のヒナイに眩く。

「ね？ ついてるでしょ」

「う、嘘だろ……？」

世の中、どれだけ美しくとも男が居ると、ヒナイは改めて知ることになった。

いわゆる彼女——否、彼は男の娘だったのだ。

「アタシは『ミズチ』。よろしくね、センサー。ヒナちゃん♪」

「どうも……」

「男……男……？」

美人——ミズチが男であるとヒナイが知ってから、茶屋に寄った三人。

依然としてヒナイは信じられぬものを見るかのような瞳でミズチの体を嘗め回すように見るが、その視線にミズチは頬を紅潮させ、口元を着流しの袖で覆う。

「やだ、ヒナちゃんったら……そんな熱い視線で見つめられたら照れちゃう」

「……てめエ、ホントに男なんだよな？」

「そうよ。生まれて十七年、ずうくと♪」

「アレだよな。手術とかして、生やした訳でもないんだよな？」

「うふふつ、ちゃんと天然物なんだから」

(てんねんもの)

ミズチとヒナイの会話の横で、茶を啜りつつミズチの『天然物』発言に目を細めるシライト。

彼は以前、白を骨格で男性と見抜いたように、今回もミズチのことを男性と見抜いていた。

だが、白よりも女性的な身振り手振り故、見抜くにもそれなりの時間がかかったことを、ここに追記しておこう。

それにしてもミズチは色っぽい。

茶屋にて彼が頼んだ白玉あんみつを食べる際の挙動にしても、髪が食べ物につかないよういちいち髪を掻き上げる動きや、唇についた黒蜜を舐め取る動きは、大人の女性のソレと言って過言ではないだろう。

これは、騙される者が多くても仕方がない。もつとも、彼に自分を女性と間違えさせる意図があるのかは不明だが、先程の会話を鑑みるに、女性と勘違いした者をからかうことはするようだ。

(世界には、色んな人が居るんだなあ……)

しみじみと啜る茶は、いつもより渋い。

閑話休題。

「それにしても、なんで女装なんてしてんだ……？」

「女装もなにも、アタシが好きな美的感覚にビビっとくるのがコレだっただけ。何を美しいと思うのかはアタシの勝手ですよ？」

「そりゃあ……そうだな」

「人の生き方って人それぞれだけれど、アタシは美しく生きたいのもつとも、美しさの定義自体が人それぞれなだけだね」

「……おー」

「ま、あとは楽しく生きたい感じ？ 折角の人生、楽しまなきや損じや

ない」

明るい口調で語るミズチは、あつという間に白玉あんみつを食べ終える。

それから、茶を啜って口の中に残る甘さを流した後は、一息吐いて二人に視線を送る。

「それで、若い男女が二人で旅して、なにしてるの？」

「……強いて言えば……世助け……ですかね？」

「あら素敵。若いのに立派じゃん？」

「それほどでも……」

「ふくん……世助け、ねえ」

舐めるようにシライトを見つめるミズチは、常に弧を描く口をさらに湾曲させ、突然告げた。

「面白そうね。アタシも連れてつてよ」

「……え」

「ううん、嫌って言っても付いてく。アタシ、今ちよつと変な人らに追われててね……」

「おいおいおい！ 勝手に面倒事持ち込んできてんじゃねえよ、コラ！」

ミズチの提案に茫然とするシライトの一方で、追手に追われていることを暴露する彼に声を荒げるヒナイ。

しかし、数秒思索したシライトは、悩まし気に眉を顰めた後、決心がついたように真つすぐな瞳を浮かべた。

「分かりました……乗りかかった舟です」

「やった！ センセー、素敵。抱かしてあげちやう♡」

「……遠慮します」

「じゃあ、抱いてあげちやう？」

「それもちよつと……」

「んもウ、甲斐性なし。ヒナちゃん、フラれたアタシを慰めてく」

「慰めつか、コラ!!」

——こうして、凸凹なトリオが完成するのだった。

「——ミズチはどこに逃げた？」

闇より声が響く。

「そう遠くには行っていないはずだ」

木々を飛び移る音が響く。

「まあ、どちらにせよ……」

布擦れの音が響く。

「音隠れを……いや、大蛇丸様を裏切った者には、死、あるのみだ」

死の音が、歩み寄ってくる。

二十二 『いや、忍べよ』

「ふう〜……いいお湯だった♪」

頬を紅潮させ、手拭いで髪の毛の湿気をとるミズチは、先に上がっていたシライトへ向かって言い放った。

彼が部屋に入ってくるのとすれ違いに、そそくさとヒナイが部屋から出ていくが、これから風呂に入るつもりなのだろう。がさつに見えて彼女は風呂が大好きだ。一日の疲れを癒すべく、今日もたつぷり湯に浸かることだろう。

それは兎も角、今日泊まる宿の一室に集う二人の間には、何とも言えぬ空気が漂う。

ミズチが望んで付いてきた訳だが、正直なところ、シライトもまだ完全に心を許している訳ではないのかもしれない。いや、適切な距離感を掴むべく、相応の距離感を保っているだけだろうか。

だが、乳鉢で乾燥させた薬草を擦っている彼に構わず、ミズチは彼の背後に近づいてきた。

「へー。なんのお薬？」

「……風邪薬ですね……あつて困るものじゃないので」

「ふーん。売るの？」

「……必要に応じて……です」

「うふふつ、貧しい家だったら無償で配るって感じ？」

「まあ、そうですね」

シライトの言葉にフツと笑うミズチは、そのまま窓際まで歩んでいく。

すると徐に窓を開け、曇天の空を見上げる。

「もうすぐ雨かも」

「……そうですか？ 明日には晴れてほしいですが……」

「センサー、雨は嫌い？」

「眺める分には好きですが……洗濯とかができなくなるので……毎日だと困るかもですね」

「そう。アタシは雨が好き」

頬杖をついて空を見上げるミズチの傍に、一粒の雫が降って来た。それからほどなくして、町には夥しい雨粒が降り注いでくる。往來を歩んでいた者達は、歩を急がせてどこかへ向かっていく。

雨粒のように忙しなく動き回る往來を見下ろすミズチは、ほんのり冷えてきた空気を鼻で吸い込み、ふうと息を吐いた。

「お空と地面が繋がってるようで……神秘的だから」

感性は人それぞれ。

だが、雨という一つの現象を神秘的と捉える彼の感性を、シライトは素直に感心するのだった。

「しらたき。真ん中で寝ろ」

「真ん中……ですか」

「あら。みんなで川の字？」

それはヒナイが風呂から戻り、髪の毛が乾いた頃だった。

絵も言えぬ表情で、自分とミズチの間を挟むポジションで寝ろと言うヒナイに、シライトは首を傾げる。

一方でミズチは、三人で川の字となって眠れることを楽しみにしているのか、嬉々とした口調だ。

石鹸の香りが仄かに香るヒナイは、やや理解し難いといった表情を浮かべているシライトに詰め寄り、ミズチに聞こえぬよう耳打ちする。

「(会ってすぐの野郎の隣に寝られんのは気が気じゃねえんだよ)」

「(……繊細なんですね)」

「(バカにしてんのか、てめエ！)」

「(いえ、そういう訳じゃ……)」

どうやら、単純にミズチの隣で眠りたくないらしい。

夜這いでもされると思っているのだろうか？ それにしても、男勝りな性格であるにも拘わらず、意外と貞操を気にしたりとしっかりしている彼女だ。坊主だから、と言えばそこまでだが、卵料理——特

に親子丼が大好きな（生臭）坊主とは思えない。
（バランスはとれてる……って言ったら、怒られそう）

男勝りな女と、女っぽい男。バランスはとれている。

そんな思考が一瞬脳裏を過ったシライトであるが、口に出せば鉄拳は不可避だと結論を出し、固く口を結んだ。

「アタシはどこでもいいわよ。夜更かしはお肌の天敵。寝る場所でもめて就寝が遅くなるのは馬鹿馬鹿しいもの」

「……地獄耳か、コラ」

「うふっ。そーいうギャップ、嫌いじゃない。寧ろ好き」

「やめろオー！」

ミズチの発言に、表情を険しくするヒナイ。

案外気の合う者達ではないかとも考えるシライトであったが、この考えもまた結果が見えていたので、あえて口に出さず、早々に二人の間に敷かれている布団に潜り込むのだった。

「うーん！ いい天気。空気がおいしく！」

グツと伸びをしながら林道を進むミズチ。傍らにはシライトとヒナイが勿論居る。

朝早く宿を発った三人は、次なる町へ向かうべく、鬱蒼と杉が生い茂る林道を進んでいた。昨日の雨もあつてか、やや湿気はあるものの、木や苔など様々な匂いの立ち込めるこの空間は、居心地のいい場所だ。

一方、くあくど欠伸をするヒナイは、何食わぬ顔で歩いているシライトにそつと耳打ちする。

「なあ、しらたき。ホントにこのまま連れてくのか？」

「ホントもなにも……こういう成り行きでしたし……」

「手前から面倒事に飛び込んでくのア兔も角、他人が呼び込む面倒事に巻き込まれんのは御免だぜ？」

ヒナイが危惧するのは、ミズチが口にしていた追手のこと。

彼が何者に追われているのかは知らないが、手配書に載るような大罪人だとするならば、一緒に居る自分たちも追い忍やらなにやりに襲われるのではないか？ そのあたりを彼女は心配していた。

「こうしてる今も、あいつを狙ってる野郎がどっかに居たらと思うとなあ……」

その時、近くの茂みがガサガサと音を立てる。

咄嗟に振り返る三人。たった今話していた内容が内容であったため、シライトとヒナイは臨戦態勢をとり、音の発信源に目を遣った。

すると出てきたのは、一つの巨大な黒い影。

「なんだビビらせんなよ。クマじゃねえか。刈って食うか？」

「あら、かわいい」

「……『逃げよう』とかは考えないんですか？」

クマだった。

だが、クマの登場に一切動じない三人。

ミズチのかわいい発言は兎も角として、ヒナイに至ってはクマを食用としか見ていない。もつとも、ヒナイほどの実力があれば、野生のクマなど敵ではないが――。

「そうだな。お前は逃げているならば、逃げているなりにビクビク震えているべきだ」

現れた野生のクマが倒れ、不意に声が響いてきた。

何者かの野太い声。誰のものかとシライトとヒナイが辺りに注意を払っていると、ミズチはやれやれといった様子で首を横に振るっている。

「別に逃げている訳じゃないもくん。強いて言えば……家出かしら
♪」

「龍地洞での修練もほっぽりだし家出とは、大層なご身分だな」

直後、六つの影が三人を囲うように現れる。

十人十色な容姿の者達だが、全員に共通しているのは、ミズチが帯のように用いている注連縄を同じく身に着けていることだろうか。

それだけで、現れた者達がミズチとなんらかの関係がある者であることは、シライトたちにも想像することができた。

ただならぬ殺気。

間違いない、現れた者達は忍だ。

「おいおい……なんだ、あいつらはよ」

「ん？ そうねエ……音忍六呂衆おとにんりくりよしゆうよ」

「おとにんりくりよしゆう？」

ヒナイの問いに応えるミズチ。

だが、聞き慣れぬ言葉にシライトが目点を点にして、言葉を反芻する。

「そ。簡単に言えば、音忍四人衆つてのに嫉妬して、勝手に名乗ってる雅楽隊みたいなものよ」

「誤解を招く言い方するなアーっ！」

かなり雑多な説明をするミズチに、現れた六人の内、腕が六本ある少女が声を荒げる。

「私たちは、大蛇丸様に『地』の呪印を与えられし、音忍の中でもエリートリートの追い忍部隊だ！」

「別に『地』の呪印持ちなんて、北のアジトに山ほど居るじゃなくい？」

「ぐぬっ……部隊名までつけてもらってるんだぞ！」

「コンプレックス拗らせ過ぎてトラブル起こさないようにご機嫌取りって、大蛇丸様も大変よね〜」

「ぐぬぬっ！ 上忍レベルのチャクラを持つ私たちに向かって反抗するなんて、命はないと思え！ ミズチ！」

「貰いもので浮かれるのも考えものよね〜」

「ぐぬぬぬっ！ す、すぐに訂正するなら許してやってもいいぞ……？」

「果てには、厄介払いに『追い忍だから』っていう理由でアジトをたらい回しにされて、ロクにエリート扱いされてないもの面白いトコよね〜」

「……うわああああああん!!! 断金!! ミズチが言っちゃイケないことと言ったあああ!! 言っちゃイケないことをおお!!!」

ミズチとの口論の果てに敗北した六本腕の少女は、ワンワン泣いて大柄の男の方へ目を向ける。一方、目を向けられた男——断金は、

結果は見えていたと言わんばかりに呆れた様子だ。

対して、ミズチはヒナイに錫杖で頭をスパーンと叩かれる。

「焚きつけてんじゃねえよ!! これじゃあオレらも厄介事被るじゃねえか!!」

「あら、そう? 大丈夫よ。あんな見た目だけど、アタシよりは弱いと思うから」

「火に油を注ぐなコラアーツ!」

再度錫杖で引っぱたかれるミズチ。

その間、ミズチに散々に言われた音忍六呂衆たちは、額に青筋を立てて殺気を立てていた。

確かに、あれだけ散々な言われようをされれば、穏やかな人であっても少しは苛立つハズ。短気な者達であれば尚更だ……既に泣かされている者も居るが。

「ふんっ。お前を連れて帰れば、大蛇丸様も我等のことを露ほどは認めて下さるだろう」

「えく。だって、もう『胚』は渡したし、放っておいてくれてもいいじゃない」

「嫌というなら、無理やりでも連れて帰るまでよ」

リーダー格らしい大柄の男が、腰より桴を取り出し、身構える。

「音忍六呂衆が一人、断金」

「同じく、勝絶」

「ひっぐ……同じく、双調」

「……同じく、黄鐘」

「同じく、盤渉」

「同じく、上無」

断金に続き、それじれ己の名を名乗っていく六呂衆。

太鼓を背負った大男が断金。

箏篋を携える華奢な男が勝絶。

蛇皮線を構える六本腕の少女が双調。

鉦鼓を首に下げる女が黄鐘。

箏篋を手で回す飄々とした男が盤渉。

そして、龍笛を口に携えるのが上無だ。

見事なまでに楽器を演奏しそうな風貌の者達だが、追い忍と言っていたことから、彼らは忍者なのだろう。

「いや、忍べよ」

「ヒナイさん……藪から棒に何を」

ピーヒャラピーヒャラ戦闘中に演奏する様を想像したのか、ヒナイは実に神妙な面持ちで、剣呑な雰囲気を漂わせる六呂衆にツツコんだ。

彼女のツツコミも十分理解できるが、雰囲気的にツツコめる状況ではない。シライトはそれを伝えるべく、彼女の肩に手を置いた。すると、唐突に気が付いたかのような反応をミズチが見せる。

「あ、一応気を付けてね。彼ら、生まれも育ちのバラバラだけど、死韻しいんの一族に伝わる秘伝忍術習ってるっぽいから」

「しいんのいちごぞく」

「音でチャクラを活性化させたり、幻術をかけたたりする一族よ♪」

ウインクで解説を締めてくれるミズチだが、ピンとこないシライトは依然呆気にとられているままだ。

しかし、軽い口調の割には、相手は中々の難敵である。

幻術をかける際は、主に相手の五感のいずれかに作用させるのが基本だ。火の国を代表する一族である“うちは一族”は、その紅き眼——写輪眼を用い、相手の視覚に作用させて幻術をみせる。

他にも嗅覚、触覚、味覚など、幻術をかける方法はあまたあるが、中でも防ぎにくいのが聴覚に作用する忍術と言われているのだ。

なにせ、聴覚に作用する幻術は聞こえたらアウト。

それはつまり、有効範囲が広いということ。

防ぐには耳を押さえるのが手っ取り早いですが、耳栓でも用意していないければ、手で押さえるぐらいしか回避方法はない。

しかも、それは腕を封じることとイコールであるため、忍術も忍具を用いた攻撃を封じられることと同義になる。足で戦う忍者も居るだろうが、それでも苦戦は必死になるだろう。

「そうだ！ 命が惜しかったら、投降することだ！」

「……これ、オレらもか？」

「恐らくは……」

投降を勧める双調を余所に、その勧告が自分達へ向けられているものかを審議するシライトとヒナイであったが、このまま自分たちだけ逃げることもできなさそうな雰囲気、冷や汗を垂らす。

「——仕方ないか」

刹那、身の毛もよだつ寒気が辺りを覆う。

寒気の発生源は他でもない、ミズチだ。

獲物に狙いを定めるかのように目を細める彼からは、只ならぬ殺気が放たれている。波の国で出会った濃霧でさえ、ここまでの殺気はなかった。

一変したミズチに驚く間もなく、彼の袖からは丸太のように太い大蛇が六匹、それぞれ六呂衆の下へ伸びていく。

「蛇睨呪縛か!!」

口寄せされて向かってくる大蛇を前に、術の全貌を知っている断金が声を上げる。

すると彼は徐に空気を吸い込み、なんと持っていた桴を膨らませた自分の腹に叩き込むではないか。

「腹太鼓！」

次の瞬間、彼の腹からは低く重い音が衝撃として辺りに響きわたっていき、向かってきた大蛇を衝撃で弾き飛ばす。

相手を大蛇で縛り上げる術が、*“蛇睨呪縛”*だ。

これで縛り上げられる心配はなくなった———と思いきや、大蛇の影で見えなくなっていたミズチの足元から、途端に膨大な量の煙が巻き上がり、同時に凄まじい勢いの風が吹き荒れる。

「しまった……!」

「バ〜イ♪ 大蛇丸様によろしく言っといてね〜♪」

気づいた時にはもう遅かった。

ミズチは、他二名と共に巨大な鶏に乗って、大空へと旅立ってしまった。鶏らしからぬ絢爛な色の羽を風に靡かせる鶏。しかし、尾はこれまた絢爛な鱗に身を包む蛇が、舌をチロチロ出し入れし、地に居る六

呂衆を睨みつけているではないか。

そのように蛇が睨みを聞かせている一方で、王冠のように豪華な色合いの鶏冠を生やす鶏の頭は、背に横座りしているミズチに目を向ける。

「ミズチ姉さま、ご機嫌麗しゅうございます。今日も一段とお美しいですわ」

「うふふつ。クジャ、貴方もね」

「此度は何処へ？」

「そうね〜…雲みたいに気ままに旅したい気分だから任せるわ」

「畏まりましたわ」

『クジャ』と言う名の鶏——もとい、バジリスク。

風の国では危険かつ希少な生き物として知られている種だが、実際目の当たりにすると、その美しい光沢と色を持つ羽に心奪われることだろう。

だが、

「シユ〜！ 女っ！ 女のいい臭い！ 顔、悪くねえ！ やらせろ！」
「んもウ、節操ないんだから。だ〜めっ。ヒナちゃん怖がつてるでしよ」

先程まで地上へ睨みを聞かせていた蛇頭の方が、背に乗るヒナイに気付き、舌をチロチロさせ、その凶悪な顔面を彼女の眼前まで近づけた。

男勝りなヒナイだが、流石にこのサイズの蛇は生理的に無理なのか、鳥肌を立たせながら錫杖で『しっしっ！』と追い払う。

そんなヒナイを見かね、主人であるミズチが蛇頭を窘めた。

（忙しい口寄せ獣……）

片や、落ち着きのある貴婦人のような振る舞い。

片や、女に餓えた男のように興奮を隠さぬ言動。

その様を間近で見っていたシライトは、混沌とした現場で遠い場所を見る瞳を浮かべていた。

話は変わるが、蛇は古くより生命エネルギーの象徴と言われている。

特に交尾は、雄と雌が番となつて絡み合い、その時間は長いと数日間にも及ぶ。そんなエネルギーギツシユな絡み合いをイメージして作られたのが、神社などでよく見られる注連縄である。

そんな蛇を生やす鶏。

男らしさも兼ね備えつつ、女らしさも兼ね備えている生物。

(……なんだか、ミスチさんみたい)

「うふふつ、主とペットは似るモノよね」

「……心を読まないでください」

シライトのふとした考えを読んで応えるミスチ。

勤が良いのか鋭いのか。常に余裕を崩さぬ佇まいは只者でないことを示唆しているのだろうか、見つめると吸い込まれそうな彼の瞳をジツと見つめ、それを問うことはたやすい話ではない。

もし、引き込まれてしまえば最後。掘られるだろう。何をとは言わないが。

——そんな彼のうなじ近くには、勾玉のような模様が三つ浮かんでいたが、この時シライトは気づかなかつた。

二十三。 お肌ツヤツヤの秘訣

「お疲れ様、クジャ」

「はい。では、失礼致しますわ」

ミズチの労いの言葉を受けて煙と化して消えるクジャ。

音忍六呂衆から逃げ去った三人であったが、連れてこられた二人は何かを問いたいかのような瞳をミズチへ向けている。

「……おい、てめエ」

「ん？ なーに、ヒナちゃん」

「なんであんな変な奴らに追われてるか、訊こうじゃねえか」

剣呑な雰囲気身を纏わせ、ミズチに詰め寄るヒナイ。

そんなヒナイの様子に、ミズチは笑顔を崩さぬままやれやれと首を振る。

「やつぱり気になっちゃう？」

「つたりめえだろうが！ こつちの命に係わつかもしんねえんだからな、コラ！」

「そういう訳なら仕方ないわね。まあ、道すがら話すわ」

やけにあつさりと話すことを了承するミズチ。

そんな彼に続きながら、二人は耳を傾ける。

鬱蒼と生い茂る林の中、どこへ続くかも分からない道を突き進みながら……。

「そうね……最初に話さなきゃいけないのは、アタシが大蛇丸様の弟子ってトコからかしら」

「……その人は、一体どなたなんですか？」

「あら、知らない？ 結構有名なんだけど。もしかして、火の国の生まれじゃない感じかしら」

「滝の方です……」

「そ。それなら仕方ないわね。大蛇丸様は、彼の伝説の三忍……自来也、綱手に並ぶ人のことよ」

ミズチの挙げた名前に二人が反応する。

「綱手様と……う？」

「ガマ仙人とか？」

「知り合い？」

「二師匠です（だ）」

「あら！ すっごい奇遇。なんか、運命的なものを感じちゃうわね……♡」

本人たちが認知せぬところで、伝説の三忍の弟子たちが集っていたことに驚きを隠せないミズチ。

再び舐めまわすかのような視線で二人を見つめるが、ヒナイの引きつった顔を目の当たりに、いい加減で話に戻る。

「で、アタシが弟子になった経緯は、大蛇丸様の器になる実験体の一人だったんだけど、中々いい器かもしれないって大蛇丸様に見込まれてね……一実験体から、色々施しを受けるようになってね」

「お、おい！ 実験体ってなんだコラ!？」

「そのまんまの意味よ。ま、そんなに気にしないで」

「気にするだろ普通」

「んもウ、ヒナちゃんの知りたがり♪ 好奇心は猫を殺しちゃうわよ？」

「オレあ猫じゃねえ！」

（そんな生物学的な話ではないと思います、ヒナイさん……）

声を荒げるヒナイの横で、心の中でツツコミを入れてみるシライトであるが、内心平静ではない。

実験体とは穏やかではない話だ。

綱手と同格の人物であるらしいことから、どれだけの人格者かと思いきや、綱手とはまた別のベクトルで危険な人物であることが分かっ
てしまった。

——命を実験に用いるとは、倫理的に許せる行為ではない。

自然とシライトの眉間には皺が寄る。

だが、ミズチは実験体であった過去を重く感じさせぬ軽い口調で、
言葉を紡いでいく。

「まあ、かいつまんで話すとするなら……大蛇丸様は永遠の命を欲し

がっててね。でも、生き物は普通寿命で死ぬじゃない？ だから、同じ体で延命するより、精神だけ生き続けて体は新しいのに取り換えようっていうベクトルの研究になった訳。アタシは、その新しい肉体——とどのつまり器に見出された一人ってこと」

「とんだクソ野郎だな、大蛇丸つてのァ……」

「んふっ♡ でも、お陰様でやりたいことの幅が広がったから、結果的には感謝してるわよ。ま、暗い実験場にまた押し込まれるのもヤだから、こうしてブラブラ歩いてるんだけどね」

腰を振りながらそう語るミズチ。

その仕草だと、ブラブラしているのは「玉」の方であるが、敢て二人は口にしない。

だが、今の話で一通りの事情は察した。

視線を交わして首肯する二人の内、ヒナイは己の胸をドンと叩いて見せる。

「ん〜……まあ、なんだ。可哀そーな過去があるつてのァ分かった。そんなら、オレにどんと任せておけ！」

「あら、男気ある……♪ カッコいいわ、ヒナちゃん」

クスリと一笑するミズチ。

「自来也つて人も、そんな感じなの？」

「ん、ガマ仙人か？ ……どうだろうな、あのスケベ爺は」

「へえ〜……スケベ」

「な、なんだよ。師匠つつつても、そんな知ってる訳じゃあねえぞ？

ほんのちよつと忍術教えてもらっただけだしな」

「ううん、そうじゃないの。アタシ、大蛇丸様に似て好奇心旺盛でね……」

徐に手をヒナイの肩に置くミズチは、そのまま撫でるように手をヒナイの二の腕、肘、そして手へ滑らせていく。

かなりのソフトタッチ。

スキンケアも欠かしていないようなミズチの手で撫でられれば、それこそ絹に触れたような触り心地であろうが、余りにも滑らかな触り方をされてしまい、ヒナイの腕には鳥肌が立ってしまう。

そんな様子 of 彼女を見かねて手を引くミズチは、こう続ける。

「自分の中にある知識欲を満たしたいの。例えば、このモノは幾らなのかとか、このお酒はどんな味なのかとか、この人と情事を重ねたらどう気持ちいいとか……特に最後のなんて、とつてもプライベートルなことでしょう？ 些細なことでもなんでも知りたい。知れば知るほど、アタシに何かを満たしていく……そんな感覚が堪らなく大好き♡」

二股に裂けた舌——スプリットタンをチロリと出し、舌に埋め込まれたピアスを覗かせるミズチの瞳は、まさしく蛇のように鋭い。

「大蛇丸様は、知識欲が旺盛な人だわ。でも、その知識欲が忍術に全振りだから、飽き飽きしちやつたの。でもアタシはオールマイティに知りたい。だ・か・ら♪ ヒナちゃんのこと、たくさん教えてね？」

「お、おおう……？」

「もちろん、センサーもね♪」

「……ある程度なら」

「アリガト♪」

困惑する二人の様子に満足したのか、ミズチは嬉々とした様子で翻り、キャピキャピしながら拳を掲げて『おー♪』と声を上げる。

「さー！ 次行ってみよー♪」

三人がたどり着いたのは、なんの変哲もない小さな村だ。

しかし、村全体がどこか活気に満ち溢れている。何か祭りでも行われているかのような慌ただしさだ。

「……なんなんでしょうね？」

「祭りなら好きだぜ、オレあ」

「うふふつ。折角だし、村を散策してみましょ」

十中八九、悪い出来事が起こっている訳ではなさそうな村の散策を始めようとする三人。

しかし、そこへ一人のガタイのいい中年男性が、三人を目にするや否や嬉々とした表情で駆けつけてくる。

「ちよいちよいちよい、アンタ！」

「「ん？」」

「その紅い髪の……お坊さんだよな！」

「お、オレか？ まあ、一応坊主だが——」

「そりやあちようどよかつた！ ちようどお坊さんが居ないか探してたトコなんだよ！」

ヒナイに用事がある男性。

首を傾げる彼女に、男性は満面の笑みを浮かべながら続ける。

「実は、もうすぐうちの娘が結婚するんでな……村を上げて結婚式を挙げるんだが、戒師をしてもらえないか!? もちろんお礼はする！」

「かかか、戒師だとオ!? しかも、結婚式のか!？」

「お、おう……? すまない、突然の頼みで混乱するのは分かるんだが、ここからだとお坊さんを呼ぶのに町へ行くにも大変でな」

「まあかせろイ!!」

「本当か!? いやあ、助かる……いや、助かりますよー!」

突然、結婚式の戒師をするよう頼まれたヒナイであったが、何故か興奮気味に男性の頼みを了承した。

「……村を上げてとのことですが……良いお家柄で?」

「ん? いや、まさか! ただ、この辺りは田舎もあって、ほとんどの家が親戚みたいなもんでな!」

「あ……成程」

田舎あるある——近所がほとんど親戚。

滝隠れの里にて世帯数が多い『たきの』姓のシライトにとっては、理解する事が容易な事象である。

つまり、今回村を上げて祝われる結婚式は、特段良家であるため派手に行う訳ではなく、親戚によるどんちゃん騒ぎのようなものなのだろう。

「……というか……ヒナイさん」

「ん、なんだコラ?」

「戒師……やったことあるんですか?」

「ねえ!」

「……ない、と」

「ああ。でも安心しろ！ 鼠ノ寺はアシユラ宗の流れ汲む寺だが、大体火の国のポピュラーな宗派とほとんど変わらねえよ！」

「……心配しているのは宗派の違いじゃなく……やれるかどうかなんです……」

「できるって！ 和尚の仕事、ちゃんと見てたからな！」

『大船に乗ったつもりでいろ！』と胸を張るヒナイだが、正直不安しかないシライトだ。

ヒナイが結婚式の戒師をしている姿を想像できようか？ いや、できない。

しかし、既に受けてしまった依頼をはねのけるのも忍びないだろう。見ず知らずの他人とはいえ、幸せに水を差すのは如何なものか。シライトはただ、ヒナイが立派に戒師を務めあげてくれることを願うしかない。

一方、ミズチはというと、

「結婚……素敵ね！」

(あれ……僕だけノリ気じゃないのがおかしいのかな)

身内ならば兎も角、他人の結婚式にここまで興奮する二人を目の当たりにし、自分の感性を疑い始めるシライト。

ここにカツユが居れば、多少彼女の賛同を得られたであろうシライトのハズだが、生憎彼の連れは色恋が好きなら年ごろの女子と、女のよきな感性を持った男子だ。

決してシライトが冷淡なのではない。寧ろ、二人は他人の色恋沙汰に過敏なだけなのだ。

「アタシも、是非なにか手伝わせてほしいわ！」

「おっ、ありがとうなお嬢さん！」

「うふふっ、お世辞がお上手♪」

完全にミズチを女だと思っている男性は、笑みを浮かべて手伝いを申し出るミズチを前に、鼻を伸ばしている。

新婦の父親がそれでいいのかと言いたくなるが、シライトがグツと堪え、意気揚々とするヒナイに声をかけた。

「僕……なにかすることありますかね？」

「食い過ぎと酔い止めの薬でも作つときやあいいんじゃね？」

「……わかりました」

賑やかになるであろう結婚式を前に、シライトは今日一日、食べすぎと酔い止めの薬を作る羽目になったのだった。

草木も眠る丑三つ時。

三日月が夜空に浮かぶ頃、颯爽と彼は林の隙間を縫って走っていた。

しかし、突然彼は足を動かすことを止める。

すると、彼の周囲に六つの人影が現れたではないか。

「どういう心変わりだ、ミズチ？」

太鼓を持った男・断金が、現れた美男子・ミズチへ向けて怪訝そうに声をかける。

「ようやく、大蛇丸様の下に帰る覚悟ができたんだろう」

勝絶が続く。

「ふんっ、賢明だな」

得意げな声色で、双調も続ける。

「……同意」

落ち着いた口調で、双調に同意する黄鐘。

「まあ、本人がその気なら楽ちんだし」

飄々と盤渉が、箏篋を回しながら続ける。

「楽の極み」

最後に、上無が締める。

この真夜中、なんとミズチは音忍六呂衆の下へ自ら向かっていたのだ。

今頃村にて寝泊まりしているシライトやヒナイにはなんの相談もせず、たった一人で。

普通に考えれば自殺行為であるが、相手が殺害ではなく確保を目的

としているため、殺されることはない。そうはいつても、大蛇丸の実験は人の生死を問わぬものが多いことは、音隠れの忍者にとつては周知の事実だ。

音隠れは、つい最近砂隠れとの同盟により木ノ葉に戦争を仕掛け、多大な被害を被った。

元々新興の隠れ里である音隠れは、優秀な血継限界や忍の一族の引き抜き、そして他ならぬ大蛇丸の実験にて強化された者が多いものの、忍としての練度で木ノ葉の優秀な忍に一步届かぬところもあり、返り討ちにされた者も少なくない。

「大蛇丸様の器杯の候補である立場を理解したならば、早々に戻ってこい」

「……そうだわ」

音隠れにとつて、ミズチは重要な実験体の一人だった。

なにせ、彼は――。

「結婚式には、やっぱり雅楽隊よね。華々しい音楽がなきや、式が映えないもの」

『……は?』

全員が素っ頓狂な声を上げた。

まるで何のことを言っているのか理解できない。

「ミズチ……お前は一体なんの話を」

「ううん、大した話じゃないの。ただ、今泊ってる村で式が開かれるから、どうせなら雅楽隊に演奏してもらって、華々しい感じにしたいなーって♪」

「……ミズチ、貴様……!」

プルプルと振るえる断金。

しかし、憤慨しているのは彼だけではない。他の五名も全員、ミズチの馬鹿馬鹿しい考えに憤慨しているようであり、青筋を立てる代わりにうなじの辺りから異様な紋様を浮かび上がらせる。

「リンチにされに來たみたいじゃねえか」

「だったら私らがやってやる!」

「……うん」

「後悔すんなよ」

「多勢に無勢。愚かの極み」

「——『天』の呪印持ちだからと、俺たちを舐めすぎだな」

直後、六人の姿が異形へと変わる。

月明りの下では、黒く変色したようにしか見えぬ彼らの肌。実際、黒に変化している者も居るが、赤や茶など、いずれにせよ常軌を逸した肌色だ。

そしてなにより、六人全員の頭部からは大なり小なり角が生えている。

まさしく鬼の如く容姿へと変貌した六人は、彼らの主たる大蛇丸に与えられた呪印を用い、状態2へと己を昇華させたのだ。

莫大に上昇するチャクラ。

量だけであれば、上忍にも匹敵するであろう。

しかし、そんな六呂衆を前にしても、ミズチは余裕を崩さない。

「『仙人化』……ね」

「そうだ。この呪印を携えた忍が量産された暁には、忍び五大国と言えど、音隠れを看過できぬものとなるだろう」

凶悪な笑みを浮かべる断金。それだけ彼は、今の姿に自信があるのだろう。

だが、

「ぶっ。今のままじゃ、どう頑張っても重吾の猿真似なのに、どうしてそこまで優越感に浸れるのかしら」

「……なんだと?」

鼻で笑うミズチに、いら立ちを隠さない面々。

そんな彼らにむかって、ミズチは言葉を続ける。

「重吾の——龍地洞出身の一族の仙人化でさえ、蛇の仙人モードのまがい物。力を渴望して、精神を自然エネルギーの奔流に飲まれた力ワイソーな一族の、亜流の仙人モードよ」

「それがどうした? 力であることには変わりはない。お前も呪印を授かっている身だ……この力に満ち溢れる感覚、分からない訳ではないだろう」

「ホンットだめだめね。折角の痛気持ちいいんだから……」
もつと気持ちよくならないと！」

刹那、ミズチの体から水色のチャクラがあふれ出す。

それはいつの間にか、蛇の如くうねり始め、周囲の者へ警鐘を鳴らすかのようにシューツ、と啼き声を上げ始める。

そして極めつけは、ミズチ本人だ。

浅黒く変色していく体には、次々と鱗が浮かんでいき、最終的には額から天を突くような一本の角が生え、人の手を模したようなおどろおどろしい翼が背から生えたではないか。

目の周りには、紫色の隈取。

それは、六呂衆全員が敬愛する主である大蛇丸の隈取そっくりのものであった。

「ま、まさか……仙人モードと仙人化を同時に——!?!」

「重吾の酵素は自然エネルギーを自然に集める。そして、それを元に大蛇丸様が刻んだ呪印は、練ったチャクラに反応して、自動的に周囲の自然エネルギーを収集する！ 呪印の痛みなんて、異形と化すのを体が拒んでいるだけの拒絶反応なの。でも、大切なのは痛みも受け入れること……」

バツと翼を広げるミズチ。

辺りには旋風が吹き荒んだかのような強風に包まれる。

大蛇丸でさえ会得できなかった仙人モードを、存分に扱っている様子の子のミズチの前に、断金は震えた声を漏らす。

「やはり天才か……ッ！」

「うふふつ……そうよ。蛇の仙人モードは“天才”を選ぶの。肉体が弱ければ、蛇の莫大な生命エネルギーを受容できず、精神が弱ければ自然エネルギーに飲まれて狂暴化する。根性論の蛙と、理論的な蛞蝓とは根本的に違うの！」

目を細め、紫色の唇を長い舌で舐めまわすミズチは、一旦高揚を抑える。

「……呪印による自然エネルギー収集。 “伝異遠影” による仙人化の完全なコントロール……かつて六道仙人は、投身を凶ることで古い体

を捨てて、仙人へ昇華したと言うのよ。だからアタシは、この術を”
羽化登仙うかとうせんの術”って呼んでるの♪ 異形こそ、蛇の仙人モードの神髓
よッ!!」

「つ……それで？ まさか、状態2の俺たちと戦おうと言うのか？」

臨戦態勢に入る六人。

各々の武器——楽器を構えたが、そんな彼らに言い放ったミズチ
の言葉は衝撃的だった。

「アタシのお願い聞いてくれないなら、体に言うこと聞かせるしか
ないじゃ〜ん？ 流石のアタシでも、お外で七人は初めてかも……♡」

——ゾッ。

まさか。

まさか、コイツは。

察してしまった六人は、自身の穴という穴がキュツと引き締まるこ
とを錯覚した。

忘れていた訳ではない。ミズチという人間が、気に入った者であれ
ばノンケでも構わず食べてしまう人間であり、男女関係なくイけるク
チであることは。

「か、かかれッ!!!」

六人は立ち向かう——貞操を守るために。

結果は惨敗だった。

「……ミズチさん」

「ん？ なアに？」

滞りなく終わった結婚式。礼服と言った礼服もないため、そのまま
の服装で参列していたシライトは、満面の笑みで新郎新婦を見送った
ミズチのとある変化に気が付き、恐る恐る声をかけた。

「……なんで、肌がツヤツヤなんですか？」

「え、そ〜う？ う〜ん……たくさん精力貰ったから、かな♪」

「はあ……」

やけに肌がツヤツヤのミズチに理由を聞いても、はぐらかされたような気しかしない。

だがシライトは、急遽結婚式にやって来た謎の仮面雅楽隊が、全員内股で覚束ない足取りで村から去っていった光景を目の当たりにしてから、心の奥底で『もしや』と考えていた。

深く聞いたらイケない気がする。

何故なのだろうか。今になって、急に故郷のフウの顔が脳裏を過る。

ヒナイとは別のベクトルで活発な少女であったが、今、自分の身の回りに居る者達と比較すると、かなり真面で魅力的な人間に思えてきた。会いたくて堪らない。会いたくて体が震える。震えているのは、主に目の前の美男子の所為ではあるが。

それは兎も角、これが郷愁なのだろうか。

猛烈に滝隠れに逃げ帰りたいと、シライトはミズチの笑顔を見ながら考えた。

そんな時、ふいくと額の汗を拭うヒナイが、依然として式場に残っている二人の下へやって来る。

「おう。まだここに居たのか？ 新婦の親父さんがよ、『折角だから家に来て飯どうだ？』って誘ってくれたぞ、コラー！」

「あら、いいじゃない。幸せ一杯分けてもらおうと♪」

「……あんまり搾取し過ぎちゃいけませんからね」

「ん？ なにを……かな？」

「諸々です……」

「善処するわ♪」

「お願いします……」

「なんの話してんだ、てめエら……？」

少し村から外れた丘で、とある六人はたそがれていた。

下半身の痛みを忘れるためには、どうしてもこうするしかないように思えたからだ。

「なあ……」

「んー？」

「……俺たち、雅楽隊で食っていないか？」

「……んー」

「右に同じく」

「……同意」

「おーう……」

「……うん」

今日、一つの夫婦が新たな門出を祝う一方で、色々奪われた六人は忍を止めて、雅楽隊として活躍するようになるのだが、これはまた別の話……。

二十四。 親孝行、ちゃんとしてますか？

「——つい昨日、近くで巨大な蛙と蛇と蛞蝓が暴れてるのを見たって言ってるわ」

「成程……」

指に小鳥を止まらせていたミズチが、小さく『ありがと』と呟きながら、放るような仕草で小鳥を飛び立たせる。

曰く、彼は体に注入された特殊な酵素を完全に操ることにより、動物と話せるとのこと。

この世界では知能が高くなれば、犬や猫でも普通に話すが、人語を離さない動物の言葉を理解する彼の力は特異と言う他ない。

そんな中、師である綱手の足跡を辿っていたのだが、少々きな臭い話が出てきた。

巨大な蛙と蛇と蛞蝓の戦い。前者二つは兎も角、巨大な蛞蝓と聞いて咄嗟に頭に思い浮かぶのはカツユだ。

シライトは、チャクラの量がそれほどではないため、カツユを口寄せしたとしてもそれほど巨大にはならない。

だが、彼の森の千手一族の血を引き、尚且つ陰封印にてチャクラを溜めている綱手であれば、山のように巨大なカツユを口寄せできるはず。

「……この辺に、綱手様が居るんですかね」

「蛙・蛇・蛞蝓と言ったら、真っ先に浮かんでくるのは伝説の三忍ね。うふふっ、折角だったら観戦したかったんだけど」

「つーか、その流れだとガマ仙人も近くに居んじゃねえか？」

伝説の三忍の三つ巴を覗いたかったと微笑むミズチの横で、久しぶりに会うことができるかもしれない男への思いを馳せるヒナイ。

「そうかもしれないわね。ま、行ってみたらわかることよ」

「だな」

「じゃあ……行きましようか」

襟をパタパタさせ、少し涼んでみるミズチはヒナイに応える。

そう、百聞は一見に如かず。行ってみれば、自ずと真実は分かるも

のだ。

胸に抱く思いはそれぞれ違えど、一先ずはシライトの師である綱手の下へ向かうべく歩を進ませる。

天気は晴れ。

吹きつけてくる向かい風が前髪を靡かし、視界は良好だ。

「よオ。具合はどうだのオ、綱手」

「自来也。どうもこうも……疲労に加えて多量の失血。いくら九尾の人柱力だからって……ほら、見ろ。ぐっすりだ」

とある宿の一室。

昼間にも拘わらず敷かれている布団には、ボサボサの金髪頭の少年がすやすや眠っていた。

安らかに眠る様に安堵する男——自来也であったが、ふう、と一息ついてから綱手を一瞥する。

「ワシはお前の方を訊いてみたんだがのオ……」

「ふんっ。薄情な師匠を持って、このガキが可哀そうだよ。これだからインテリスケベは」

「辛辣だのオ……ま、それだけ悪態つけるなら平気なんだな。がっはっは！」

綱手の言葉を受け、自来也は豪快に笑い飛ばす。

それを見て、今一度フツと笑う綱手の顔はいつになく穏やかだ。今までの曇りが晴れたかのような笑み。自来也はその顔を見て、かつての自分達を思い出す。今は亡き三代目火影・猿飛ヒルゼンに師事していた頃、まだナルトくらいであった自来也は、同期の綱手、大蛇丸と共に研鑽を重ねた。原石が輝きを放つには、他の二人より多少時間はかかってしまったものの、今では忍び五大国に名の轟く伝説の三忍と来た。

酸いも甘いも噛み分けて今の自分達が居る訳だが、何も知らず、ただ我武者羅に強くなりたいと願っていた頃が懐かしくも、複雑な心境

になつてしまう。

だが同時に、落ちこぼれであつた自分を笑い飛ばしていた頃の綱手が戻つて来てくれたことを、嬉しく思う自分も居る。

〔『同志』と呼ぶにやあ、ちよいと距離が離れすぎちまつたものだよ……〕

だからこそ、師を殺し、自分達の思いが届かぬ場所まで離れていつてしまった大蛇丸のことを、齒がゆく思つてしまう。

豪快に笑い飛ばした後、深呼吸をして気を落ち着かせる。

ヒルゼンが命を賭した『死鬼封尽』により腕を封じられた大蛇丸だが、彼は綱手に頼らずとも治せる手はあると豪語していた。

となれば、大蛇丸の件は終わつてはいない。寧ろ、気をかけるべきなのはこれからだ。

“暁”の動きも活発化してきて、どの方面に関しても油断はできない。

「まったく……乾く暇がないのオ。……ん？」

ふと、ドアを激しくノックする音が部屋に響く。

あからさまに不機嫌そうな顔を浮かべる綱手を横目に、半ば自来也は綱手に差し向けられるがのように、ドアの下まで駆けていく。

綱手の付き人であるシズネは、つい先ほど眠っている少年——ナルトの治療のために必要な道具やらを調達するべく買い出しに向かったが、彼女は怪我人が眠っていることを知っていて騒音を奏でるような人物でないことは、自来也も知っている。

ということは、やつて来たのは悪戯か、間違いか、はたまた伝説の三忍らが居ると知つてカチこんでくる者か——。

「……綱手の借金取りかのオ？」

「なんだとオっ!？」

「おいおい、ナルトが起きるだろう。もうちよいと声量をのオ……」

「お前が素っ頓狂なことを口に出すからだ、このバカがつ!!」

なくはない可能性だ。

彼女の借金は、木ノ葉の経済を傾かせる可能性があるほどの額だ。借金取りが意地になつて綱手の所に来た可能性は否定できない。

もし借金取りであった場合は、シズネには悪いが、寝ているナルトを連れて一旦この宿からドロソするしかない。シズネとは、その後合流すればいいだけの話だ。

「まあ、出てみるしかないのオ」

ぶつくさ文句を言いつつ、ドアの取っ手に手を掛けた自来也。

「誰だ？」

「お」

「おオ……!?!」

扉を開けた瞬間、自来也は目の前に飛び込んできた「紅」に目をぱちくりさせた。

「ガマ仙人じゃねえか！ 久しぶりだな、コラ！」

「そー言うお前は……まさか、鼠ノ寺のちんちくりん小娘か？」

「ヒ・ナ・イ！」

「ぶっ!?!」

名前で呼ばれないことを不服に思ったヒナイが振るった錫杖が、自来也の顔面に突き刺さる。

容赦ない殴打。自来也の顔には、錫杖の環の跡がくつきり赤く浮かび上がる。

「つつつつ……前に増して狂暴になったんじゃーねエーのオ……」

「なんだ自来也。知り合いなのか？」

「その声は……綱手様」

「っ！ シライトか！」

「ん？ 綱手。この優男、知り合いなのか？」

ヒナイの背後からひよつこりと顔を出したシライトに、部屋の奥に居た綱手が反応する。

「お〜ま〜え〜は〜……今まで一体どこで道草食ってた!!?!」

「……まず、綱手様と別れた漁村を出た後……」

「みなまで言わなくてもいい！ おまえの話は長いからな。はあ……とりあえず、ようやく来たんだな？ ええ？ 女一人を侍らせて」

「……ヒナイさんとご同行する理由につきましては……話すと長くなりますが」

「なら説明しなくてもいい！ まったく、この弟子は……」

「お詫びと言ってはなんです……人助けしてもらったお酒が……如何ですか?」

「飲む!」

数か月振りの弟子との再会。余りにも合流が遅い事に呆れと憤慨を覚えた綱手であつたが、彼の手土産である酒に興味を示す。

そうだ。綱手は昼間から飲んだくれるつもりのようなのだ。

酒の肴は——弟子の世助けの旅についてか。

だが、そんな綱手に対して『病人の目の前で飲むつもりとか如何に?』と言わなければかりの視線を向ける自来也。

そんな彼であつたが、続いてシライトの背後からスルリと登場する人影に目を奪われることとなつた。

「あら、パーティー? 楽しそ♪ アタシも混ぜてほしいなア」

「おオ!? おいおいおい、ええ感じのねえちゃんが一緒に居んじやねエのオー! ヒナイ、おまえのツレか!」

「あ……おう」

ミズチの登場に、自来也のテンションが一気に上昇する。

それもそのハズ。ミズチは、傍から見れば美人そのもの。女に弱いと見得切りで自負するだけあつて、戦の時は精悍な顔つきも、今は鼻の下を伸ばす間抜け面になつている。

そんな師匠への呆れと、とある事実に対する複雑な心境を胸に抱くヒナイは、なんとも言えぬ表情だ。

だが、弟子の気持ちからぬ自来也は、そのままミズチの下へ下駄をカランコロンと鳴らして近づく。

「飲み混ぜて欲しいのか! ええぞええぞ!」

「うふふつ。あなたが彼の有名な自来也様なのね。お酌してあげる?」

「お、ええのか! いやあく、キレーなねえちゃんに酌してもらつた酒ほど旨い酒はねーからのオ!」

すっかり鼻の下を伸ばしている自来也。

伝説の三忍と言えど、相手の性別を見抜くことは容易いことではな

いらしい。

だが、見かねたヒナイが深いため息を吐いて自来也の肩に手を置く。

「アガってつとこ悪イが……」

「あー、なんだつてのオ？」

「そいつ……ミズチは男だぞ、コラ。エロ仙人」

「……へ？」

間の抜けた声を漏らす自来也が、ミズチの体を頭頂部から足の爪先までじっくりと見つめる。

「うふっ♪ そうよ、オジさま。美男子のお酌でも構わないなら、存分にサービスし・た・げ・る……♡」

「い、いい！ ワシあ確かに美人のねえちゃんは好きだが、野郎はノーセンキューだつてのオ！」

「あら、つーれないっ」

男と知った途端、自来也は全力でミズチの酌する発言を全力で拒む。

18禁の小説を書いている身分ではあるらしいが、あくまでノーマルな性癖であるようだ。彼にとって性別がいかに重要な要素であるか垣間見えた瞬間である。

そんな自来也の拒絶を受けたミズチだが、本人は言葉に対して大して傷ついた様子は見せていない。というよりも、慌てて拒む自来也の姿を見て楽しんでる節すら感じ取れる。

「はあ……なんだ、野郎の癖に女っぽい喋り方して、大蛇丸みたいなやつだのオ……」

「あら、大蛇丸様はアタシの師匠みたいなものよ。弟子は師匠に似るって言うしね。ある種、当然の結果っていうかー？」

「は……う？」

またもや間の抜けた声を発する自来也。

だが、部屋の奥では声を出さないうちながらも、綱手も目を大きく見開いてミズチを見つめている。

驚くところは色々ある。

集約するとすれば、自分の弟子が、知り合いの弟子と共に行動していることだろうか。

だが、ただの弟子ではない。彼の雨隠れの長・山椒魚の半蔵に『伝説の三忍』という呼び名を与えられた、木ノ葉の誇る忍たちの弟子だ。

—— 事実は小説よりも奇なり。

物書きである自来也の脳裏には、すぐさまその言葉が浮かんだ。

「はア——!!?」

だが、頭は容易く事実を受け入れ難い時もある。

威厳もなにもなく大声を上げる自来也と綱手に向かい、シライトは唇に人差し指を当て、ヒナイは騒がしいと言わんばかりに耳を両手で塞ぎ、ミズチは袖で口元を覆いつつクスクスと微笑む。

「んん〜……なんだってばよ、ウルセーなア……」

余りの騒々しきは、深い眠りに落ちていたナルトが寝言を口に出してしまうほどだった。

「ほーれ。ぴっちぴちの女の酌だぞ。喜べ、コラ」

「確かに若いが……色気がないのオ」

「あ、？」

とある居酒屋にて、ヒナイに酌されている自来也は、お猪口に注がれた酒を仰ぐものの、どこか満ち足りていない様子だ。

更に、ポツと口から漏れた言葉に、ヒナイの額には青筋が立つ。

だが、そんなヒナイを窘めるようにミズチが声を上げる。

「駄目よ、ヒナちゃん。もつと女を生かしてお酌してあげないと」

「……性別が逆だったらのオ」

心底残念そうに項垂れる自来也。

ヒナイとミズチの性別が逆であれば、どれだけ嬉しかったことか。いつぞや出会った少女が、こうして成長して酌をしてくれるのは嬉しい限りではあるが、いかんせん色気——つまりサービス精神が見当

たらない。

その点、ミズチは男であるが、同性であるためか男が喜ぶツボを心得ている。

だからこそ惜しい。

と言うよりも、どうせであればどっちも女性であればよかった。そうすれば、一度で二度美味しい気分になれたのに……。

自来也は酒気の混じったため息を吐く。

一方、そんな彼の目の前で焼き鳥を齧る綱手。

イイ感じに酔いが回ってきているのか、頬はほんのりと紅潮し始めている。

「まったく！ 久しぶりに会ったと思えば、女を侍らせて……お前と言う奴は！」

「……侍らせているつもりはないんですが……」

酔いが回って来た綱手を前に、オドオドと酌をするシライト。

本当に久しぶりに出会った訳であるが、いつもに増して当たりが強い気がした。

因みに、今シズネはナルトを看病するべく宿に留まっている。シライトの顔を見た途端、死人でも見たかのように『あひい！』と声を上げていたが、姉弟子は相変わらずであると、シライト的にはホツとする一場面であった。

だが、安堵もつかの間、今は修羅の時だ。

酔った綱手ほど絡みづらい相手は居ない。

しかし、

「……綱手様」

「んー？ なんだ」

「……やっぱりいいです」

「なんなんだ、お前は！ 男なら、もっとこう……シヤキつとしろい！」

「っ——！」

質問を取りやめたシライトの背中に、綱手の平手打ちがクリーンヒットした。

暫し痛みにも悶えるシライト。

だが、どこか師が晴れ晴れとしていることを確信し、薄く笑ってみた。自分が居ない間にひと悶着があれど、それが彼女に対して良く働いたのであれば、弟子としては嬉しい限りである。

だが、ここで綱手が気づいたようにハッと顔を上げた。

「そうだ、シライト……私は、五代目火影に就任することになった」

「……はい？」

「木ノ葉隠れのトップだ。三代目が死んだからな……だが、お陰さまで夢に命を“賭ける”覚悟はできた。だから私は里に帰る」

「はあ……」

「そこでだ……お前、どうする？」

ジロ、と睨みつけるかのような視線が、シライトを射抜く。

火影——それは火の国の隠れ里である木ノ葉隠れの里の頂点に君臨する忍のこと。

初代火影・千手柱間。

二代目火影・千手扉間。

三代目火影・猿飛ヒルゼン。

四代目火影・波風ミナト。

里に安寧を齎さんと、その夢に命を懸けてきた者の遺志を継ぐべく、綱手は立ち上がったのだ。

一弟子としては、師が五影の一角に君臨することは誇らしいことこの上ないが、彼女の下で旅をしながら修行をつけてもらっていたシライトにとっては、少々厄介な問題は発生する。

「私の下で弟子を続けるにしても、火影ともなれば一個人に構ってる暇はとれなくなる。それに、そもそもお前は滝隠れの者だ。もし木ノ葉に移るといふなら、それなりに書類届なんかもしなきゃあならんが……」

「はあ……」

シライトは滝隠れの人間。そして綱手は木ノ葉隠れの人間。

つまり、出身の違いによって、彼らの円滑な師弟のやり取りが難しくなってしまうのだ。

このまま綱手の下で修行するのならば、シライトは戸籍を木ノ葉に移さねばならなくなる。

しかし、移ったからと言って綱手による修行が行われるとは限らない。

今迄放浪の医者のように各地を巡り、医者としてスキルアップしてきたシライトに、はたして一か所に留まらせるのは如何なものか。

そこを考えたからこそその綱手の問いに、シライトはウンウン唸る。長考。

気づかぬ内に、眉間に皺が寄ってしまったシライトを見かねた綱手は、徐にシライトのヘアバンドを少し捲り、額に手を当てる。

「……まあまあ溜まってきているな」

「！」

「それさえ会得できれば、後のことはお前だけでどうにか学んでいくだろう」

「綱手様……」

「なんてったって、お前は五代目火影の弟子なんだからな。お前の地味な作業への集中力は、この私が保障してやる！」

——あれ、これ貶されている？

一瞬そのような考えが過ったシライトであったが、ここは素直に綱手の話を聞こうと耳を傾ける。

「案外、人生はわからないもんだ。一度や二度、どうしようもないくらいに打ちのめされることもあれば、ちよつとしかきっかけで希望を見ることもできる。私にとつて、お前を弟子にとつたのはなんてことはない、ただの気まぐれさ。だけどな……案外、悪い時間じゃあなかつた。ひたむきに人を助けようとする姿は、昔の自分を思い出したもんだ」

「……酔いが……回ってますね」

「歳をとると、どうも色んなところが緩んじまってね。まあ、願わくば、私が教えた術で大勢救ってやって、私の名を轟かせてほしいもんだ」

ケタケタと笑う綱手は実に楽しそうだ。

舌がよく回っている。すでに名声ならば十分である彼女が、それ以上を求める必要などないように思えるが、伝えたい内容は婉曲してしまふものだ。

だからこそシライトは、綱手の語りを酔っている所為にした。

「それと……もう一つ。今ある繋がりを大事にな」

「……はい」

「私らは、いつの間にか離れちまっていたが……そりやあそのハズなんだよ。どんなしつかりした糸だろうが綱だろうが、いつかは緩んじまったりたわんじまったりする。そのままだと、プツツンと繋がりが切れた時に、もう戻らないことさえ気づかない。馬鹿馬鹿しい話さ。アイツが離れたのも、私の所為もあるのかもしれないねエ……」

「綱手……」

しみじみと語る綱手に、思わず自来也が声を上げる。

「アイツ」の名を口にはせずとも、既に二人はそれが誰であるのかははつきりわかっている。

「だが……もしかすると、まだやり直せるのかもしれないのオ。まあ、なにを言いたいかと言えばだのオ……友達家族知り合いなんかとの付き合い大事にしろってことだ。人間死ぬ時アポックリいつちまうもんだからのオ」

「まったくだ」

自来也の言葉を受けて首肯する綱手。

生きている間に、二度の忍界大戦を経験した彼らにとって、身近に居る人間が手の届かない遠い場所へ逝ってしまうことは少なかつただろう。

言葉の重みというのだろうか。ズシリ、と腹の奥底に響くような感覚をシライトは覚えた。

思わず目を細めるシライト。

そんな彼へ、俯いて語っていた綱手は面を上げ、口角をつり上げてみせる。

「……強いて言うなら……そうだ。たまには故郷に顔を見せていってやれ。尻が青かったあの頃よりはよっぽどマシな顔つきになってる。

「家族も居るんだらう？」

「……はい」

「なら、行ってこい！ 決まりだ」

半ば強引に一度帰郷させられることとなったシライトであるが、余り嫌そうではない。

いや、寧ろ今まで里に帰らなかつた方がおかしいのだ。齡十二の子どもが、一度も帰らず三年を過ごす。子どもの成長は早い。子どもの成長を見ることができない家族は、どのように寂しい思いをしていることだろうか。

そう思つた途端、帰らずには居られない。

「それでは、一度滝隠れに帰ります。今まで、ありがとうございます……」

「なんだ、水臭い。死ぬわけじゃあるまいし」

「……まあ……そうですね。あと、厚かましいようですが、一つお願いしてもいいでしょうか？」

「ん？ なんだ？」

弟子の珍しい願い出に首を傾げる綱手。

非常に言いにくそうに眉を顰めるシライトが、不意に笑つて口にしたことは――、

「僕が立派な医者になれるかどうか、一つ賭けてみませんか？」

「……ふんっ、なんだそんなことか。そうだなあ……」

にやにや悪だくみするかのような笑みを浮かべている綱手は、フィンガースナップをして、シライトを指さす。

「そう来たら、私は勿論、お前が立派な医者になれない方に賭けるさ。

『病払いの蛞蝓綱手姫』と謳われた私よりも立派になれるなんざ、これほくつちも思わないね」

「……じゃあ、僕は自分に賭けます」

「そうだな。そうではなくては勝負にならない」

非常に曖昧な賭け勝負をする二人に、自来也は呆れた笑みを浮かべる。

成程、これが彼らなりの師弟のやり取りという訳だ。自来也は、今

まで自分が忍とは何かを教授してきた弟子たちとは、これまた違った関係だ。

綱手がシズネ以外の弟子を取っているなど、自来也にしては驚き以外の何者でもなかったが、このやり取りを見る限り、自分が思っている以上に信頼は固いようだ。

「善しや善しや。……んで、ヒナイ。お前は どうするんだ？」

「ん？ どうもこうも……世助けの旅は続けるつもりだぞ」

「そうか」

「なんだよ。もったいぶつた雰囲気醸し出しやがって。言いたいことあんならさっさと見え、コラ。言わなきゃわかんねえだろ」

「……坊主の癖に、相も変わらず口が悪いのオ」

げんなりする自来也であったが、ゴホンと一つ咳払いしてから、突然神妙な面持ちを浮かべる。

「さて、ここいらで一つ、師匠らしく大切なことを教えてやるとするかのオ」

「お、なんだ。もつとすつげー術でも教えてくれるのか？」

「バーカ。違エーつての。〃忍〃の在り方についてだ」

自来也の言葉に、目を大きく見開くヒナイ。

〃忍〃の在り方。それは人や里によって違うものであるが、伝説の三忍の一人の在り方と言い換えれば、実に興味深い話になりそうだ。

だが、見当でもついているのか、得意げに口角を吊り上げる自来也の前で、ヒナイはジツと彼の唇を見つめて時を待つ。

「忍とは——」

「『忍び耐える者』……だろ？」

「おお!? おまえ、一体どこで聞いて……」

「ド根性忍伝なら読了済みだぜ」

「成程……こりゃ一本取られたのオ」

白髪の生える頭をボリボリ搔く自来也。ここ一番の見せ場をとられ、なんとも消化不良感が否めない顔を浮かべている。

だが、ヒナイがいつの間にか自分の忍としての在り方について知っていたことを、実に満足げに笑ってから酒を煽る。

「ふう……まあ、それが分かってんなら後は言うことはない。もつとボンキュッボンのカワイイねえちゃんに育ってから酌してくれ」

「このセクハラ爺がつー！」

「げこオ!？」

お得意の助平魂を見せた途端、容赦ないボディーブローが自来也に突き刺さり、潰れた蛙のような悲鳴が居酒屋の中で木霊したのだった。

名残惜しくなる前に、シライトたちは綱手たちと別れた。

自分たちとはまた違った道を進んでほしいと願われる三人は、まだ見ぬ助けを求める者たちの下へ向かうべく、歩を進ませる。

「……そう言えば、ミズチさんにとって『忍』ってなんですか?」

「アタシー? そうねエ……『自分の欲を忍ばない者』、かしら♡」

「だろうと思ったよ、コラ」

三人の珍道中は、一旦シライトの帰郷を挟んでまだまだ続いていく。

第五章 友と暁

二十五 行けたら行くは基本行かない

「はあ……はあ……はあ……はあ……！」

息を切らした少女が、鬱蒼とした木々の群れの間を潜り抜けていく。

鮮やかな黄緑色の髪は木漏れ日によって明るく照らされる。彼女の女性にしては豊かな筋肉美を誇る褐色肌の体も同時にだ。

しかし、その肌には深い切り傷などの細かな傷が無数にあり、少女の顔色も悪かった。

血の零れる脇腹を手で抑え、痛みに顔を歪める少女の名は『フウ』。滝隠れの里の忍であり、七尾の人柱力でもある少女だ。

普段の快活な笑みも、この切迫した状況では浮かべることができないのか、フウはただただ滝隠れのある里の方へと走る。

しかし、そんな彼女に襲い掛かる影が二つ。

「ひゃっはア!!」

「ッ！」

横より飛び出てきたオールバックの男が、フウに目掛けて大鎌を振るう。

腰から生える翅の飛行能力により、辛うじて致命傷を避けることができたフウであったが、また一つ、彼女の柔肌に傷が刻まれた。

だが、すでに脇腹にもらつている傷の痛みのせいで、その一撃の痛みはさほど感じる事ができない。

痛みとは危険信号のようなもの。痛みを感じないことがすでに、フウが危機的状況にあることを示しているのであるが、生憎フウにはそこまで考えが回らなかった。

回避したまま、大鎌を持つ男から逃げ去ろうとするフウ。

そこへもう一人の男が、腕を伸ばして彼女を捕まえようとした。

だが既に印を組んでいたフウが、口から日光を受け光輝く鱗粉を吐き出す。

「秘伝・鱗粉隠れの術！」

「むウ!？」

眩い光が森を包む。

あまりの眩さに目がくらんだ二人。

チカチカとする視界が元に戻った時には、もうフウの姿は彼らの前から消え失せていた。

「……取り逃がしたようだな、飛段」

「取り逃したのはためーだろうが、角都」

互いに名を呼び合う男たち。

彼らは「暁」。

今まさに、人柱力——正確には彼らに宿る尾獣を収集しに、各国を巡る犯罪集団だ。

「はあ……友達……百人……」

とうとう疲れと痛みに耐えかねたフウが、木の根元に腰を下ろす。

空を見上げる瞳は焦点があっておらず、今にも倒れてしまいそうな、そんな危うさを彼女は孕んでいた。

「せつかく無理言つて中忍試験出たのに……友達……できたのに……これじゃあ、百人できる前に死んじやいそうっス……」

ガクリと肩を落とすフウ。

先程腰を下ろしたばかりだということにも拘わらず、地面にはすでに血だまりができています。

早々に処置をせねば失血死してしまうだろう傷。

しかし、処置さえ億劫になってしまうほどに、フウは気力を削がれてしまっていた。

「眠ったら……元気になるっスかね……?」

『……………ウ』

「五分……五分だけ……」

『フウ……おい、フウ』

「ふにゃ？」

頭に響く声に辛うじて意識を保ったフウは、刹那、景色が暗闇一色になることを錯覚した。

これは現実ではない。精神世界——いつも七尾と語り合う心の中の光景だ。

体の痛みも忘れて見上げれば、いつも通りの七尾がそこに佇んでいる。虫然としている姿形であるため、表情がどのようなものであるかは常人には理解し難いものの、今日に限ってフウは、彼の様子が手に取るように分かった気がした。

「心配してくれてるんすか、七尾」

『ラッキーだったな、俺が居て。でなけりゃ、お前はそのままおっ死んでたトコだったぜ』

「……みたいっすね」

カラッと笑うフウに、七尾はため息を吐く。

『……ラッキーだぜ、フウ。今日の俺の気分はいつもと違う。少しばかり力を貸してやってもいい』

「ホントっすか!？」

『人が死ぬのは縁起が悪いからな。フウ、ようか蛹化の術を使え』

「了解っすー!」

自分の危機を案じていつも以上に力を貸してくれると豪語する七尾に目を爛々と輝かせるフウは、彼に言われた通りの術を発動するべく、現実世界では朦朧とした意識の中で印を結んでいく。

そして結び終わると同時に、胸の内よりじんわりと、それでいて粘着質のようなチャクラが全身に満ち溢れる感覚を覚えた。

——蛹化の術。

刹那、フウの体の至るところから放たれる糸状のチャクラが、フウの体を包み込んでいく。

その光景は、さながら羽化のために眠りにつく蛹。

淡い光を放ちながらフウの体を包み込む糸状のチャクラは、物の数分で、傷ついた彼女の体を包み終えた。

するとどうだろうか。

突然、フウを包み込んでいた蛹の表面に亀裂が入り、中から少々ねばついた液体を纏うフウが、怪我一つない綺麗な体でどっこらしよと這い出てきたではないか。

「ふい〜……助かったっス」

息を吐くフウは、自分の体の動きを確かめるように軽く伸びをする。

チラリ、と背後にある自分の抜け殻を見て、『こんな感じなんスねー』と呑気の感想を垂れつつ、傷がないことも今一度確認した。

——問題はなし。

暁の手先の者達につけられた傷は癒えた。

これならば、滝隠れの里に帰還できる可能性がグツと向上するだろう。

“蛹化の術”は、蛹となって体の傷を癒す術。羽化した体には、蛹になる直前まで受けていた外傷などを完全に完治することにより、傷一つない綺麗なものへと変化する。

しかし、蛹になるということから、回復中は一切抵抗ができない。

この術を用いる時は、それこそ黙っていれば死ぬしかない傷を負った時のみの、イチかバチかな場面だ。

『よし。きつさとズラかるぞ』

「オツケーっス。ケゴンとヨウロウの命を無駄にしないためにも……」

中忍試験の帰りでの襲撃。

目当ては人柱力たるフウだった。

それを察し、中忍試験に下忍として護衛について来てくれていた上忍二人は、暁二人を食い止めるべく立ち向かっていったのだが、現実は無常。

暁二人が執拗にフウに攻撃を加えていることが、二人の結末を暗に示していた。

そのことに顔に影が落ちるフウ。

しかし！ と、彼女は次の瞬間には笑顔を浮かべた。

「皆の下に帰ろっ……!?!」

突如、発音がままならなくなった。

熱い、胸の——心臓の辺りが。

口の端から垂れているのは、血だ。

何が何だかわからぬまま、フウが胸元に目を遣れば、何も刺さっていないのにも拘わらずぽっかりと穴が穿たれた光景が目に入った。

血は鼓動に合わせて溢れ出す。

ドクン、ドクンと。その度にフウの命の灯火が小さくなっていく。

「あれ……？ おかしい……スね……あっし、あ……」

『フウ！ しっかりしろ、フウ！』

「し、ちび……あ、しのごオ……しんぱい……し——」

長年連れ添った相棒が見せてくれた心配に、嬉しそうにほほ笑んだフウ。

だが、現実はまだたく穏やかでもなんでもなく、一人の少女の命を無残にも奪おうとしているのだった。

「まったく、ひでー目に遭ったってのオ」

「悪かったってばよ。オレもわざとじゃねーんだからさ」

「それで殺されそうになったワシの身にもなってみろ」

ブツブツと文句を垂れる自来也の横に並ぶのは、黒とオレンジが基調のジャージを身に着けているナルトであった。

木ノ葉崩しから約二年半。

ナルトは師である自来也の下で身も心も成長し、忍としての実力も格段に向上した。

なのだが、忍としての威厳など一切ない。

幾ら成長したとはいえ、まだまだ十代。直情的な根っこの部分はそのままでも言おうか。

そんなナルトと自来也は、木ノ葉隠れの里を離れて修行の真っ最中。

忍としての心構えについてのいろはや、自来也直伝の忍術を教えて

もらうなど、伝説の三人を知っている者であれば喉から手が出るほどの貴重な経験を積んでいる。

特には互いに死にかけることもあったものの、それも今となっては思い出の一つだ——笑えはしないが。

「それよりエロ仙人。オレってば、そろそろ腹が減ってきたってばよ。ラーメン食いに行こうぜ」

「お前は腹が空けばラーメンラーメンと五月蠅いのオ。この世にラーメン以外に旨いものなんぞ山ほどあるだろう」

「それでもオレはラーメンが好きなんだってばよ！ 一日三食ラーメンでもバッチコイだ！」

(こいつ、いつか高血圧で死ぬんじゃないオ?)

ラーメンを熱望してやまない弟子を前に、自来也は彼の塩分過多による高血圧を案じる。

忍がラーメンの食べ過ぎによる高血圧が原因で死ぬなど、笑い話ではない。余りにも情けなく、自来也としてもすでに故人のナルトの両親に顔向けできない。

だが、こんなバカな弟子でも長年連れ添えば可愛いものだ。

かつての弟子を彷彿とさせるナルトを前に呆れたように笑う自来也は、『分かったってのオ』と渋々ラーメン屋へ向かう。

適当に探すこと十数分。

それっぽい店を見つけた自来也は、ナルトと共に暖簾をくぐって店の中に入る。

部屋に充満する空気は熱く、一瞬息が詰まりそうになるもの、すぐさま鼻腔を擽る食欲そその香りに否が応でも腹が空く。

「へへッ、なーにしようっかなア〜！」

「まったく、いつまで経ってもガキだのオ……」

「——あ、ガマ仙人」

「ん？」

自来也に向けて言い放たれたと思しき声に、思わず二人は声が聞こえた方向へ目を向ける。

するとそこには、三人仲良くカウンターに並んでいるヒナイ、シラ

イト、ミズチの三人が居るではないか。

「なんだ、お前らもここで昼飯食つてたのか。奇遇だのオ」

「世間って狭いな、コラ」

「……ご無沙汰しています」

「こんにちは、自来也様♪」

各々の反応を見せる三人に対し、店に入った自来也たちも自然に彼らの隣に並ぶように席へ腰かける。

こうして彼らと出会うことも二年半ぶり。

以前は、大蛇丸と戦った後での遭遇であったが、あの時よりも三人はより大人びた雰囲気纏っているように窺える。

特に、

「なんだ、ヒナイ。おめー随分立派に育つたのオ……！」

「このエロ仙人が、コラ」

下心丸出しでヒナイの胸元に目を遣る自来也に、ヒナイが額に青筋を立てて苛立ちを顔に出す。

法衣の上から出もはつきりとわかるたわわに実った胸。

脱げばスゲーことになるってのオ！ と興奮する後ろでは、ナルトが軽蔑の眼差しを師へと向けていた。昔からこうだが、流石に弟子にもそういう目を向けるとは思っていなかった

いや、しかし思い返せば“おいろけの術”で女に変化したナルトを見て、即弟子入りを認めていたではないか。

ナルトは遠い場所を見るような瞳を浮かべつつ、現実逃避するように店主に味噌チャーシュー麺を注文する。

そして、少しばかり自来也の隣には座りたくなくなったため、ミズチに一個横に移動してもらい、シライトとミズチに挟まれる形で席に着いた。

熱気の満ちる空間だが、店員に差し出されたお冷を飲めば、喉にひんやりとした爽快感が突き抜ける。

これだ。ラーメン屋にて、熱々のラーメンが来る前にひとまずキンキンに冷えたお冷で喉を潤す。このプロセスがあるからこそ、ラーメンを最大限に楽しめることができるのだ。

だが、ラーメンが来るまではまだ時間がある。
ナルトは自然と横に二人に会話を振っていた。

「なあ、しらたきの兄ちゃん。前、こんな綺麗なねーちゃん居たか？」

「……そう言えば、あの時ナルト君は寝てたね」

「あの時？」

「綱手様が五代目になるとかなんとか言った頃……」

「……ああ、あの時か！　　そういや、エロ仙人が懐かしい奴に会ったって言ってたけど、しらたきの兄ちゃんたちだったのか！」

「はい」

大蛇丸との激闘後、ぐっすり眠っていたナルトは、彼が眠っていた間に綱手と自来也の下に訪れていたシライトたちの詳細を知らない。シライトとヒナイの二人に関しては波の国で出会っているが、波の国からの間に出会ったミズチの存在をナルトは知らないのだ。

綺麗と告げられたミズチは、実に嬉しそうにほほ笑んでいる。

「あら、ありがとう」

「おう！　　オレ、うずまきナルト！　　火影になるのが夢だつてばよ」

「そうなの？　　凄いわね」

「へへッ！　　……あれ、そんな喋り方する奴に会ったことがあるようなないような……」

「気にしなくてもいいのよ。後、アタシはお姉さんじゃなくてお兄さんだから」

「えっ！？」

ミズチが男であることに驚愕し、思わずシライトの座っている方向へ飛びのくナルト。

そう、彼はこう見えても竿と玉を股の間にぶら下げているのだ。

白を彷彿とさせるような美人の男の存在にデジャブを覚えつつ、ナルトは『マジかよ……』と暫し放心状態である。

そう言えば、自来也は一切このミズチに反応していなかった。師匠の性格を鑑みれば、彼にも反応してもおかしくはないはずだが、ナルトが知らない内に出会い、尚且つ男と知っていたとするならば辻褃は合う。

「世界は……摩訶不思議だつてばよ」

「そうですね」

ナルトの驚愕に同意するシライトは、お冷を飲んで喉を潤す。

「……ナルト君は……どこで何を？」

「ん？ ああ、オレか。オレはエロ仙人と一緒に修行の旅に出てたんだつてばよ！」

「修行に……」

「おう！ しらたきの兄ちゃんたちは何してたんだ？」

「まあ……旅だけけども」

もごもごことバツの悪そうにまごつくシライトに、ナルトは怪訝そうに眉を顰める。

そんな彼に助け舟を出したのはミズチだ。

至極おかしそうに微笑む彼は、首をかしげているナルトにこう話す。

「アタシたち、二年前から滝隠れの里を目指してるんだけど、行く先々でセンサーが人助けに勤しむものだから、まだ里に着けてないのよー」

「えっ!? 二年も前から……しらたきの兄ちゃん、かたつむりじゃねえんだから」

「……」

返す言葉もない。

そう言わんばかりにシライトは硬直し、黙り込んでしまう。

そうなのだ。以前綱手に里帰りを提案されたシライトであるのだが、二年以上たつても里に着かない。理由は至極単純。シライトが旅先で見つける困った人を助けるものだから、時には長期間滞在し、またある時には里とは逆方向へ進むこともあった。

お人好しなのも考えもの。

そうからかうような笑みをミズチに向けられたシライトは、更にバツが悪そうな顔を浮かべ、空になったお冷の入っていたコップに口をつける。

「しらたきの兄ちゃん、それはどうかしてるつてばよ」

「……はい」

「オレ、しらたきの兄ちゃん家族とか知らねえけど、帰ろうって思ってることは知り合いなりなんなり居るんだろ？　なら、一回くらい帰らないと心配してるってばよ」

「……はい」

年下に説教されるシライトは、最早ブロークンハートだった。

流石に堪えたのか、徐に面を上げた彼の瞳には強い意思の光が宿っている。

「……次は帰ります」

「そう言う奴に限って帰らないんだってばよ……」

「……」

呆れた面持ちのナルトに、シライトは得も言えない表情を浮かべていた。

ここから全力で走れば、滝隠れには三日も経たずに到着する。

たったそれだけの距離。なのにも拘わらず、いつまで経っても帰れないのは何故だろうか？

今一度思索するシライト。

その時、ふと脳裏を過つたのは里に居る一人の友達の笑顔だ。

(フウ……)

六年などあつという間だ。

自分が人並みに男らしくなった一方で、彼女もまた女らしく育っていることだろう。

互いの成長の変遷を見ることは叶わないが、一度帰って彼女と話したい。旅をして何を見たのかを語り合いたい。

きつと、彼女は嬉々として耳を傾けてくれる——そんな確信があったから。

この足が、心が逸り、今すぐにも駆け出したい気持ちを何と云えばいいのだろうか。

とにかく会いたい。

フウにも、家族にも、子どもときから過ごしていた故郷へと帰りたい。

ようやく決心がついた。

「……すみません、ミズチさん。ヒナイさん。食事が終わったら、すぐに滝隠れに向かってもいいですか?」

「ええ、アタシは構わないわよ」

「んあ? オレも別にいいけど……」

「……ありがとうございます」

突然その気になって帰郷を提案するシライトに、二人は特に否定することもなく受け入れる。

彼らにとつても、明確な行先はない旅路だ。

向かう場所がどこであろうが、別段問題はないという訳である。

連れの快諾を得られたところで、シライトは『早速』と言わんばかりに席を立つ。

「しらたき。そう急いでも仕方ねえだろ、コラ。一先ず座れ」

「……はい」

しかし、ヒナイに窘められ、彼はしよぼんとした表情で再度席につくのだった。

「ふう、食った食ったア! 腹一杯だつてばよオ!」

「……ナルト君。ラーメンのスープを全部飲み干していたけれど、ラーメン一杯に含まれている塩分量は一日の摂取量を軽く超えています……健康を考えるなら、スープは残した方がいいと」

「ええー!? ラーメンはスープを飲み干してこそだつてばよ! それに! 残さず食ってくれた方が、作ってくれたおっちゃんとか喜んでくれるじゃんか!」

「……それも……そうですね」

「折れるなよ」

ラーメンの塩分について説明するシライトであったが、並々ならぬ熱を込めてラーメンを語るナルトを前に、医学的観点など払いのけられてしまう。

そんな弱腰なシライトにツッコみを入れるヒナイだが、彼女の立場的にはナルト寄りだ。

例え塩分が多かろうと旨い物は旨い。

幼少期、腹八文目も食事を摂ることができないことも多かった彼女にとって、物を残すなど言語道断。出された物は全て食らう。それが彼女のモットーだ。

「アタシは、スープ飲んだ分動けばいいだけの話だと思うわ」
因みにミズチは中立だ。

その時の気分で、残すか残さないか決めるようである。

「昔はともかく、今はキツイのオ……」

自来也は年齢的な問題で、胸やけしそうな食べ物全般避けたい様子。子。

そのように呑気に話す五人は、途中まで道が同じという理由で並んで歩いていた。

旅は道連れとも言う。折角の機会、会話に花を咲かせるのも悪くないと、談笑していた五人。

ゆるり、ゆるりと時間は過ぎる。

風向きが変わったのは、深い林道を歩んでいた最中のことだった。林の奥より忍び寄る音。

咄嗟に振り向けば、そこに佇んでいたのは血みどろの姿の忍が一人。額当てに描かれた紋様は滝隠れの忍を表すもの。

「こ……木ノ葉隠れの……自来也様とお見受け致します……」

血みどろの忍は、息も絶え絶えとなりながら、血色の悪い顔で必死の形相を作り、吐き捨てるように言葉を発する。

「わたしは……滝隠れの上忍……ケゴンと申します。滝隠れと同盟国たる木ノ葉隠れの者とお見受けしたあなたに……ただちに頼みたい事が……！」

脱力し、その場に崩れ落ちてしまうケゴンと名乗った男の下へ、アイコンタクトをとった五人が駆け寄る。

医者であるシライトが真っ先に治療にあたった。

騙し打ちの可能性も考えられたが、シライトは彼の姿に見覚えが

あつたのだ。

よく、フウを迎えに来ていた忍の一人。

そんな彼が瀕死の状態になっているとは、よい予感はない。

無言で治療に徹していると、その甲斐あって顔色が良くなり、呼吸も整ってきたケゴンが、顔を歪めて言葉を紡ぐ。

「先日……木ノ葉と砂の合同で開催された中忍試験……わたしたちはその帰りでした。ですが、襲撃に……ぐっ！」

「敵は一体？」

自来也が問えば、ケゴンは脳裏に焼き付いた悍ましい光景を思い出す。

「『暁』」

「っ……っ！」

「その者らに……我等と共に居た一人が狙われて……っ！」

「誰だ、その狙われた者とは？」

いつになく神妙な面持ちを浮かべる自来也に、ナルトも静かに話を聞こうと耳を傾けている。

「——フウ。滝隠れの……下忍です」

「!!」

シライトの目が見開かれ、彼の異変に気が付いた他の者達が反応する。

ここまで彼が動揺を露わにすることなど、未だかつて見たことが無かった。

心なしか、『掌仙術』を用いている彼の手が震えているようにも見える。

しかし、自来也はあえて質問をシライトに投げかけず、引き続きケゴンの話に耳を傾けようとした。

「何故、その下忍が狙われたのか見当は付いているのか？」

「それはっ……」

そこまで口に出し、言葉が続けることを躊躇するケゴン。

だが、自来也は既に提示されたキーワードから、大方の予想はつけていた。

彼自身、極秘裏に調査していた「暁」という名の組織の目的。彼らが狙う理由とさえも、

「人柱力なんだな。その子は」

「っ！……」

「無言は肯定と捉えるぞ」

そこまで自来也が言えば、ケゴンは苦心に満ちた表情で頷く。

一方で、初めて人柱力という言葉聞いたシライト、ヒナイ、ナルトの三人は首を傾げる。

只一人、ミズチだけは険しい表情で、分かっている三人へ視線を投げかけた。

「人柱力……少しだけ聞いたことがあるわ。忍び五大国と滝が有している膨大なチャクラの塊たる魔獣——尾獣を体に封印している人のことだっつて」

「それっつてば……」

ナルトは何か心当たりがあるかのように言葉を漏らした後、自分の胸の辺りの服をギュツと握る。

すると、ナルトが言葉を続けるよりも前に、自来也がいかにも真剣な様子で全員を見渡し、口を開いた。

「これはワシらだけでどうすることもできない問題だつてのオ。ワシが頼まれた以上、これは木ノ葉と滝……両方が関わらなきゃいけない問題だ。そのフウって子を探すにしろ……既に囚われていると仮定するならば奪還せにやアカンが、迅速かつ的確な対応が必要だ」

目を鋭くする自来也は吼える。

「すぐに木ノ葉と滝に連絡する！ ここからは一分一秒が勝負だ！」

——命がかかっている。

直接自来也は口にはしないものの、そういった雰囲気嫌というほど感じ取ったシライトは、自身の手にいつも以上に力がこもっていることを自覚した。

二十六。 お体に障りますよ

「逸るなよ」

「……分かっていきます」

自来也の声を受け、シライトは神妙な面持ちで頷く。

現在、五人が行っていることはフウを連れ去ったと思しき暁の搜索だ。幸い、五人の中には特にチャクラ探知に秀でたヒナイが居る。

彼女が居れば、ほんの些細なチャクラの残滓さえ残っていれば、追跡はそう難しくはないだろう。

だが、時間が残されていない。

一刻も早くフウを救出せねば、彼女の命はないだろう。

『——同盟国である滝の申し出だ。有事であることを鑑み、自来也——お前が先行して追跡をしろ。ウチからも追々応援を寄越す』

つい先ほど、シライトが口寄せしたカツユを通じて話した綱手は、木ノ葉から応援を寄越す旨を口にしてくれた。

ナルトが共に居ることにつき、少々悩んでいたようであったが、最終的にはナルトにも信頼を置き、自来也と共に向かうことを許してきている。彼女もまたナルトに可能性を見た者だ。今回の救出において、一定以上の働きを期待しているのだろう。

そんな五人であるが、綱手より任務を言い渡された自来也とナルトは兎も角、シライト、ヒナイ、ミズチの三名はまったくの部外者と言ってもいい。

しかし、それでもついて来ているのはシライトのフウ救出への意欲だ。

彼女を助けたい——その一心で頭を下げた彼の申し出に、綱手の後押しもあつて、自来也へ付いて行くことを許された。

「いいか？ 相手が暁となると、おぬしらの身の安全は保障できん。悪いが、自衛は個人でやってくれい」

「……はい」

「誰に言っただ、コラー！」

「あら、安心してください自来也様。アタシ、こう見えて結構戦えるから」

三人の様子に満足そうにうなづく自来也。

彼が確かめたかったのは、命を懸けられる覚悟があるか否かだ。忍との戦いは命がけ。相手が抜け忍で構成されている組織であるならば、尚更だ。

しかし、今のやり取りで彼らの意気込みを確認できた自来也は、ヒナイの“神楽心眼”を頼りに暁の追跡を続ける。

そんな時、ヒナイが『ちよつとまで』と皆に制止をかけた。ピタリと止まる足。

その中、只一人ゆっくり歩を進めるヒナイが辺りを見渡し見つけたのは、セミの抜け殻のように得体の知れない半透明の殻で形作られた人の抜け殻だった。

「うえっ……なんだってばよ、これ」

「うーん、アタシが知ってる忍術とも少し違うわね」

気持ち悪いものを見たように顔から血の気を引かせるナルトの一方で、興味津々に近づくミズチは、一切躊躇する様子なく抜け殻にベタベタ触る。

「これって……」

「……フウに似てる」

ヒナイがシライトに目を向ければ、記憶の中の彼女の姿を思い返すシライトが、ポツリと呟いた。

数年会っていない友人の姿——ましてや子どもであった彼女がどのような成長したかは分からない。

しかし、全体的な雰囲気。そしてかすかに感じられるチャクラの質から、フウのものであるとシライトは確信した。

「なるほどのオ。追う手掛かりになるやもしれん。回収しておくか？」

「じゃあ、オレが」

自来也の言葉を受け、探知係のヒナイが“封入の術”で巻物にフウの抜け殻を封印する。

これで新たな痕跡を得られることができた。搜索も一応捗るかもしれない。

「ようし、ヒナイ。案内頼んだぞオ！」

「人任せにしてんじやねえぞ、コラ！」

本業の忍者がまったく働かないことに業を煮やすヒナイが声を荒げる。

そうは言いつつも、たった今見つけたフウの抜け殻のチャクラを元に、*“神楽心眼”*での追跡を再開した。

先程よりも明確に位置を把握できる。

やった。勝ち誇るかのような笑みを浮かべるヒナイは、それなりに遠くにひしひしと感じられるフウのチャクラの方へ足を向けた。

「こつちだ、コラ！」

向かうべく方向が明確になった分、皆の足取りは早くなる。

そんな中、一人暗い表情をしているシライトが、並走するナルトに声をかけた。

「すみません……本当なら一人でも助けたいところなんですけど、力及ばず君の力も借りてしまつて……」

「いいつてばよ！ そのフウって姉ちゃん、しらたきの兄ちゃんの大事な友達なんだろう!？」

「ええ……」

「なら、絶対に助ける！ 約束するつてばよ！」

真つすぐな瞳で応えてくれるナルト。

彼は、連れ去られたフウに自分を重ねていた。体の中に化け物と称される存在を飼っていることにより受けた迫害を、ナルトは身に染みて覚えている。恐らくフウと呼ばれる人物も、そう違うはない——寂しい思いをしていたことは想像に難くなかった。

それでもフウの友達になつてくれていたのがシライト。

ナルトにも、大人には白いものを目で見られながらも、遊んでくれる友達はそれなりに居た。彼らのお陰で救われたことも何度もあったのだ。

嗚呼、しかし相手側からの想いを目にするのはこれが初めて。

『助げたい』。シライトがそう断言する相手を、ナルトは少し羨ましく思った。

そんな時、ナルトは今度、サスケのことを思い出す。彼は、今はどこで何をしているのだろうか？

あの時は結局手を引き、木ノ葉に戻ることが叶わなかった好敵手の姿が脳裏に過る。

救えなかった悲しみも、ナルトは知っていた。

悲しみを優しさに変えたナルトにとって、友のために命を懸ける男に手を貸すことへ些少の躊躇いもない。

「ようし！ ヒナイの姉ちゃん、ドンドン行っちゃってってくれればよう!!」

「——それは困りますねエ」

『!!』

不意に上より参上した二つの影に、五人の足が止まる。

現れたのは、鮫を彷彿とさせるエラと歯並びの色白の男。

もう一人は、黒髪を靡かせるどこかはかなげな美青年。

どちらも赤い雲をあしらったようなデザインの黒いコートを身につけており、なんらかの関係者であることは目に見えて分かった。

「あら、イイ男♡」

「あアアー！ お前らってば……!」

ポツと頬を赤らめるミスチの一方で、ナルトが指を指して大声を上げる。

そんなナルトたちの前に出てくる自来也は、神妙な面持ちで現れた二人を睨む。

「久しぶりだのオ……イタチ。それに干柿鬼鮫」

「ククツ、伝説の三忍に名前を覚えて頂き光荣ですよ」

「……」

片や、霧隠れの抜け忍であり、忍刀七人衆が一人〃干柿鬼鮫〃。

片や、木ノ葉隠れの抜け忍であり、うちは一族を一人残して虐殺を働いた男〃うちはイタチ〃。

自来也やナルトにとっては、綱手を搜索する旅の途中で出会った以

来の再会だ。

しかし、今のタイミングでの再会是最悪としか言いようがない。

「何故貴様らがここに居るんだのオ？」

「……聡明な貴方であれば答えは出るかと」

「その通りですよ。私とイタチさんが来た理由。それは——」

突如、印をすさまじい速度で結び始める鬼鮫。

その光景に皆が目を見開く。

「全員、避けるオ！」

「あなた方の足止めですよ！」

水遁・爆水衝波!!

頬を大きく膨らませた鬼鮫は、次の瞬間には怒涛の量の水をその口の中から吐き出して見せた。

あまりの水の勢いに、再不斬との戦闘を思い出すナルト。

（いや、違っつてばよ！ こいつは水のねえ場所でこんだけデカイ水遁を——!!）

水遁は基本的に水辺で繰り出す忍術。

手練れの忍であれば、水のない場所で繰り出すことも可能であるが、それにしてもこの量は規格外だ。

しかし、自来也の喚起も相まってかろうじて全員が鬼鮫の水遁を跳んで回避する。

彼らの後方にあった木々はもれなく津波のように侵攻する水流の前に、次々と折れて倒れていくではないか。

「まずはナルト君……あなたに眠ってもらいますよ！」

そう叫ぶ鬼鮫は、宙に浮かんでいたナルトの下へ一直線に飛んでいく。

空中では身動きがとれないと踏んだのだろう。

直線の軌道を描き飛来する鬼鮫は、その背に背負っていた大刀・鮫肌を手に取り、ナルト目掛けて振るう。

「させるかー！」

しかし、ナルトが十字の印を結び、自身の隣に影分身を作った。すると影分身が本体の方を引っ張り、そのまま鬼鮫の振るう斬撃か

ら避けることに成功する。

「ほう……随分頭が回るようになりましたね」

「あら、ナルト君ばっかり見ていて……嫉妬しちゃう♪」

「なに?」

不意に下から響く声に見下ろす鬼鮫。

直後、振るつた右腕に大量の蛇が巻き付き、噛みついてくるではないか。目を見開けば、無数に連なる蛇の先でニタリと口角で弧を描いているミズチが、グンとその腕を振るう。

鬼鮫はその勢いのままに振るわれるが、まだ余裕だ。

この程度の攻撃でやられる自分ではない——そう思っていた矢先、目の前に正拳突きของ構えをしているシライトの姿が目に入る。

「桜花衝……ッ!!」

「ぐぼア!」

周囲の水が飛び散るほどの衝撃を生み出す拳が、ミズチの潜影多蛇手で振り回された鬼鮫の胴に突き刺さった。

余りの勢いに宙をバウンドする鬼鮫であったが、今度は四方八方より何かに縛り付けられる感覚を覚える。

何事かと目を見開ければ、金色の輝く鎖を体中より伸ばすヒナイが、好戦的な笑みを浮かべ、鎖を引つ張らんと腕に力を入れていた。

「よっしや! 捕まえたア!」

魚でも釣り上げたかのようなトーンで叫ぶヒナイ。

その一方では、自来也とイタチが熾烈な攻防を繰り広げている。

「つとオ、行かせんぞイタチ。お前の写輪眼はあいつらにはちと厳しいからのオ……ワシが先んじてお前を始末するつもりじゃったんだが、案外あいつらもやりよるわい」

「……鬼鮫はあの程度ではやられませんよ」

「なにっ?」

自来也が鬼鮫の方を一瞥する。

「にやにイ!」

彼が目の当たりにしたのは、自身の鎖が砕かれて驚くヒナイの姿。加えてみるみるうちに傷が癒えていく鬼鮫の姿だった。

極めつけは――、

「ククツ……いいチャクラですね。鮫肌が喜んで食べてますよ……！」

鬼鮫の手に握られている、包帯を巻かれていた巨大な刀が、生き物であるかのように大口を開いてヒナイの鎖――“金剛封鎖”を喰らっている光景であった。

まるでスナツク菓子を食べる感覚で、うずまき一族の扱う封印術を貪る様は、見る者に畏怖を与える。

「……そうだ！ アイツ、人のチャクラあの刀で奪うんだってばよ！」「なにイ!? 先に言いやがれ、コラ!!」

「そう言えば……大刀・鮫肌には、相手のチャクラを喰らって自分の傷を癒すなんていう能力があつたような気がするわ」

「……それは……まずいですね」

思い出したかのように叫ぶナルトに、さらに被せて叫ぶヒナイ。似た者同士……否、弟子である。

それは兎も角、相手のチャクラを奪うという厄介な能力に、どう攻略するべきかと悩む四人。

単純に考えれば、チャクラをそれほど用いない体術で攻めればいい話なのだが、最も物理攻撃力を有しているのはシライトだ。戦い慣れしていない人間が、果たして元忍刀七人衆の一人であつた忍中の忍に一発食らわせられるかは甚だ疑問だ。

しかも、獲物を持っている相手に丸腰で攻めるのもイケない。

一瞬の間に、必死に思考を巡らす四人。

その中で最も早く突破口を見つけたのはミズチだった。

「うふふっ……アタシが行くわ、センサー」

「ミズチき……ッ!?!」

思わずシライトがギョツと驚いた光景。

それはミズチが呪印にて異形の姿へと変貌しているというものだった。一度見たら忘れぬ光景を前に、ナルトも目を見開き、ヒナイも『なんだそれ!?!』と声を上げている。

だが、そういつた声を一切気にせず状態2へと変化したミズチは、

右腕をフジツボのような形へと変形させ、そこに無数に開かれる穴から、あろうことか光線状のチャクラを発射した。

「イっちゃって♡」

「ツ……ハア!!」

その攻撃を前に、鮫肌を構えて受け止める鬼鮫。

鮫肌に直撃したチャクラの光線は、その剣筋によって軌道を逸らされ、鬼鮫の周囲に無数の焼け跡を刻んでいく。

しかも、弾かれなかった分は鮫肌に食われ、そのまま鬼鮫に還元され、結果として彼の体の傷を癒すこととなる。

「な、なにしてるんだってばよ、ミズチのねえ……いや、兄ちゃん!」

さつき説明しただろと言わんばかりに声を荒げるナルトであるが、紫色に変色した唇で薄く笑うミズチには聞こえていないのか、攻撃が止まる気配は一切ない。

「どれだけ攻めようとも無駄ですよ……!」

「そうかしら? アタシの攻め、こんなもんじゃないから」

「根比べですか……いいでしょう!」

さらに強まる攻撃の前に、鬼鮫は悠々と受け止め続ける。

鮫肌の能力もそうだが、それ以上にミズチの猛攻を受け止め続ける鬼鮫の膂力も凄まじい。

何十秒続いたか分からない猛攻。

いつしか、ミズチのチャクラが絶えたのか、肩で息を吐くミズチが状態2から元の姿へと戻ってしまった。

「ククツ、勝負はわたしの勝ちのようですね」

勝ち誇った様子で鬼鮫が鮫肌を肩に担ぐ。

しかし、ミズチは負けたことに悔しがる訳でもなく、寧ろ俯かせた顔で笑っていた。

「ホント? たくさん食べてくれた?」

「? ええ、貴方のお陰でご覧の通——!?!」

片手を掲げた鬼鮫であったが、信じられぬ光景に目を見開いた。

——鱗?

何の変哲もなかった自分の肌に、まるで爬虫類のような鱗が生え始

めている。

しかもそれだけではない。鱗は次々に体中に生えていき、何故だか骨格も変わるかのような感覚も覚え始める。

次第に腕は縮んでいき、足も胴体に吸い込まれるかのように消えていく。

「一体、これは……!?!」

「食べすぎはお体に障っちゃうわよ。自然エネルギーの扱いは難しいんだから……ね?」

刹那、鬼鮫の体が石化し始める。

(これは……)

その光景に心当たりがあつたシライトは一人納得する。いや、後ろでイタチと戦っている自来也も知っているだろう。

仙術チャクラ——それらを練り上げるには、自然界に存在する自然エネルギーを体内に取り込まなければならぬのだが、身体エネルギーや精神エネルギーよりも多い比率を体内に取り込んだ場合、自然エネルギーの下になった生物へと変化してしまう挙句、石化してしまうという副作用が現れるのだ。

それほどまでに繊細な自然エネルギー。

あれほどまで暴食すれば、石化することはほとんど当然といった結果だった。

ミズチがニツコリ笑う間、鬼鮫は歪な蛇のような姿へと変形した挙句、微動だにしない石像へと変わってしまう。

「鬼鮫……」

「よそ見していいのか?」

物言わぬ石像と化した同僚に目を向けたイタチであったが、その隙を逃がさず、自来也が渦巻くチャクラの球体を彼の胴体へぶつけた。

「螺旋丸!!」

「っ——」

弟子のナルトよりも速く、そして洗練された螺旋丸がイタチの胴に突き刺さるや否や、彼の体を後方へ大きく吹き飛ばす。

その余波で水浸しになっていた地面は抉れ、イタチがぶつかった木

も葉が散り、枝が折れ、幹には深々とした裂傷が刻まれる。

コートも破れ、痛々しい傷跡を露わにするイタチは脱力し、その場に崩れ落ちた。

だが、そんな彼から目を離さなかった自来也が、信じられぬものを目の当たりにしたかのように目を見開く。

「コイツア……」

先程までイタチだった人間は、自来也に見覚えのない中年の男へと変貌しているではないか。

（いや、一元に戻ったと言っべきかのオ？ “暁”の術で化けた偽物か？ 通りで手ごたえがなかった……）

顎に手を当て思案する。

恐らくは、この中年の男が化けていたのではなく、第三者の手によつて化けさせられていたと推測する自来也。

偽物にしては、余りにもイタチの気配に酷似していたのが理由だ。

ナルトたちが相手していた鬼鮫も同じ術で変化させられていた者かは、石化してしまった今では分からない。

だが、大刀・鮫肌は本物であった。

しかし、それほどまでに貴重な忍刀をはたして、偽物に渡すだろうか？

「ふむ……難儀な話になってきたのオ。だが、敵の目的が足止めである以上、むぎむぎ立ち止まっている訳にもいかんのオ」

「エロ仙人！ そっちも終わっちゃったのか？」

「当たり前だ、ナルト。お前とは出来が違うんだつてのオ！ ほら、行くぞ。ヒナイ、行けるな!？」

驚く弟子をからかう自来也。

それからもう一人の弟子たるヒナイに指示を出し、搜索の再開を命ずる。

すると、ヒナイは顔をしかめた。

「人使いの荒い仙人だな、コラ……って言うか、オレにはあんなかつちよいい忍術教えてねえじゃねえか！」

「阿呆！ あんな少しの間だけ滞在する場所をとった弟子に、こんな

会得難度高い忍術教えるか！」

「どうやら、螺旋丸を見て自分も身につけたいと思っ
ているらしいヒナイ。」

「自来也はそんな我儘を口にするヒナイに抗議したが、さら
にヒナイは反論した。」

「なんだ、その扱い！ 弟子を不平等に扱うな、コラ！ 現
地妻か、オレはー！」

「あんなちんちくりんだった小娘を現地妻なんぞするか！
ワシはこれでも弟子には平等に愛情注いでやってるつうの
オー！」

「あの……いい加減に……」

「言い合いを始めた自来也とヒナイの二人であったが、途
中間に挟んできたシライトが負のオーラを発していたため、
気圧されてしまった二人は口を噤む。」

「気を取り直し、ヒナイの案内の下フウが居るであろう場
所に向かう五人。」

「救出までのタイムリミットは、刻一刻と減っている。」

二十七。 不死と不死

ホーホーとフクロウが鳴いている。

時刻は夜中。これ以上の移動は困難と判断した自来也の指示により、たき火を囲んで休息を摂ることとなった。

嫌と言うほどに静かだ。

いや、単純にフウのことが気になって眠りにつけないと言うだけなのだろうか。

どちらにせよ、シライトにはとてもではないが安眠は期待できそうにはなかった。

「……」

「いい加減眠ったらどうだのオ」

「……わかつているんですけれど……」

「お前は医者だ。無理に戦おうなんてするんじゃないやねえ。お前には命の瀬戸際の子を助けるつつう、ワシらにはできんことができる。医者なんだからのオ」

自来也の優しい声色に、寝付けずジツと煌々と燃えていたたき火を眺めていたシライトは、ようやく自分に眠気が襲ってきた感覚を覚えた。

「お前のやるべきことは、ワシらとは別にある。医者は集中力が命だろう。今は十二分に休んでおけ」

「……はい」

医者たる自分にできることは、瀕死の彼女を助けることにある。

蜘蛛の糸のように細く頼りない命の糸が途絶えぬよう、つなぎとめること。それが医者たるたきのシライトのやるべきことだろう。シライトは自分に言い聞かせた。

ふと瞼を閉じれば、大蛸輪仙人の顔が脳裏を過る。

フウが特別な存在であることを自分に教えてくれたのは他でもない、彼女だ。そして何かできぬかと助力を乞う自分に、命を救う術を教えてくれの者も彼女である。

ならば、今こそ誓いの時を果たすべき。

自分の力は何のためにあるか。それは元を辿れば、フウを——友達を助けたという一心からだった。

(待ってて……フウ)

意図的に呼吸を穏やかにするシライトは、このまま眠りにつけるようにと努めた。

不安には駆られるが、その度に笑顔のフウが脳裏を過る。

『シライト！』

屈託のない笑みは太陽のように輝いている。

露ほども、あの輝きを守れるのであれば——命は惜しいが惜しくない。

彼にも、男としての意地があるのだから。

——不思議な感覚だ。

フウの意識は不意に覚醒した。

しかし、辺り一面に広がっているのは何もない真つ白——否、白という表現も正しいのかさえ分からない無が広がっている。

訳も分からぬまま歩く、歩く、歩く。

そんな時、大振りに振っていた自分の手が子どものように小さくなっていることに気が付いた。

嗚呼、これは夢だ。

ふわふわと浮かぶ感覚を覚えつつ、夢だと認識したフウは、大声を張り上げる。

「もオ——いいイ——よオ——！」

かくれんぼで、身を隠し終えた者のように合図を出す。

しかし、誰も答えない。

「もお〜い〜よオ〜!!」

もう一度。

「もお〜いイ……よオ……！」

それから何度も何度も声を張り上げるも、一向に返事は返ってこな

い。

いつも傍に居てくれる七尾でさえも、今に限ってはなんの反応も返してこないことが、フウにはとても不安だった。

しかし、ポジティブな彼女だ。

諦めず繰り返し、声を上げる。

十、二十、三十——そして百回目を超えようとした辺りで、フウの喉からは声が出なくなった。

最初は痛いと思つた喉の痛みさえ、今は感じ取れない。

代わりにあるのは胸の痛み。

鼻を嚙り、涙を拭うフウは、形容しがたい胸の痛みを手を当て、その場に膝から崩れ落ちた。

「もう……いいっすよオ」

——誰か見つけて。

独りの寂しさは耐えられなかった。

追跡を始めて三日が経った。

休憩を入れながらの移動ではあるが、流石に三日に渡る移動に、本職の忍は兎も角として、シライトなどには疲労が垣間見えている。

だが、途中一切弱音を吐かなかつた。

元々無口というのもあるが、それに加えてもなにも語らない。これから向かう先で待っている者のために、僅かでも体力を温存していたという強い想いからだろう。

そのようにして進み続けた五人がたどり着いたのは、空区。

断崖絶壁の前に佇むのは、札のようなものが張り付けられている巨大な岩だ。

「これは……」

「『五封結界』だのオ」

忍術についてはさっぱりシライトが首を傾げれば、自来也が口を開いて説明する。

「『五封結界』は近くに『禁』と書かれた札を五か所に貼り付けて結界を作る忍術だ。随分大切な物がここにあると見た！」

そう言い切る自来也に、他四人が頷く。

「じゃあ、オレらで探して中に突入するのか？」

「エロ仙人！ さっさとやるってばよ！」

「待ってつのオ、バカ弟子ども！ 五か所に貼り付けてるって言ってるだろう！ この札を剥がせば、一人だけ襲われることになるじゃろうが。忍はできるだけ四人一組で動くべし。戦うにしろ救出するにしろ、下手にばらけて動こうとすれば敵の思うつぼだ」

声を上げるヒナイとナルトを窘める自来也は、不意に後ろに視線を送る。

「そろそろだのオ……」

そう呟けば、背後の木々がざわめく。

何事かと自来也以外が身構えれば、四人と一匹が姿を現す。

「カカシ先生！ ヒナタ、キバ、シノオ！」

「よっ、ナルト。デカくなったな」

現れたのは、シライトにとって波の国以来の木ノ葉の上忍『はたけカカシ』だった。

その他に居るのは、少し暗そうな少女、大きな犬に跨る活発そうな少年、フードを被ってゴーグルを着けている少年だ。

「……ん？ なんで紅先生じゃねえんだってばよ？」

「そ、それは……」

ふと首を傾げるナルトに、少女『日向ヒナタ』が口を開こうとする。

だが、彼女の代わりにフードを被った少年『油女シノ』が前に出てきた。

「ナルト。紅先生は事情があつて来られない。何故ならば——」

「あーもう面倒くせエ！ 今回任務に抜擢されたのは、探知能力に優

れたおれたちで、んでもって事情で来られない紅先生の代わりとして
カカシ先生が来てくれたって訳だよ！」

「なるほど、そーいうことか！」

「……」

「シ、シノくん……」

しかし、シノの説明は活発そうな少年「犬塚キバ」によって遮られ
てしまう。

結果、キバの説明だけでナルトは理解してしまったため、シノは無
言で一歩下がることとなった。そんな彼を慰めるようにヒナタが声
をかけるが、『放っておいてくれ』と言わんばかりに手で制止する。

中々に個性豊かな面々だ。

だが、彼らも立派な忍。今回のフウの救出任務に、綱手によって差
し向けられた者達なのだ。

そんな彼らを率いてきたカカシが、自来也に一礼する。

「ご無沙汰しています」

「うむ」

「それで、詳細を」

「ここにやあ『五封結界』が張られとる。まずは、ここ以外に近くに
あるハズの札を探さなきゃ、突入も叶わんのオ」

「そういうことでしたら……ヒナタクん。白眼で」

徐に振り向いて指示するカカシに、緊張したのか少し顔が強張って
いるヒナタであったが、すぐに気を取り直して身構えた。

瞼を閉じ、一拍呼吸を置く。

刮目。

それと同時に彼女の目の周囲に浮かび上がる血管。初めて見る者
にしてみれば何が何だかわからぬ光景ではあるが、彼女——日向家
の者達が扱う血継限界「白眼」を知っている者からすれば、安心して
みていられる光景だ。

「……ここから東に、約800メートル先の木の幹。北北西、約450
メートル先の、川沿いの岩肌。南南西、約600メートル先の廃墟前
の林の中。南東、約700メートル先の岩の上……です」

「よし。じゃあ……」

札の場所を確認したところで、ようやくシライトたちに目を向けたカカシ。

なにか言いたげに顎に手を当てて考えるが、自来也の方に視線を向け、彼がコクリと頷いたのを目の当たりにし、言及することはなかった。

ある程度綱手から話は聞いているのだろう。

ただの一般人であればすぐにでも帰らせたいところだが、協力してくれる医者であれば話は別だ。綱手お墨付きの実力、わざわざ使わない理由もない。

「あくまで木ノ葉の忍でない君たちは、救出した子の介抱を最優先に」

「……はい」

「おう！」

「うふふ、これって信頼されているのかしら？」

知らない顔も居るが、カカシは自来也の判断を信じ、ヒナタが見つけた札の場所へ赴く準備をする。里から持ってきた無線機をヒナタ、キバ、シノに配り、最後に自分に身につけた。

「あれ？ オレはいいのか？」

「ナルト、お前は自来也様と一緒に居なさいって。なんだ、久々に会ったって言うのにオレが離れるのが寂しいか？」

「うえっ……そんなんじゃないやねえってばよ」

「まー！ 安心しろ。すぐに戻る」

札を剥がす作業に自分が携わらないことを疑問に思っていたナルトであるが、人柱力たる彼をそう易々と一人にする訳にもいかない。自来也と共に行動するよう諭した後、カカシは『散！』と掛け声を上げ、そのまま札が貼られている場所へと向かっていった。

待つこと数分。いや、数分も経ってはいない。だが、体感的にはそれなりの時間を覚えていたシライトたちの下に、カカシたちから事前に渡された無線機から連絡が伝わってくる。

『こちらカカシ。発見した』

『おれも見つけた。何故ならば、寄壊蟲が――』

『あ……キバくん。もう少し東……』

『お、そうか!? ……ああ、あつたぜ! サンキュ、ヒナタ!』
『……』

不憫な感覚は否めない。

シノという少年に少々同情しつつも、無事札を見つけられた四人の言葉を受け、自来也が軽やかな跳躍で岩壁に貼られている札の下まで向かう。

「ようし、突入方法はボタンフックエントリーじゃあ!」

「ぼたんふつくえんとりー?」

「……入口の左右に待機しろっつーことだのオ。それより綱手の弟子! ワシらが剥がしたら、全力でこの岩ぶん殴れ! いいな!」

いまいち突入方法を理解できていないシライト(それとヒナイ)へため息を吐いた自来也だが、忍でない彼らにそこまで期待するのも如何ものかと、幾らか噛み砕いた説明をした後に、入り口の大岩を破壊するという大役をシライトに任せる。

その気になれば自分でもできなくはないが、腕力に物を言わせて破壊することは、綱手の弟子たるシライトならば容易いことだろうという判断の下だ。

事実、先日戦った鬼鮫との戦闘でも、彼の腕力は目を見張るものだった。

顎で岩の前で待機するよう指し示し、シライトが深呼吸し、身構えた瞬間を見逃さず、自来也は声を上げる。

「今だ!」

無線機の手からも札を剥がす音が響く中、シライトは地面に罅が入るほど踏み込み、全力の一撃を岩壁に叩き込んだ。

蜘蛛の巣が広がるように罅が入る岩壁。

一方で、シライトの拳は一切傷がついていない。

かなり洗練された“桜花衝”。昔、綱手にその技で殴られて死にかけたことのある自来也はゾツと冷や汗を流しつつも、無残に砕け散っていく岩壁にニヤリと笑う。

「いい拳持つてんじゃねえのオ……!」

そう呟く自来也は、アイコンタクトで指示を仰ぐナルトたちを視線で誘導しつつ、手で合図を送り中に突入した。

「ああん!? なんだ、もう来たんじゃねえか!」

「構わん。なにせ——」

そこに広がっていた光景に、突入した五人は目を見開いた。

不気味で巨大な像。それが突然消えたかと思えば、像の指先に乗っていた二名が飛び降りてきたではないか。

同時に、宙に浮かんでいた一つの影も力なく地面に落下する。

「ちようど終わったところだ」

頭巾を被った男がゴミを見るような瞳で見下ろす先に居るのは、血にまみれたフウだった。

「——!」

「待てイ!! 早まるな!!」

自来也の怒号が奔るが、シライトは我を忘れるように駆けだしてしまった。

その光景に舌打ちする自来也は、すぐさま援護するべく、彼に続いて他の三人と共に前へ出る。

「ひゃつはア!! ジャシン様への供物が一、二、三、四、五オ!!」

そんな五人を前にし、歓喜の声を上げる男“飛段”が、フウへ向かって走っているシライト目掛け、大鎌を振るように飛びかかる。

しかし、敵が来ることだけは予想していたシライトが、服の袖から幾条かの線を繰り出す。

「んだ!? 気持ち悪イ!」

「邪魔を……するな……ッ!」

「うおお!」

袖から口寄せしたムカデが、飛段の両腕に絡みつく。

それに伴い大鎌を振るうことさえままならなくなった飛段が、シライトのチャクラで強化した身体能力によって振り回され、広大な岩の中の空間の壁へ叩きつけられるではないか。

そうして襲撃者を撃退したシライトは、目の前に転がるフウを抱きかかえ、スツと胸に手を当てる。

——微かに鼓動を感じられた。

(でも、このままじゃ……！)

余りにも弱弱い命の灯火に、シライトの表情が歪む。

胸に痛々しく穿たれている傷により、恐ろくかなり血が流れている。それに加えてチャクラも少ない。

数年ぶりに出会った友が、まさかここまで死に瀕している状態だとは——。

このまま『ドツキリっス！』と起き上がってくればまだ気が安らいだことだろう。

だが、そのような気配は微塵もなく、ただただ目の前の少女は本能のままに呼吸を繰り返しているだけだ。

「ヒナイさんっ！」

「血だな!? 任せとけ！」

即座に理解したヒナイが、シライトとフウの下へ駆けだす。

しかし、彼女の体が突然ガクンと下がる。

何事かと全員が目を見開けば、ヒナイの足元から何者かの腕が生え、彼女の足を掴んでいるではないか。

「なッ……！」

「一文にもならん奴は早々にぐっ退場願おうか」

「ぐっ！」

頭巾の男「角都」がそう告げると、ヒナイの体は地中より生えている腕に振り回され、たった今入ってきた入り口へ放り投げられた。

「ヒナイ！」

「ヒナイのねえちゃん！」

「そして、お前らもだ」

放り投げられるヒナイの身を案じる他の者達。

そこへ角都が背中よりブチブチと線維が千切れるような音を奏で、奇怪な仮面を被った得体の知れない化け物を生やし、すかさず印を結び始めるではないか。

咄嗟に身構える四人。

しかし、彼らが思っていたよりも攻撃の範囲は広がった。

風遁・圧害!!

ぽっかりと空いた洞窟の中で、竜巻でも起こったかのような旋風が吹き荒れた。

開けた外ならまだしも、出口が一つしかない洞窟内では、外へと抜けなかった風が暴れ回って不規則に洞窟内に居る者達へと襲い掛かる。

チャクラコントロールで足下を固定しても体が浮いてしまう強風に、シライトとフウを覗いた三人が、ヒナイと同じく洞窟の外へ吹き飛ばされる。

それを見届けた角都はと言うと、先程シライトに蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられて崩れた瓦礫に埋もれていた飛段へ声を投げかけた。

「さつきとソレを片付けて来い。相手は九尾の人柱力と伝説の三忍だ……油断すると殺されるぞ」

「それをオレに言うかってーのー!」

首を鳴らしつつ、瓦礫の山から這い出て来る飛段。

そうして飛段にこの場を任せた角都はと言うと、たつた今外へ吹き飛ばした自来也たちの下へ向かっていく。

この場に残るのは、シライトとフウ、そして飛段だ。

「さつきはよくも蹴ってくれやがったな。死ぬほど痛かったぞ、オイ!」

「……ボクはこう見えても医者です。人を殺すつもりはありません」

「医者だア!? ……カア——!! ……なんてことだよ! ……医者つてこたあジャシン教に最も則さねえ職業じゃねえか!!」

「……?」

「ジャシン教」と飛段が口にする聞き慣れぬ宗教に、怪訝そうに眉を顰めつつ、掌仙術でフウの治療を行うシライト。

そんな彼に飛段は、血走った眼を浮かべながら、その大鎌を肩に担いだ。

「ジャシン教は殺戮がモットーなんだよ! 半殺しも戒律じゃあダメだ。だつてのに、必死に堪えてソイツ生け捕りにしたっていうのに、不敬にも命生き永らえさせるような職なんざもつてのほかだ! も

う我慢ならねえエ!! てめえもその女も、ジャシン様の供物にしてやるからよオ!!」

「……………」

「待っててください、ジャシン様ア——!!!」

狂ったように声を上げる飛段が、大鎌を構えてシライトに突進してくる。

それを目の当たりにしたシライトは、抱きかかえていたフウを一旦置き、カツユを口寄せしてから飛段へと立ち向かっていく。

口寄せされたカツユはと言うと、一瞬何が起こっているか分からないとでも言わんばかりに辺りを見渡す。

「シライトくん!？」

「カツユ様、その子を…………フウをお願いします!」

「…………はい!」

力強く頷くカツユにフウを任せ、シライトは飛段に肉迫した。

次の瞬間、飛段がその大鎌を横に一閃するが、上体を反らすようにして回避する。

続けざまに飛段が左足で蹴り上げようと足を上げたが、身体を捻ることで、紙一重で回避した。

それから何度も攻撃と回避を繰り返す飛段とシライト。

「んだよっ! ちょこまか避けやがって!」

「……………」

飛段は暁の中でも武器の扱いは下手な方だ。

それに加え、シライトは綱手との地獄の特訓により、回避だけは上忍並みと言えるだけに育っていた。

シライトが飛段に立ち向かったのは、彼からフウを意識から逸らすべく、自分が困になるため。

存分に鍛え上げられた回避能力を以てして、シライトは反撃の際を伺う。

「んの野郎!」

再度、大鎌を横に振るう飛段の一閃。

それだけであれば回避は容易かったであろう。しかし、寸前でニヤ

りと口角を吊り上げる飛段に、シライトは得体の知れない不気味さを覚えた。

その時、飛段の振るう大鎌の柄が突然伸びたではないか。

「死ねえ!!」

「くっ!!」

「あ、くそッ!」

だが、薄皮一枚切らせただけで躲すシライト。

完全に不意をついたものだとばかり思っていた飛段の顔には苛立ちが目に見えて募っていた。

そんな彼の胴へ、今度はお返しと言わんばかりの“桜花衝”が突き刺さる。

拳が直撃した胸が凹むほどの一撃に、飛段は『ごぶア!?!』と吐血しながら、再び背中の方に存在していた壁に激突し、崩れ落ちてきた瓦礫に埋もれた。

それを確認したシライトは、すぐさま印を結び始める。

(確か……)

師に教えられた術。

だが、旅をする上で一度も使う機会がなかったため、印を結ぶ速度は異様に遅かった。

一つ一つ丁寧に印を結び、チャクラを練るシライトは、現在カツユの中に埋もれて治療を受けているフウへ治療を施すべく、“その術”を発動する。

「よし——」

「ジャシン様アアアア!!」

「!?!」

「おれマジで頑張りますから、見ていてくださいいいいい!!」

いつの間にか瓦礫の中から出てきていた飛段が、奇怪な陣の上に立っていた。

顔にはドクロを模したかのような紋様が浮かんでおり、肌も墨で塗ったかのように黒く染まっている。

そんな彼が手にしていたのは、細く鋭い槍のようなもの。

刹那、飛段はそれをあろうことか自身の胸に突き立てたではないか。

「……………えっ……………?」

口から出た血が地面に赤い模様を作る。

「んぎもちいイ……………!」

恍惚とした表情を浮かべる飛段の一方で、何故かシライトもまた、胸に尋常ならざる痛みを覚え、その場に膝を着く。

おかしい。

どこから攻撃した?

一体どうやって……………。

しかし、シライトは結局答えにたどり着く前に、前のめりに崩れ落ちた。

その光景を満足そうに眺めていた飛段は、あくどい笑みを浮かべ、自身の胸に突き立てていた槍を抜く。

それを振るって血を払えば、今度は面倒くさそうにため息を吐きながら、出口の方へと向かっていった。

「はあ……………医者なんてやってるから、ジャシン様の裁きが下ったんだよ」

そう言葉を吐き捨てる飛段は、外で戦っている角都の応援に向かうべく歩を進める——ハズだった。

「桜花……………」

「あん?」

「裂衝!!」

「お、おオツ!!?」

突如、飛段の体に襲い掛かる衝撃波。

完全に意識外の攻撃であったため、飛段は踏みとどまることなく、本日三度目となる壁への激突を体験することになった。

何事かと、逆さまになって壁にもたれ掛かる飛段が目にしたのは、これまた異様な紋様を顔に浮かべるシライトの姿だ。

額には、ひし形と二重の円が重なるかのような模様を浮かべ、他にも隈取のような濃い緑色の線が顔に走っている。

(大蛞蝓仙人……綱手様……ボクは——ボクは、この時のためにあなた達から忍術を教わったと、今なら言い切れます)

刮目するシライト。

彼が身に宿すは仙人の力——仙人モードを体現していたのだ。

加えて、以前はなかった額のひし形の紋様。それは綱手より授かった忍術“百豪の印”だ。三年間、額の一点に一定量のチャクラを集めることにより、必要な時に使うことのできるという忍術。

至極緻密なチャクラコントロールと、三年間もの間、ただ一点にチャクラを集めるといふ気が遠くなりそうな過程を経て手に入られる忍術を以て、ようやくシライトは仙人モードを完成させることに成功した。

さらに極めつけは胸の傷。

さきほど、謎の方法で飛段につけられたハズの傷は、みるみるうちに塞がっていくではないか。

これこそ、“百豪の印”を会得した者にのみ許される究極の再生忍術“忍法・創造再生”だ。単なる回復ではなく、チャクラで細胞を刺激することにより、尋常ならざる速度で再生するこの忍術があれば、“百豪の印”にて溜めたチャクラが枯渇しなければ、戦いの中で死ぬことはなくなる。

医者が患者よりも死ぬ訳にはいかない——そんな綱手の教えが、この忍術には込められているのだ。

「……気は進みませんが……他でもない、フウのため」

「あぁ!？」

「ボクは貴方を……倒します」

拳を握るシライト。

それは、拳を向ける先に佇む飛段を倒さんとする決意と、自分の後ろに横たわっているフウを助けんとする決意が込められた固い拳だ。

例え相手が不死であろうとも折れることの無い信念が、そこにはある。

二十八 紡ぐ糸

(仙人モードと創造再生……それにフウへの網療治夥。……悠長にしてられない)

身構えるシライト。

真面に戦うことなど、綱手以外にはほとんどない。しかし、やらねばならぬ時が今だ。

しかし、シライトが気にしていたのは制限時間だ。元々チャクラ量に特別秀でている訳でもないシライトにとって、“百豪の印”にてチャクラを補ってはいるものの、仙人モードと他人への治療を行いながらでは、すぐに枯渇しかねない状況と言える。

狙うは短期決戦。

間の抜けた格好で壁にもたれ掛かっている飛段の下へ、シライトはもう一度拳を振るう。

すると、拳から放たれた衝撃がまたもや飛段へと襲い掛かり、『ぶはッ!』と飛段が悲鳴を上げることとなる。

仙人モードでのみ放つことのできる“桜花衝”の発展技、——“桜花裂衝”。

自然エネルギーが術者の一部となることで、拳撃の勢いをそのまま軌道上に居る相手に伝えることができる技だ。

遠距離攻撃の手段に乏しいシライトにとっては、遠方に居る相手に対しての貴重な攻撃手段である。

「でっ！ あ、あ! チックシヨオ——！ わけわかんねえ攻撃しやがって！」

「っ！」

次々と身に降りかかる衝撃に吐血しながらも、飛段は瓦礫に埋もれていた陣へと戻ろうと必死に駆けだす。

それを目の当たりにしたシライトは、させまいと何度も“桜花裂衝”を放つものの、不死身ではないかと思うほどの耐久力を持つ飛段は、嵐のように降りかかる攻撃に構わず、陣へ足を踏み入れた。

「さっきはなんで死ななかつたのか不思議だが……今度こそジャシン

様の供物にしてやるぜエ！」

「っ……ぐっ！」

再び適当な槍を取り出し、今度は自身の二の腕に突き刺す飛段。

次の瞬間、シライトが今まさに振るおうとしていた腕の二の腕部分から出血したではないか。痛みに耐えかね、攻撃を絶えさせてしまうシライト。怪我自体は“忍法・創造再生”によりすぐさま治るもの、そう悠長に事を構えられるものではない。

「おらおらおらおら！　これでも死なねえのか!？」

「っ……」

「死なねエエエエ!!　こいつを殺したら、きっとジャシン様大喜びだよ、こりゃあよオ!!!」

絶え間なく自傷行為に走る飛段の一方で、シライトの体も次々に傷つき、みるみるうちに癒えていく。

ここまでやられれば、流石の戦闘慣れしていないシライトでも、飛段と自分の体がリンクしていることには気が付いた。だが、どうやってリンクしているのかは未だ見当つかない。

このままではじり貧だ。いずれチャクラが尽きて、やられてしまうだろう。

しかし、それではフウを治療するためのチャクラがなくなることと同義。

早々に決着をつけなければ、シライトにとっては敗北に等しいのだ。

傷ついては癒え、傷ついては癒え——それを繰り返しているシライトの周りには、血の海が出来ている。

このままではいけない。

シライトは必至に活路を見出すべく、飛段をじっくりと観察する。

その時、ふと気が付いた。

(……なんでわざわざ変な模様の上に立っているんだ……?)

飛段の足元。

赤い絵の具——血——で書かれた謎の陣。最初は気が付かなかったが、ああも見栄えよく立たれていると、逆に不自然に感じてし

まう。

そう気が付くや否や、シライトには先程飛段が何をしていたか思い出した。

自分の攻撃を喰らっても尚、あの陣の中へ戻ろうとしていたではないか。

その時、*「桜花裂衝」*を彼は喰らっていたのにも関わらず、その攻撃についてのダメージはシライトに反映していなかった。

一つの手がかりを得た瞬間、不可解な点が次々に浮かんでくる。

そんな時、シライトの脳裏に一つの作戦が浮かんだ。

(なら――)

徐に印を結び始めるシライト。

口寄せ以外印を結ぶのが致命的に遅い彼の姿を前に、飛段は恍惚とした笑みを浮かべつつ、自傷行為を続ける。

「ゲハハハハア！ なにするんだ、今度は!? オレは今でもムチャクチャ痛えーんだぞ!」

「づうツ……!」

激痛に次ぐ激痛は、シライトの集中力をかき乱す。

痛みに歯を食いしばり、自然と出てくる涙を零しつつ、それでもシライトは印を結び終え、グツと上体を反らした。

「仙法溶遁……」

「ああ？ せんぼー?」

——
さんずがわ
酸酢川!!

「おお!!」

頬を膨らましたシライトが、反らした上体を戻す勢いで吐き出したのは、得体のしれない液体だ。

一見、水遁に属する術のようにも見えなくもないが、シライトは*「溶遁」*と口にした。

それはつまり、溶かす術であるということ。

*「呪術・死司憑血」*にて、相手の血を体内に取り込んだ上で陣の上に立ち、相手の肉体と自身の肉体をリンクさせていた飛段は、不死身の肉体も相まってか、*「避ける」*という選択肢を取ることがなかつ

た。

「お……おとおお!!?」

迫りくる濁流の如き水——とは言っても、膝が浸からない程度の高さの津波に、足を踏ん張ることしかしていなかった飛段は、途端に足に力が入らなくなり、ガクンと膝から崩れ落ちてしまった。

何事かと己の足元を見遣れば、そこには皮膚が、そして肉が溶けて骨がむき出しになっている。

「い、いでええええ!!? なんじゃこの痛みイ!! 初めての感覚だぜエエエエ!」

溶ける痛みを初体験したと叫ぶ飛段は、足が溶ける激痛に悶えながら喜んでいた。

シライトにとっては理解し難い感覚だが、飛段は酸の海に溺れつつ、シライトの方へどす黒い眼差しを浮かべる。

それもそうだ。自分をこのような目に遭わせた怒りと、相手が自分とリンクしていると知っているかどうかは分からないが、わざわざ自分にこのような再起不能の傷を与えたのだ。

勿論、相手も自分と同じ地獄を見るような目に遭っているハズだとばかり、飛段は考えていた。

「……あ、？」

だが、飛段の考えは外れていた。

足が溶け、骨がほとんどむき出しになっている自分と違い、シライトは五体満足ではないか。しかも、『忍法・創造再生』によって傷一つない綺麗な体へと戻っている。

——なぜ、なぜ、何故!?

不可解な状況を前に混乱していた飛段だったが、ハツとして自身の腕に目を遣れば、吸い込まれそうな黒色の肌は元の色に戻っているではないか。

「はあああッ!!?」

声が裏返るほど叫ぶ飛段の一方で、シライトは彼の足元に目を遣る。

(狙いは……地面を溶かすこと)

赤々としていた陣は、「仙法溶遁・酸酢川」による綺麗さっぱり溶かされ消えていた。

そう、シライトの狙いは始めから足下の陣であったのだ。かろうじて水遁も使えなくはないシライトだが、はたして本当に自分が繰り出す程度で、岩肌に書かれた模様を消せるのだろうか——そのような不安から、「忍法・創造再生」で多少の無茶はできるとだけあって、溶遁にて模様の消去を試みた。

無論、特別な一族ではないシライトは、普通の溶遁は使えない。

「見事」

「ふう……うまくいきましたね」

ノソノソとシライトの袖から出てくる二匹の生き物。

口寄せした二匹の口寄せ獣である、ムカデのタンバとナメクジのカツユの協力なければ成り立たぬ術だ。

彼らの毒と酸を混ぜて放つ水遁が、「仙法溶遁・酸酢川」の正体。

二匹がミニマムなサイズだからこそ、足が少し溶ける程度で済んだものの、もつと巨大な状態で放てば全身もれなく溶けてなくなることだろう。

だが、狙いは陣のみ。

必要以上の攻撃は必要ないと判断したシライトの考えが、飛段の足を溶かす程度で済ませたのだ。

(これで大分楽になる……)

相手の足を封じ込めることには成功した。これでロクに動けなくなるだろう。

そう考えたシライトは、追撃を警戒し、飛段の下へ一歩ずつ歩み寄っていく。

足を溶かされて立てない飛段は、それでも立ち上がらんと、大鎌を杖代わりにしつつ、膝立ちで歩み寄ってくるシライトへ吼える。

「こんなもんでオレは殺せねえよ！ オレは不死身だ……足溶かされようが、這いつくばってもテメーを殺してやるぜエ！」

「……！」

歩み寄る間、飛段による罵倒は延々にシライトへ向けて言い放たれ

る。

ダメだ。この人間は自分には理解できない頭をしている。なんとなくだがそう察したシライトは、自身の拳を眺め、どうするべきは今一度思案した。

だが、ある一言が洞窟内に響きわたる。

「そっちの女みたいに殺してやるよ、ゼッターによオオオオ!!」

爪が肉に食い込み、血が流れた。

かつてないほど感じた怒りに、思わず拳に力が入り過ぎてしまったのだ。

しかし、シライトの面持ちはとても穏やかであった。哀しそうに歪み、哀れみの目を以て飛段を見下ろす。

「そう……ですか」

そう呟いて飛段の目の前に立つシライト。

それを見計らい、飛段が大鎌を振るつたが、袖の中に居たムカデが大鎌に絡みつき、彼の攻撃を中断させる。

徐に飛段へ手を翳したシライトは、あろうことか「掌仙術」のような光を放ちつつ、飛段に体に触れた。

「あ……なにしてんだ、テメー?」

「……」

「なんだなんだ!?! オレにお情けかけようってか!?! あれか、もうてめえの勝ちだから見逃してやろうって魂た——」

シライトの不可解な行動に嘲笑するかのように声を張り上げていた飛段であったが、自身の体に起こる変化に言葉を失う。

「な、なんじやこりゃあああ!?!」

体が徐々に、軟体動物のように柔らかくなっていくではないか。

次第に皮膚の表面には粘液らしきねばついた液体も滲み出し、手足も退化するかの如く縮んでいく。

それだけならばまだよかった。

辛うじて動かせるか確かめるべく腕を見遣れば、浸食するかの如く石化し始めていたのだ。

「…… “せんじんしやう仙人衝”」

「ああ!?! なにしやがったんだ、てめエ!」

「……掌仙術の療養で、自然エネルギーを込めたチャクラを体に流し込んでいます」

「自然エネルギーだア?! クソ! なんだこの術……!! ああ、ジャシンの御加護を受けたオレの体が!」

「……あなたは先程、自分のことを不死身と言いましたね……死なないとも」

「それがどうした!? そうだ! オレはジャシンの使者だ!! 一に殺戮二に殺戮、三四に殺戮、五に殺戮!! 殺しこそが救いとするのがジャシン教なんだよオ!!」

ナメクジの体へと変貌する最中でも、大声を張り上げて叫ぶ飛段の前に、シライトはため息を吐く。

徐々に石になる体。

最後に顔だけが残ったところで、シライトは悲痛な面持ちでこう告げた。

「不死身という意味なら……——一生石でも大差ありませんよね……」

殺戮を心より願う男を野に放てない。

医者として、人の人生を殺すことは許され難い。だが、これからも人殺しを続けることを誓って止めないであろう者はどうしたらいいものか。

苦渋の決断の末、シライトが下したのは、不死身の飛段を石にすることだった。

湿骨林で何体か見たナメクジの石像。昔、その地で仙力を習得しようとしたものの、志半ばで習得することが叶わなかった石像のことだ。

彼らと同じ道を歩んでいるのだと考えれば、少しは気が休む。

「石に意思なし……せめて自然へと還って下さい……」

この世に生を授かった者を自然へと還した。

それだけのことだ。

「……フウ……！」

仙人モードを解いたシライトは、石になった飛段を後にし、分裂体のカツユの中で治癒されているフウの下へ駆けつけた。

“蛞蝓・網療治療”によつて、“忍法・創造再生”の恩恵を受けている以上、外傷はほとんど治っているはず。

問題は血と――、

（チャクラが……！）

一切チャクラを感じられない。

はたしてそのようなことが未だかつてあっただろうか？

見たことの無い状態に、シライトの頬には冷や汗が流れる。どうすればいい、どうすればいいと何度も思案を繰り返していたが、

「っ……！」

迷っている暇など無かった。

チャクラ解剖刀で胸の横を切り開き、素手で心臓を掴み、チャクラを当てながら直接心臓マッサージをする。

それに加え、もう片方の手はフウの顎にかけることで気道確保をし、人工呼吸するために血の気の悪い唇に覆いかぶさるよう口をあてがい、息を吹き込む。

少しでも足しになればと、“異身伝心の術”にて周囲の生命エネルギーも集めながらの作業だ。

（死なせない……絶対に死なせないから……フウ！）

「水遁・挫苦！」

「土遁・土流壁！」

角都の背中より出てきた化け物の一体が、口より高圧水流を自来也目掛けて放つ。

しかし、地面を抉りながら向かってくる水流に対し、自来也は即座に印を組み、堅牢な土で出来た壁を生み出し、水流を防いで見せた。

鋭く抉られる土の壁だが、それでも尚貫通を許さない所を見るに、自来也の忍としての実力を窺うことができるだろう。

しかし、その光景を前に角都がほくそ笑む。

「土に強いのは雷……」

「むむっ！」

「雷遁・偽暗！」

また別の化け物の口から、今度は激しい閃光を纏った電気の槍が放たれる。

土遁の忍術では雷遁に負ける。忍であればだれもが心得ているであろう相性の観点から、目の前より向かってくる電気の槍を交わそうと試みる自来也であったが、それよりも早く緑色のオーラを纏ったミズチが前に飛び出した。

「雷遁・蛇雷！」

「なにっ!？」

袖より蛇をかたどった電撃を放つミズチ。

額から生えている角と、目元に描かれているクマドリ。そして背中から生えている異形の翼から分かる通り、彼は仙人モードと呪印を併用し、全力を出していた。

その状態での「雷遁・蛇雷」は、角都の「雷遁・偽暗」と同じ威力であったのか、暫しの拮抗を繰り広げた後、両方の電撃はスパークを散らしながら中で爆ぜるように消える。

「やだっ。仙人モードなのに結構なパワー……ゾクゾクしちゃう♡」

「大蛇丸に似て変な奴だのオ……それよりミズチとやら。分かるな？」

「ええ、自来也様。化け物一体につき一つの「性質」」

「だのオ。全部の性質変化……隙が無いように見えて、案外弱点は目に見えているのオ」

ニヤリとほくそ笑む自来也は、他の化け物と戦っているナルトたちの方を見遣る。

そこでは、化け物一体が口腔から炎を吐き出そうとしていた。しかし、相対するナルトとヒナイの目の前に佇む二つの巨体。

火遁・頭刻苦!!

放たれたのは小さな火球。それを阻むように、一つの毛玉がヒナイたちの前に飛び出した。

そして火球が毛玉に当たったかと思えば、爆発が起こったかのように周囲が火の海と化す。

しかし、依然毛玉は健在。

寧ろ、たった今喰らった火球による炎をその身に宿し、轟々と背中が燃え盛っているではないか。

「ぬおおお!! 俺っちア火鼠! こんくらいの炎じゃあやられねえつチューの!」

「よし、ぶっ潰しちまえ! ノブ!」

「見ていて下せえ、姐御!! 火遁・火廻!!」

炎を一身に纏ったハムスターことノブは、途端に前回りを始める。

だが、次第に凄まじい速度で回るようになり、その光景はさながら火車のようだった。

刹那、猛スピードで化け物へと突進するノブ。

そんなノブを目の当たりにし、化け物の一体が、先程自来也に繰り出した水流“水遁・挫苦”をノブ目掛けて放つ。

“火”には“水”。単純な話だ。

しかし、そう易々と反撃を許すはずもない。

「ガマ吉!」

「おうよウ! 水飴鉄砲!!」

ナルトに口寄せされた蝦蟇であるガマ吉が、口より仙術チャクラを混ぜた球状の水飴を放ち、化け物の放った水遁の忍術を相殺する。

その間にもノブは化け物に迫り、化け物が避ける間もなくノブの巨体は激突した。

回転速度もそうだが、なにより燃え盛る体だ。

挟まれた上で焼かれる化け物は、この世のものとは思えぬ悍ましい叫び声を上げた後、仮面が粉々に砕け散り、同時にその黒い線が集まったような異形の体も飛び散る。

「やいー!」

敵を一体倒した連携プレーを称え、ナルトとヒナイはハイタッチする。

だが、まだ戦いが終わった訳ではない。

喜ぶ二人を仕留めようと、先程攻撃を防がれた化け物が再び水流を解き放つ。

しかし、風遁や雷遁の忍術に比べ、速度は速いが軌道は読みやすい術だ。攻撃の軌道を見極めた二人は迫りくる水流を軽やかに避け、今度は水遁を使う化け物を標的とする。

「多重影分身の術!!」

十字の印を結び、両手の指では数えきれないほどの数に影分身を生み出すナルト。

「ヒナイのねえちゃん、アイツの動きちよつと止めてくれてばよー!」
「任せろ、コラー!」

そう言うや否や、ナルトは複数体の影分身で「螺旋丸」を放つ準備を始める。

一方でヒナイは、水流を放つ化け物目掛け、金色に輝く鎖を解き放った。うずまき一族特有の封印術「金剛封鎖」。そう易々と碎かれるものではない鎖は、瞬く間に化け物の体に絡みつき、身動きを取れなくさせた。

そこへ、ナルトたちが飛び上がる。

無数に煌くのは、乱回転するチャクラの塊。

「忍を……舐めるなつてばよオ!!」

螺旋超多連丸!!

複数体の螺旋丸を手に持った影分身と本体のナルトが、化け物の四方八方から、その歪な体へ螺旋丸を叩きこむ。

無数にねじ込まれる螺旋丸は、ブチブチと繊維が引きちぎれるような音を奏でる。

「ヴオオオオオ!!」

「これで終いだア!!」

尚も足掻く化け物へ、トドメと言わんばかりに特大の螺旋丸を携えたナルトが、その仮面へと巨大な螺旋丸を叩きこむ。

「大玉螺旋丸!!」

仮面に「大玉螺旋丸」を叩きこまれた化け物。

仮面はみるみるうちに、ミキサーにでもかけられたかのように粉々になり、そのまま化け物の体は「大玉螺旋丸」により、体を縦に真っ二つに両断された。

化け物だった残骸は、周囲にバラバラと散らばる。

そんな中、ナルトは軽快に飛び降り、自身の二の腕に手を当てた。

「よっしゃあー!」

「おのれ……よくもオレの……!」

喜ぶナルトに、角都の顔は怒りに満ちる。

まさか、自分の分身たる心臓を二つもやられるとは思っても居なかった。

彼の用いている禁術「地怨虜」は、他者の心臓を取り込むことによって生き永らえることのみならず、取り込んだ者の性質変化まで自身のものとすることができる術だ。

バランスよく取り込めば、三代目火影猿飛ヒルゼンのように、五つの性質変化を扱えるようになるなど、破格の戦闘力を有することができることが強み。

しかし、このザマはなんだ?

既に二つもやられ、残るは三つ。

本体たる自分と、雷遁と風遁の個体のみだ。

「これが伝説の三忍……そして九尾の人柱力か。少々悔り過ぎていたようだ」

「ふん、今更後悔したところで遅いのオ。尾獣を集めて回つとるようじゃが……お前はここでワシがきっちり始末する」

そう言うとき自来也は、印を結ばんと手を構える。

そんな自来也を前にし、数秒思索した角都は何を思ったのか、体の外へ出していた残りの化け物二体を戻すではないか。

だが、ただ戻した訳ではない。

化け物の顔は背中より出したまま、自身も体の至る所にある継ぎ接ぎの部分から、黒い触手のような物体を蠢動させる。

いよいよ人間離れした姿に、自来也は嫌悪感を表すかのように顔を歪めた。

「げえ……気持ち悪い姿だつてのオ……」

「心配するな。お前の心臓も今からこの中に入るのだからな」

そう告げる角都に、自来也は神妙な面持ちで身構える。

静寂が辺りを覆う。

木々のざわめきが鼓膜を鋭く揺らす。

そして、木葉が一枚地面に落ちた時、両者は動いた。

「雷遁風遁・穢^{エル}琉^{メス}眼巢!!」

「口寄せの術ウ!!」

二体の化け物の口から、暴風と電気の槍を放つ角都。それらは混じり合い、電撃を混じった猛烈な風となって自来也に襲い掛かった。

一方で自来也は、何故か自身の斜め上の空中に蝦蟇を一体呼び寄せたではないか。

「屋台崩し……じゃねえな!」

「エロ仙人!」

なにをしているのだと言わんばかりに声を上げるヒナイとナルト。角都もまた、この瞬間に口寄せの術を選んだ自来也の選択にほくそ笑む。

——殺つた!

「——かのオ?」

「っ!!?」

しかし次の瞬間、自来也の体は地面に吸い込まれるようにして消えたではないか。

影も形も無くなった自来也を前に、角都の「雷遁風遁・穢^{エル}琉^{メス}眼巢」は宙を奔るのみで、敵を捉えることはなかった。

一方、空に居る蝦蟇は明後日の方向に舌を伸ばす。

舌が伸びたことにより、自ずと蝦蟇の影も伸びる。

その影は角都の背後まで伸びた——その瞬間、伸びた舌先の影から自来也が飛び出た。

「蝦蟇平影操りの術」——対象者の影に入り込み、操ることので

きる術だ。

自来也はそれを応用し、角都の背後に回り込んだのである。

「弟子の前だ。カツコイイとこ見せなきやのオ」

「なに……!!?」

「螺旋連丸!!」

「ぐ、おおおおお!!?」

即座に両手に「螺旋丸」を作り出して見せた自来也は、両手に掲げる「螺旋丸」を、角都の化け物それぞれに一つ叩き込む。

ナルトより荒々しく、それでいて極限までに収束したチャクラの塊は、化け物を形作る触手を巻き込みながら、化け物の心臓を突き破るように抉り込んでいった。

普通の人間ならば体内がスクランブルエッグ状態になることが避けられないが、あいては触手の化け物。内部に納められている心臓をミンチにするだけに留まる。

攻撃を追えば自来也はしてやったと言わんばかりの笑みを浮かべつつ、反撃を警戒して下がった。

その間、角都は背中の上で崩れていく化け物の叫びを代弁するかのようにならめき声を上げる。

「ぐ、ぐう……おのれ……!」

「どうした? 注意力が散漫だのオ」

不意打ちにより多大なダメージを受けた角都。

そんな彼に対し、余裕と言わんばかりの笑みを浮かべている自来也に、弟子たる二人は尊敬の眼差しを向ける。

「す、すげエ、エロ仙人……!」

「スケベなだけじゃねえんだな、コラ」

失礼な言葉も聞こえた気がするが、今更な話だ。自来也は聞き耳こそ立てれど、反応はしない。

「さて、終わりにするかのオ……」

弟子たちの声を受け、自来也はトドメを刺すべく身構える。

しかし、そんな彼へ手裏剣がいくつかが飛来して来た。

気配を察し、即座に躲す自来也であったが、突然の乱入者に眉を顰

める。

「何奴!？」

「あれれれ、角都さーん! メチャクチャ劣勢じゃないですか」

「情ケナイ奴ダ……」

「飛段もやられちゃったしね」

全員が、声の響いてきた方向へ目を遣る。

そこには、渦を卷いたような模様の仮面を被る者と、ハエトリグサのような植物を上体に生やしている者が、木の枝の上に立っていた。着ているのは違うことなき暁のコート。

新士の登場に、優勢であった四人は警戒を強める。

だが、現れた者達の内、渦巻模様の仮面を被った者は、あつけらかなとした声色で語り始めた。

「もう用は済んじやいましたし、さっさと帰りましょう! あ、そうだからね! 飛段さんやられちゃったから、今度はボクが角都さんの相棒ですかね」

「バカ……ソナ簡単二暁二入レルト思ウナヨ……」

「いいじゃないか、入れてあげれば」

明るく語る仮面の者の一方で、ハエトリグサの者は一人二役であるかのように交互に喋っている。

一方で角都は、『あの狂信者め……』と飛段が倒されたことを恨めしく思っているかのように呟きながら、新士の下へ走っていく。

それを目の当たりにし、ナルトが『この!』と追いかけてしようとするが、自来也はそれを手で制止する。

「深追いするな、ナルト!」

「っ……テメーら、何者だつてばよ!!」

深追いは禁物。

それを理解しているナルトは、せめてもと言わんばかりに、相手の正体を問う。

そんな彼の問いに答えたのは、またもや仮面の男だ。

「何者かって、そりゃあ……また会うことになるさ、九尾の人柱力」
「っ!」

「バイバイ」

『っ!?!』

次の瞬間、仮面の男は角都とハエトリグサの男と共に、まるで空間に呑み込まれるかのようにしてその場から消えていった。

「なんだ!?! なにが起こったんだってばよ!?!」

「……かなり高度な時空間忍術かのオ……いや、話は後だ。カカシたちは敵のトラップで足止めを喰らっていたようだが、もうすぐ戻ってくるようだ。ワシらは、綱手の弟子んトコに行くぞ!」

その声に、ナルトを始め皆が洞窟内へ入る。

先程の会話を鑑みるに、飛段はシライトに倒されたことが分かるが、新手が彼を手につけなかったとは限らない。

最悪の事態を想定しつつ侵入した四人であったが、悪い予想に反し、シライトは一人でフウの心肺蘇生を行っていた。

しかし、状況は芳しくなさそうだ。

「しらたきの兄ちゃん!」

「……ッ」

ナルトの声に気が付き、一瞬彼へ目を遣ったシライトであったが、その余裕はなさそうだ。

必死に心肺蘇生を行っているものの、一向に瞳を開けないフウ。

人柱力が尾獣を抜かれればどうなるか知っている自来也にとつて、シライトの行っている行為は、痛々しくて真面に見て居られない。

しかし、必死に命を救おうとする男の姿から目を離す訳にはいかないだろう。

少女の命の灯火の一片が完全に消え去るまで、諦める訳にもいかな

い。
ド根性だ。自来也は、何かできぬかと必死に思案する。

(なんとかできぬか……なんとか……!)

ナルトの母親——クシナのような光景は見たくない。
すると、シライトの鋭い声が響く。

「ヒナイさん!」

「へっ……オレか!?! 血か、コラー!」

「いいえ……あの……あれを……」

「あれってどれだ!？」

神妙な面持ちとは裏腹に、はつきりもしないシライトの言葉に、思わず声を荒げてしまうヒナイ。

そんな時、シライトは一旦フウの唇から放し、ヒナイの懐を指さす。

「声が……声が聞こえたんです」

「声……しらたき、何言って——」

「この前の抜け殻を出してください、早く!」

「お、おう!？」

漸く見当がついたヒナイは、『封入の術』にて札に封印したフウの抜け殻を出す。

それを目の当たりにした自来也がハッと目を見開く。

「成程、そういう訳か……!」

「確かに、それならなんとか……」

自来也に続き、ミズチも何かに気が付いたかのように面を上げる。

この中、ただ一人置いて行かれているナルトは、ただただ困惑し、『あれをこうすれば……』などとブツブツ呟いている自来也たちを後ろから眺め、あらんばかりの音量で心の内を叫んだ。

「つまり……どういふことだつてばよ!？」

決してナルトの理解力が乏しい訳ではない。

ただただ、知識の数の面で置いて行かれている。それだけだった。

二十九 持つべきは友

時間を忘れていたら夕方になっていた時のように、フウは真っ白だった空間が真っ暗闇に変化していることを知覚した。

行く当てもなく、トボトボと歩く。

その最中、彼女は一つの光源を目の当たりにした。

——たき火？

暗闇の中、煌々とした輝きを放ったき火。

あの周りだけは、炎によって紅蓮に照らされ、とても暖かそう。

そう思うや否や、身体の冷たさを覚えたフウは、呼び寄せられるようにたき火の下へ駆けよっていく。

ここが天国か地獄かは皆目見当もつかない。

しかし、たき火に当たると、許されるだろうと、フウは飛び火に入る虫のようにたき火へ走る。

「……あれ？」

だが、たき火に近寄っていく内に気が付いた。

自分の小指にある線——いや、糸だろうか。火の灯りに照らされて、漸く気が付いた一本の糸に、フウは怪訝に眉を顰める。

これはなんだ？

どこと繋がっているのだ？

考えれば考えるほど疑問が浮かぶ。

答えの出ぬ問いに暫し悩む。たき火を目の前にし、いつまでも悩むことをまどろっこしくも思えてきたが、何故だかこのまま放っておいていいことだとも思えなかった。

——旅が終わったら、いっしょに土産話するって！

「あ……」

突如、脳裏に鮮烈に思い起こされた映像。

まだ下忍になったばかりの頃、よく遊んでいた友人と交わした約束のことも思い出した。

「……戻らなきゃっス」

踵を返し、小指の糸を頼りに道を引き戻す。

先程までとは違う。独りぼっちで歩くことは不安だが、明確に誰かと繋がっていることを意識している今、暗闇の中でも突き進むことは恐くない。

糸を辿り、走る、走る、走る。

どれだけ走ったか分からないが、無我夢中で戻る途中、煌々と光っている出口のようなものを目の当たりにした。

溢れんばかりの光。

ああ、そうだ。たき火などよりも、こちらの方が温かく優しい光だ。
——…フウ。

あと少しで出口にたどり着こうとしたその時、そこに立っている一つの人影に気が付く。

逆光で顔は良く見えないが、懐かしい声だった。

その懐かしさに導かれ、徐に手を伸ばす。

すると、出口に佇んでいた一人の少年は、青年にも見える大きな姿へと変貌し、困ったような笑顔を見せ——フウの手を取った。

「……ごめんっス。やっぱまだそっちには行きたくないっス！」

手に伝わる熱に涙しつづ振り返り、満面の笑みで別れを告げる。

誰かが後ろで手を振ってくれているような気がしたから。

「ふいっや」

突然目が覚めた。

(…体チヨー痛いっス…)

意識が覚醒するや否や、全身が筋肉痛にでもなったかのような痛みに襲われ、思わずフウは顔を歪めた。

その後、おぼろげな視界の中、周囲の状況を確認する。

目が覚めたばかりで暫く何が起こっていたか思い出せなかったが、自分が“暁”と自称する男たちに追われ、途中胸に何故か穴が空いた所為で倒れたことまでは思い出せた。

金縛りにでも遭っているかのように動かない体を無理やり動かし、

胸を確認するフウ。

元々平らだった胸へ、逆に凹みを作られてしまった訳だが、何故だかどうしてか胸に空いた風穴は綺麗さっぱりなくなっているではないか。

不思議に思いつつ、今度は周りに目を向ける。

夜なのか、灯りがほとんどなく見辛いことこの上なかったが、天井があることを確認し、自分が今部屋に居ることは気が付けた。

(……ん？　なんであつしは部屋に居るんスか？)

確か、倒れた時は外だったハズ。

にも拘わらず部屋に寝かされているということは、誰かが運んでくれたという意味だ。

一体誰が？

自分を追いかけていた敵が運んだとなると、ウカウカ眠つても居られないが、今一度周囲に目を遣つて視界に入った人間に、思わず目を見開いてしまった。

(……誰っスか？)

大人びた少年だった。

子どもというには些か落ち着いている印象を与えるが、大人と言いつ切るにはまだあどけなさが残っている。

そんな少年を見遣り、暫し思考していると一人心当たりがあつた。

あの暗闇から自分を引き戻した少年——シライトだ。

確かに、よくよく見てみれば、シライトの面影が残っているように見えなくもない。

だが、些か顔を合わせていない期間が長すぎた。今のところ、目の前の少年は「シライトに似ている」であつて、シライトであると断言はできない。

しかし、横になつているフウの目の前で、胡坐を掻きながら眠るといふ非常に腰に悪そうな眠り方をしている姿を目の当たりにすれば、つい最近まで看病してくれていたことはフウでも分かった。

(ああ、やっぱりシライトなんスね……)

どうやってかは知らないが、自分を誰かが助けた上で、シライトが

看病してくれている。

それだけで嬉しい気持ちになったフウは、安心感からか再び睡魔に襲われた。まだまだ眠い。一度胸に風穴を開けられたのだから仕方はないが、体力が完全に戻っていないようだ。

(もうちよい寝るっス)

船を漕いでいるシライトに心の中で『おやすみ』と唱え、再び瞼を閉じるフウ。

暫くすると、見慣れた空間が目の前に広がった。

「ん？　ここは……」

『……………ウ……………フウ』

「あれ、この声……」

ふと響きわたってくる声に辺りを見渡すも、中々その声の主が見つけれられない。

おかしい。いつもなら、相手の巨大さも相まってすぐさま見つけれられるのだが、今回に限ってはどれだけ辺りを見渡せど、“彼”の姿が見当たらないのだ。

「どこっスか？」

『下だ』

「ありり？　わっ！　誰っスか!?　あっし、そんなダンゴムシみたいな知り合い居ないっスよ」

『だれがダンゴムシだ』

「ん……………いや、もしかすると七尾っスか？」

『そうだ』

「わあく！　ちっちゃくなつたっスねエ……………脱皮したんスか？」

『だっぴしたらふつうはでかくなるだろうが』

「あ、そうか！」

フウが興味津々に屈んで見下ろす先には、カブトムシのような姿からダンゴムシのような丸っこい姿へと変貌してしまった七尾の姿があった。

あの巨体が嘘のようだ。

辛うじて“七尾”という名の由来の七つの尾は残っているが、それ

にしても小さくなったものである。

小さくなつた所為かは謎だが、心なしか声が甲高くなり、舌足らずな喋り方だ。

「じゃあイメチェンツスカ？」

『ほんとうにそうおもつか……？』

「いや、違うんすね。そう言うんだから」

『まあな。だが、こうかふこうか、またおまえのなかにいれられちまつたみてえだ』

「？ どういうことツスカ？」

『……しかたねえ。せつめいしてやるよ』

首を傾げるフウにやれやれと首を振る七尾は、おバカなフウでも理解できるよう、稚拙な喋り方で懇切丁寧に会話を始める。

——まず最初に、俺はお前から引き剥がされた。

その所為で、お前の中の経絡系が引つpegされて、後は浄土へ直行の道のりだった。

だが、ラツキーだったな。すぐにお前のダチとやらが来てくれて、死なねえように死にかけのお前を治療してくれた。

それだけだったら、幾ら治療されても死んでただろうな。

だが、もつとラツキーだったのは、俺たちはその前に“蛹化の術”で抜け殻を残していたことだ。

あれも、前の俺に比べたら搾りカスみてえな量だが、しっかり尾獣チャクラつてモンが残ってる。暁とかいういけ好かない連中は、俺そのものが目当てだったから、抜け殻に興味を示さなかったが、後で来たお前のダチは気づいて持ってきてくれていた。

どうやらお前のダチ——シライトだったか？

アレは精神エネルギーが多めのチャクラで周囲のモノと精神を通して、身体エネルギーを集める術を使つてお前を助けようとしていた。

そのおかげで、抜け殻の中に残っていた分の俺がそいつに意識を繋げられて、的確な指示を出せたんだよ。

それから……まあ、俺も人間の医療について詳しいことは語れねえ。

だが、ラッキーなことに医療忍術紛いのことができる輩が大勢いた。

そいつらの協力で、抜け殻はお前の中に戻って、俺もこんなに小さくなっちまったみてえだが、なんとか俺も復活出来て、ついでにお前も助かったっつー訳だ――。

『わかったか?』

「要するにラッキーだったってことっすね!？」

『……それでいい』

フウがどこまで理解できているかは分からないが、とりあえず色々偶然が重なり、命をつなぎとめることができた。それさえ理解できればいい話だ。

『だいぶぶんのおれは、あのへんてこなぞうにすいこまれちゃった。まあ、じかんがたてばもとにもどれはするが、しばらくのあいだ、おれはいぜんみたいにおまえにチャクラをあたえるのはできなくなるからな』

「へー。時間が経てば、また前みたいにおっきいカブトムシみたいな姿になるんすね?」

『まあな』

「えへへッ。あっし、七尾の子ども時代も見れてなんか得した気分ス！ 前の人柱力さんは、きつと見れなかつたっすもんね！ 七尾、こう見えて結構ジジイっすから！」

『ひとことよけいだ』

ジジイ発言が気に食わなかったのか、苛立ちを見せる七尾。

しかし、尚も笑顔で小さくなった自分を見つめているフウに、今更いちいち腹を立てることも馬鹿馬鹿しく思えてきた。

そうだ、こいつは昔からこんな奴だった。

イケない。体が小さくなってしまった所為か、精神年齢の方も下がっているのかもしれない。

そう反省している間にも、フウはしつこく『七尾――♡』と小さくなっ

た七尾を指で撫でまわす。

そんな彼女に業を煮やしたのか、七尾は目をキツと凄ませる（昆虫的な瞳であるため、凄ませる余地はないのだが）。

『おい、フウ』

「ん、どしたんスカ？」

『おれは“しちび”なんてなまえじゃねえ』

「え？　じゃ、じゃあ今ここに居る七尾は偽物……!？」

『ちがう。“しちび”なんてなまえはな、にんげんどもがおれたちのしつぽのかずだけみてかってにきめたなまえだ。おれには“ちようめい”っていうなまえがちゃんとあるんだよ』

「ちよーめー？」

『“おもたい”に“あかるい”で“ちようめい”だ』

「“重たい”に“明るい”……あー、なるほどオ！　なんだ、七尾ってあだ名だったんスね」

『まあな。それがいつしか、まるでほんみようみたいなあつかいをされてきた。まあ、こつちがわざわざなることもなかったから、にんげんどもにもしんとうしなかつたんだろうがな』

そう語る七尾——否、“重明”。

確かに、小さくなる前のあの重厚感ある甲殻と、陽の光を反射して鮮やかに輝く翅を思い出せば、重明と言う名前も合点がいく。

「いい名前っスね！　じゃあこれからは重明って呼んでいいっスか!？」

『……かってにしる』

満面の笑みで『ちよーうめい♪』と呼んでくるフウに対し、重明はつつけんどんな様子で背を見せる。

だが、以前の威圧感たつぷりの姿と比較すると、些かこじんまりしてしまった重明のその態度には、愛くるしささえ覚えてしまう。

「えへへッ。ちよーめー、チョーメー、重明エー！」

『だまれ、こむすめ』

その後も、フウの意識が完全に寝落ちるまで延々と名前を呼ばれ続けた重明は、うんざりとしつつ——それできて遥昔のことを思い出

すのだった。

「……ん」

ふと目が覚めると同時に、腰に途轍もない痛みを覚えた。

反射的に伸びをすれば、えげつない音を腰が奏でる。バキバキと、それはもう聞いているだけで清々しい気分になってしまいそうな音だ。

だが、一晩中胡坐を掻いて寝てしまっていたシライトは、自分の腰はほどほどに、目の前で寝ているハズのフウへ視線を向ける。

昨日——フウの蘇生に成功してからの話だ。

頭に響く“七尾”となる声に導かれ、なんとかフウの蘇生に成功した後は、戻ってきたカカシたちと合流し、そのまま滝隠れへと向かった。

木ノ葉から滝には、すでに事件の内容は伝わっていたようであり、思っていたよりもすんなりと滝隠れの下に木ノ葉の面々は足を踏み入れ、滝の者の厚意を受けつつ任務の疲れを癒した。

シライトも、久方ぶりに会った家族との出会いもほどほどにし、未だ意識の戻らないフウの身を案じ、襲撃の可能性を危惧し、里長の家に寝かされているフウに、特別につきつきりで看病することを許されたのだ。

全ては、新たな里長となったシブキの意思である。

若く優しい彼は思考も柔軟だ。他里の者を受け入れることに抵抗感のある里の古株たちとは違い、フウを助けたことに対し、素直に礼を述べた彼だったからこそ、容体の急変に備えるという意味で、フウの蘇生に成功した医者であるシライトに看病を任せてくれたのだ。

そういう訳で一夜を明かしたのだが、少々疲労がたまり過ぎていた所為で、いつからか寝落ちしてしまっていたようである。

(フウは……)

視線をフウの顔に向けるや否や、自分を凝視してくる彼女の姿が目

に入り、思わず硬直してしまった。

「おはよっス。そんな風に寝てたら、体バキバキになっちゃうっスよね」

「……フウ?」

「フウっすよ! まさか、顔忘れた訳じゃないっスよね!」

「……ううん……割と忘れない顔だし……ちゃんと覚えてるよ」

「それって褒めてるんスか?」

穏やかにほほ笑むシライトは、少しばかりショックを受けているフウの手を握る。

今度は——温かい。

確かに感じられる命の熱に、目頭が熱くなる感覚を覚えた。

「よかった……」

「えへへっ……重明から聞いたっスよ。シライトが頑張ってたあつしのこと助けてくれたこと」

手を握り返すフウは、上体を起こしつつ、太陽のように明るい笑みを浮かべ、こう言い放つ。

「ありがとう!」

「……ううん、いいよ」

固く握られる手の熱に、思わず涙が零れてしまった。

心から、医者をしていてよかったと思える瞬間。それは患者が死の淵より舞い戻り、笑顔を見せてくれる瞬間だ。

「友達……なんだから」

友であるならば尚更。

嗚咽を上げて涙を零すシライトを前に、フウは戸惑いつつ、それでいて優しい眼差しを見せ、彼の涙が収まるまですっと——ずっと背中を撫で続けるのだった。

「本当に、あなた方にはなんと礼を申せばいいものか……」

「いや、それも里長に頭を下げられるとのオ……」

「いいえ、あなた方はフウの恩人。これから滝は、木ノ葉の同盟国として協力を惜しまぬ旨を、是非ともあなたの口から火影殿に伝えてもらいたい」

「そうか……よし、任せろ」

滝隠れの里の出入り口にあたる部分で話していたのは、自来也と里長のシブキだった。

フウの安否も確認でき、もう里に残る用事もなくなったため、木ノ葉に向かって帰るのはごく自然の流れであると言えよう。

後ろでは、ナルトたちは友人たちとの再会を改めて懐かしむように話しており、既に帰路につく準備は万端だ。

そんな時だった。

『待つてエ〜〜〜!』

「……お、なんだア?」

里の奥より聞こえてくる声に、自来也のみならず他の者達も目を凝らし、迫ってくる人影に焦点を合わせる。

こちらへ向かって来ているのは、シライトに負ぶわれてやって来たフウだった。

ゼエハアと息を切らすシライトに背負われる彼女は、満面の笑みを咲かせ、自来也たちに声をかける。

「アンタ達が、あつし助けてくれた人たちっすか!?!」

「こ……コラ、フウ! ここに居る人を誰だと思ってるんだ!? 木ノ葉の伝説の三忍こと自来也様だぞ!」

「へえ〜! あつしと是非友達になつてください!」

突拍子もなく、シライトに背負われつつ友達申請をするフウ。

そんな彼女に、自来也は鼻の下を伸ばす。

「なんじゃなんじゃ〜、まずは友達からってか!? ええ!?!」

「エロ仙人、いい加減にするつてばよ……」

「そっちの人も友達になつて欲しいっす!」

「え、おれか!?!」

自来也の次は、ナルトに目をつける。

困惑するナルトであったが、目を爛々と輝かせて手を伸ばす彼女の

申し出を断る理由もなかったため、少しため息を吐いてから、『よろしくだつてばよ!』とナルトは手を握った。

その瞬間、得も知れぬ感覚を彼女の中から感じたものの、余りにも僅かな違和感であったため、ナルトは気のせいだと考えることをやめる。

その後もフウは次々に友達申請をし、この場に居る木ノ葉の面子全員とめでたく友達になった。

「えへへっ、これで友達百人の夢がまた近づいたっス!」

「なんか……すみません」

「いや、いいんだ。是非とも今後も木ノ葉の里をよろしく頼むぞ」

喜ぶフウの一方で申し訳なきそうにしているシライトへ、自来也が肩を叩き、彼の労をねぎらう。

それからは、遅れてやって来たヒナイとミズチにも別れを告げ、名残惜しくなる前にと早々に自来也たちは滝隠れの里から去っていく。

「またなー、みんなー!」

子供らしく手を振るナルトに、負けじとフウも手を振り返す。

似た者同士だと、思わず笑ってしまうシライトも、友達を救うことに助力してくれた者達へ手を振ることをいとわない。

やがて、彼らの背中が見えなくなるまで、シライトたちは手を振り続けた。

世界は予想以上に広いが、世間が余所以上に狭いことも知っている。

またいずれ出会う時のことを思いつつ、シライトたちは里の中へ戻らんと踵を返した。

そんな時、ふとミズチが声を上げる。

「ねえ、センサー」

「……はい?」

「これからどうするの? 里でゆっくりでもする?」

それは今後の動向についてであった。

「しらたきが残るってんなら、オレも暫くはここに滞在するぞ」

ヒナイの意見に、口火を切ったミズチは同意するように頷く。

そんな彼らの言葉にまず反応したのは、シライトではなくフウだった。

「お話聞かせてほしいっス！」

「……フウ？」

「みんなの旅の話……シライトと約束してたんス！ だから、あつしにみんなの旅の話を聞かせて欲しいっス！」

満面の笑みでそう口にするフウに、三人は思わずフツと口元を緩めた。

暫し旅はお休み。

今後は、世界に羽ばたいたことのない少女のために、自分達の旅の話をしてやろうではないか。

視線で合意する三人は、はしゃぐフウに温かい眼差しを浮かべつつ、里の中へ戻る。

滝の音間近に語るは旅路。

『——まったく、もつべきは「トモ」だな。おれもおまえもラツキーだぜ、フウ』

終章

滝隠れ秘伝 — 祝言日和 —

——月日が流れるのは早いものだ。

火影としての業務に追われる綱手は、山のような書類に囲まれながら、生きた骸のように生気を失った顔で筆を動かしていた。

うちはマダラが起こした“第四次忍界大戦”が終わり、早一年。

戦争の傷跡は未だ残っているものの、以前とは違い里と里が手を取り合う時代が到来し、心なしか人々の心には、また別の希望が宿っているように思える。

だが、それとこれとは話が違う。

幾ら手を動かせども少なくともならない書類に綱手は辟易しつつ、とうとう船を漕ぎ始めてしまった。

今に始まった訳ではないが、業務中に仮眠（と言う名の居眠り）をとらなければ、火影としての激務はこなせない。いや、こなせるとは断言していないが、不眠不休で働いてどうにかなるものではないのだ。

夢見心地で居眠りする綱手。

だが、そんな彼女を叩き起こすように、音を立てて扉を開ける者が一人現れた。

「綱手様!!」

「ふがつ!?!」

「……今、寝ていらつしやいましたね、綱手様?」

「そ、そんなことはあるはずなكارう。私は火影だぞ」

「ブーブー」

シズネの問いに対し、苦しい言い訳をする綱手に、机の上に寝っ転がっていたトントンが呆れたように鳴き声を上げる。

「それよりシズネ。なんだ、そんな慌てて……」

「それが、シライト君から手紙が届いていて」

「シライトからだぞ? 珍しいな……いや、初めてだな」

弟子の一人であるシライトからの手紙とのことで、綱手は何事かと眉を顰める。

柄にもない事をしてまで手紙を出してくるとは、まさか大事があったのではないかと不安を煽ってくるようなものだ。

「内容は？」

「それがですね……っ！」

やや興奮した様子で手紙を広げるシズネ。

バツと全体を綱手が見渡せるように手紙の内容は、要約すれば、こう書いてあった。

『結婚します。たきのシライト フウ』

「……」

「……」

「ブー」

「——なにいいいいいい!!?」

火影邸を震わすほどの絶叫が、昼間の木ノ葉隠れの里に響き渡った。

「あくあく！ 疲れたっス！」

「……まだ始めてちよつとだよ」

「それにしても、良い日当たりっスねエ……眠くなってきたっス」

手に持っていた荷物を放り出し、畳の上に転がるフウ。

そんな彼女に目を遣るシライトは、困ったものだとため息を吐きつつも、穏やかな笑みを浮かべる。

二人は現在、引越しの荷物を片付けている途中だ。

とは言っても、フウが以前より住んで居た家にシライトが移り住む

だけの話である。これから隣に診療所を立てる予定ではあるが、要するにはシライトがフウの家に転がり込んだという訳だ。

季節は秋。

滝隠れの里も、紅葉が青色の空に美しく映える季節である。

程よく涼しい風に当たりながら横たわれれば、すぐにでも眠りにつけるだろう。

「それにしてもワクワクっスね、新婚生活！」

「……フウは……お泊り会か何かだと思ってる？」

目を爛々と輝かせて言い放つフウに、シライトは一旦荷物を運ぶことを止め、転がるフウの隣に正座する。

こんな彼らだが、結婚した。

フウの知り合いの忍であるクンという女性は、『フウに先に越されるなんて……！』と手拭いを噛んで、悔しがっていたと言う。

そんな二人の馴れ初めは――

『どうやってあつしを助けたんスか？』

『……それは……まず心肺蘇生を……』

『それってつまり……人工呼吸したってことっスよね？』

『……そうだね』

『あ、あつしのふぁーすときっすは、シライトに奪われちゃったってことっスか!?!』

『……人工呼吸は……医療行為であって接吻では……』

『責任とって欲しいっスー!』

――などというやり取りから交際に発展し、今に至る。

だが、上記の素っ頓狂なやり取りは置いておくとしても、幼い頃からの付き合いであり、尚且つ命の恩人ともあれば、二人の間に合意さえあればなら不思議ではない話だ。

現に、こうして結婚にこぎつけている。

シライトの両親は、内気で旅に出ていた息子に嫁が出来たことを大層喜んだとな。

「いやあ……子どもは何人欲しいっスか？」

「話が……飛んだね」

「あつし、一人っ子で寂しかったっすからね。寂しい思いさせない為にも、七人くらい欲しいっす！」

「……七人は流石に……養えないかな」

七人子どもが欲しいと口にするフウに、シライトは戦慄したように目を細めつつ、現実的な意見を口にする。

七人は、よほど盛んな夫婦であつても作らない人数だ。

彼女は子作りを——生命の神秘をなんだと思つているのだろうか。医学的な知識を十分に蓄えているシライトは、楽観的なフウの言葉にいちいち驚いてしまう。

しかし、一方でフウから子作りの話を提示されることについても驚いたりもする。

そんな彼らではあるが、結婚式はまだだ。

シライトは、恩師たる綱手を招待できるように少し待つつもりである。

今はまだ五代目火影のままだが、彼女は六代目をカカシに決めていくらしく、もうすぐ六代目襲名式を行うとのこと。

それからは綱手とシズネを呼び、結婚式だ。

シライトは兎も角とし、フウには友人がかなり多いため、相応に賑やかな式になるとの見通しだ。

(お腹が痛い)

式に来る者の大半が知らない人間。

そう思うと、胃痛になることも致し方ないだろう。ここに来て、旅に出てロクに里内に知り合いを作らなかつたことを呪うとは思っていないなかつた。

「なんだなんだ？ 新郎がなんつー顔してんだ、コラ？」

「……ヒナイさん」

「おー！ お客さん、いらっしや〜〜い！」

そんなシライトたちの下に訪れた人物が一人。

旅で長年世話になったヒナイだ。

彼女は里に定住することに決めたシライトとは違い、また別の目的のために旅をしている途中だ。今日は、その途中に寄ってくれたのだ

ろう。

どっこいしよと縁側に腰を掛けるヒナイは、からかうような笑みを浮かべつつ、シライトに顔を向ける。

「どうなんだ、新婚生活。もうやったのか？」

「まだです」

「ちえー、即答かよ……」

「……自来也様に少し似てきましたね」

「そうか？ んー、まあ蝦蟇仙人の小説読み漁ってるからな」

そう言いつつ背囊から本を取り出すヒナイ。

彼女一押し『ド根性忍伝』を始め、『ド純情忍伝』、『イチヤイチャパラダイス』、『イチヤイチャバイオレンス』、そして自来也の遺作となった『イチヤイチャタクテイクス』まで、自来也が物書きとして書き上げた本は網羅しているようだ。

「……まだ……かかりそうですか？」

「んー、学がねえと一頁書くのも大変だな、コラ」

「……楽しみにしてますから」

「おう、任せとけ！」

シライトの激励に、ヒナイは快活な笑みを浮かべる。

彼女は現在、物書きとしての活動を始めた。

師である自来也を習つての行動だろうか。

自来也は——もうこの世には居ない。

ヒナイは、彼の死に目に出会えた訳ではない。だが、事の顛末を妙木山の二大仙蝦蟇とナルトから聞き、何かを思ったのだろう。

今は、自来也の生き様を本にするべく、彼の軌跡を辿るようにあちこちを歩き回っているとのこと。特に、幼少期の自来也を描く上で、妙木山の仙蝦蟇であるフカサクやシマ（もう一人、大ガマ仙人と呼ばれる老蝦蟇が居るのだが、歳の所為か物忘れがひどく、取材にならない）にはよく話を聞きに行っているようだ。

その上で綱手などにも取材したいと考えている彼女だが、綱手は木ノ葉の要人。火影を辞めるまで取材は難しいと、ヒナイは愚痴を零す。

更には、もう一人自来也を知る人物にも取材を申し込んだらしい。

「そろそろアイツも来るハズなんだけどな……遅いな、コラ」

「アイツって……」

「お待た〜♪」

文句を垂れながら唇を尖らせていたヒナイの下にやってくる人影。

「ミズチさん……」

「お久しぶりね、センサー。フウちゃんもね」

「久しぶりっス！」

少し顔を合わせぬ間、何故かより女性らしくなったミズチだ。

男のハズ。なのにも拘わらず、その身に纏う雰囲気はより女性らしくなっている。

「ミズチ！　ちゃんと聞いてきてくれたんだろうな、コラ!!」

「ちゃんと大蛇丸様に聞いてきたわ。ちよ〜つとりツプサービスされてるかもしれないけど、参考にはなるんじゃないかしら」

「おお、助かる！」

ほかほかと顔を上気させ、ミズチから巻物を受けとるヒナイ。

彼女が取材を申し込んだ相手——それは自来也、綱手と同じく木ノ葉の伝説の三人と称される大蛇丸だ。

様々な罪を起こした彼であるが、第四次忍界大戦での働きと、彼ほどの研究者を易々と処分することは木ノ葉にとって不利益だと、木ノ葉の上役が考えたのだろう。大蛇丸は、監視つきで研究に没頭しているらしい。

一方、ミズチはというと、今は大蛇丸の元に戻り、助手をしていると言うではないか。

同業者の香燐や水月、重吾などと共に、〃弟たち〃の面倒を見るのが最近の日課だ。

「弟さんたちは……どうですか？」

「元氣よ。でも、大蛇丸様って最近になってからお盛んだから、弟もつと増えちゃうかも……♡」

「っ！……シライト、負けられないっスよ！」

「対抗心は覚えなくていいから……」

何故か大蛇丸に対抗心を覚えるフウを窘めるシライト。

綱手といい大蛇丸といい、生きている伝説の三忍は異様に若い。そして、シズネも中々老けない。不思議な話だとシライトは思う。

綱手は細胞を活性化させているため、若々しい見た目を保っているとのことだが、シライトは今後若返りするつもりはない。

好きになった人と、共に歳を重ねていくつもりだ。

仲睦まじく談笑する四人。

彼ら四人の繋がりには、フウがシライトと出会い、シライトがヒナイと、そしてミズチと出会ったことで出来たものだ。

この世に運命があるのかは分からない。

しかし、間違いなく言えることは、今こうして共に居る以上、この出会いは偶然ではなく必然であったものなのだろう。

フウとの出会い。

大蛸蟪仙人との出会い。

綱手との出会い、シズネとの出会い。

ヒナイ、ミズチと出会い、他にもナルトや自来也など、様々な出会いを経て、フウに再会した。

そして今は、より強い絆で結ばれていることをひしひしと感じる。

これかたの道のり、シライトはフウと共に歩んでいく。

にわか雨にも負けず、向かい風にも負けず。

ずっとずっと、トモに――。

「シャハハハハ！ 人柱力が結婚か。我愛羅には縁の無さそうな話だぜ」

「それはそうとも限らないわ、守鶴。風影ともあろうものが、妻を娶らないことなんてありえるのかしら？」

「そうだね。水影のやぐらも結婚してたし、孫も居るよ」

「老紫の頑固ジジイは、あの性格だったからなあ……」

「ですね」

「それは兎も角……おれやよオ、めでたい話だと思うぜ！　なあ、重明」

「ラッキーだぜ。あんなお転婆能天気娘に嫁入り先が見つかるんざ」

「その分、ナルトの奴は安心だな。大戦の英雄だから、女たちがホイホイやってくる。寄り付き過ぎて、自分の相手されなくなるんじゃないやねえかって、九喇嘛が不安がるくらいだもんな」

「なにテキトーなことほざいてやがる、牛鬼!!　誰がいつそんなこと言った!」

『ハハハハっ!』

「てめえら、全員面貸せエ!!」

また別の場所でも、話の話題につきない獣たちが、寄り合い所にて他愛のない話をする。

やはり、持つべきは友だ。

七尾——重明は、そう思うのだった。